ISSN 1341-6952

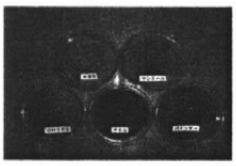
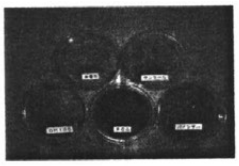
東北大学埋蔵文化財調査年報19

第5分冊

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査
分析・考察

東北大学埋蔵文化財調査室
2010

年報19第5分冊　正誤表

頁	行	誤	正
P91	5行目	留木、樫、朴、・・・・・・	**留木は**、樫、朴、・・・・・・
P145	図8－3　英文キャプション	Fig.8－3　Picture of a excavated straw	Fig.8－3　Picture of a excavated straw **bag**
P145	図8－4　英文キャプション	Fig.8－4　Picture of a excavated wooden buck-	Fig.8－4　Picture of a excavated wooden **bucket**
P148	図8－8　図中	 土硬化実験② 左　上：未塗布 右　上：サンコール 左　下：OH100 中央下：PEG 右　下：OM50	 土硬化実験② 左　上：未塗布 右　上：サンコール 左　下：OH100 中央下：PEG 右　下：バインダー

東北大学埋蔵文化財調査年報19

第5分冊

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査
分析・考察

東北大学埋蔵文化財調査室
2010

例　言

1．本書は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが2001年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめた調査年報19の、第５分冊である。

2．報告書の紙幅の関係から、年報19は５分冊に分けて刊行する。本書は、その第５分冊である。本書には、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の、分析・考察を掲載した。

3．整理作業および本書の編集作業は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮（2008年度まで）・菅野智則（2009年度）が担当した。

4．本書に掲載した分析・考察のうち、自然科学的分析などについては、以下の方々に分析・執筆を依頼した。

(3) 武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種

木簡の樹種同定については、東北大学植物園の鈴木三男氏に分析を依頼した。

(5) 武家屋敷地区第７地点出土の植物遺存体

植物遺存体の同定と検討については、2009年度に、古代の森研究舎の吉川純子氏に分析作業を委託した。

(6) 武家屋敷地区第７地点出土の動物遺存体

動物遺存体については、門脇隆志氏（鳥取県埋蔵文化財センター）が東北大学大学院文学研究科在学中に、修士論文作成の際に分析を行っている。本報告にあたり、その内容の一部を使用させていただいた。

(7) 武家屋敷地区第７地点出土の犬骨

１号遺構出土の犬の骨については、奥松島縄文村歴史資料館の菅原弘樹氏に分析・検討をお願いした。

(8) 武家屋敷地区第７地点で出土した特殊な遺物の取り上げと保存処理

当調査室非常勤職員で保存処理を担当している千葉直美が、実施した内容をとりまとめた。

上記以外の項目は、埋蔵文化財調査室職員が以下のように分担した。

(1)・(9)：藤沢　敦　　(2)・(4)：柴田恵子

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

5．本書に掲載した木簡の検討については、(財)斎藤報恩会の研究助成による成果を含んでいる。

・平成14年度(財)斎藤報恩会研究助成「仙台城下武家屋敷跡出土の近世木簡の総合的研究」

研究代表者：藤沢敦、研究分担者：京野（柴田）恵子・高木暢亮、助成金額：500,000円

6．本分冊には、調査年報19第２分冊において報告した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点出土の磁器および陶器のカラー写真を収録したＣＤを、付録として巻末に添付した。

7．整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った（敬称略）。

小井川百合子（仙台市博物館）、菅野正道（仙台市博物館）

仙台市教育委員会、仙台市博物館、東北大学植物園、東北大学大学院文学研究科考古学研究室

6．調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡　例

1．方位は真北に統一してある。

2．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

3．引用・参考文献は、それぞれの項目ごとに記した。また本文中で、『東北大学埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報１という形で略記している場合がある。

第 5 分 冊 目 次

例言
凡例
目次
図目次
表目次

第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の調査
８．分析・考察 …… 1
(1) 仙台城と周辺武家屋敷における近世建物の基礎構造 …… 1
①建物跡の柱間寸法 …… 1
②掘立柱列の構造と柱間寸法 …… 3
③礎石の規模と構造 …… 5
④礎石建物と掘立柱建物 …… 10
(2) 武家屋敷地区第７地点出土の18世紀前葉の遺物についての検討 …… 15
①陶磁器 …… 15
②土師質土器・瓦質土器 …… 29
③漆器 …… 52
④箸状木製品 …… 57
⑤駒形木製品 …… 60
(3) 武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種 …… 67
(4) 木簡の樹種と型式との関係について …… 89
(5) 武家屋敷地区第７地点出土の植物遺存体 …… 95
(6) 武家屋敷地区第７地点出土の動物遺存体 …… 105
①資料の採集方法 …… 105
②同定および算定について …… 105
③確認された動物遺存体の種名 …… 108
④動物遺存体の生態と出土状況 …… 111
(7) 武家屋敷地区第７地点出土の犬骨 …… 135
(8) 武家屋敷地区第７地点で出土した特殊な遺物の取り上げと保存処理 …… 141
(9) 武家屋敷地区第７地点の調査成果－まとめに代えて－ …… 149

第Ⅰ章　2001年度（平成13年度）事業の概要
第Ⅱ章　富沢芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）
第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の調査
１．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史
２．調査経緯
３．基本層序と時期区分
４．検出遺構 …… 以上第１分冊
５．出土遺物１〈陶磁器・土器・土製品・瓦〉 …… 第２分冊
６．出土遺物２〈木簡・墨書ある木製品〉 …… 第３分冊
７．出土遺物３〈その他の遺物〉 …… 第４分冊
８．分析・考察 …… 第５分冊

図　目　次

（1）

図1－1　仙台城跡本丸大広間断面模式図 ……6
図1－2　仙台城跡二の丸第2地点検出遺構 ……6
図1－3　仙台城跡二の丸第17地点Ⅳa期の遺構 …8
図1－4　仙台城跡二の丸第17地点Ⅲb3期の遺構 ・9
図1－5　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第7地点Ⅲ期の遺構 ……9
図1－6　仙台城二の丸第5地点Ⅲa期の遺構 ……11
図1－7　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第4地点Ⅰ期の遺構 ……11

（2）

図2－1　武家屋敷地区第7地点
2号遺構出土磁器（1）……19
図2－2　武家屋敷地区第7地点
2号遺構出土磁器（2）……20
図2－3　武家屋敷地区第7地点
2号遺構出土磁器（3）……21
図2－4　武家屋敷地区第7地点
2号遺構出土陶器（1）……22
図2－5　武家屋敷地区第7地点
2号遺構出土陶器（2）……23
図2－6　武家屋敷地区第7地点
24号土坑出土陶磁器 ……24
図2－7　武家屋敷地区第7地点
20号土坑・3a層出土陶磁器 ……24
図2－8　仙台城跡二の丸地区出土
供膳具（碗類）の材質 ……25
図2－9　仙台城跡二の丸地区出土
供膳具（皿類）の材質 ……25
図2－10　仙台城跡二の丸地区出土
陶磁器の器種組成比率 ……26
図2－11　仙台城跡二の丸地区出土
陶器の産地別組成比率 ……27
図2－12　武家屋敷地区第7地点出土
陶器碗類の産地別組成比率 ……28
図2－13　武家屋敷地区第7地点2号遺構出土
土師質土器皿・焼塩壺 ……39
図2－14　武家屋敷地区第7地点2号遺構出土
瓦質土器 ……40
図2－15　武家屋敷地区第7地点2号遺構出土
その他の土師質土器 ……41
図2－16　武家屋敷地区第4地点出土
土師質土器・瓦質土器 ……41
図2－17　仙台城跡出土土師質土器皿類の変遷 ……42
図2－18　仙台城跡出土の皿類以外の
土師質・瓦質土器の変遷（1）……43
図2－19　仙台城跡出土の皿類以外の
土師質・瓦質土器の変遷（2）……44
図2－20　仙台城跡出土の皿類以外の
土師質・瓦質土器の変遷（3）……45
図2－21　仙台城跡出土土師質土器皿の
法量分布（1）……46
図2－22　仙台城跡出土土師質土器皿の
法量分布（2）……47
図2－23　仙台城跡出土土師質土器皿の
ススの付着割合 ……48
図2－24　仙台城跡出土土師質土器皿の
糸切り技法と回転方向の比率 ……48
図2－25　仙台藩領内出土の焼塩壺（1）……49
図2－26　仙台藩領内出土の焼塩壺（2）……50
図2－27　江戸の遺跡出土の焜炉類 ……51
図2－28　仙台藩領内出土の漆器の変遷（1）……55
図2－29　仙台藩領内出土の漆器の変遷（2）……56
図2－30　仙台城跡二の丸地区および
武家屋敷地区出土箸状木製品の長さ ……58
図2－31　武家屋敷地区第7地点出土駒形木製品 ‥60
図2－32　伝世品の木下駒 ……63
図2－33　駒形の郷土玩具 ……63
図2－34　絵本などにおける春駒・首馬 ……64

（3）
図3－1　武家屋敷地区第７地点
出土木簡の樹種同定写真（1）……72
図3－2　武家屋敷地区第７地点
出土木簡の樹種同定写真（2）……73
図3－3　武家屋敷地区第７地点
出土木簡の樹種同定写真（3）……74
図3－4　武家屋敷地区第７地点
出土木簡の樹種同定写真（4）……75
図3－5　武家屋敷地区第７地点
出土木簡の樹種同定写真（5）……76
（4）
図4－1　武家屋敷地区第７地点
出土木簡記載の地名……94
図4－2　『柳生村絵図』に見える居久根の様子…94
（5）
図5－1　武家屋敷地区第７地点出土種実（1）…103
図5－2　武家屋敷地区第７地点出土種実（2）…104
（6）
図6－1　武家屋敷地区第７地点における
動物遺存体が出土した遺構……106
図6－2　武家屋敷地区第７地点
２号遺構土壌サンプル採取範囲……107
図6－3　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（1）……128
図6－4　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（2）……129
図6－5　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（3）……130
図6－6　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（4）……131
図6－7　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（5）……132
図6－8　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（6）……133
図6－9　武家屋敷地区第７地点出土
動物遺存体写真（7）……134
（7）
図7－1　武家屋敷地区第７地点１号遺構出土の
イヌ遺骸の出土状況平面図……135
図7－2　武家屋敷地区第７地点
１号遺構出土のイヌ頭骨……138
図7－3　武家屋敷地区第７地点
１号遺構出土のイヌ四肢骨……139
（8）
図8－1　武家屋敷地区第７地点
遺構配置図（Ⅱ期）……145
図8－2　武家屋敷地区第７地点
遺構配置図（Ⅲ期）……145
図8－3　俵の出土状況……145
図8－4　桶の出土状況……145
図8－5　犬の全身骨格の出土状況……145
図8－6　俵の取り上げと保存処理……146
図8－7　桶の取り上げと保存処理……147
図8－8　犬の全身骨格の取り上げと保存処理…148

表 目 次

(1)

表1－1　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第4地点掘立柱列の柱間寸法 ・・・・・4

表1－2　仙台城跡二の丸第17地点
掘立柱列の柱間寸法 ・・・・・4

表1－3　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第7地点掘立柱列の柱間寸法 ・・・・・4

(2)

表2－1　仙台城跡二の丸地区出土
供膳具（碗・皿類）の材質別出土点数 ・・・・・25

表2－2　仙台城跡二の丸地区出土
陶磁器の器種別出土点数 ・・・・・26

表2－3　仙台城跡二の丸地区出土
陶器の産地別出土点数 ・・・・・27

表2－4　武家屋敷地区第7地点出土
陶器碗類の産地別出土点数 ・・・・・・・28

表2－5　仙台城跡二の丸地区および
武家屋敷地区出土箸状木製品の先端形状 ・・・・・58

表2－6　仙台城跡武家屋敷地区第7地点
2号遺構出土箸状木製品の先端形状 ・・・・・59

(3)

表3－1　同定された樹種 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

表3－2　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（1）・・・・・77

表3－3　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（2）・・・・・78

表3－4　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（3）・・・・・79

表3－5　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（4）・・・・・80

表3－6　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（5）・・・・・81

表3－7　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（6）・・・・・82

表3－8　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（7）・・・・・83

表3－9　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（8）・・・・・84

表3－10　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（9）・・・・・85

表3－11　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（10）・・・・86

表3－12　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（11）・・・・87

表3－13　武家屋敷地区第7地点
出土木簡観察表（12）・・・・88

(4)

表4－1　武家屋敷地区第7地点出土木簡の
型式と樹種の関係 ・・・・・92

表4－2　武家屋敷地区第7地点出土木簡に
記載された品物名別の樹種 ・・・・・92

表4－3　武家屋敷地区第7地点出土木簡に
記載された地名と樹種の関係 ・・・・・93

(5)

表5－1　武家屋敷地区第7地点
出土種実観察表（1）・・・・・96

表5－2　武家屋敷地区第7地点
出土種実観察表（2）・・・・・97

表5－3　武家屋敷地区第7地点
出土種実観察表（3）・・・・・98

表5－4　武家屋敷地区第7地点
出土種実観察表（4）・・・・・99

表5－5　武家屋敷地区第7地点
17世紀代遺構別出土種実 ・・・・100

表5－6　武家屋敷地区第7地点
18世紀代遺構別出土種実（1）・・・・100

表5－7　武家屋敷地区第７地点
18世紀代遺構別出土種実（2）‥‥101
表5－8　武家屋敷地区第７地点
幕末から明治初頭の遺構別出土種実 ‥‥101
（６）
表6－1　武家屋敷地区第７地点出土
貝類出土量表（主要貝類）‥‥‥118
表6－2　武家屋敷地区第７地点出土
貝類出土量表（その他の貝類）‥‥‥119
表6－3　武家屋敷地区第７地点出土
その他の動物遺存体出土量表 ‥‥‥119
表6－4　武家屋敷地区第７地点出土魚類
出土量表（1）（発掘時取り上げ資料）‥‥‥120
表6－5　武家屋敷地区第７地点出土魚類
出土量表（2）（発掘時取り上げ資料）‥‥‥121
表6－6　武家屋敷地区第７地点出土魚類
出土量表（3）（発掘時取り上げ資料）‥‥‥122
（７）
表7－1　武家屋敷地区第７地点１号遺構
出土のイヌ計測値 ‥‥‥140
表5－9　武家屋敷地区第７地点
明治前半の遺構別出土種実 ‥‥102
表6－7　武家屋敷地区第７地点出土魚類
出土量表（4）（発掘時取り上げ資料）‥‥‥123
表6－8　武家屋敷地区第７地点出土魚類
出土量表（土壌サンプル）‥‥‥124
表6－9　武家屋敷地区第７地点出土
鳥類出土量表（1）‥‥‥125
表6－10　武家屋敷地区第７地点出土
鳥類出土量表（2）‥‥‥126
表6－11　武家屋敷地区第７地点出土
哺乳類出土量表 ‥‥‥127

第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の調査

８．分析・考察

(1) 仙台城と周辺武家屋敷における近世建物遺構の基礎構造

東北大学構内における、仙台城跡の二の丸地区および二の丸北方武家屋敷地区の調査で検出された建物や柱列などの近世建物遺構については、これまでにも調査の折々で検討を加えてきた。今回の二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査においても、礎石建物の様相が明らかになるなど、重要な知見を加えることとなった。

近年、仙台城の他の地区や、若林城跡でも調査が進展している。仙台城二の丸周辺などでは、地下鉄東西線建設に伴う調査も各所で実施されており、城下の武家屋敷についての調査所見も蓄積されてきている。仙台城とその周辺に留まらず、仙台藩領内の各所においても、城館や武家屋敷に加えて、足軽屋敷や農村の民家にいたるまで、近世遺跡の調査事例も少しずつ増加してきている（藤沢敦2008）。

ここでは、当調査室が実施してきた、仙台城跡の二の丸地区と二の丸北方武家屋敷地区における調査成果を中心に、関連する遺跡の調査事例も参照しつつ、仙台城と周辺武家屋敷における近世建物遺構の基礎構造について、若干の検討を加えてみたい（註１）。

なお、二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区では、各調査地点ごとに遺構の時期区分をしており、全体で共通する時期区分は行えていない。そのため、以下で記す時期区分は、各調査区独自のものである。

①建物跡の柱間寸法

建物跡の柱間寸法については、これまでにも調査の折々で検討を加えてきた。その中で、１間の寸法が、江戸時代の初期には６尺５寸であったのに対して、やがて６尺３寸へ変化していくことが明らかとなっている。６尺５寸や６尺３寸以外の柱間寸法が使われている場合もあり、必ずしもこの両者に限定される訳ではない。しかし、特殊な柱間寸法の建物は少数で、大多数は１間が６尺３寸か６尺５寸となっている。そのため本論では、６尺５寸から６尺３寸への変化について、あらためて検討してみたい。ただし、６尺５寸と６尺３寸では、およそ６cmの違いでしかない。したがって検出された柱の数が少ないと、どちらとも判別が難しい場合が多い。以下では、検出できた柱の数が比較的そろっており、確実な事例を中心に検討することとしたい。なお柱間寸法については、礎石建物と掘立柱建物との間で特に違いは認められないことから、基本的に共通して変化していくと考えて検討していくこととする。

二の丸地区については、年報９において、それまでのデータを整理して検討した。この際の主要な目的は、検出遺構と絵図との対比を行い、現地形上での二の丸建物の配置復元を行うことであったが、それとの関係で建物の柱間寸法を検討した。その結果、文化元年図（1804年）などでは１間を６尺３寸と考えた方が良く対応する一方で、二の丸が置かれる以前の元和６年（1620年）に造営された五郎八姫の西屋敷の遺構では１間が６尺５寸と考えられることから、時期によって変化していく可能性などを指摘した。

二の丸北方武家屋敷地区で最初の大規模調査となった第４地点の調査においては、多数の掘立柱建物や掘立柱列が検出された（年報13）。この調査では、掘立柱建物の柱間寸法が、当初は１間が６尺５寸であったものが、遅くとも17世紀末までには６尺３寸に変化していることが確認された。

二の丸第17地点の調査では、Ⅱ期の11号・12号建物が６尺３寸を使用したもっとも古い建物と考えられる（年報18）。Ⅱ期は、寛永15年（1638年）の二の丸造営から17世紀末の元禄年間における二の丸大改造までの時期と推定される。しかし、両建物跡とも検出範囲が狭く、１間が６尺３寸と断定して良いか、確実性が乏しい。また、11号・12号建物の両方とも、切り合い関係から、Ⅱ期の中でも新しい時期に下る可能性が高いことから、元禄年

間の改造以前であっても、どこまで遡るのか判らない。

このように、仙台城二の丸地区と二の丸北方武家屋敷地区の調査成果からは、元和６年（1620年）までは確実に６尺５寸が使われていること、遅くとも17世紀末には６尺３寸が使われ始めていることが確実である。６尺３寸が使われ始めるのは、さらに遡る可能性があるが、この点については不確実な部分が残っていると言えよう。また、明治時代の陸軍第二師団の建物では、６尺が使われていることが、武家屋敷地区第４地点の１～６号建物跡の事例から判明している（年報13）。

今回の武家屋敷地区第７地点の調査では、５棟の建物跡が検出された。１号建物が６尺となっているのを除くと、全て６尺３寸となっている。１号建物は礎石建物で、19世紀前葉から明治初期と考えられるⅢ期に含まれるが、Ⅲ期の中では最も新しい遺構であり、造られたのが明治時代に下る可能性も残っている。１号建物の礎石には、複数の石を積み重ねるようにして据えている部分がある。このような礎石の据え方は、江戸時代の建物には見られない。この点からも、１号建物は明治時代に下る可能性がある。１間が６尺３寸の建物の中では、２号・３号・４号建物は、19世紀前葉から明治初期と考えられるⅢ期に属する。５号建物は江戸時代初頭から17世紀末頃と考えられるⅠ期に所属する可能性がある。しかし、他の遺構との関係からⅠ期に遡る可能性があると推定したに留まり、Ⅱ期以降に下る可能性も残っている。５号建物については不確実な点が残るが、それ以外の建物については、柱間寸法という点では、これまでの検討結果と、特に異なるところは無いと言える。

このように二の丸地区などでは、６尺５寸が使われていることが確認されているのは、元和６年（1620年）までであった。一方、若林城跡の調査によって、さらに下る寛永年間まで６尺５寸が使われていたことが明らかとなってきた。

仙台市の若林城は、初代藩主である伊達政宗の隠居城として、寛永４年（1627年）から造営され、政宗が死去する寛永13年（1636年）まで使用された伊達政宗一代限りの近世城郭である。その後は、仙台藩の御帳蔵や御薬園として利用された。この若林城では、宮城刑務所の建て替えに伴う調査が2004年度以降、実施されている（佐藤淳ほか2005）。これまでの調査で、若林城の主要な区域を構成すると考えられる建物群などが発見されている。若林城は使われた時期が極めて限定されるため、一部を除くと建て替えは行われておらず、建物跡の把握が比較的容易である。後世に破壊された区域を除くと、遺構の残存状況は良好である。若林城の調査成果については、詳細な報告が出そろっていない段階ではあるが、いずれの建物も１間が６尺５寸と考えて差し支えないようである。したがって、寛永４年までは、１間が６尺５寸であったと考えて良いであろう。

問題は、若林城の造営から、さほど間をあけない寛永15年（1638年）に造営された仙台城二の丸が、どのような柱間寸法を採用していたのかという点である。この点についても、若林城跡の調査で、興味深い成果が得られている。若林城跡の第５次調査と第８次調査で検出された１号建物跡が、二の丸の比較的初期の段階を描いたと考えられる『御二之丸御指図』に見られる「大台所」と酷似しており、若林城の１号建物が移築され「大台所」として使われた可能性が指摘されている（仙台市教委2005・2007）。『伊達治家記録』には、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという記事があり（註２）、それが裏付けられる結果となった。移築に際して、１間につき２寸切り縮めるということは考え難いことから、寛永15年造営の二の丸の建物については、治家記録に記載された建物を中心に、６尺５寸のものが含まれていた可能性は高いと思われる。しかしながら、全ての建物が６尺５寸であったかどうかは、現段階では不明とせざるを得ない。

二の丸地区における大規模な建て直しは、17世紀末の元禄年間に行われた一連の大改造と、文化元年（1804年）の火災による焼失と再建が知られている。藩主と側室の生活空間である中奥や、付属的な建物については、上記以外の時期にも建て替えが行われていた可能性が高い。

元禄年間の大改造の前後に描かれた絵図を見ると、当初のまま維持されている建物と、建て直されている建物の両方が認められる。この際に建て直された主要な建物に、どのような柱間寸法が使用されたかを、直接検討で

きるデータはない。二の丸でも付属的な建物については、元禄年間以降は6尺3寸が使われている。6尺3寸の使用開始が、元禄年間以前に遡る可能性もあることは、前述の通りである。武家屋敷地区でも、元禄年間までには6尺3寸に転換している。しかし、二の丸の主要な建物については、なお確実なデータを欠いている。

文化元年（1804年）の火災によって二の丸建物群はほぼ全焼し、約5年の歳月をかけて再建されたと考えられる。二の丸第17地点では、もともと建物がなかった区域に、再建工事が行われている期間に一時的に建てられたと考えられる礎石建物が検出されている（年報18、図1－3)。これらの建物は、いずれも1間は6尺3寸で建てられていた。このことから、二の丸のかなり大規模な建物でも、文化期には6尺3寸で建てられていることが確認できる。しかし、火災から再建された主要建物については、確実なデータがない。

文化元年の火災をはさんだ前後の時期の絵図を見ると、二の丸の建物群にはほとんど変化が見られず、ほぼ従来通り再建されたと考えられる。その際、従来の礎石を利用して再建されていた場合には、1間が6尺5寸で再建された可能性も残ることとなる。

本丸の「大広間」に相当し二の丸では最も中心となる「小広間」の裏側にある、「御椽通」「伺公之間」「時計之間」付近については、第2地点の調査において礎石建物が検出されている（年報1、図1－2)。しかし、柱間寸法を検討できるのが2間分だけなので、柱間寸法を厳密に検証することが難しい。6尺5寸の方が、礎石の位置関係では比較的対応するようであるが、これのみで確実に判断することは困難である。

仙台城の本丸大広間では、慶長年間に造営された大広間の全体像がおおむね明らかとなっており、1間が6尺5寸を基準として造られていることが判明している（渡部紀ほか2004、佐藤・在川2009)。本丸では、この大広間を含む主要な建物は、慶長年間に造営されたものが、明治時代初期に取り壊されるまで、江戸時代を通じて維持されていたと考えられる。また、造営時期については意見が分かれるが、仙台空襲で焼失するまで残っていた大手門も、戦前の実測調査によって1間が6尺5寸で造られていたことが判っている。したがって、仙台城全体で見れば、1間が6尺5寸の建物と6尺3寸の建物が、ある時点以降は両方が存在して維持されてきたことは間違いない。

二の丸の主要建物の柱間寸法については、確実な調査事例を欠くため、今後も検討が必要である。現状では、時期や建物の由来などによって、複数の可能性が想定される。若林城からの移築などの事例が明らかとなってきたため、複雑な展開をしている可能性を想定しておく必要が高くなったと言えるだろう。今後も、個々の調査データを、詳細に検討していくことが必要となるであろう。

②掘立柱列の構造と柱間寸法

柱列については、柱間寸法を中心に、若干の検討を加えたことがある。武家屋敷地区第4地点の検討では、4尺が最も多く一般的で、次いで3尺6寸・5尺・5尺2寸などが使われていること、6尺・7尺・8尺というものも少数存在することが明らかとなっている（年報13、表1－1)。二の丸第17地点の検討では、4尺が最も多く、次いで4尺2寸が多い。他には、3尺8寸・4尺5寸、4尺6寸・4尺8寸・5尺・5尺1寸・5尺2寸が使われている。さらには6尺・約8尺・9尺2寸など、狭い柱間寸法を二倍にしたようなものも見られた（年報18、表1－2)。様々な柱間寸法があるが、特別な意味が見出せるものは、6尺3寸の2間分を3等分した寸法が4尺2寸となることだけである。

また、柱間寸法の詳細な検討はなされていないが、二の丸第5地点では二の丸中奥の裏門の周囲で多数の柱列が(年報6)、二の丸第9地点では二の丸全体の裏門である台所門の周囲の塀と考えられる多数の柱列が（年報8)、いずれも多数検出されている。この2地点で検出された柱列については、比較的間隔の大きいものが多い傾向がある。しかし、二の丸第5地点では、極めて多数の柱穴が重複しており、柱列の復元自体に不確実な点が残っているので、詳細な検討は難しい。

表1－1　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点掘立柱柱列の柱間寸法
Tab.1－1　List of pillared fence classified depending on the span between pillars at BK4

	３尺６寸	４尺	５尺	５尺２寸	６尺	７尺	８尺
Ⅰａ期			27号柱列		28号柱列		
Ⅰ期（細分不明）		24号柱列					
Ⅱａ期		21号柱列		19号柱列		20号柱列	22号柱列
Ⅱｂ１期	20号建物	７号建物		21号建物			
Ⅱｂ２期		16号柱列	３号柱列				
Ⅱｂ３期		13号柱列 14号柱列					
Ⅱｂ期（Ⅱｂ期内での細分不明）	２号柱列 15号柱列						
Ⅱ期（細分不明）			７号柱列				

Ⅰａ期：17世紀初頭から17世紀前半
Ⅰｂ期：17世紀中葉から後葉
Ⅱａ期：17世紀末から18世紀前葉
Ⅱｂ１期：18世紀前葉から18世紀中葉
Ⅱｂ２期：18世紀中葉頃
Ⅱｂ３期：18世紀後葉から19世紀中葉

表1－2　仙台城跡二の丸第17地点掘立柱柱列の柱間寸法
Tab.1－2　List of pillared fence classified depending on the span between pillars at NM17

	３尺８寸	４尺	４尺２寸	４尺５寸	４尺６寸	４尺８寸	５尺	５尺１寸	５尺２寸	６尺	約８尺	９尺２寸
Ⅱ期					６号塀 ７号塀							25号柱列
Ⅲb1期			23号柱列	24号柱列				21号柱列			22号柱列	
Ⅲb2期									20号柱列			
Ⅲb3期			19号柱列				16号柱列		17号柱列	18号柱列		
Ⅳb期	10号柱列	１号塀 ２号塀 ３号塀 ４号塀 ６号柱列 ７号柱列 ８号柱列 11号柱列 13号柱列 15号柱列				14号柱列	12号柱列					

Ⅱ期：寛永13年（1638年）から元禄年間（17世紀末）
Ⅲｂ期：元禄13年（1700年）頃から文化元年（1804年）
Ⅳｂ期：文化６年（1809年）頃から明治初頭（1868年）頃

表1－3　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点掘立柱柱列の柱間寸法
Tab.1－3　List of pillared fence classified depending on the span between pillars at BK7

遺構名称	時期	柱間寸法	備考
１号柱列	Ⅲ期	３尺９寸	控え柱２尺・途中異なる寸法が入る可能性
２号柱列	Ⅲ期	３尺９寸	
３号柱列	Ⅲ期	３尺７寸	
４号柱列	Ⅲ期	４尺	一部３尺
５号柱列	Ⅲ期	３尺７寸	
６号柱列	Ⅲ期	５尺５寸	
７号柱列	Ⅱ期	７尺４寸	
８号柱列	Ⅰ・Ⅱ期	４尺	
９号柱列	Ⅰ・Ⅱ期	４尺２寸	

Ⅰ期：17世紀初頭から17世紀末頃
Ⅱ期：18世紀初頭頃から19世紀前葉頃
Ⅲ期：19世紀前葉頃から明治時代初頭

今回の武家屋敷地区第７地点の調査では、９列の掘立柱列が確認された（表1－3)。３尺７寸・３尺９寸・４尺が２例、４尺２寸・５尺５寸・７尺４寸が各１例であった。７号柱列の７尺４寸は、３尺７寸の倍として考えることができるかもしれない。４尺や４尺２寸が特に多い訳ではないが、これまでの事例と、大きく異なることはないと言えるだろう。

今回の調査結果も含めて、柱列の柱間寸法には、時期による変化などを明確に指摘することは難しい。４尺２寸については、１間が６尺３寸という寸法が採用されて以降に下る可能性が強いことは言えるが、その他の柱間寸法については、明確な時期的特徴などは指摘できない。これまでの調査成果を総合すると、４尺や４尺２寸を中心に、３尺５寸から５尺５寸程度の間の寸法が基本で、その倍の間隔のものも見られるとまとめておくのが穏当であろう。

これらの柱列については、塀跡と考えるのが妥当であると思われる。これまでの調査では、塀になると思われる遺構は、全て掘立柱で占められている。全体に、柱は深く埋設されており、位置を微妙にずらしながら頻繁に造り替えられている。塀は一本の柱で構造を支えるため、柱を深く埋設することで自立させる必要があるため、掘立柱形式を採用したものと考えられる。

掘立柱列については、通常の独立した掘立柱の柱穴が並ぶものと、溝を掘って柱を立てたものの２種類が確認されている。溝状の掘り方のものは、二の丸第９地点（年報９）や第17地点（年報18）で検出されており、二の丸外郭線などに関わる塀と考えられるものである。両者の間で、柱間寸法に特に顕著な違いは見られない。溝状掘り方のものには、４尺前後の寸法が多く、間隔の広いものが少ない点が異なっている程度である。柱間寸法が大きい場合には、溝状の掘り方では無駄が多くなるため、このような傾向は当然のことであろう。

二の丸第９地点や第17地点では、溝状掘り方と独立した柱穴のものが、並行して確認されている場合があり、造り替えによる結果と考えられる。これらは両者とも、塀と考えて差し支えない。そのこともあり、溝状掘り方と通常の柱穴のものとの間で、上部構造が異なっていたと言えるような根拠は見出し得ない。ただし、溝状掘り方のものは二の丸地区でのみ確認されており、武家屋敷地区では見つかっていない。今後、武家屋敷地区で発見される可能性が無いとは限らないが、注目される違いである。このことから、掘り方の違いが、構造や構築方法などと関係するものかもしれないが、現状では判然としない。

なお、二の丸地区や武家屋敷地区の各地点で多数検出されている掘立柱列で、土塀の基礎と確実に判断できる事例は確認できていない。いずれも、木製の板塀跡と考えて差し支えないもので占められている。土塀の基礎構造がどのようなものであったかについては、確実な調査事例が無く、良く判っていない。他の地区の事例を含めて、今後も検討していく必要がある。

③礎石の規模と構造

礎石建物跡の調査事例の積み重ねによって、礎石の規模や根固めなどの構造が、建物によって、あるいは同じ建物でも場所によって、大きく異なることが明らかとなってきた。そこで、建物の規模や性格が、ある程度明らかとなっている事例を、次に見てみたい。

本丸大広間は、本丸の中心となる建物で、仙台市教育委員会による継続的な調査によって、ほぼ全体像が明らかとなりつつある（金森・根本2002、佐藤・在川2009)。建物本体の座敷部分の主要な礎石の外側に、広縁がめぐり、さらに外側に落縁がめぐっている（図1－1)。礎石そのものが残存していたのは、床束など一部に留まるが、礎石の掘り方は、座敷部の主要なもの、広縁部、落縁部、座敷部の床束で、それぞれ規模と構造が異なっている。座敷部の主要な礎石の掘り方は、径160～210cm、深さ30cm程度で、根固めに小礫を詰め込んでいる。広縁部の礎石掘り方は、径75～120cm程度、深さ40cm程度で、根固め石は座敷部より小振りで土砂の割合が多くなる。落縁部の礎石掘り方は、径70～90cm、深さ40cm程度で、根固め石は小振りとなっている。座敷部の床束

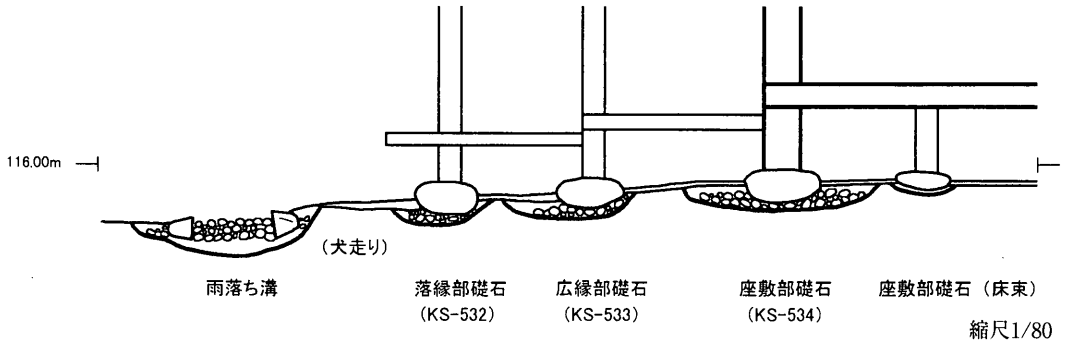
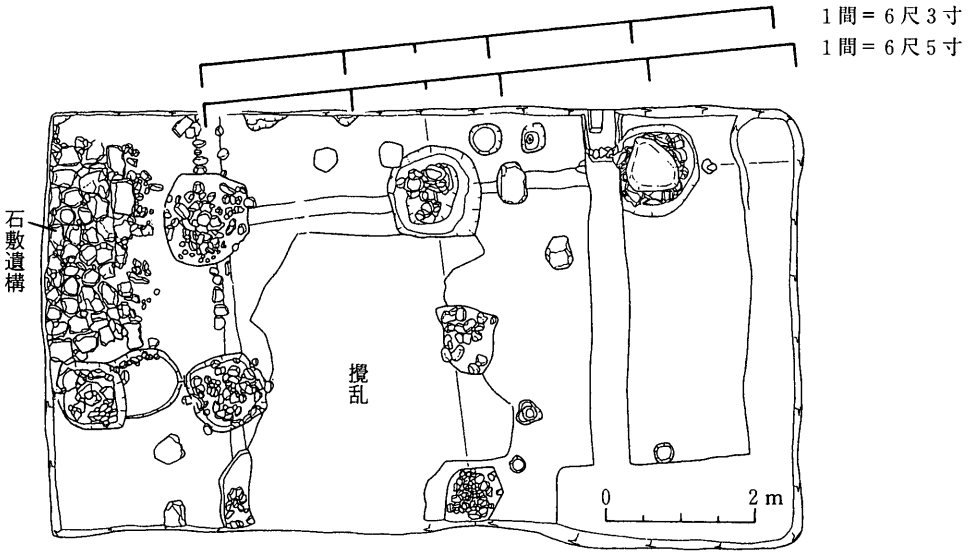


図1－1　仙台城跡本丸大広間断面模式図（『仙台城跡９』より）
Fig.1－1　Schematic profile of main ceremonial hall (*Ohiroma*) in Sendai Castle



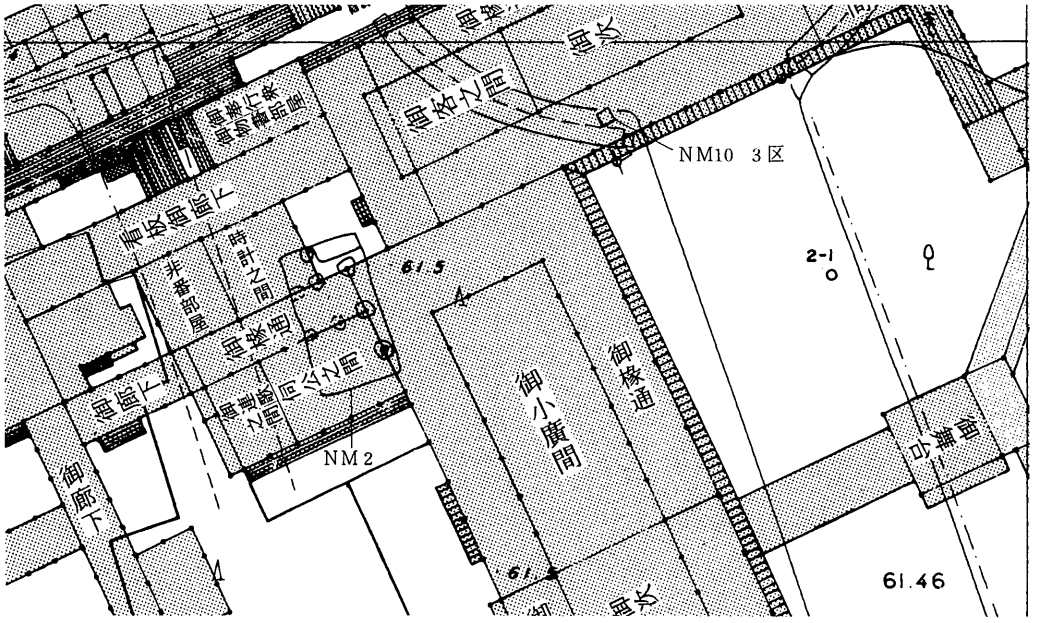


図1－2　仙台城跡二の丸第２地点検出遺構
Fig.1－2　Plans of features at NM2

の礎石掘り方は、径40～90cm、深さ10～27cmで、形状や規模にはばらつきがある。根固め石を少量入れるものもあるが、根固め石が入れられないものもある。このように、本丸大広間では、座敷部の主要な礎石、広縁部、落縁部、座敷部の床束の順で、次第に礎石掘り方の規模が小さくなり、構造が簡素になっていく様子が明らかである。

二の丸第２地点の調査で検出された礎石建物については、絵図との対比から、二の丸では最も中心となる「小広間」の裏側にある「御椽通」から「伺公之間」「時計之間」などの区域に相当すると考えられている（年報１・７・９、図1－2)。この内、礎石が残されていたのは１基のみで、径70cm、厚さ35cmであった。礎石掘り方は、径110～120cm程度、深さ30cm前後で、根固めに小礫が詰め込まれていた。この二の丸第２地点の礎石建物は、明治15年（1882年）の火災で焼失したと考えられることから、文化元年（1804年）の火災後に再建された建物である可能性が高い。

二の丸第17地点の調査では、文化元年（1804年）の火災によって二の丸建物群が焼失した際、復興期に一時的に建てられたと考えられる礎石建物が良好に検出され（Ⅳａ期)、礎石建物の具体的様相を知る上で重要な資料となった（年報18、図1－3)。

二の丸第17地点のⅣａ期の検出遺構のうち、２号建物については、攪乱によって破壊された部分もあるが、比較的建物の様相が明らかとなっている。西辺は屈曲をくり返しており、いくつかの建物が複雑に連接するものと思われる。礎石には、規模の大小や根固めの状況から、二通りの様相が認められた。大規模なものは、掘り方の径70cm前後、深さ40cm程で、川原石を充填して根固めとし、30～55cmの大振りな厚みもある礎石を据える。建物全体の重量を支える、主要な柱を立てたものと考えられる。小規模なものは、掘り方の平均的な径20cm前後、深さは浅くて10cm以下で、根固めを伴わず、20～30cmの扁平な川原石を直接置いて礎石とする。これは、主要な柱の間に置かれた柱や、床束を支えた礎石と考えられる。これらの礎石をつなぐ地覆石が、外周を中心に認められる。地覆石も、小規模な礎石同様、浅い掘り方に直接置かれる。

同じく二の丸第17地点のⅣａ期の３号建物は、２号建物の北側に建てられた礎石建物である。南辺と西辺、西辺から２間分の所には扁平な川原石を使って、地覆石が並んでいる。建物の北側の区域では、径30～70cm、深さ15cmの掘り方に根固め石を入れた礎石が検出されているが、南側の石列の区域には、このような礎石は認められなかった。２号建物では礎石をつなぐ形で地覆石が並べられていたが、３号建物では独立した礎石が見られず、地覆石のみで構成されている区域があることが異なっている。

二の丸第17地点のⅢｂ３期（18世紀）の４号建物も、地覆石を並べる礎石建物である（年報18、図1－4)。薄い整地層を施した上に、根固め石や地覆石の石列を構築する。地覆石（石列１～４、石列８・９）は、扁平な角礫が多いが、川原石も使われている。コーナーなど柱が立てられていたと思われる部分には、やや大きな石が使われている。根固め石の可能性のある小礫が分布する場所もあり、その上に石列や礎石（ピット450）が置かれている場所もある。石列５と石列６は、構造が石列１などと類似するが、間隔がずれるため、他の建物になる可能性もある。

武家屋敷地区第７地点では、Ⅲ期（19世紀前葉から明治初頭）の２号建物が、比較的様相の判明する礎石建物である（年報19第１分冊、図1－5)。礎石と、礎石をつなぐ石列状の地覆石で構成される。礎石は25～35cmの川原石を用いており、幅35～50cmの掘り方に据えられている。掘り方の深さは20～30cmとやや深いものの、根固め石は入れられず、土で埋め戻した上に礎石が置かれている。礎石の中には、掘り方が明瞭にとらえられなかったものもあり、それらは床束を支える礎石であった可能性も考えられる。礎石をつなぐ地覆石は、礎石より小さい15～20cm程度の川原石を用いている。意識的に検出に努めたにもかかわらず、明瞭な掘り方は確認できなかった。石と同じ程度の範囲をわずかに窪めた程度の掘り方であったか、あるいは地表面に直接石を置いただけであったと推定される。そのため、後世に石が取り去られてしまうと、痕跡をとらえることは極めて難しくなるこ

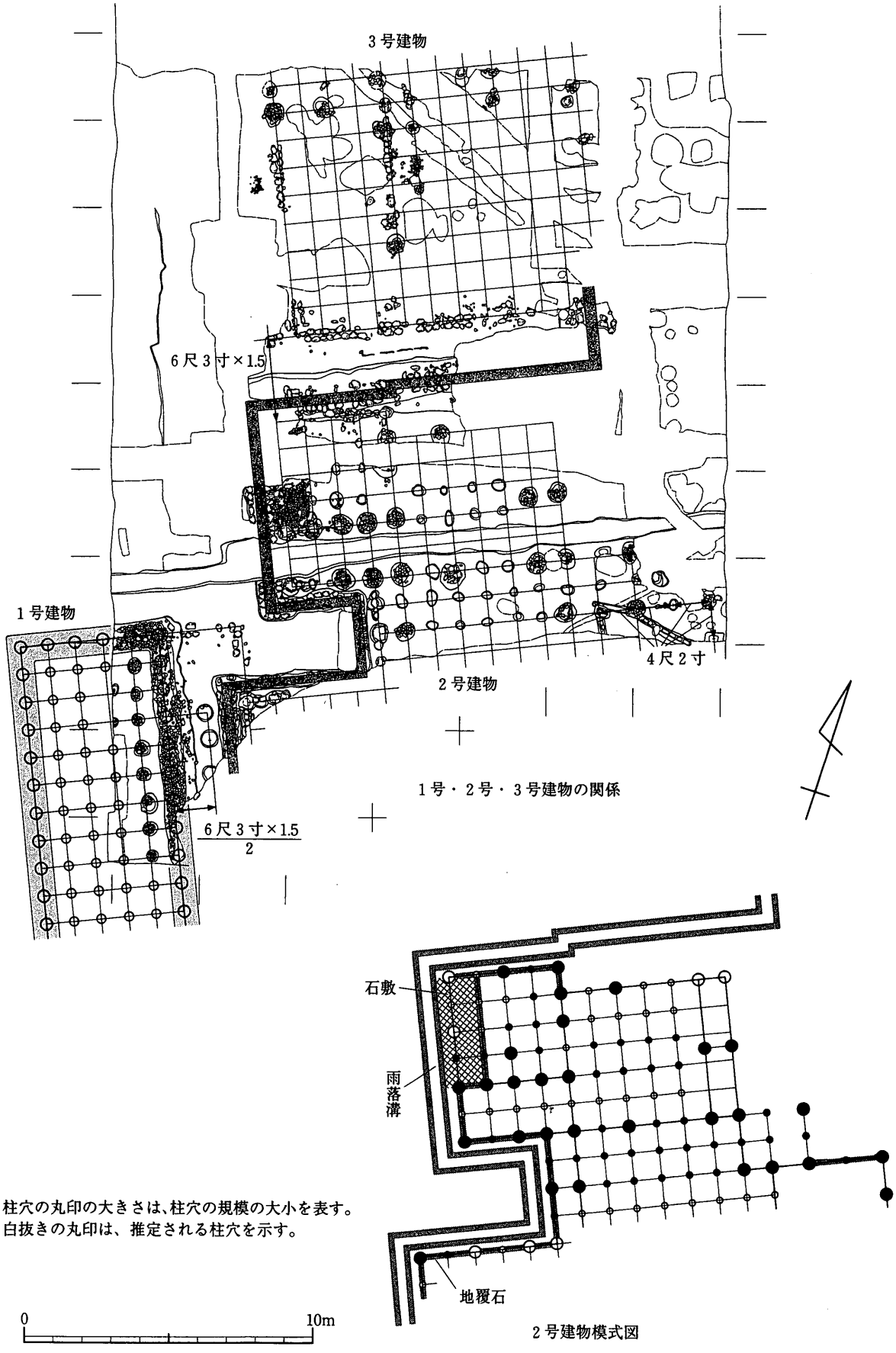


図1－3　仙台城跡二の丸第17地点Ⅳa期の遺構
Fig.1－3 Plans of features belonging to phase Ⅳa at NM17

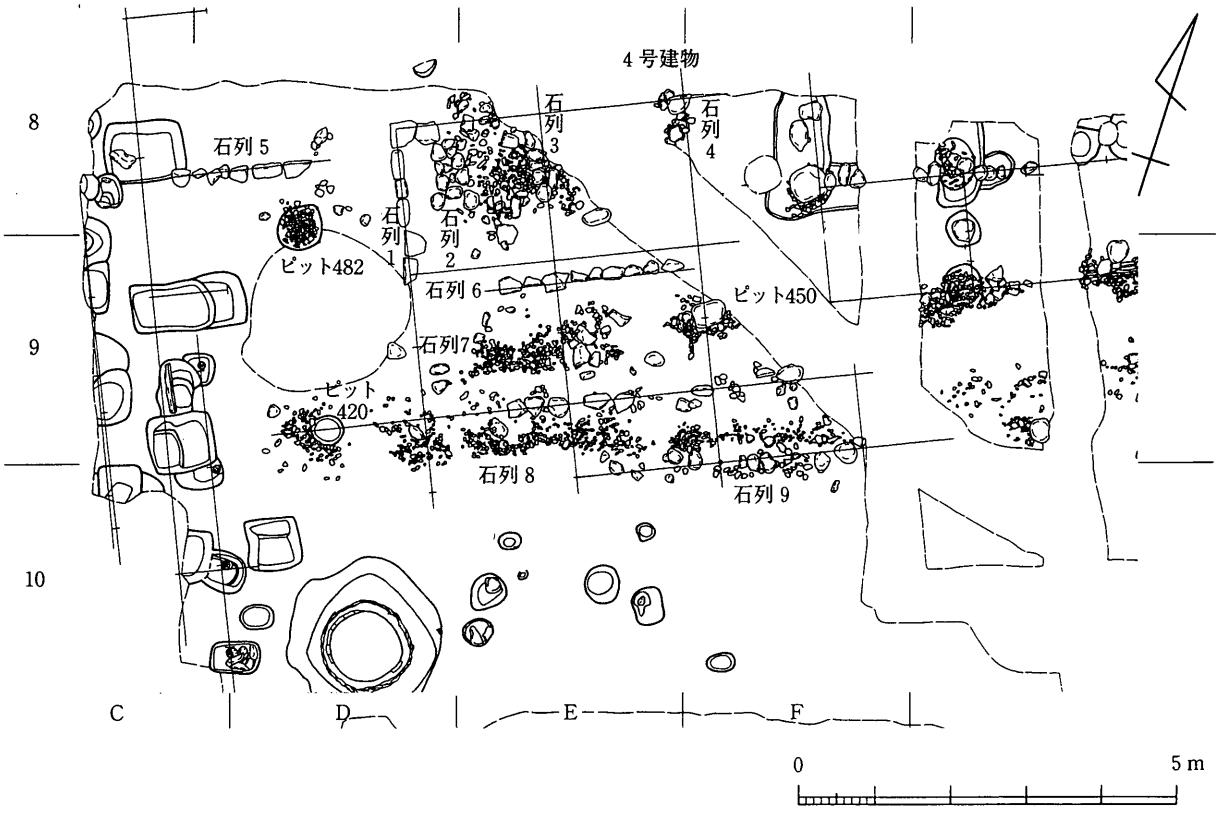


図1－4　仙台城跡二の丸第17地点Ⅲb3期の遺構
Fig.1－4　Plans of features belonging to phase Ⅲb3 at NM17

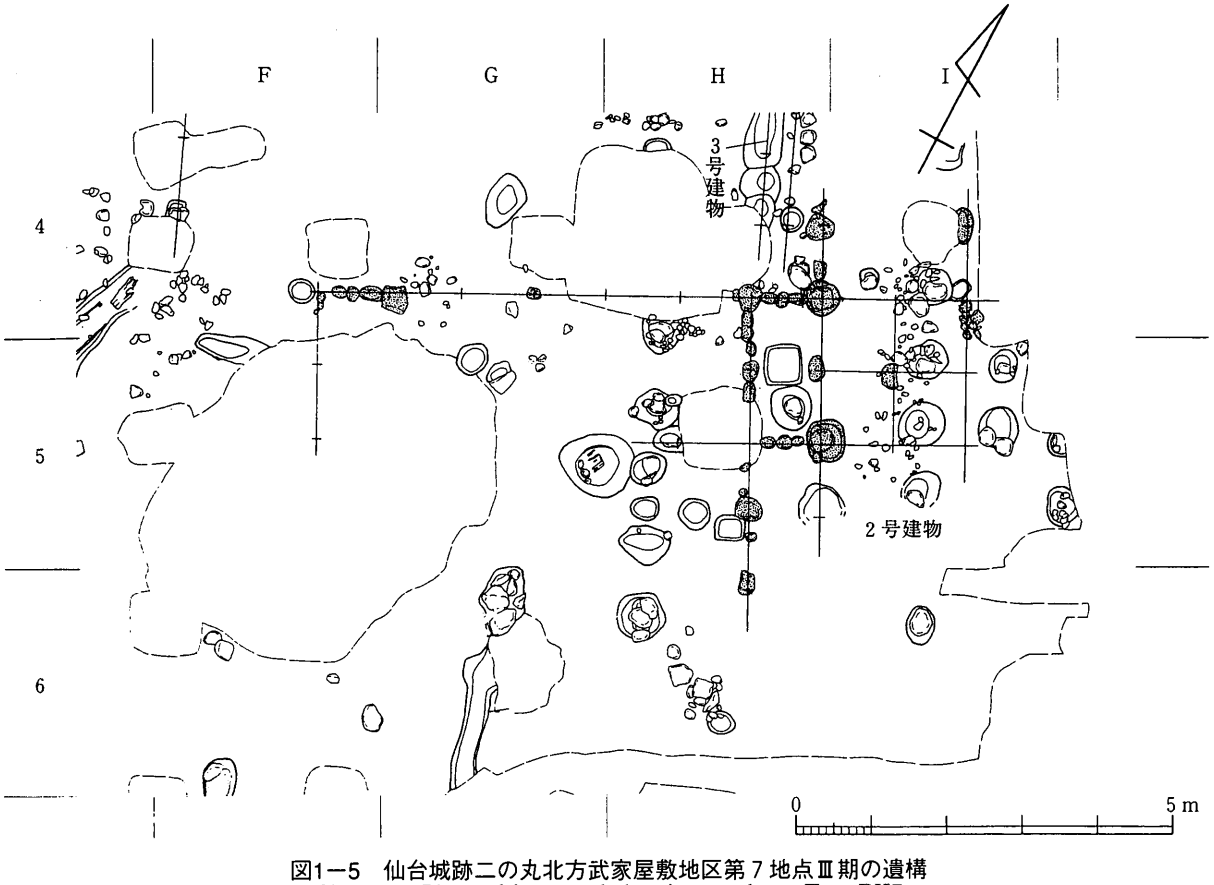


図1－5　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構
Fig.1－5　Plans of features belonging to phase Ⅲ at BK7

とが、容易に想定される。

やや特殊な構造と考えられるのが、二の丸第17地点Ⅳａ期の１号建物跡である（年報18、図1－3）。外周は、上幅95～120cm、下幅55～75cm、深さ50cm前後の断面逆台形の溝を掘り、川原石を主体とした５～15cm程度の礫を詰め込んでいる。礎石は全て取り払われていたが、詰められた礫の上に据えられていたものと考えられる。溝に囲まれた内部には、径30～65cm、深さ10～15cmのほぼ円形の掘り方に、５～10cm程度の川原石を入れて根固めとした柱穴が半間間隔で並んでいる。これも礎石は残っていなかったが、床束を支える礎石と考えられる。同様の溝が、隣接する第１地点の調査区で発見されており（年報１）、それを合わせて考えると、東西２間半、南北７間以上の細長い建物になると推定される。外周の基礎構造は、堅個なもので、重量を支えるための工夫と考えることができるであろう。内部の床束を支える礎石も、比較的丁寧に造られている。細長い建物の形態や、このような基礎構造の特徴から、土蔵のような建物を想定できるであろう。

このように仙台城と関連する近世遺跡の建物遺構を見ると、建物の性格や規模、特に礎石にかかる荷重によって、礎石および掘り方や根固めの構造や規模は、大きく異なっていることが明らかである。本丸大広間の主要な柱を支える礎石が最も大きく、次いで二の丸小広間周辺の柱が大きい。これらは、かなり大規模な建物であり、荷重も相当大きかったことが想定される。一方、武家屋敷地区第７地点の２号建物の礎石は、最も小規模で簡素な礎石であり、その分だけ荷重も軽かったと思われる。また同じ建物の中でも、礎石が支える柱の種類によって、礎石の規模と構造が異なっており、それぞれの礎石が支える荷重に応じて、使い分けられていることは明らかであろう。今回は検討できなかったが、掘立柱建物でも、同じ建物の中で柱穴の深さが大きく異なっている事例もあり、同じように柱にかかる荷重の違いを反映している可能性が考えられる。建築学的な検討は行えていないが、このような礎石や柱穴の特徴を把握していくことが、上屋構造の復元にとって重要であると考えられる。

④礎石建物と掘立柱建物

本丸大広間や若林城の主要建物群、二の丸の中心建物は、当初より一貫して礎石建物であったと考えられる。西屋敷の主要建物も全て礎石であったように、城に準ずる主要な施設については、江戸時代の初期から礎石建物が用いられていたと考えて良いであろう。

ところが、簡素な構造の建物については、仙台城の中においても、江戸時代を通じて掘立柱建物が使い続けられた可能性がある。二の丸第５地点では、中奥裏側の門（御切手御門）の東側に大量の掘立柱柱穴が集中していた（年報６・７）。保存状態が良くない部分もあり、柱穴の組み合わせは、十分明らかにはできなかったが、これらの掘立柱の柱穴には、門から延びる塀と掘立柱建物の柱穴が含まれていると考えられる（図1－6）。この区域の建物は、塀に沿って造られた「腰掛」と考えられ、絵図では、桁行１間の細長い建物として描かれ、半間分が土間で、半間が板敷きと考えられる。塀は掘立柱構造で、頻繁に建て替えられていたことが判明している。「腰掛」についても、簡素な構造のため一貫して掘立柱建物で、塀の建て替えに伴い頻繁に建て替えられた可能性が考えられる。このような簡素な構造で、なおかつ頻繁に建て替えられる建物については、仙台城内でも掘立柱が使われ続けていたと考えて良いだろう。

城以外の一般的な武家屋敷の建物が、礎石建物であったのか、掘立柱建物が使われ続けていたのかという点については、大きな問題が残っている（註３）。仙台城二の丸北方武家屋敷地区の調査では、圧倒的に掘立柱建物が多く、礎石建物はきわめて少ない。同じような事例は、仙台城周辺の武家屋敷に限らず、仙台藩領内の各地で見られることである。

仙台藩では、家臣の多くが仙台城下の屋敷以外に、知行地に在郷屋敷を有していた。在郷屋敷は、家臣の家格などによって規模や位置づけが異なっていた。重臣が居館としていた、地域の中核的位置を占めるものは、要害・所・在所と区分され、特別な扱いを受けていた。

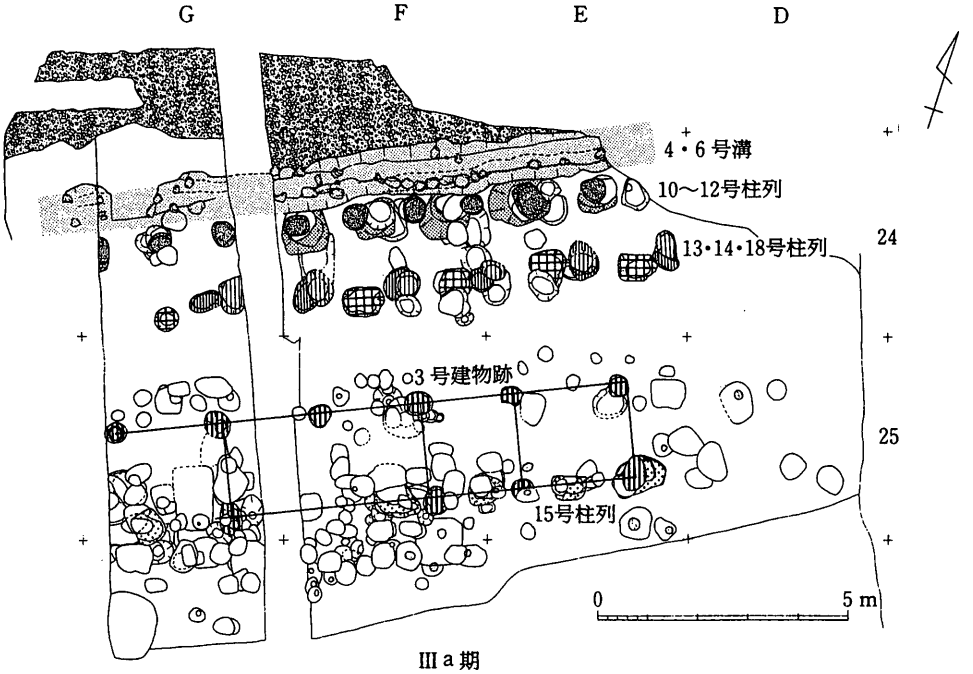


図1－6　仙台城二の丸第5地点Ⅲa期の遺構
Fig.1－6　Plans of features belonging to phase Ⅲa at NM5

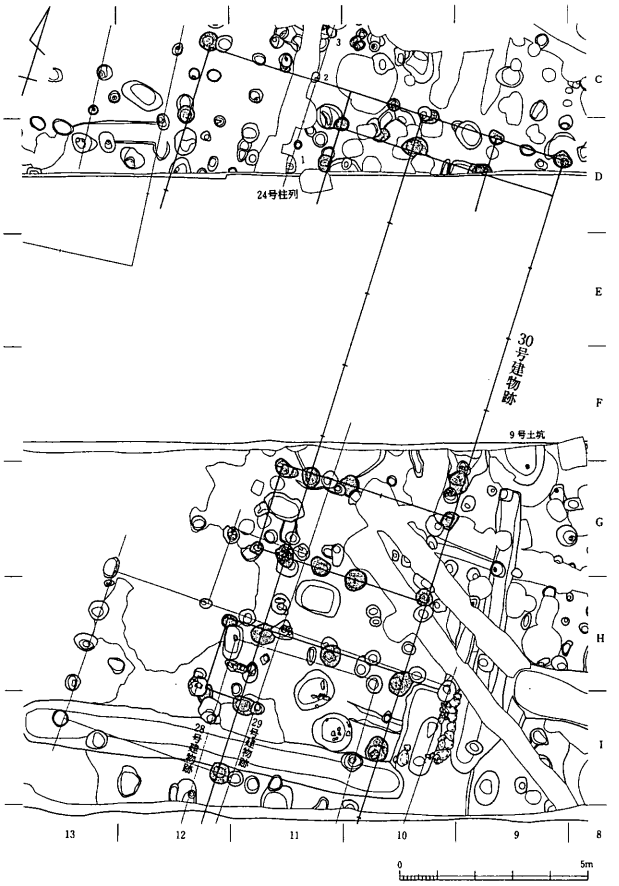


図1－7　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点Ⅰ期の遺構
Fig.1－7　Plans of features belonging to phase Ⅰ at BK4

登米市（旧迫町）の佐沼城跡は、近世の佐沼要害である。「三の丸」と呼ばれたこともある、堀に囲まれた区画で、陪臣の屋敷地として使われた区域が調査されている。礎石建物は見つかっておらず、江戸時代を通じて掘立柱建物が存在していたと考えられている（佐久間光平ほか1995）。

大崎市（旧松山町）の上野館跡は、仙台藩の奉行などの要職をつとめた茂庭氏の在郷屋敷で、「所」拝領であった。屋敷のほぼ全域が発掘調査されているが、礎石建物はわずかしか発見されていない。礎石建物の有無について問題となるのは、B期とされた17世紀末～19世紀の遺構群である。報告者は、絵図との対比から存在が推定される主要建物が検出されていないこと、遺構群の性格と時期から掘立柱建物が主体とは考えにくいことから、戦後に削平を受けた際に、礎石建物跡の大部分は失われてしまったと推定している（佐久間光平ほか1993）。

このような調査事例に対して、実際に礎石建物が少なかったことを示すのか、あるいは削平によって破壊され検出できないのか、どちらと考えるかによって、復元される遺跡の姿は大きく異なってくる。この問題を考えるに際しては、時期的な問題と、居住者の階層や建物の性格の問題がある。二の丸北方武家屋敷地区第４地点Ｉｂ期（17世紀中葉～後葉）の30号建物のように、比較的大きな建物でも、掘立柱である場合も確認される（年報13、図1－7）。したがって17世紀には、主要な建物でも掘立柱建物が使われていた可能性がある。その場合でも、やがて主要な建物は礎石建物に転換していったというのが、一般的な理解であったと思われる。

農村の民家建築についても、江戸時代の途中で、礎石に転換していく場合が多いことが知られている。一般的な傾向としては、18世紀前期から中期にかけて上層農家の主屋が礎石で建てられ始め、18世紀後期から19世紀前期には中下層農家の主屋も礎石に転換していくことが指摘されている。しかし、必ずしも全てが礎石に転換する訳ではなく、従来考えられていたより遅くまで、掘立柱建物の民家建築が造られていた場合もあることが指摘されるようになっている（浅川・箱崎編2001）。宮城県内に残されている民家建物についても、ほぼ同様で、18世紀以降は礎石を使ったものが出現し、現在まで残されているものがある（古建築研究会編著1992）。19世紀以降では、納屋などの小規模な附属建物でも、礎石が使われている事例は少なくない。しかしこれらは、礎石を使った建物であるから残ったとも言える訳で、掘立柱建物がいつまで使われたかという点については、残された民家建物だけから考えることはできない。

仙台城下における武家屋敷については、農村の民家建物よりは礎石への転換が早かったと考えるのが穏当な理解であろう。にもかかわらず、発掘調査事例では、幕末にいたるまで掘立柱建物が多数造られ、礎石建物はきわめて少ない。江戸時代を通じて、幕末まで掘立柱建物が使われ続けていることは確実である。付属的な簡素な構造の建物は、幕末まで掘立柱が使われた場合があったことは間違いないだろう。しかし、主屋などの主要な建物でも、掘立柱建物が使われ続けたのかという点については、民家建築の様相などを参考にすると、疑問が大きいと言わざるを得ない。後世の破壊により、礎石建物が確認できなくなっている可能性も高いだろう。

先に検討したように、近世の礎石建物の礎石は、柱にかかる荷重などによって、その構造や規模に大きな違いがある。荷重が比較的軽い小規模な屋敷であった場合、礎石は小規模で、掘り方の構造も簡素であったと考えられる。小規模な礎石には、掘り方がほとんどなく、若干窪めた程度の場合もある。地覆石については、ほとんど掘り方を持たない事例もある。現在に残されている近世民家建築では、地覆石を据える際に、ほとんど掘り方が無く、地表面の上に石を並べ、石の間を粘土などで固める方法も見られる。このような礎石や地覆石が取り去られると、掘り方を確認することは極めて難しく、建物の痕跡を把握できないことが容易に想定できる。

川内地区の武家屋敷地は、明治時代に建物が取り払われ、一時的に畑として利用されていた場合があることが、武家屋敷地区第４地点（年報13）や第７地点（年報19第１分冊）で確認されている。畑の耕作の際、支障となる礎石を除去した可能性は大きく、第４地点では畑の一画に大小の礫を集めた「集石遺構」が検出されている。後世に畑が作られている区域では、江戸時代の礎石建物がほとんど破壊されている可能性を考えておくことも必要であろう。

一方で、武家屋敷地区で検出される掘立柱建物の数が、幕末にいたるまで多数におよんでいることは、掘立柱建物が例外的な事例でないことを示唆する。このことは、掘立柱建物が簡素な建物に限定さるのかどうか、江戸時代の新しい段階でも、慎重に検討することが必要であることを示していると言えるだろう。

このように、仙台城周辺の武家屋敷地区において、礎石建物が本来存在しなかったのか、後世の破壊により確認できないだけなのかという点については、現在のデータでは確定的な答えを準備できる状況ではない。仙台城周辺の武家屋敷地は、地下鉄東西線関連の調査によって、急激に調査事例が増加している。今後も、両方の可能性を想定しながら検討を続けるとともに、蓄積されつつある成果を比較検討して、仙台城周辺の近世武家屋敷の実態を解明していくことが期待される。

〈註〉

1）本論については、2001年10月７日に米沢女子短期大学において開催された東北史学会2001年度大会考古学部会において、藤沢敦・京野恵子・高木暢亮の連名で口頭発表した「近世建物遺構の基礎構造」において報告した内容の一部を含んでいる。

2）治家記録義山公巻之二、寛永15年12月14日の記事に見える（平重道編1974)。「十四日戊寅。此日二丸屋形焼火間、虎間、御納戸茶道部屋、御鑓間上臺所、御風呂屋、大臺所、小姓間、御用間、肴部屋、御鷹部屋、筭用屋、今日マテ段々上棟アリ。右御作事、若林ノ屋形ヲ解シ用ラルト云々。」ここに記された建物の名前は、茶道部屋・御鑓間・御鷹部屋、筭用屋を除くと、『御二丸御指図』で確認できる。それら位置は、特定の場所に固まることなく、二の丸の各所に分散している。

3）近世遺跡において礎石建物がほとんど検出されないことについては、2008年５月に開催された平成20年度宮城県考古学会総会・10周年記念大会の際の発表「宮城考古学－この10年の歩みと展望－近世」において、問題点を指摘したことがある。

《引用・参考文献》

浅川滋男・箱崎和久編　2001　『埋もれた中近世の住まい』同成社

阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告４

入間田宣夫編　2006　『仙台市史特別編７城館』仙台市

金森安孝・根本光一　2002　『仙台城跡１－平成13年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第259集

金森安孝・伊藤　隆　2003　『仙台城跡２－平成14年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第264集

鹿野仁子・鈴木　隆・渡部　紀　2007　『仙台城跡７－平成18年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第309集

川又隆央・小泉博明　2004　『下野郷館跡』宮城県岩沼市文化財調査報告書第２集

古建築研究会編著　1992　『宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－』宮城県文化財調査報告書第151集

小林清治編　1982　『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻　名著出版

佐久間光平ほか　1993　『上野館跡－近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第156集

佐久間光平ほか　1995　『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第２集

佐藤　淳ほか　2005　『若林城跡－第４次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第292集

佐藤甲二ほか　2007　『川内Ａ遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第312集

佐藤　巧　1967　「仙台城の建築」『仙台城』pp.23～87

佐藤　巧　1979　『近世武士住宅』叢文社

佐藤　洋・在川宏志　2009　『仙台城跡９－平成20年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第348集

鈴木　隆・渡部　紀　2005　『仙台城跡５－平成16年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第285集

鈴木　隆　2006　『仙台城跡６－平成17年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第297集

仙台市教育委員会　2005　「仙台市若林城跡（第５次調査)」『平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』　pp.55～60

仙台市教育委員会　2007　「仙台市若林城跡－第８次調査の概要－」『平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』pp.55～60

平重道編　1974　『伊達治家記録四』宝文堂出版

高倉淳ほか編　1994　『絵図・地図で見る仙台』今野印刷
千葉正樹　2003　「第三章仙台城下の景観と構造　第一節城下町の景観」『仙台市史通史編４　近世２』pp.160～187
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報１』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報６』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2005　『東北大学埋蔵文化財調査年報18』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2006　『東北大学埋蔵文化財調査年報19第１分冊』
中尾七重　2000　「日本建築史（近世生活文化史）の時代区分について」『歴史と地理』540　45～58頁　山川出版社
藤沢　敦　2008「宮城県の考古学－この10年の歩みと展望－VII. 近世」『宮城考古学』第10号　pp.89～102　宮城県考古学会
宮澤智士　1983　「近世民家の地域的特色」『講座・日本技術の社会史第七巻建築』pp.151～182　日本評論社
村田晃一ほか　2006　『中野高柳遺跡Ⅳ－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅳ－』
宮城県文化財調査報告書第204集
吉岡一男ほか編　2005　『絵図・地図で見る仙台　第二輯』今野印刷
渡辺浩一　2003　「第三章仙台城下の景観と構造　第二節武家屋敷と武士」『仙台市史通史編４　近世２』pp.188～207　仙台市
渡部　紀・中山　純・豊村幸宏・伊藤　隆　2004　『仙台城跡３－平成15年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第270集
渡部　紀・在川宏志・鹿野仁子　2008　『仙台城跡８－平成19年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第330集

(2) 武家屋敷地区第7地点出土の18世紀前葉の遺物についての検討

①陶磁器

武家屋敷地区第７地点出土の陶磁器について、個々の特徴や遺構ごとの様相については、年報19第２分冊で述べている。ここでは、主に、武家屋敷地区第７地点２号遺構出土の陶磁器について、検討を加えていく。武家屋敷地区第７地点２号遺構は、大規模な廃棄土坑であり、出土遺物の内容から、二の丸から排出されたゴミが廃棄されたものと考えられる（年報19第１分冊）。供伴する木簡では、記載されている年号が享保年間のものに限られており、２号遺構の遺物は18世紀前葉の時期の一括資料である。そのため、武家屋敷地区からの出土ではあるが、遺物の内容としては仙台城跡二の丸地区の様相を示す良好な資料と言える。

これまで、年報９において、仙台城跡二の丸地区出土の陶磁器の一括資料をもとに、その変遷について検討を加えている。また、年報18では、年報９の分析に、二の丸地区第17地点から出土した18世紀末～19世紀初頭の一括資料を加えた再検討を行っている。18世紀前葉の資料は、これらの考察において、他の時期の資料から比べると量的にも少なく、良好な資料に欠ける時期であった。そのため、２号遺構出土の一括資料を加えた上で、これまでの年報でおこなってきた分析と比較しながら、18世紀前葉の陶磁器の様相について検討していきたい。

また、20号土坑および3a層出土の陶磁器は、２号遺構よりもやや新しい様相を示しており、比較として考察に加えていく。20号土坑は、２号遺構、１号遺構、24号土坑などの廃棄土坑が、3b層によって整地された後、自然に形成された窪みであろうと考えられている（年報19第1分冊）。20号土坑に堆積した埋土が3a層であり、遺物は一連のものである（図2－7）。自然に形成された窪みのため、遺物の年代幅としてはやや広く、18世紀後葉頃まで下る可能性があるものも含まれているが、主体となるのは18世紀中葉頃と考えられる。18世紀中葉の資料も、これまでの検討からは欠けていた時期であり、併せて考察していく。

図2－1～図2－5には、２号遺構出土の陶磁器を、図2－7には、20号土坑および3a層出土の陶磁器をまとめて掲載している。また、図2－6は、２号遺構と同時期の24号土坑出土陶磁器をまとめて掲載したものである。24号土坑は、出土点数が２号遺構ほど多くはないため、数量的な分析には加えていない。しかし、出土遺物の様相は２号遺構と共通しており、２号遺構にはみられない器形や文様のものが含まれることから、参考として掲載している。

２号遺構と20号土坑・3a層以外の資料については、年報９、年報18の分析データと、それぞれの一括資料が掲載されている年報を元にしており、併せて参照されたい。また、時期区分の中で２つの資料群がある場合は、例えば17世紀末葉a、17世紀末葉bのように示しているが、これらは便宜的に区別しているだけで、直接、時間的前後関係を示したものではない。

A．材質別の検討

図2－8・図2－9、表2－1には、碗類と皿類について、漆器・木製品を合わせた材質別の割合を示している。陶器の碗類・皿類について、18世紀前葉から18世紀中葉に顕著な変化が現れている。

碗類では、17世紀初頭～前葉に主体であった漆器・木製品が、17世紀末葉の段階で、磁器・陶器に入れ替わっており、中でも、磁器の占める割合が17世紀末葉や18世紀前葉では５割以上を占めている。これ以降は漸移的に磁器の割合が減少し、それに伴い陶器の割合が増えていく。特に、18世紀中葉および18世紀後葉には、陶器の碗の比率が５割以上と、磁器より多くなることがわかる。19世紀前葉～中葉になると、肥前磁器に加え、瀬戸や東北産の磁器が加わることにより、磁器の占める割合が再び急増している。

皿類では、17世紀初頭～前葉の段階から、磁器・陶器でほぼ占められており、特に陶器の割合が高い。瀬戸・美濃や唐津の皿や向付の出現頻度が高いためと考えられる。17世紀末葉になると磁器の割合が9割以上と非常に高くなり、磁器の皿が浸透していく様相がみられる。18世紀前葉においても、陶器の皿も一定程度みられるもの

の、磁器の割合が高いことに変化はない。18世紀中葉は一つの転機と考えられ、陶器の皿の割合が急激に高まっている。18世紀中葉になると、大堀相馬産や小野相馬産の皿がみられるようになり、陶器の皿の割合が高くなっているものと考えられる。

B．器種組成の検討

次に、上述の材質別の組成でみられる変化をふまえ、磁器・陶器について器種別の組成を検討していく。図2－10、表2－2には、磁器、陶器の器種組成の変遷を示している。18世紀前葉aとして示したのが、武家屋敷地区第7地点2号遺構出土の資料であり、18世紀中葉として示したのが、20号土坑・3a層出土の資料である。

磁器全体の様相としては、碗類が増加し、皿が減少する傾向にあり、18世紀前葉から19世紀初頭にかけては比較的安定した組成を示すことが指摘されていた（年報9）。17世紀末以降、肥前産の磁器碗が普及しはじめ、碗の比率が高まっていき、18世紀代には「くらわんか手」の碗が加わることにより、碗はより高い比率を示しているものと考えられる。

18世紀前葉aの2号遺構出土磁器においても、碗の占める割合は非常に高い。17世紀末葉の段階では、碗は3割前後の割合を占めるが、18世紀前葉aでおよそ5割、18世紀前葉bで4割強と、さらに高い割合を示している。18世紀前葉段階では、磁器の碗類の普及が進んでいることがうかがえる。2号遺構の碗類には、いわゆる「くらわんか手」と呼ばれる厚手の碗が多く含まれる一方で、比較的薄手で、意匠も細かな上手の碗も多数みられる。意匠も様々なものがみられ、細かな文様が描かれたものから、コンニャク判や型紙摺りによる文様を持つ碗、色絵や青磁、白磁の製品など、多様であり、磁器碗が浸透している様相がうかがえる。

2号遺構の特徴として、磁器の皿類の割合が高いことも挙げられる。皿類は、量産品とみられる見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿が多いのみならず、伝世品の大皿や比較的上手の皿なども含まれていることが注目される。18世紀前葉b（二の丸地区第5地点3号土坑）は、全体の点数が少ないため、直接比較することは難しいかもしれないが、皿類の割合では大きく異なっている。他の時期と比較しても、2号遺構の皿類の占める割合は高い。上述のように、18世紀前葉は陶磁器が浸透していく時期であり、供膳具における陶磁器の割合が高い時期である。皿類に関しては、肥前産陶器の皿が一定量含まれてはいるものの、大堀相馬や小野相馬などの陶器の皿はまだあまり含まれておらず、大堀相馬・小野相馬の皿が多く出現するようになる前の段階である。そのため、18世紀前葉段階では、磁器の皿類の需要が高く、18世紀中葉以降、大堀相馬や小野相馬などの比較的近い地域からより安価な皿が手に入るようになることにより、磁器の皿の比率が若干低くなるのではないかと推測される。

18世紀中葉の20号土坑・3a層では、磁器の碗類がさらに高い割合を占めている。しかし、2号遺構で多く含まれていた「くらわんか手」の碗は、ほぼ含まれていない。白磁とみられる破片が一定程度含まれていることが注目される。磁器の碗の需要として、白磁などの陶器では代用できない要素のものでは、一定程度含まれるものと推測される。皿類の割合は2号遺構ほど高くはならず、安定した値を示している。

陶器では、17世紀初頭から前葉は、瀬戸・美濃や唐津の皿・向付など、皿類の割合が非常に高い。17世紀末葉以降は碗類の割合が増加している。中でも18世紀前葉から19世紀初頭までは、多少の増減はあるものの、いずれも碗類は比較的高い割合を示している。

C．産地別の検討

磁器に関しては、産地別の推移を示した図は割愛した。2号遺構では、中国磁器が6点含まれている以外は、すべて肥前産である。中国磁器は、景徳鎮民窯系と漳州窯系である。20号土坑・3a層では、すべてが肥前産磁器である。17世紀末葉以降、19世紀に瀬戸や切込、平清水などの磁器が加わるまで、磁器の大部分を肥前産が占め、伝世した中国産磁器がわずかに伴うという傾向は、18世紀前葉、18世紀中葉においても変化ないものとみられる。

図2－11・表2－3は、２号遺構（18世紀前葉１）と20号土坑・3a層（18世紀中葉）を加えて、陶器の産地別組成の推移を示したものである。

18世紀前葉aでは、肥前の割合が最も高く、次いで瀬戸・美濃が多い。大堀相馬は存在するものの、比率としてはあまり多くはなく、大堀相馬よりも小野相馬の割合の方が高い状況にある。大堀相馬、小野相馬とも、大部分が碗類であるが、小野相馬では小型・中型の丸皿、片口鉢、灰吹、火入、擂鉢などもわずかに確認される。擂鉢には堺産が含まれる。また、擂鉢や甕類、灰吹、火入などの器種では、東北地方の窯で製作されたとみられる陶器も確認される。東北産とした陶器は、粗製の胎土で、鉄釉を施釉したものであるが、釉調や胎土、擂鉢の口縁部形態などをみると、複数の窯のものが含まれているものと推測される。

年報19第２分冊でも述べているが、２号遺構出土の相馬産の陶器は、胎土や釉調で、大堀相馬、小野相馬を区別することが難しいものが多い。その判断が付かないものを、図2－11では相馬系として示している。相馬産の陶器であると考えられるが、ほとんどのものが小野相馬にみられるような、淡青灰色ないし淡青灰白色で半失透釉から失透釉の灰釉のものである。18世紀中葉や18世紀後葉の製品と比較すると、大堀相馬の透明度のある淡緑灰色の灰釉はほとんどみられない。そのため、大堀相馬の灰釉碗にも、小野相馬に似た淡青灰白色系の失透釉が用いられているものと考えられる。ある程度器形のわかる碗では、高台の削り方、高台付近の釉切処理、胎土などで、大堀相馬を識別できる場合もあるが、個体差も大きく、焼成の程度や部位による違いもあり、破片資料では、さらに識別が困難なものが多い。

18世紀前葉の中でも、18世紀前葉aと18世紀前葉bとでは、瀬戸・美濃、大堀相馬、小野相馬の比率に大きな違いがみられる。18世紀前葉aでは、瀬戸・美濃の比率が比較的高く、大堀相馬と小野相馬を併せた相馬系陶器の比率がそれほど高くはない。その組成比では、17世紀末葉に比較的近い様相を示している。18世紀前葉bは、前述のように、数量的に少ないことを考慮しなければならない資料であるが、肥前の割合がより少なくなり、瀬戸・美濃はごく限られたものとなっている。これに対して、大堀相馬、小野相馬を併せた相馬産陶器が、かなりの比率を占めている。組成比では、18世紀中葉につながる様相を示している。また、18世紀前葉bは、出土した陶器の特徴をみても、大堀相馬の灰釉は、より透明度がある淡緑灰色系統のものであり、鉄釉流し掛け碗、鉄釉掛け分け碗など（年報６）、種類においても多様化しており、より18世紀中葉の様相に近づいているのではないかと考えられる。

17世紀末に操業を開始した大堀相馬焼は、操業直後、18世紀前葉までの短期間に、急速に生産規模を拡大した可能性が高いことが指摘されている（関根達人1998）。18世紀前葉の２つの資料群を比較してみても、大堀相馬の陶器生産が確立し、その特徴がより現れるようになる時期は、この18世紀前葉の期間であろうということが推測される。18世紀前葉aの２号遺構からは、年号が記載された木簡が多数供伴しており、享保二年（1717年）から享保十八年（1733年）までの年号が確認されている（年報19第３分冊）。その中でも、点数が多いのは、享保四年（1719年）から享保七年（1722年）である。陶器が使用される年数がどのくらいであるのかといった点も考慮しなければならないが、消費地における出土状況からは、おおよそ1720年前後の時期には、大堀相馬の陶器はそれほど多くはなく、それ以降、18世紀中葉にかけて増加することが考えられる。

18世紀中葉の20号土坑・3a層では、大堀相馬の比率が最も高くなり、それまで高かった肥前の比率が急激に低下している。小野相馬は、一定の比率を保った状態である。大堀相馬は、碗類が多いことに変わりはないが、18世紀前葉aの２号遺構ではみられなかった、鉄釉掛け分けや鉄釉流し掛けの碗がみられるようになり、器形では丸碗に加えて、腰折碗や端反碗がみられるなど、碗類に多様性がみられるようになる。また、数は少ないものの、折縁輪花皿、丸皿、火入（または香炉）や片口鉢などの器種も確認される。小野相馬でも、最も多いのは碗類であり、見込み蛇ノ目釉剥ぎ丸皿や折縁皿、火入（または香炉）がわずかにみられる程度である。これらの資料では、小野相馬においても碗類が中心で、それ以外の器種はあまり多くは含まれていない。18世紀後葉では、碗と

皿を主要な器種とする大堀相馬と、大堀相馬と競合しない片口鉢、大鉢、皿、火入・香炉などの器種を主体とする小野相馬といった器種の上での作り分けがみられたが（年報８）、これらの資料では、まだそのような様相はみられない。小野相馬において、器種の上での作り分けがより顕著に認められるようになるのは、18世紀後葉頃であろうと考えられる。

図2－12・表2－4には、２号遺構と20号土坑・3a層に関して、陶器の主体を占める碗類の産地別組成を示している。2号遺構（18世紀前葉）では、肥前が3割強と最も多く、次いで小野相馬が多い。大堀相馬は小野相馬より少ない状況にあり、大堀相馬と瀬戸・美濃はほぼ同程度である。大堀相馬、小野相馬と、相馬系とした陶器を併せた割合が、おおよそ肥前と同じ程度を示している。肥前では、呉来手碗が非常に多いほか、刷毛目文の碗が多数含まれている。瀬戸・美濃は、灰釉丸碗、尾呂茶碗、御室茶碗、腰錆茶碗などのほか、破片ではあるが天目碗や茶器とみられる灰釉碗も含まれており、様々な瀬戸・美濃製品が用いられていたことがうかがえる。大堀相馬では、鉄釉流し掛け灰釉碗がいくつかみられるが数は多くなく、多いのは灰釉丸碗である。関根が指摘している（関根達人1998）、「17世紀末の最も古い灰釉丸碗は、体部の丸みが強く、高台は小振りで、全体の形としては京・信楽系陶器の丸碗に近い印象を与える」ものが、18世紀前葉の段階にも、わずかではあるが含まれている（図2－4の43）。上述のように、灰釉は淡青灰色ないし淡青灰白色で半失透釉から失透釉のものがほとんどである。瀬戸・美濃の腰錆碗写しで、18世紀中葉以降では含まれる灰釉・鉄釉の掛け分け碗はみられない。破片資料に、鉄釉流し掛け灰釉碗で、灰釉・鉄釉掛け分け碗の腰部にみられるような刻線がある資料が１点みられるが、灰釉と鉄釉を掛け分けたものではない。小野相馬も灰釉碗が多く、鉄釉流し掛け灰釉碗や鉄絵灰釉碗がいくつかみられる。

20号土坑・3a層になると、大堀相馬の碗類の比率が高まり、碗類のうち６割程度を占めるようになる。それまで多かった肥前は急速にその割合が減り、瀬戸・美濃の割合も減少している。小野相馬の割合はほぼ変化はみられず、大堀相馬が急速に成長し、その需要を伸ばしていることがうかがえる。京・信楽は高級陶器として一定の需要があるためか、低いながらも一定の割合を保っている。大堀相馬では、碗の種類が増えていることが注目される。灰釉丸碗、鉄釉流し掛け灰釉碗が多く、鉄釉流し掛けの腰折碗が加わり、腰部に刻線がある鉄釉流し掛け灰釉碗もみられる。確実なものは１点のみではあるが、２号遺構にはみられなかった灰釉・鉄釉掛け分け碗が加わるようになる。灰釉は、透明度がある淡緑灰色系のものが多く、２号遺構で多かった淡青灰色で失透釉のものはほとんどみられない。ごくわずかではあるが、灰釉が白濁して糠白釉に近い発色をしているものも含まれている。小野相馬では、灰釉丸碗のみで、鉄釉流し掛けや鉄絵の碗はみられなくなる。瀬戸・美濃は、腰錆碗が１点と灰釉碗がみられるのみで、２号遺構と比べると、碗の種類は少なくなる。肥前には、呉来手碗がいくつかみられる程度である。

大堀相馬の鉄釉流し掛け灰釉碗は、瀬戸・美濃の尾呂茶碗を写したものと考えられる（年報７）。18世紀前葉の２号遺構では、瀬戸・美濃の尾呂茶碗がいくつか出土しており、それとともに大堀相馬の鉄釉流し掛け灰釉碗も少量ながら出土している。しかし、大堀相馬のシェアが高まる18世紀中葉になり、大堀相馬の鉄釉流し掛け灰釉碗が多くみられるようになると、本家である尾呂茶碗は含まれなくなる。また、大堀相馬の灰釉・鉄釉掛け分け碗は、瀬戸・美濃の腰錆茶碗を写したものと考えられている（年報７）。瀬戸・美濃の腰錆茶碗が出土する２号遺構の段階には、大堀相馬の灰釉・鉄釉掛け分け碗は出土していない。18世紀中葉になり、大堀相馬の灰釉・鉄釉掛け分け碗が含まれるようになると、瀬戸・美濃の腰錆茶碗もわずかに含まれるものの、限られたものとなっている。このように、大堀相馬は、瀬戸・美濃や肥前などの陶器製品の需要をうまく取り込みながら、その生産規模を拡大させていった様相がうかがえる。

これらをふまえて、陶器全体の産地別組成をまとめると、次のようになる。17世紀初頭から前葉には、肥前と瀬戸・美濃でほぼ占められ、二分される状況であった。17世紀末葉には、呉来手などの碗を中心に肥前が４割か

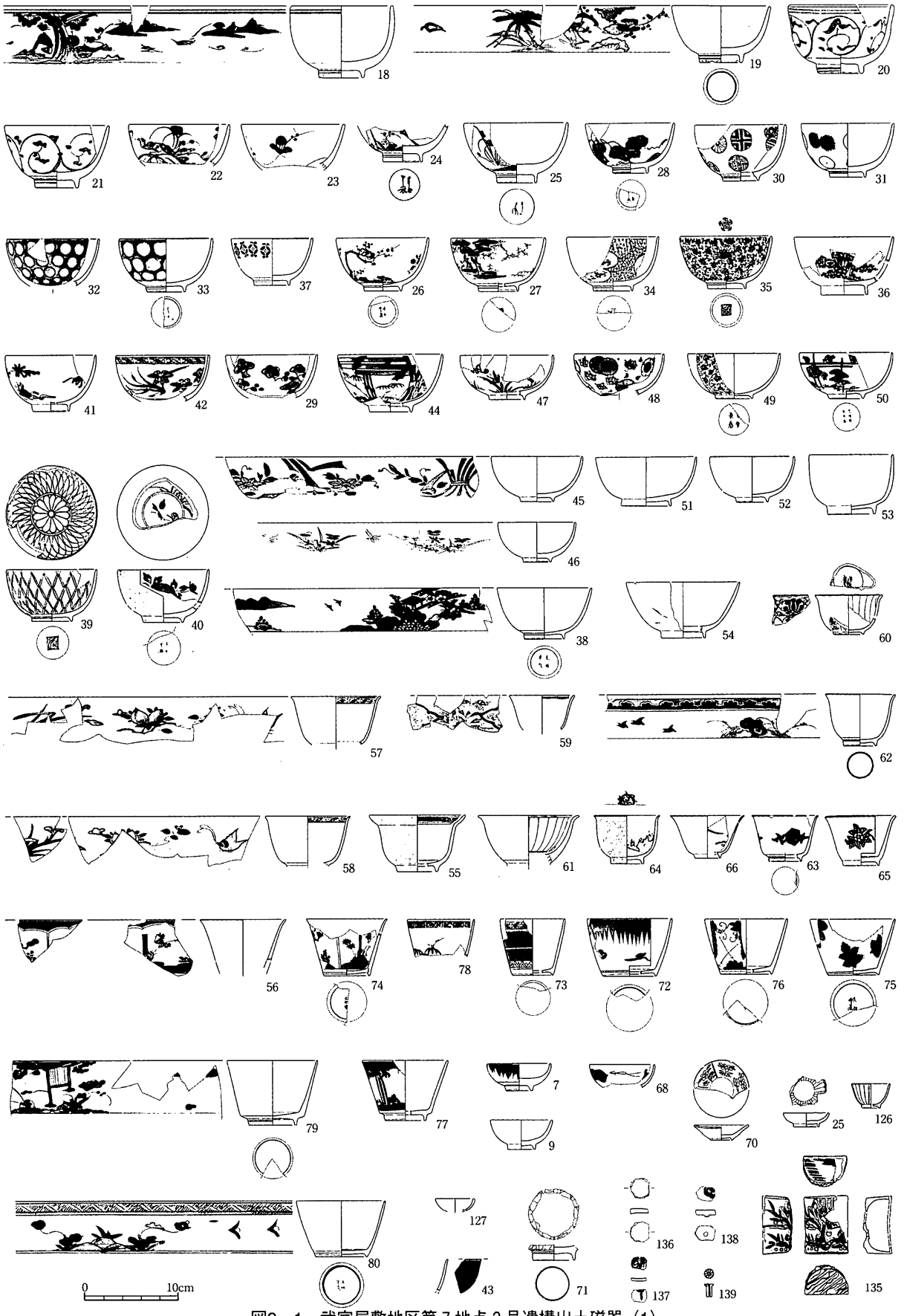


図2－1　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土磁器（1）
Fig.2－1　Porcelains from No.2 structural remains at BK7（1）

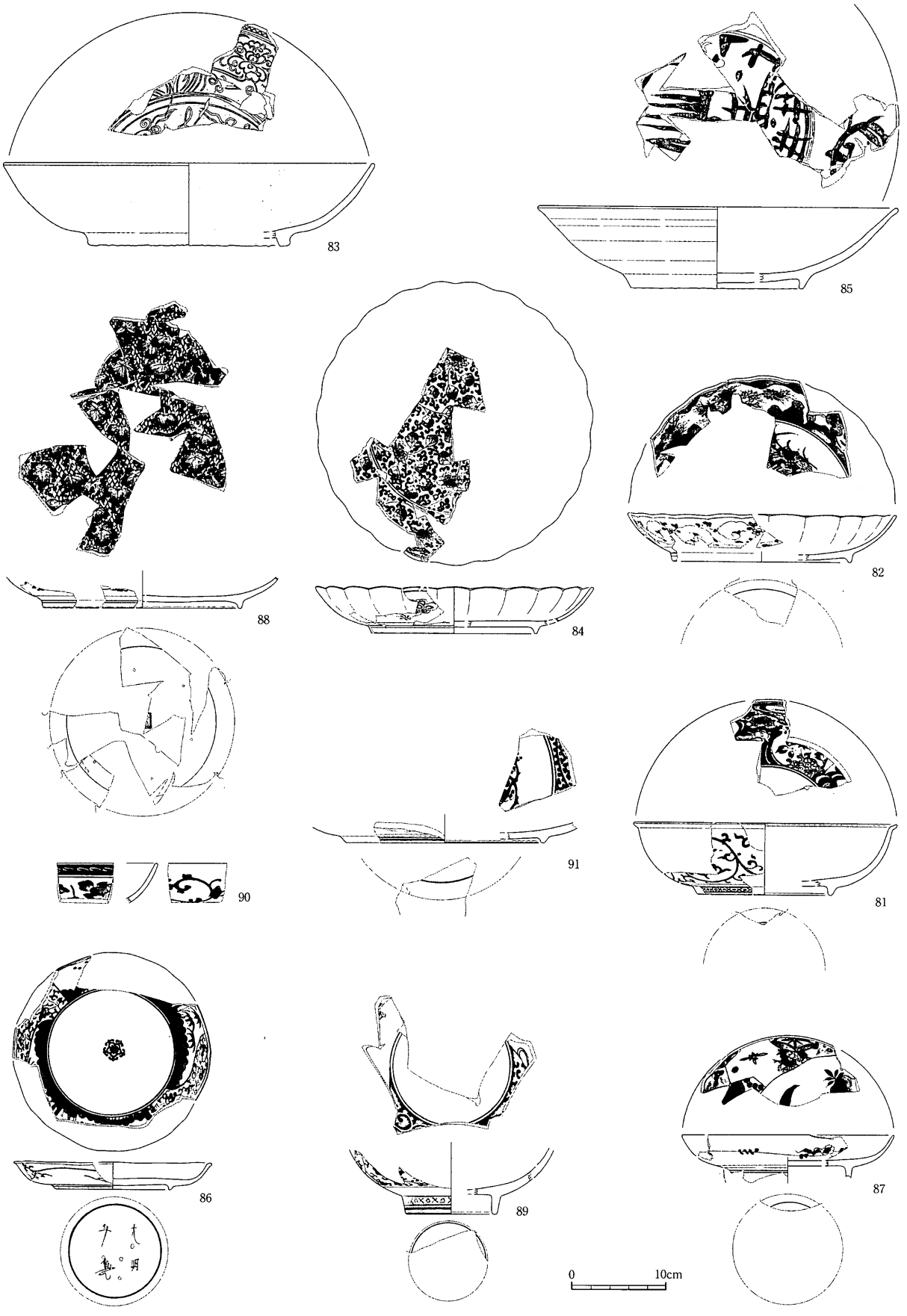


図2－2　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土磁器（2）
Fig.2－2　Porcelains from No.2 structural remains at BK7（2）

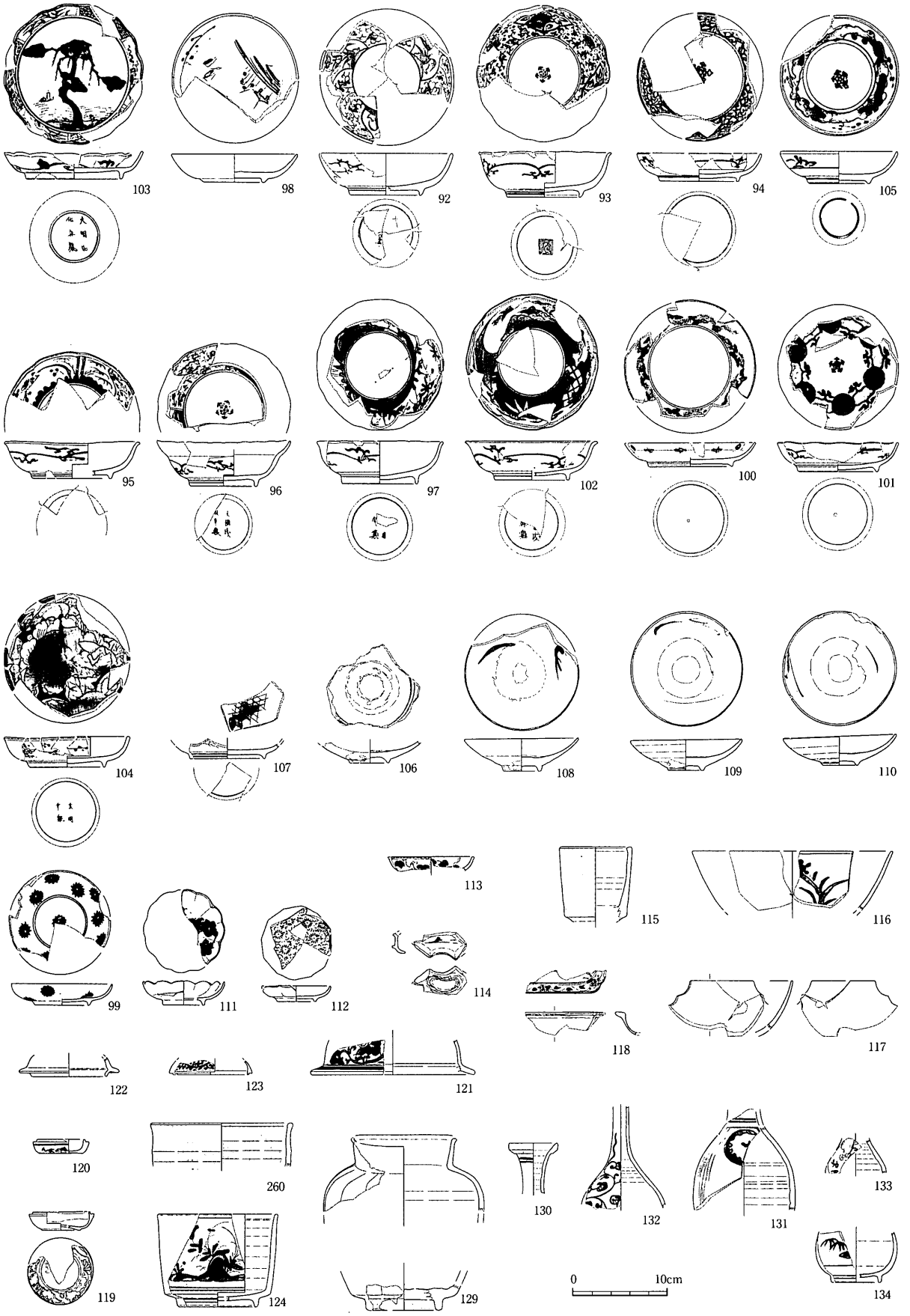


図2－3　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土磁器（3）
Fig.2－3　Porcelains from No.2 structural remains at BK7（3）

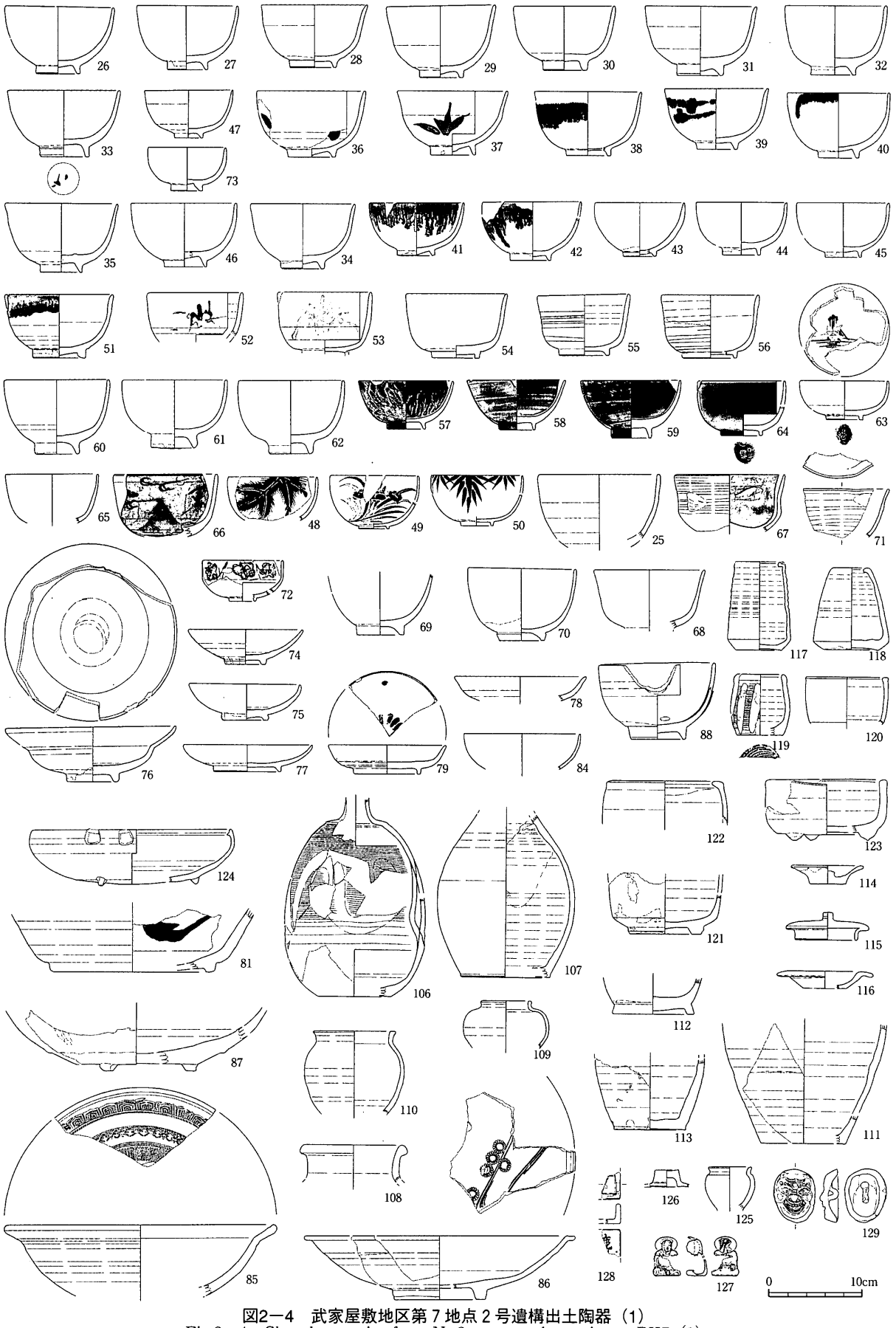


図2－4　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土陶器（1）
Fig.2－4　Glazed ceramics from No.2 structural remains at BK7（1）

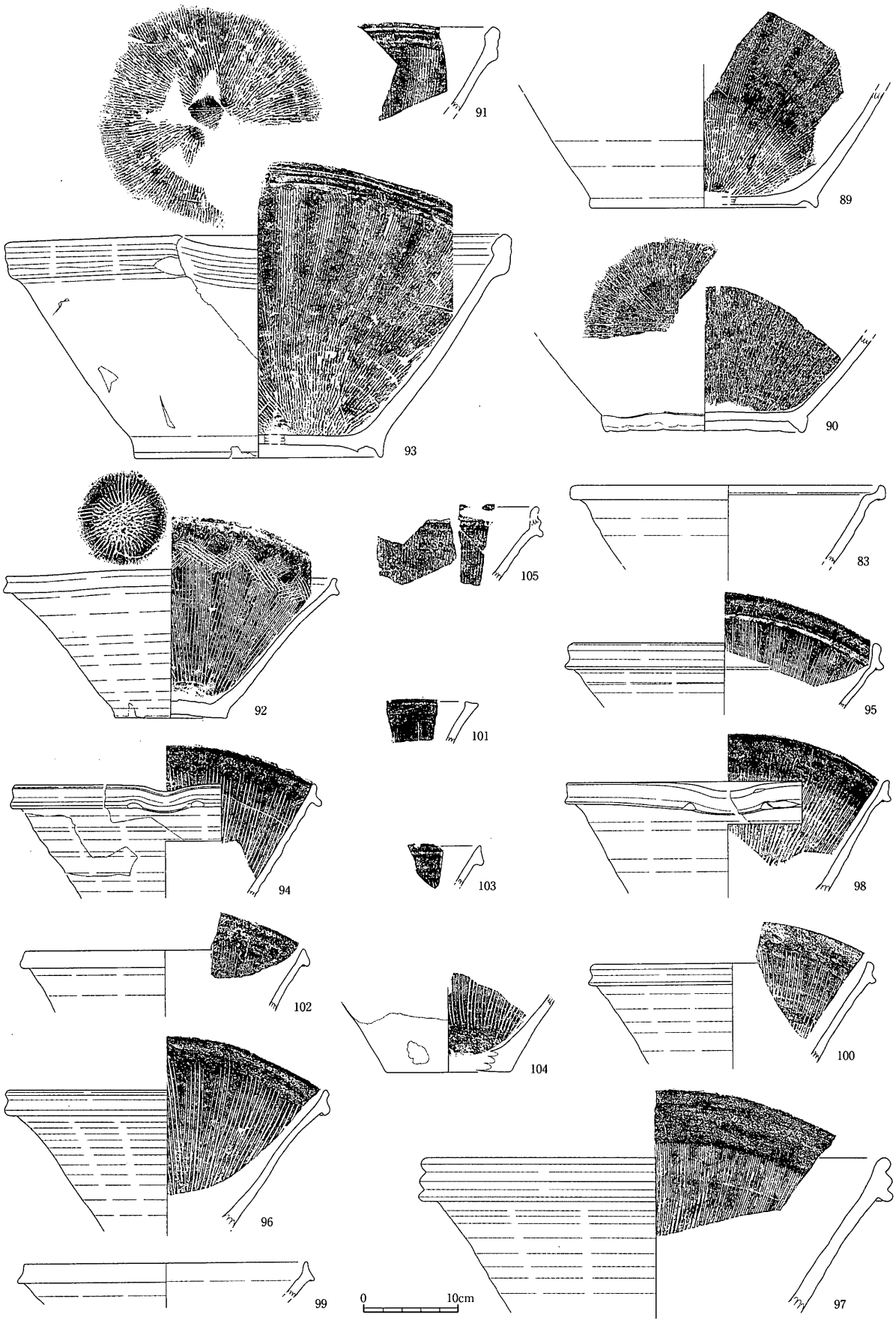


図2—5　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土陶器（2）
Fig.2－5　Glazed ceramics from No.2 structural remains at BK7（2）

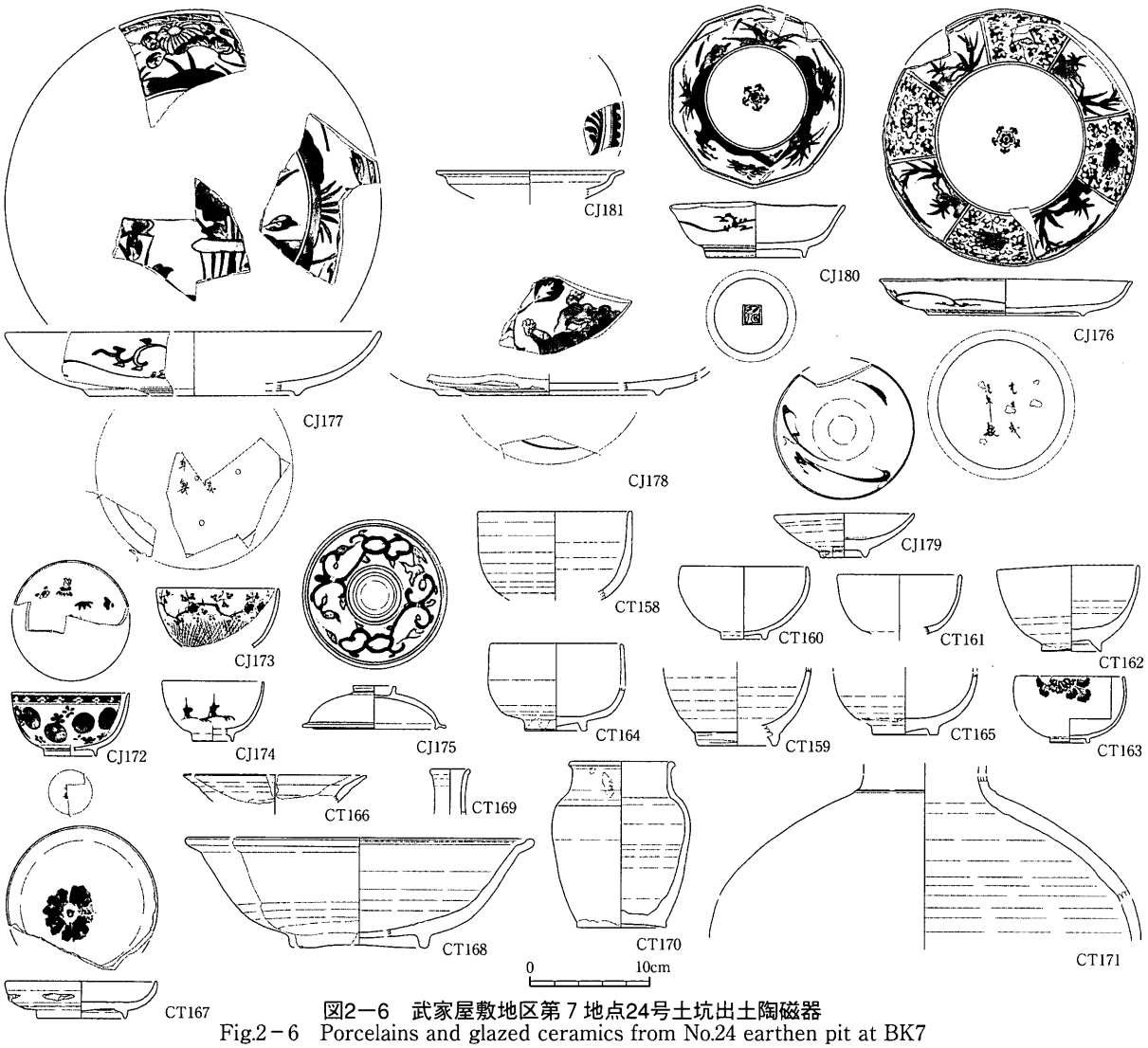


図2－6　武家屋敷地区第７地点24号土坑出土陶磁器
Fig.2－6　Porcelains and glazed ceramics from No.24 earthen pit at BK7

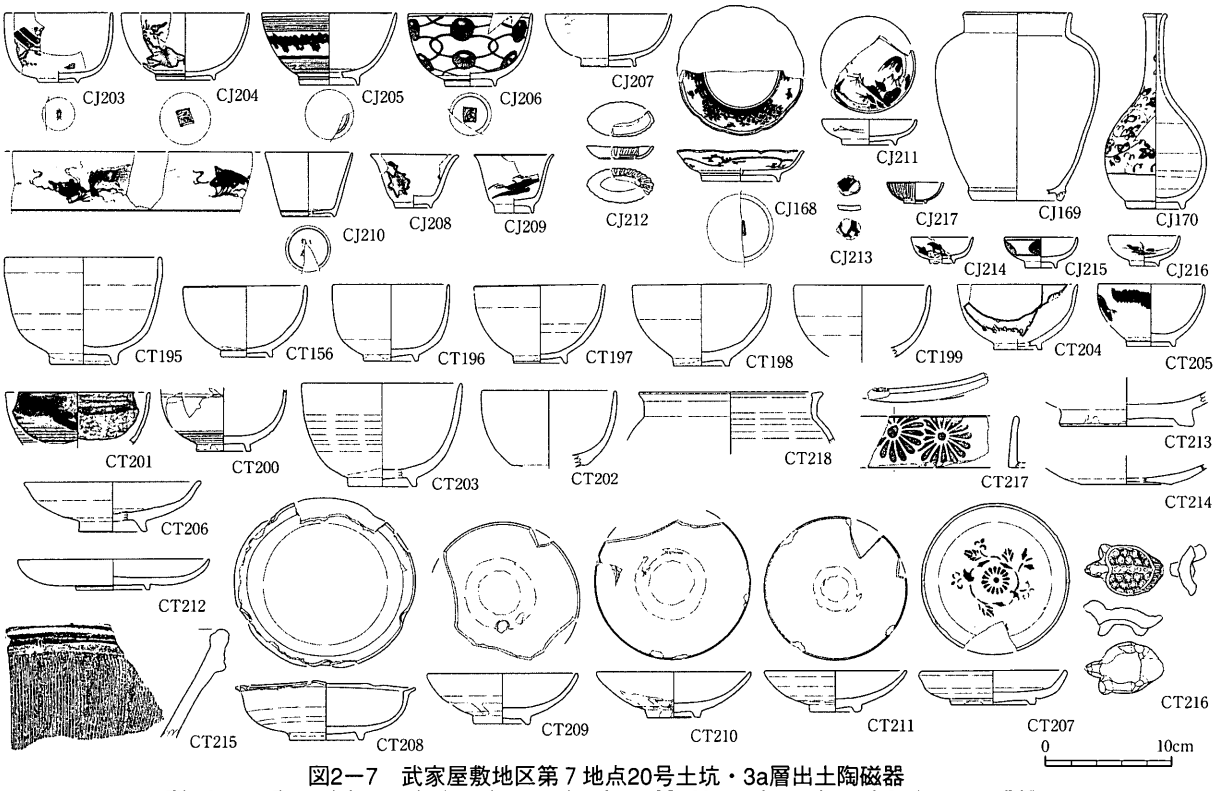


図2－7　武家屋敷地区第７地点20号土坑・3a層出土陶磁器
Fig.2－7　Porcelains and glazed ceramics from No.20 earthen pit and 3a layer at BK7

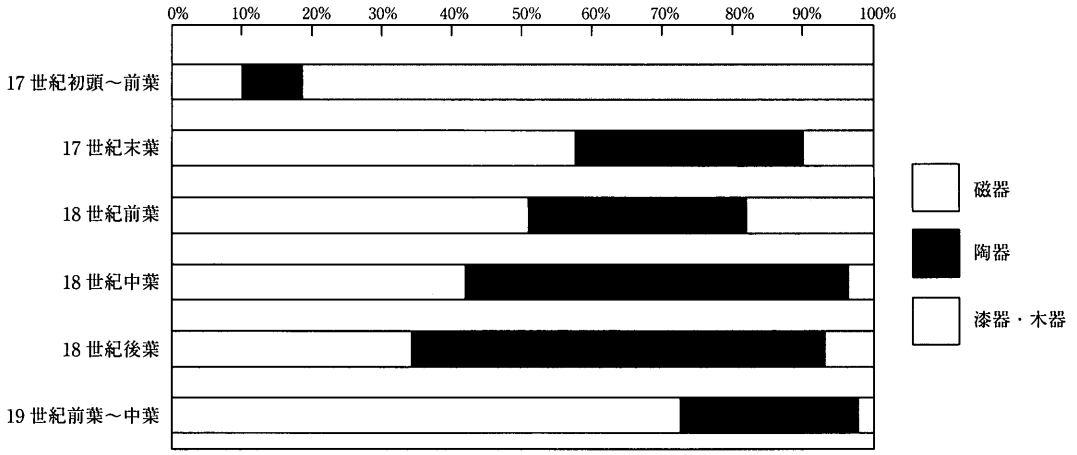


図2－8　仙台城跡二の丸地区出土供膳具（碗類）の材質
Fig.2－8　Materials of table ware (bowls) from the second citadel of Sendai Castle

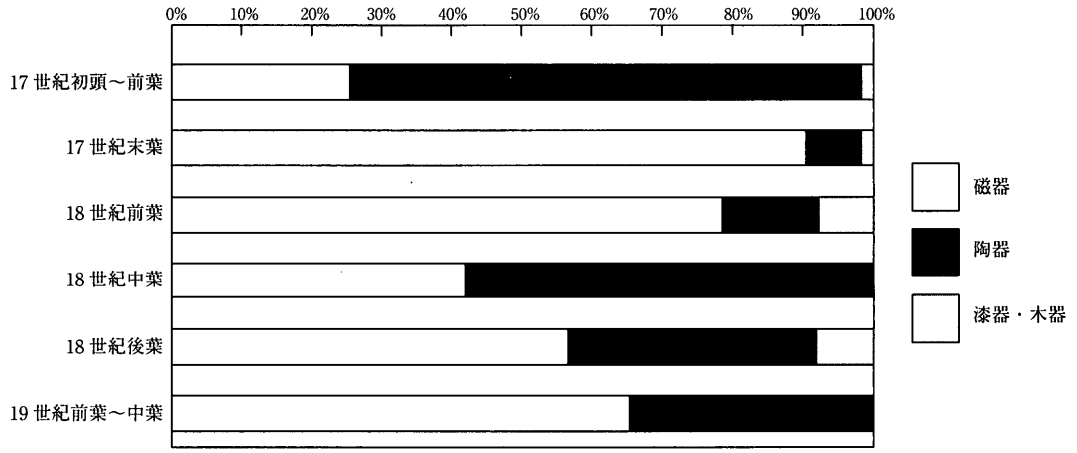


図2－9　仙台城跡二の丸地区出土供膳具（皿類）の材質
Fig.2－9　Materials of table ware (dishes) from the second citadel of Sendai Castle

表2－1　仙台城跡二の丸地区出土供膳具（碗・皿類）の材質別出土点数
Tab.2－1　Count of bowls and dishes from the second citadel of Sendai Castle

時　期	資　料	碗　類				皿　類				碗・皿識別不明	
		磁器	陶器	漆器等	合計	磁器	陶器	漆器等	合計	磁器	陶器
17 世紀初頭～前葉	NM9　7･8 層、Ⅰ期遺構	6	5	48	59	42	120	3(1)	165	5	0
17 世紀末葉	NM5　北区Ⅶ･Ⅵ･Ⅴ層	82	46	14	142	47	4	1(1)	52	86	4
18 世紀前葉	BK7　2 号遺構	418	252	148	818	246	43	25(19)	314	12	117
18 世紀中葉	BK7　20 号土坑・3a 層	85	110	7	202	15	21	0	36	5	17
18 世紀後葉	NM9　15･16 号土坑	117	200	23	340	48	30	7(4)	85	7	80
19 世紀前葉～中葉	NM9　1 号池	638	222	18	878	208(8)	110	1	319	51	211

陶器の向付や漆器の椀蓋は皿として用いられる場合が多いと考え皿の数量に含めている。
(　　) 内の数値は、皿に含めた蓋類の数。

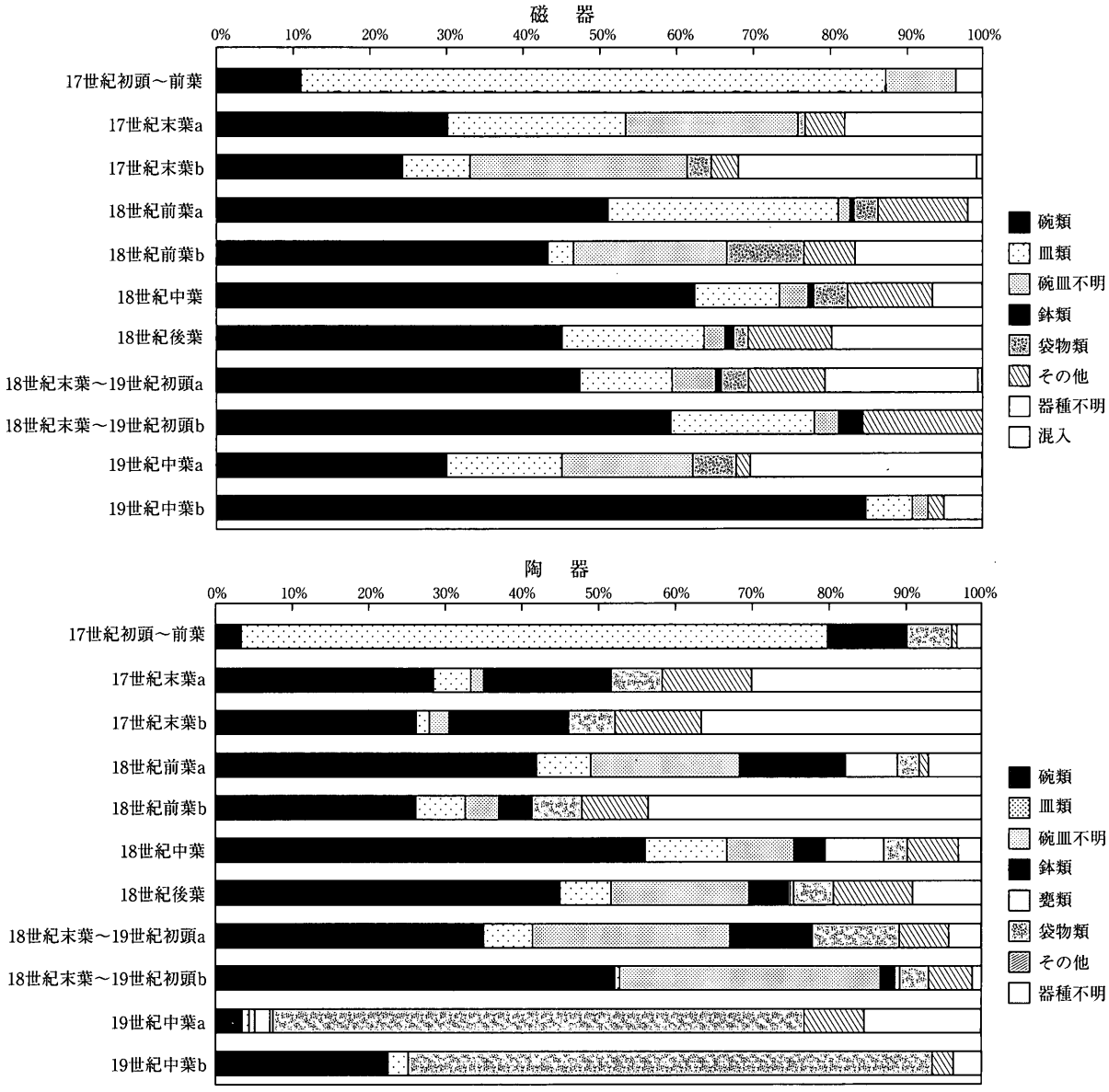


図2－10　仙台城跡二の丸地区出土陶磁器の器種組成比率
Fig.2－10　Histograms of porcelains and glazed ceramics from the second Citadel of Sendai Castle

表2－2　仙台城跡二の丸地区出土陶磁器の器種別出土点数
Tab.2－2　Counto of porcelains and glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle

時期	資料	磁器									陶器								
		碗類	皿類	碗皿不明	鉢類	袋物類	その他	器種不明	混入	合計	碗類	皿類	碗皿不明	鉢類	甕類	袋物類	その他	器種不明	合計
17世紀初頭～前葉	NM9　7・8層、16号溝	6	42	5	0	0	0	0	2	55	5	118	0	16	0	9	1	5	154
17世紀末葉a	NM5　北区Ⅶ・Ⅵ層	35	27	26	0	1	6	21	0	116	17	3	1	10	0	4	7	18	60
17世紀末葉b	NM5　4号土坑、北区Ⅴ層	54	20	63	0	7	8	69	2	223	30	2	3	18	0	7	13	42	115
18世紀前葉a	BK7　2号遺構	418	246	12	4	26	95	17	0	818	252	43	117	83	41	17	7	42	602
18世紀前葉b	NM5　3号土坑	13	1	6	0	3	2	5	0	30	12	3	2	2	0	3	4	20	46
18世紀中葉	BK7　20号土坑・3a層	85	15	5	1	6	15	9	0	136	110	21	17	8	15	6	13	6	196
18世紀後葉	NM9　15・16号土坑	117	48	7	3	5	28	51	0	259	200	30	80	24	2	23	46	40	445
18世紀末葉～19世紀初頭a	NM9　2号池	67	17	8	1	5	14	28	1	141	65	12	48	20	0	21	12	8	186
18世紀末葉～19世紀初頭b	NM17　3層一括	19	6	1	1	0	5	0	0	32	83	1	54	3	1	6	9	2	159
19世紀中葉a	NM5　1・2号池	16	8	9	0	3	1	16	0	53	10	3	2	6	1	204	23	45	294
19世紀中葉b	NM9　1号池	83	6	0	0	2	2	5	0	98	42	5	0	0	0	128	5	7	187

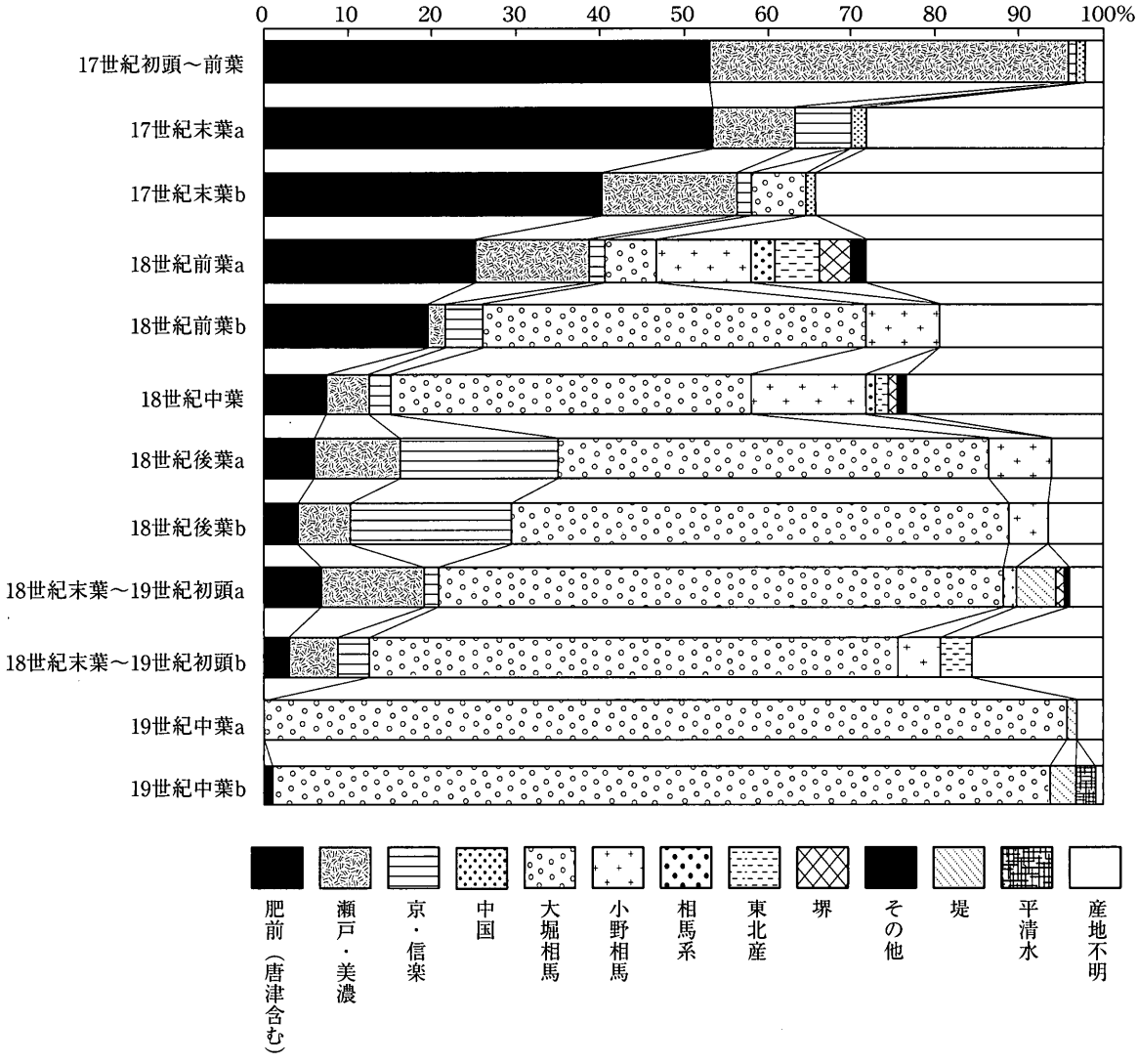


図2－11　仙台城跡二の丸地区出土陶器の産地別組成比率
Fig.2－11　Histogram of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by producing district

表2－3　仙台城跡二の丸地区出土陶器の産地別出土点数
Tab.2－3　Count of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by producing district

時　期	資　料	肥前	瀬戸美濃	京信楽	中国	大堀相馬	小野相馬	相馬系	東北産	堺	その他	堤	平清水	産地不明	合計
17世紀初頭～前葉	NM9　7·8層、16号溝	80	65	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	151
17世紀末葉a	NM5　北区Ⅶ·Ⅵ層	32	6	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	17	60
17世紀末葉b	NM5　4号土坑、北区Ⅴ層	42	17	2	1	7	0	0	0	0	0	0	0	36	105
18世紀前葉a	BK7　2号遺構	151	82	11	0	37	68	17	32	23	4	0	0	177	602
18世紀前葉b	NM5　3号土坑	9	1	2	0	21	4	0	0	0	0	0	0	9	46
18世紀中葉	BK7　20号土坑、3a層	15	10	5	0	84	28	1	3	2	2	0	0	46	196
18世紀後葉a	NM9　16号土坑埋土4層以下	10	18	33	0	88	13	0	0	0	0	0	0	11	173
18世紀後葉b	NM9　15号土坑埋土4層以下	4	7	20	0	62	5	0	0	0	0	0	0	7	105
18世紀末葉～19世紀初頭a	NM9　2号池	13	23	3	0	127	3	0	0	1	1	9	0	9	189
18世紀末葉～19世紀初頭b	NM17　3層一括	5	9	6	0	100	8	0	6	0	0	0	0	25	159
19世紀中葉a	NM5　1·2号池	0	1	0	0	274	0	0	0	0	0	3	0	9	287
19世紀中葉b	NM10　2区Ⅲ－2b·2c·3·4層	0	0	2	0	173	0	0	0	0	0	6	4	2	187

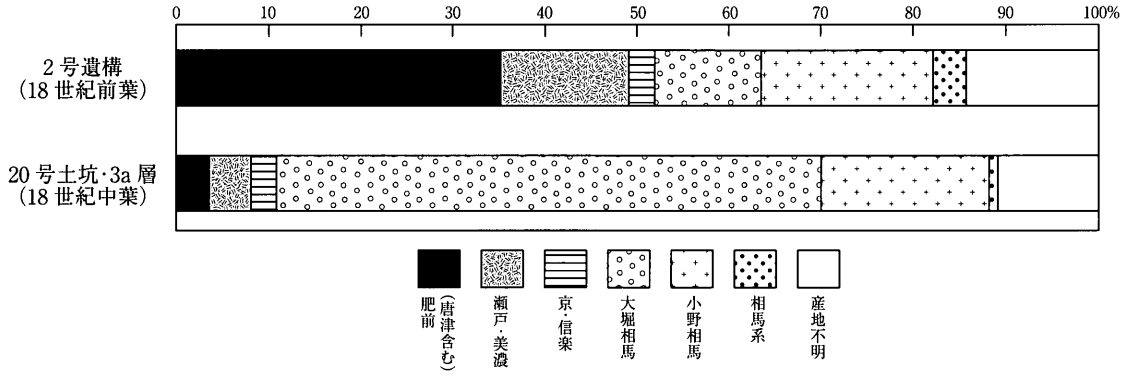


図2－12　武家屋敷地区第7地点出土陶器碗類の産地別組成比率
Fig.2－12　Histgrams of bowls of glazed ceramics from BK7 by producing district

表2－4　武家屋敷地区第7地点出土陶器碗類の産地別出土点数
Tab.2－4　Count of bowls of glazed ceramics from BK7 by producing district

時　期	資　料	肥前	瀬戸 美濃	大堀 相馬	小野 相馬	相馬系	京 信楽	不明	合計
18世紀前葉	BK7　2号遺構	89	35	29	47	9	7	36	252
18世紀中葉	BK7　20号土坑·3a層	4	5	65	20	1	3	12	110

ら5割を占める。一方で、瀬戸・美濃の割合がかなり減少していくが、図2－8でもわかるように、代わって肥前磁器が浸透していくためと考えられる。17世紀末葉になると、一部で大堀相馬の陶器が出現するが、灰釉丸碗のみで、出土量も少ない。18世紀前葉aでは、17世紀末葉の様相を残しつつも、肥前がさらに少なくなり、大堀相馬とともに小野相馬が加わるなどの変化がみられる。18世紀前葉bの段階では、より18世紀中葉に近い様相を示すようになり、肥前はさらに減少し、大堀相馬が急激に増加している。大堀相馬の比率が高まると、大堀相馬と競合関係にある瀬戸・美濃は、出土量が減少していることがよくわかる。18世紀中葉以降、大堀相馬が陶器の主体を占めるようになる。18世紀中葉には、肥前の割合も減少し、その分、大堀相馬や小野相馬が比率を伸ばしている。18世紀中葉の段階では、小野相馬は碗類が主体で、他の器種も出土しているものの、数は非常に少ない。小野相馬が碗類以外の器種を積極的に生産するようになるのは、18世紀後葉頃であろうと考えられる。肥前、瀬戸・美濃は、あまり高くない割合ながらも、19世紀初頭まで一定量出土している。京・信楽は、各期を通して出土しているが、18世紀後葉にはその比率が高まっている。18世紀第2四半期～第3四半期に京焼が量産品の生産を本格化させたと考えられ（赤松和佳2006）、信楽焼も18世紀中頃を上限として、京焼風の碗類の生産を本格化し始めたと考えられている（畑中英二2003）。18世紀後葉に京・信楽の比率が高まるのは、このような動きが影響しているためと考えられる。小野相馬は、18世紀末葉から19世紀初頭で減少し、19世紀中葉にはみられなくなる。それと符合して、仙台の堤が出現している。堤に関しては、窯跡の調査がなされておらず、考古学的にはその実態がわかっていない。そのため、その出現の時期に関しても、さらにさかのぼる可能性も含まれている。19世紀中葉になると、大堀相馬が陶器の大多数を占めており、陶器は東北地方の窯の製品でほぼ占められているような状態になる。

小結

武家屋敷地区第7地点の出土資料によって、18世紀前葉の陶磁器の様相が明らかとなった。特に、大堀相馬と小野相馬の陶器では、両者を区別する特徴が明確でない資料も多くみられた。両者の特徴が明確になってくるのは、18世紀中葉頃であり、器種の上での作り分けが明確になるのは18世紀後葉頃である。生産開始期、あるいは

生産拡大期の両者の関係を考える上で、今回の資料は重要である。

また、擂鉢や壺・甕類、火入・灰吹・香炉などの器種では、東北地方の窯で生産された可能性が考えられる陶器が含まれている。これらの窯は、おそらく１つではなく、複数の窯の製品が含まれているものと考えられる。また、18世紀前葉以降の年代の資料にも一定程度含まれており、これらの陶器が一体どこの窯で生産されたものであるかは、今後の課題として残されている。

②土師質土器・瓦質土器

仙台城跡出土の土師質土器・瓦質土器の変遷については、年報９において、それまで出土した一括資料を中心に検討がなされている。そこでは、良好な資料に欠ける時期があるものの、仙台城跡出土の土師質土器・瓦質土器の様相や画期が考察されている。

その後、仙台城跡の二の丸地区や北方の武家屋敷地区では、本年報で報告する武家屋敷地区第７地点の調査のほか、いくつかの調査が行われた。特に、武家屋敷地区第７地点の２号遺構は、供伴する木簡の記載内容から、享保年間のごく限られた時期の廃棄土坑であることが考えられる。２号遺構からは、大量の土師質土器の皿が出土しており、それ以外にも焼塩壺・焙烙・焜炉・火鉢など、さまざまな種類の土師質土器や瓦質土器が出土している。これらは、出土遺物の検討から、二の丸から排出されたごみが廃棄されたものであろうと考えられている（年報19第１分冊）。

ここでは、２号遺構出土の一括資料を中心に、年報９での考察に18世紀前葉の土師質土器・瓦質土器の様相を追加していきたい。また、それ以外にも、二の丸地区第17地点や、武家屋敷地区第４地点の資料など、出土点数は少ないものの、出土状況から時期が限定される資料も確認されている。これらについても、必要に応じて触れていき、仙台城跡出土の土師質土器・瓦質土器の様相や変遷について、考察していく。

A．資料の概要

年報９では、年代が限定できる９資料群を提示し、「仙台城跡出土の皿類以外の土師質・瓦質土器の変遷」を示している（年報９図90）。図2－18～図2－20は、この変遷図に、その後の調査で出土した一括資料を追加して作成したものである。追加した資料の概要は、次の通りである。なお、年報９で示した資料群の説明や集成図については、年報９とそれぞれの調査の年報を参照されたい。

17世紀初頭～前葉：武家屋敷地区第７地点　14号土坑

18世紀前葉：武家屋敷地区第７地点　２号遺構

18世紀末～19世紀初頭：二の丸地区第17地点３層

二の丸地区第17地点14号土坑

二の丸地区第17地点2号溝

武家屋敷地区第７地点の２号遺構は、出土遺物の検討から、二の丸から運ばれたゴミが廃棄されたものと考えられる。そのため、出土遺物は、二の丸地区の様相を反映しているものと考えられる。図2－13～図2－15には、２号遺構出土の土師質土器、瓦質土器をまとめて示している。

武家屋敷地区第７地点の14号土坑は、遺構の詳細な性格はわからないが、武家屋敷に伴う遺構であろうと推測される。

二の丸地区第17地点の３層については、文化元年（1804年）に落雷のため二の丸がほぼ全焼していることが文献記録から知られており、文化元年の火災後の、再建工事に伴う整地層と考えられる。２号溝は、埋土に多量の炭化物を含み、陶磁器類が一括して出土している。文化元年の火災により、二の丸建物群が全焼した後、３層の整地を行う以前の片付けの際に、臨時的に構築された溝であろうと考えられる。14号土坑は、検出状況からゴミ

穴と考えられている（年報18）。

武家屋敷地区第４地点からも、1号溝（17世紀前半主体）、３号池A～F（17世紀中葉主体）、２号池埋土６～４層（17世紀末～18世紀前葉）、10号土坑（18世紀後葉～19世紀前半）など、遺構の検出状況から時期が比較的限定できる資料が確認されている。しかし、やや広めの年代幅でとらえなければならない遺構もあり、図2－18～図2－20の変遷図には入れず、図2－16にまとめている。武家屋敷地区第４地点は、比較的上級の家臣の屋敷地として使われた場所であることがわかっており（年報13）、出土遺物もこれらの屋敷地に伴うものと考えられる。

Ｂ．時期ごとの出土状況の変化

上述の資料を加えた上で、時期ごとの出土状況の変化について、図2－18～図2－20をもとに、述べていく。

17世紀初頭～前葉では、土師質土器の皿・耳皿・灯火具・焼塩壺・鉢？・内耳の部分と思われる破片や、瓦質土器の火入・擂鉢・火鉢・変形鉢？・風炉？などがみられた。武家屋敷地区第７地点14号土坑からは、瓦質の擂鉢（図2－18の９）と坩堝（図2－20の１）が加えられる。この時期は、全体に遺物量がさほど多くない傾向にあり、土器類の出土量も少ない。14号土坑においても、土器類の出土量は少ない傾向にある。その中で、瓦質擂鉢は７破片が出土しており、比較的多い点数と考えられる。武家屋敷地区第４地点１号溝からも、瓦質の擂鉢（図2－16の1～3）が出土している。瓦質土器の擂鉢は、この時期に比較的多くみられる器種と考えられる。しかし、この時期以降はほとんど出土しておらず、代わって陶器の擂鉢の出土が多くなっていくものと考えられる。

17世紀末～18世紀初頭（元禄年間）の資料では、土器類の出土量が前代と比べて多くなる。中でも、土師質土器の皿の出土量が増加している。他の器種は皿に比べると少ないが、土師質土器の耳皿・焼塩壺・鉢？や、瓦質土器の火鉢が認められる。

18世紀前葉においても、皿が大多数を占め、他には瓦質の火鉢が認められる程度であった。しかし、武家屋敷地区第７地点２号遺構の出土遺物が加わり、18世紀前葉の様相が大きく変わることが明らかとなった。２号遺構では、皿が大多数を占める傾向に変わりはないが、土師質土器の焼塩壺・焙烙・鉢類・風炉・焜炉風口・鞴羽口や、瓦質土器の焜炉・火消壺？・火鉢など、今までに確認されていなかった器種も多数出土している。年報９では、18世紀後葉の資料で、皿以外の器種も増加してくることが指摘されていたが、18世紀前葉の段階で、すでに器種が増加することが考えられる。また、土師質土器の焙烙については、18世紀後葉の段階でフライパンのような形態をしたものが出現することがわかっていたが、それ以前の時期では、焙烙は確認されていなかった。２号遺構からは、内耳を有する丸底のもの（図2－15のCH156）と、内耳がなく丸底のもの（図2－15のCH160・162）の２つの種類の焙烙が確認されており、仙台城跡において、18世紀前葉の段階で焙烙が存在することが明らかとなった。これらは、18世紀後葉のフライパン形の焙烙とは、形態的に大きく異なるものである。特に、内耳のある焙烙は、中世の土鍋である内耳土器に起源を有する（江戸遺跡研究会2001）ものであろうと考えられる。

18世紀後葉では、前段階の時期から認められる皿・耳皿・焼塩壺・鉢？・焙烙に加えて、ミニチュアと思われるものが存在している。皿が大多数を占めることに変わりはない。前述のように、焙烙はフライパンのような形態をしたものである。瓦質土器では、火鉢・手炙り・焜炉？が認められる。

18世紀末～19世紀初頭では、皿が多数を占めるほか、瓦質土器の蚊遣りが出現することが指摘されている。二の丸跡第17地点の３層・14号土坑・２号溝からは、焼塩壺や、火鉢Ａ１類が出土している。これらは、前後の時期との空白を埋める重要な資料である。

19世紀中葉頃の資料では、出土例が多く、器種がさらに増加している。土師質土器では五徳、瓦質土器では炭櫃・十能などが、この時期に新たに認められる。また、火消壺は18世紀前葉の資料にもみられたが、19世紀中葉頃の資料では、器形が異なるものが確認されている。

C．各器種の変遷

a．皿

土師質土器の皿については、口縁もしくは底部外周の６分の１以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径・底径・器高が計測できるものを抽出し、以下のような分析を試みている。口縁もしくは底部外周が６分の１以上残っているものを抽出基準としているのは、経験的に、口径もしくは底径を復元するときに、安定した数値を得られるであろうという判断によるものである。

皿は、近世を通じて、ロクロ整形で、底部を回転糸切りする方法で製作されており、手づくねのものはみられない。底部を回転糸切りし、再調整を施さないもの（A類）と、ロクロ整形で、底部を回転糸切りした後に、外面にミガキによる再調整を加えるもの（B類）とが存在する。17世紀初頭～前葉の資料では、B類は認められず、全てがA類である。17世紀末～18世紀初頭の段階以降、A類・B類ともにみられるようになるが、A類の割合が圧倒的に多い。A類とB類の比率については、遺物集計の段階で、両者を区別して集計していないため、その全体量を示すことができない。しかし、上記の基準で抽出した後の資料では、図2－21・図2－22にA類、B類を区別して示しており、おおまかな傾向は読み取れるものと考えられる。いずれの時期でも、A類の点数が多いが、17世紀末以降、B類も一定程度含まれるようである。

図2－21・図2－22は、各時期の一括資料について、口径と器高の法量分布を示したものである。年報９で示したものに、武家屋敷地区第７地点２号遺構出土の18世紀前葉の資料を加えて作成している。18世紀前葉の資料は、これまで資料数が少なかったため、その様相が明確でなかった時期である。

皿の口径は、点数によって明確でない資料群もあるが、おおよそ10cm以下の小型のもの、10～15cm程度の中型のもの、15cm以上の大型のものの３つに大別できる。17世紀初頭～前葉の資料では、資料点数が少ないためか、分布が集中するところはあまり明確ではない。しかし、三の丸跡Ｉ期では、15cm以上の大型のものと、中型のものがみられ、二の丸跡第９地点Ｉ期では、小型と中型があるといえるだろう。他の時期ほど明確ではないものの、小型・中型・大型の作り分けはあったものと考えられる。

17世紀末～18世紀初頭の時期では、小型・中型・大型の作り分けがより明確になっており、中型のものが最も点数が多い。このような傾向は、以後、18世紀後葉や18世紀末～19世紀初頭の資料まで同様である。

中型のものについては、18世紀前葉の資料では、さらに３群に分けられるものと考えられる。武家屋敷地区第７地点２号遺構では、中型のうち、口径がおおよそ11cm前後、12～13cm、13～14cmにまとまりがみられ、12～13cmが最も多くなっている。これらのまとまりは三寸半（約10.6cm）、四寸（約12.1cm）、四寸半（約13.6cm）といった大きさに相当する可能性が考えられ、口径にこのような規格があったことも推測される。また、年報９において、中型の中に、器高が２cmに満たない浅いものが少数ながら存在することが指摘されていた。武家屋敷地区第７地点２号遺構の資料においても、器高が２cm以下の浅めの皿が、少数ながらも確実にみられる。

18世紀後葉の資料になると、口径13～14cm前後のまとまりは、点数が少なくなり、散漫な分布に変化している。二の丸跡第９地点16号土坑では、口径12cm前後に最も集中がみられ、口径11cm前後にはミガキ調整がなされるB類が集中してみられる。二の丸跡第９地点15号土坑では、中型全体の分布の中心が口径11～12cmにあり、A類、B類ともに、ここに集中している。

18世紀末～19世紀初頭のうち、二の丸地区第９地点２号池・3c層・3b層の資料では、中型のものが多いが、全体に分布が散漫で、際だった集中はみられない。二の丸地区第17地点２号溝・14号土坑や３層・３層一括では、小型と中型のみで、中型のものは、口径11～13cmに集中している。18世紀末～19世紀初頭の資料以降、器高は全体にやや浅くなる傾向がみられる。

19世紀中葉の二の丸第９地点１号池・3c層・3b層の資料では、口径10cm前後に分布の集中がみられる。それ以前の時期まで中心であった口径11～12cmのものが、やや小型化し、ここに分布の中心を移したものと考えら

れる。また、やや散漫ではあるが、口径13cm前後にもまとまりがみられる。また、これらとは別に、口径20cmに近い大型のものが存在している。

小型のものについては、18世紀前葉や18世紀後葉の資料では、さらに3群に分けられるものと考えられる。多少のばらつきはあるものの、おおよそ口径5.5～6cm、7cm前後、8.5～9.5cm程度のまとまりがとらえられるであろう。これらは、それぞれ口径二寸（約6.0cm）、二寸半（約7.6cm）、三寸（約9.1cm）にあたる可能性が考えられる。17世紀末～18世紀初頭の資料については、8.5～9.5cmに1つのまとまりがみられるが、それより小さいものの出土が少ないため、あまり明確ではない。

ミガキ調整がなされるB類については、元禄年間以降に出現している。小型、中型、大型のそれぞれが存在するが、17世紀末～18世紀初頭の段階では、点数が少ないこともあり、特に分布が集中するところはみられない。次の18世紀前葉と18世紀後葉の時期では、口径11～12cmに分布の集中がみられるようになる。18世紀前葉では分布はやや散漫であるが、18世紀後葉では、その傾向は顕著になっている。18世紀後葉の中でも、二の丸跡第9地点16号土坑では口径11cm前後に集中があり、二の丸跡第9地点15号土坑では11～12cmに集中がみられ、若干の差がみられる。また、二の丸跡第9地点15号土坑では、数は少ないものの、小型の口径9～10cmにも集中が認められそうである。二の丸跡第5地点3号土坑では、口径20cmに近い大型のものもみられる。18世紀末～19世紀初頭や19世紀中葉の資料では、B類は器高の低いものに多くみられるようになる。

次に、皿A類について、底部の回転糸切りの技法と、回転方向について、18世紀前葉の武家屋敷地区第7地点2号遺構を加えた時間的変化について検討していく。技法aとしたものは、通常みられる回転糸切りで、糸切り痕跡の中心が、どちらか一方に片寄り、そこから外側に抜けていくものである（図2－13の74）。技法bとしたものは、中心が底面のほぼ中央に位置し、糸の圧痕と思われるものが、この中心から弧状に残るものである（図2－13の60）。時期ごとに、糸切り技法とロクロの回転方向の違いの割合を示したのが、図2－24である。

技法bは、17世紀初頭～前葉の資料にはみられず、17世紀末～18世紀初頭にわずかに出現する。18世紀後葉以降では、技法bは、技法aとほぼ同程度の割合を占めるようになることが指摘されていたが、18世紀前葉の段階で、技法bの割合が増加していることが認められる。

技法aの中での回転方向の違いでは、17世紀初頭～前葉から18世紀後葉では、左回転が多数を占めており、18世紀末～19世紀初頭の資料以降、右回転が多くなる。18世紀前葉の資料でも、この傾向に矛盾することはないが、17世紀末～18世紀初頭では技法aの左回転が圧倒的に多かったことに対して、18世紀前葉では技法a左回転の割合は激減するといった変化がみられる。技法bでは、18世紀後葉以降、左回転が多数を占めているが、18世紀前葉の段階では、右回転の比率が高いといった違いがみられる。底部の回転糸切り技法については、18世紀前葉の資料は、主体を占める技法が17世紀末～18世紀初頭から大きく変化した時期であると考えられる。

土師質土器の皿には、ススやタール状の付着物が観察されるものがあり、これらは灯火具として使用した痕跡と考えられる。ススなどの付着の割合を示しているのが図2－23である。武家屋敷地区第7地点2号遺構では、B類での付着率が高くなっているが、A類と比較して、B類の抽出点数が全体で19点と極端に少ないため、付着物があるもの1点に対する割合が高くなっていることが考えられ、安定した数値を示したものではないと考えられる。A類、あるいはA類とB類を合わせた数値でみると、17世紀初頭～前葉の資料では、付着率が非常に高く、時期が下るとともに、付着率が減少していくという傾向（年報9）に、18世紀前葉の資料も矛盾はないものと考えられる。18世紀前葉の資料は、次の18世紀後葉の資料よりも付着率が低くなっているが、これは武家屋敷地区第7地点2号遺構の性格によるものと推測される。2号遺構は、二の丸から排出されたゴミが捨てられた廃棄土坑であるが、白木の箸などとともに大量の土師質土器の皿が出土し、二の丸での饗宴で使われた後のゴミが廃棄されているものと推測される。そのため、饗宴で使われた後、灯火具として再利用されずに、そのまま廃棄されたものの割合が、他の遺構に比べて高いのであろうと考えられる。

b．焼塩壺

焼塩壺については、年報７において、仙台城と仙台藩領内出土資料を元に、ロクロ整形の焼塩壺が、地元で生産された可能性を指摘している。また、年報９では、仙台城出土の地元産と考えられる焼塩壺について、分類と編年を示している。この分類と編年に、二の丸地区第17地点や、武家屋敷地区第４地点・第７地点を加えたのが、図2－18である。また、図2－25・図2－26には、仙台藩領内で、これまでに報告された焼塩壺を示している。

17世紀初頭～前葉の時期は、仙台城跡三の丸地区や仙台城跡二の丸地区第９地点のⅠ期の遺構から、焼塩壺が出土している。畿内産のものと、地元産と考えられるロクロ整形の焼塩壺が確認され、地元産の焼塩壺は、A類（図2－18の３・４）、B類（図2－18の５・６）、C類（図2－18の７・８）に分類される。A類は、ほぼ直立する体部で、外面の底部付近をカットガラス状に削るもの、B類は、体部が波打つような緩やかな稜線を持つもので、２ないし3条の稜線がつき、外面の底部付近はカットガラス状に削られるもの、C類は、B類と同様の体部形態で、外面に格子タタキを施すものである。これらA・B・C類は、17世紀初頭～前葉の資料にはみられるが、それ以外の資料には含まれない（年報９）。

この他に、若林城跡において、焼塩壺が出土しており、遺構や供伴する遺物から、いずれも17世紀初頭の年代が推測されている（図2－25の16～17、佐藤淳2007）。これらの焼塩壺は、体部上半が欠損しているため不明確な部分ものこるが、底面付近をカットグラス状に削る、A類もしくはB類に相当すると考えられる。削り方には２種類があり、連続した縦位のケズリと、横位の面取り状のケズリの違いがみられるようである。また、武家屋敷地区第７地点２層からは、畿内系とみられる手づくね成形の焼塩壺が出土している（図2－25の14）。２層からの出土であり、混入とみられるが、形態から17世紀代のものではないかと推測される。

武家屋敷地区第７地点２号遺構からは、焼塩壺87点と蓋３点が出土しており、これによって18世紀前葉の焼塩壺の様相が明らかとなった（図2－13）。器形や製作方法から畿内系と考えられる焼塩壺は、これまでいくつか確認されていたが、いずれも刻印の部分が欠損したものであった。２号遺構からは、刻印のある畿内系の焼塩壺が３点出土している。刻印はいずれも「泉州麻生」である（図2－13の132・136・137）。「泉州麻生」の刻印は、「長方形二重枠」と「内側二段角枠」（小川2008）の２つの種類が存在することが知られている。132・136・137の焼塩壺は、刻印の大きさでは「内側二段角枠」に多い大きさであり、「内側二段角枠」の可能性が高いが、隅の角部分がはっきりしないものもあり、必ずしも断定はできない。これらはいずれも粘土板を筒状に成形し、底部には粘土塊が充填されている。内面には粗い布目と縫い目とみられる痕跡が確認される。「泉州麻生」の刻印をもつ焼塩壺は、具体的な年代はわからないが、その後半段階になると仕上げにのみロクロを使うようになる（渡辺1992）。これらの焼塩壺にも、体部上半にロクロによる横ナデの痕跡が確認される。本来花焼塩を製造していた泉州麻生では、17世紀後半から18世紀前半にかけて、「泉州麻生」の刻印のある焼塩壺を製造していることが指摘されている（渡辺誠1985、1992）。また、「泉州麻生」の刻印を持つ焼塩壺の分類（小川望2008）と対比すると、これら３点の焼塩壺は、器形では「４類ハ」もしくは「４類ニ」に分類できる可能性が考えられる。器形「４類ハ」、「４類ニ」の焼塩壺は、17世紀末から18世紀前葉頃の時期が想定されている。２号遺構は、供伴する木簡に記載されている年号から、18世紀前葉の一括資料であることがわかっており、「泉州麻生」の焼塩壺の年代観とも矛盾するものではない。２号遺構からは、焼塩壺の蓋も２点出土している（図2－13の145・146）。この蓋は、逆凹字状の断面形態で、「泉州麻生」の刻印をもつ上述の焼塩壺と組になるものと考えられる（小川1992、2008）。

一方、２号遺構からは、地元産と考えられる焼塩壺も多く出土している（図2－13の127～131・133～135・138・139）。いずれも、年報９においてD類に分類されるもので、ロクロ成形で、コップ状の形態をしており、体部外面下半部に格子タタキを施すものである。２号遺構から出土したD類の焼塩壺については、凹みが深いものと浅いものがみられ、凹みの深さによって、さらにD1類、D2類の２つに分類される。

D1類としたものは、凹みの深いものである（図2－18の14～16、23・24）。２号遺構からは、あまり多くはないが出土している。凹みの深さは、5.2cm程度のものから8.5cm程度とさまざまで、器高に応じて、器高が高いものは、その分凹みも深くなるようである。図2－18の15・22・23のように底部が比較的厚いものと、図2－18の14・24のように凹みが底部まで深くなり、底部があまり厚くないものがみられる。器高や底部の厚さなど、器形には個々のばらつきが大きい。D2類と比べると、器厚はやや薄く、1.2cm前後である。D1類は、格子タタキの格子目が比較的大きく、一辺が10～12mm程度の菱形である。格子の形はやや縦長で、図2－25の32・37のようにかなりつぶれた菱形の格子目もみられる。

２号遺構からはD2類が多く出土している。D2類（図2－18の25～32）は、器高が7.9～10.0cm程度である。凹みの深さは3.2～4.3cm程度で、４cm前後のものが多い。D1類と比較して、凹みが底部まで深くなるものはなく、浅いのが特徴である。いずれも厚底である。器厚も1.8cm前後と、D1類よりも厚めである。格子タタキの格子目は、正方形に近い形で、一辺が５～６mm程度と比較的細かい。

図2－25・図2－26には、仙台藩領内で出土した焼塩壺を示している。D1類は、二の丸地区第５地点の17世紀末～18世紀初頭の整地層・遺構からの出土が確認される（図2－25の22・23）。武家屋敷地区第４地点では、17世紀末～18世紀前葉の陶磁器類がまとまって出土した２号池から１点が出土している（図2－25の38）。武家屋敷地区第７地点では、Ⅰ期（17世紀代）に属する13号土坑から１点が出土している（図2－25の37）。また、武家屋敷地区第９地点からは、Ⅰ期（17世紀初頭～18世紀代）に属するピットから１点が出土している（図2－25の36）。

仙台城跡以外では、上野館跡（佐久間光平ほか1993）、川内A遺跡（佐藤甲二ほか2007）に出土例がみられる。上野館跡からは畿内系の焼塩壺１点と、地元産の焼塩壺３点が出土している（図2－25の30～33）。地元産の焼塩壺はいずれもD1類に分類されるものとみられる。31は17世紀末～18世紀代、32は17世紀代、33は17世紀末以降とされている層位・遺構から出土している。川内A遺跡からは、地元産の焼塩壺が２点出土しており、いずれも凹みの深いD1類とみられる（図2－25の34・35）。34は近代の整地層からの出土であり、混入とみられるが、35は17世紀初頭～18世紀代の遺物と供伴している。また、仙台藩の江戸藩邸である汐留遺跡においても、D類の焼塩壺が出土している（小林博範ほか2003）。

D2類は、武家屋敷地区第７地点の２号遺構からまとまって出土している。２号遺構では、D1類も含まれるものの、主体となるのはD2類である。また、二の丸地区第17地点の調査からは、18世紀後葉～19世紀代の遺構から、断片的ではあるが、D2類が出土している（図2－26の57・58）。

D1類とD2類の違いについては、仙台藩領内での焼塩壺の産地の違いが、可能性の一つとして挙げられる。仙台藩領内では、領内の沿岸地域の複数箇所で塩田の開発が行なわれている（小々高幸一1982）。そのうち何カ所で焼塩壺が作られていたかはわかっていないが、いくつかの産地があった可能性は考えられる。もう一つの可能性として、年代差が考えられる。年代を限定できる資料が少ないため、断定はできないが、D1類は、二の丸第５地点の例のように17世紀末～18世紀初頭の時期に多くみられ、D2類は、武家屋敷地区第７地点や二の丸地区代17地点の例のように18世紀前葉以降の時期にみられる。このように、年代差についても指摘できる可能性が考えられる。

また、これらとは形態の異なる焼塩壺が、二の丸地区第９地点16号土坑、二の丸地区第17地点14号土坑、２号溝から出土している（図2－26の59～67）。二の丸地区第９地点16号土坑は18世紀後葉の一括資料であり、二の丸地区第17地点14号土坑、２号溝は、18世紀末～19世紀初頭の一括資料である。いずれもロクロ成形で、印籠形の形態をしている。図2－26の61は、やや膨らみをもった形態をしており、図2－26の62は、他に比べてやや器厚が厚いなど、細部の違いがみられるが、これら以外は類似した形態である。印籠形の器形ではあるが、この時期の江戸などで出土している畿内系の焼塩壺よりも器厚がかなり薄く、口縁部の形態にも違いがみられる。仙台藩では、畿内系の焼塩壺とは別に、17世紀代から器形の変化を伴いながらも独自の焼塩壺が出土している。しかし、

18世紀前葉や18世紀後葉のD類の焼塩壺以降、仙台藩では、地元産と考えられる焼塩壺は出土しないことになる。代わって18世紀後葉以降、これらの印籠形で器厚の薄い焼塩壺が出土している。仙台藩領内では、領内の沿岸地域の各所で塩田の開発が行なわれている。また、塩は、仙台藩による専売制が比較的初期の段階から後期まで維持されており、「国産塩の他領出し、他国塩の領内販売について原則的禁止」の態度が取られていた（小々高幸一1982)。このような状況を考えると、18世紀後葉以降の焼塩壺がすべて畿内系で占められ、地元産焼塩壺が全くないとは考えがたい。出土点数が十分と言える状況ではないため、断定はできないものの、18世紀後葉以降、地元産の焼塩壺は、図2－26の59～67のような形態のものに変化していく可能性が考えられる。

c．焙烙

土師質の焙烙は、これまで、二の丸地区第9地点から出土して18世紀後葉の資料が最も古いものであった（年報8)。しかし、武家屋敷地区第7地点の2号遺構から新たに焙烙が出土しており、18世紀前葉の時期に焙烙が存在することが確認された（図2－18の33～35)。いずれも丸底で、口縁部は直立するか、軽く外傾する器形をしている。内耳を有するものと内耳を持たないものの2種類がある。内耳を有するものは、底部付近までロクロナデの痕跡が確認される。内耳を持たないものは、口縁部付近はロクロナデであるが、底部付近は意図的にざらざらした器面に調整されている。

また、内耳の焙烙は、武家屋敷地区第4地点2号池からも1点出土しており、これは共伴する遺物の年代から18世紀前半頃であろうと考えられる。その他、武家屋敷地区第4地点3号池Dから、平底で内耳のない焙烙が確認されている。共伴する遺物に幅があるため、年代を限定できないが、17世紀中葉を主体とした時期であろうと考えられ、17世紀代においても、このような形態の焙烙が存在していた可能性も考えられる。

18世紀後葉の時期では、18世紀前葉の焙烙と異なる形態のものがみられるようになる。土師質で、円形の本体部に、把手を付けた、フライパンのような形をしたものである。把手には、上下に小孔が開けられており、木製の柄をはめ込んで使用したものと推測される。

18世紀末～19世紀初頭以降になると、同様のフライパン形の形態ではあるが、透明釉（鉛釉）を掛けた軟質施釉陶器の焙烙がみられるようになる。さらに、19世紀中葉頃では、軟質施釉陶器の焙烙は、把手が長く、小孔を開けないものもみられるようになり、出土点数も増加する。軟質施釉陶器の焙烙は、各地区の調査で比較的多く確認されている。

d．擂鉢

瓦質の擂鉢は、17世紀初頭～前葉の三の丸跡の資料の中に、比較的多く含まれていた。二の丸地区では、18世紀、19世紀の遺構や層位からも少数出土しているが、いずれも小破片で、確実に年代が判明するような資料はみられなかった。武家屋敷地区からは、少数ではあるが、供伴遺物から年代が判明する瓦質擂鉢が確認されている。武家屋敷地区第7地点14号土坑からは、17世紀前葉の陶磁器が一括して出土しており、瓦質擂鉢も7点が出土している（図2－18の9)。武家屋敷地区第4地点1号溝からは、17世紀前半を中心とした遺物が出土しており、瓦質擂鉢も7点出土している（図2－16の1～3)。

瓦質擂鉢は、中世から継続する器種であり、17世紀中頃までは、瀬戸・美濃、唐津、丹波などの陶器の擂鉢と併用されたものと考えられる。17世紀後半以降、岸窯系の陶器擂鉢が多く出土するようになり、18世紀以降では、東北地方の窯の製品と考えられる陶器擂鉢が多数出土している。東北地方で作られた陶器擂鉢の出土量が増加し、それとともに瓦質の擂鉢はほとんどみられなくなるものと考えられる。武家屋敷地区第7地点の調査では、18世紀代や19世紀代と考えられる遺構からも、わずかに瓦質擂鉢が出土しているが、年代が確実な例はみられない。

瓦質擂鉢は、いずれも厚手で、体部は直線的に開く器形であり、擂り目はあまり密ではない。武家屋敷地区第4地点1号溝の資料（図2－16）には、片口部分が付くものが確認され、内外面に炭化物が付着し、明らかに火に掛けられたと思われるものも含まれている。中世の瓦質擂鉢には、火に掛けられた痕跡を残すものが多く知ら

れており、17世紀中頃までの瓦質擂鉢には中世以来の調理方法も継続していたものと考えられる。

土師質の擂鉢は、19世紀中葉頃の資料にのみ確認される（図2－18の57、58）。破片資料で、全体の特徴は不明であるが、擂り目が密に施されていることが特徴である。

e．鉢類

土師質・瓦質土器で、鉢状の形態をしているが、用途が不明のため、それ以上の分類が難しいものを鉢類としてまとめた。そのため、器形にはさまざまなものがみられる。17世紀初頭～前葉以降、18世紀末～19世紀初頭の時期まで、各時期で確認され、18世紀前葉では比較的多く出土している。口縁部が内彎し、丸みを帯びた器形（図2－18の36～38）、口縁部が軽く屈曲する器形（図2－18の39）、比較的浅く、底部が広い器形（図2－18の40）など、さまざまである。瓦質の鉢（図2－18の43）は、口縁部の内側が突出しており、内側が敲打痕のように欠けている。18世紀後葉では、扁平な体部に短く直立する口縁部が付く器形のものがみられる。体部には大きな窓が開けられている。同様の器形とみられる破片が、18世紀末～19世紀初頭の資料にもみられる。

f．火鉢

火鉢は、口径に対して器高が浅く、体部の立ち上がりが緩いA類と、口径に対して器高が高く、体部の立ち上がりが強いB類に大別される。A類はさらに、口縁部直下の外面に、縄目状の粘土紐を貼り付けるもの（A1類）と、何も貼り付けないもの（A2類）とに分けられる（年報９）。瓦質の火鉢がほとんどであるが、18世紀前葉に土師質の火鉢がわずかにみられた。大きさには大小さまざまあり、使用する場所によって、大きさが異なるものと考えられる。

A1類は、17世紀初頭～前葉の時期から存在している。武家屋敷地区第７地点と二の丸地区第17地点の調査で、それぞれ18世紀前葉と、18世紀末～19世紀初頭の資料が加わり、おおむね各時代を通して存在することが明らかとなった。口縁部の断面形態には、時期によって違いがみられる。17世紀初頭～前葉の時期では、口縁端部は内側にわずかに突出する程度である（図2－19の１）。17世紀末～18世紀初頭の時期では、口縁端部は内側にだけ突出する形態をしている（図2－19の2）。18世紀前葉では、口縁部形態に多様性がみられるようになり、口縁端部が内側にだけ突出するもの（図2－19の９）、口縁端部が内側にわずかに突出し、外側にも突出するもの（図2－19の8）、口縁端部が内外両側に突出し、Ｔ字状の断面形態となるもの（図2－19の７）などがみられる。18世紀前葉にみられるようになったＴ字状の断面形態は、18世紀末～19世紀初頭の時期には、より明確に作られるようになり（図2－19の14）、その形態は19世紀中葉頃にも継続される。口縁部直下に施される粘土紐貼り付けによる縄目状の装飾は、右下がり、左下がりの両方がみられるが、年代による差はみられない。18世紀前葉の資料では、しっかりと押圧され、波状の形状がはっきりみられるものと、貼り付けた粘土紐に連続した刻みを加えたものとがみられるが、18世紀末～19世紀初頭以降、波状の形状がはっきりしたもののみが確認される。

A2類は、武家屋敷地区第７地点の調査によって、18世紀前葉にも存在することが明らかとなり、17世紀末～18世紀初頭に出現して以降、おおむね各時期を通じて存在するものと考えられる。口縁部形態は、17世紀末～18世紀初頭では内側だけ突出する形態であるが、18世紀前葉では、外側に突出する形態がみられ、18世紀後葉にも継続する。19世紀中葉頃の資料では、これに加え、内外両側に突出し、断面がＴ字状を呈するものもみられるようになる。

Ｂ類は、19世紀中葉頃の資料で非常に多く出土している。18世紀前葉の資料に、Ｂ類となる可能性のあるもの（図2－19の4）が含まれるが、確実な資料ではなかった（年報９）。武家屋敷地区第７地点の調査においても、18世紀前葉の段階にＢ類となる可能性がある瓦質火鉢が出土している（図2－19の5）。いずれも口縁部が内側に軽く突出する形態をしており、類似しているが、体部下半から底部が残存していないため、19世紀中葉頃のＢ類につながるものかどうかは断定できない。

g．焜炉

焜炉は、18世紀前葉と18世紀後葉の資料に、点数は少ないものの、形態が特徴的な瓦質焜炉がいくつかみられる。中でも、18世紀前葉の武家屋敷地区第７地点２号遺構からは、形態の異なる焜炉がいくつか出土している（図2－20の4・5・8）。

図2－20の8は、本体部分は窓を有する筒形の器形で、窓の下には突出部が付く。窓は口縁部から切り込まれると考えられるが、欠損しているため不明である。底部には、三足の脚が付く。舟竈と呼ばれる、舟遊びや茶屋などの屋外で湯茶を供するのに使用された焜炉類（江戸遺跡研究会編2001）に形態が類似する。東京大学本郷構内の遺跡の御殿下記念館地点（寺島孝一・西田泰民ほか1990）、医学部附属病院地点（藤本強・小川望ほか1990）、郵政省飯倉分館構内遺跡（港区麻布台一丁目遺跡調査会1986）、汐留遺跡（福田敏一・石崎俊也ほか1997、2006）、白金館址遺跡（滝口宏・高山優ほか1988）など、複数の遺跡から出土している（図2－２7の１～7）。江戸の遺跡から出土したこれらの焜炉類は、突出部が箱状なのに対して、図2－27の8は板状であるという違いはみられるが、筒形の本体に突出部が付く形態は類似している。年代では、汐留遺跡出土の図2－27の6が17世紀第３四半期頃と最も古く、御殿下記念館地点（図2－27の2）と汐留遺跡（図2－27の5）が17世紀後葉～18世紀初頭頃の遺構・包含層から、御殿下記念館地点（図2－27の1）が17世紀後葉～18世紀初頭以前の包含層から、郵政省飯倉分館構内遺跡（図2－27の4）のものが18世紀前半頃の遺構からの出土である。白金館址遺跡のもの（図2－27の7）は、18世紀後半から19世紀前半の時期を中心とした遺構からの出土であり、他の例より年代的に下る資料である。形態的にも、やや小型で、体部に孔を有するなど、異なった特徴を有している。白金館址遺跡の例を除くと、江戸ではこのような焜炉類は、おおよそ17世紀後半から18世紀前半頃の時期に確認されている。武家屋敷地区第７地点２号遺構は18世紀前葉の時期であり、年代的にも重複する。図2－20の8の焜炉は、これらの江戸出土の焜炉に系統を求めることができるのではないかと考えられる。伊達家上屋敷跡である汐留遺跡では、17世紀後半の段階で、このような形態の焜炉類が確認されている。重量のある瓦質土器を仙台まで運んだとは考え難いため、図2－20の８の焜炉は、江戸の形態を模倣して、国元である仙台城下で製作されたものである可能性が推測される。

図2－20の4・5は、体部上半に方形の窓を持つ器形をしている。５は口縁部分に窓が開くが、４は口縁が窓によって途切れず、窓は体部上半に付く。窓の対角に２カ所みられる円形の孔についても、５では体部上半にあるのに対して、４は体部下半にあるなど、違いがみられる。いずれも底部は残っておらず、下部の構造がどのようになっていたのかは不明である。４・５とも、江戸の遺跡から出土する焜炉類に類例はみあたらず、仙台藩領内独自の形態の土器であろうと考えられる。江戸の遺跡から出土する焜炉類には、時期によっても形態は異なるが、内部に突起が付くものや、付属した構造がみられるものも多いが、４・５にはみられないものと推測される。比較的類似する例は、東京大学本郷構内の遺跡の御殿下記念館地点出土の瓦質土器である（図2－27の8）。17世紀中葉頃の年代の遺構からの出土である。窓を持ち、窓の対角に円形の孔がみられる点、内部に突起などの構造がみられない点で、最も形態が類似している。しかし、窓の形状が山形である点や、円形の孔が１カ所である点、口縁に凹部が１カ所みられる点がなどに違いもみられる。この御殿下記念館地点出土の焜炉に、より形態が近いのが、18世紀後葉の二の丸地区第９地点15号土坑から出土した瓦質焜炉である（図2－20の11）。11では、窓の形状が山形を呈しており、窓の対角に円形の孔が１つ付く形態をしている。口縁部の１カ所に幅２cm程度の凹部がみられる。御殿下記念館地点の焜炉とは、窓の山形の形状や、窓の対角の孔の位置など、細かな違いはみられるが、おおよその構造は類似している。いずれも、底部は欠損しており、不明である。

また、焜炉の付属品として、風口が18世紀前葉の武家屋敷地区第７地点１号遺構、２号遺構から出土している（図2－15の154、図2－20の3）。いずれも土師質である。江戸の遺跡では、風口は、長さ17cm以下の小型と、19cm以上の大型に大きく分けられる（小林謙一1991）。154は、長さ約24cmであり、大型に分類されるものである。これらの風口がどの形態の焜炉に付属するのかは不明である。法量からは、図2－20の4・5は窓や内径が風

口の大きさよりも小さいため、可能性は考えられない。図2－20の８・10は、法量的には組み合わせ可能である。また、民俗資料では、木枠組みで内部を壁土で構築した焜炉（米川幸子2000）などがあり、土師質や瓦質以外の材質で作られた焜炉と組み合うことも考えられる。

ｈ．風炉

風炉は、茶道具の１つで、席中で火を入れて釜を掛け、湯を沸かす道具である。18世紀前葉の武家屋敷地区第７地点２号遺構、24号土坑で、土師質土器、瓦質土器がみられる。器形全体が確認できるのは、図2－20の9、10である。図2－20の９は、土風炉の代表的な形式の１つである「道安風炉」と呼ばれる風炉である。三足の脚が付き、前方に付く窓は口縁から開き、眉と呼ばれる口縁部の繋がりはない。外面は丁寧にミガキが施されている。

図2－20の10は、窓が開く形態から風炉の一種かと推測される。風炉は三足が付く形態を基本とするが、10にはみられないことから、風炉以外の焜炉類の可能性も考えられる。

風炉は、現在のところ、武家屋敷地区第７地点２号遺構、24号土坑から確認されているもののみで、他の時期のものは出土していない。

ｉ．火消壺

18世紀前葉の武家屋敷地区第７地点２号遺構から、火消壺の可能性が考えられる瓦質土器が出土している（図2－20の７）。壺形の器形をしている。組みになる蓋は不明であるが、内面の底部付近は白色に変色しており、被熱による痕跡と思われることから、火消壺の可能性が考えられる。

また、19世紀中葉頃の資料からも、火消壺と考えられる土器が出土している。二の丸地区第10地点からの出土で、器形は、18世紀前葉とは異なり、口縁が内彎した鉢形の器形をしており、三足が付く（図2－20の19～21）。二の丸地区第５地点からは、これらの火消壺の蓋になると思われるものが出土しており、内部に落とし込む状態で蓋をするものとみられる（図2－20の18）。いずれも土師質土器である。

仙台市太白区富沢遺跡第15次調査では、瓦質の火消壺が蓋をした状態で出土している（斎野裕彦ほか1987）。年代は、二の丸地区第10地点と近い時期と考えられるが、土師質と瓦質の違いがあり、形態的にも大きく異なっている。富沢遺跡の火消壺は瓦質であり、壺形の器形をしている点で、18世紀前葉のもの（図2－20の７）と近いが、口頸部や体部の器形に違いもみられる。

仙台藩領内の火消壺とみられる土器は、形態に違いがみられ、多様である。また、江戸出土の火消壺とも形態が異なっている。江戸の火消壺は、口縁部が内彎し、三足が付く形態をしている。この点で、図2－20の19～21は比較的近いが、江戸の火消壺には被せ蓋が伴うものと考えられ、蓋の形態と被せ方が異なっている。

Ｄ．小結

武家屋敷地区第７地点からは、２号遺構を中心に、量・種類ともに多くの土師質土器・瓦質土器が出土している。これにより、仙台城における土器類の変遷を、さらに詳しく考察することができた。仙台城の土器類については、基本的な土器の種類は、元禄年間までにおおよそ確立され、それ以降は大型の土器類を中心に、随時器種が増加していくという様相が指摘されていた（年報９）。18世紀前葉段階では、基本的な土器類に加えて、新たにみられる器種や器形も多く、土器類に対する需要が大きくなっていることが考えられる。17世紀中葉や17世紀後葉の資料が欠落しており、17世紀末～18世紀初頭の資料もあまり多くはないことから、18世紀前葉に新たにみられると推測される資料も、さらに遡る可能性も考えられる。

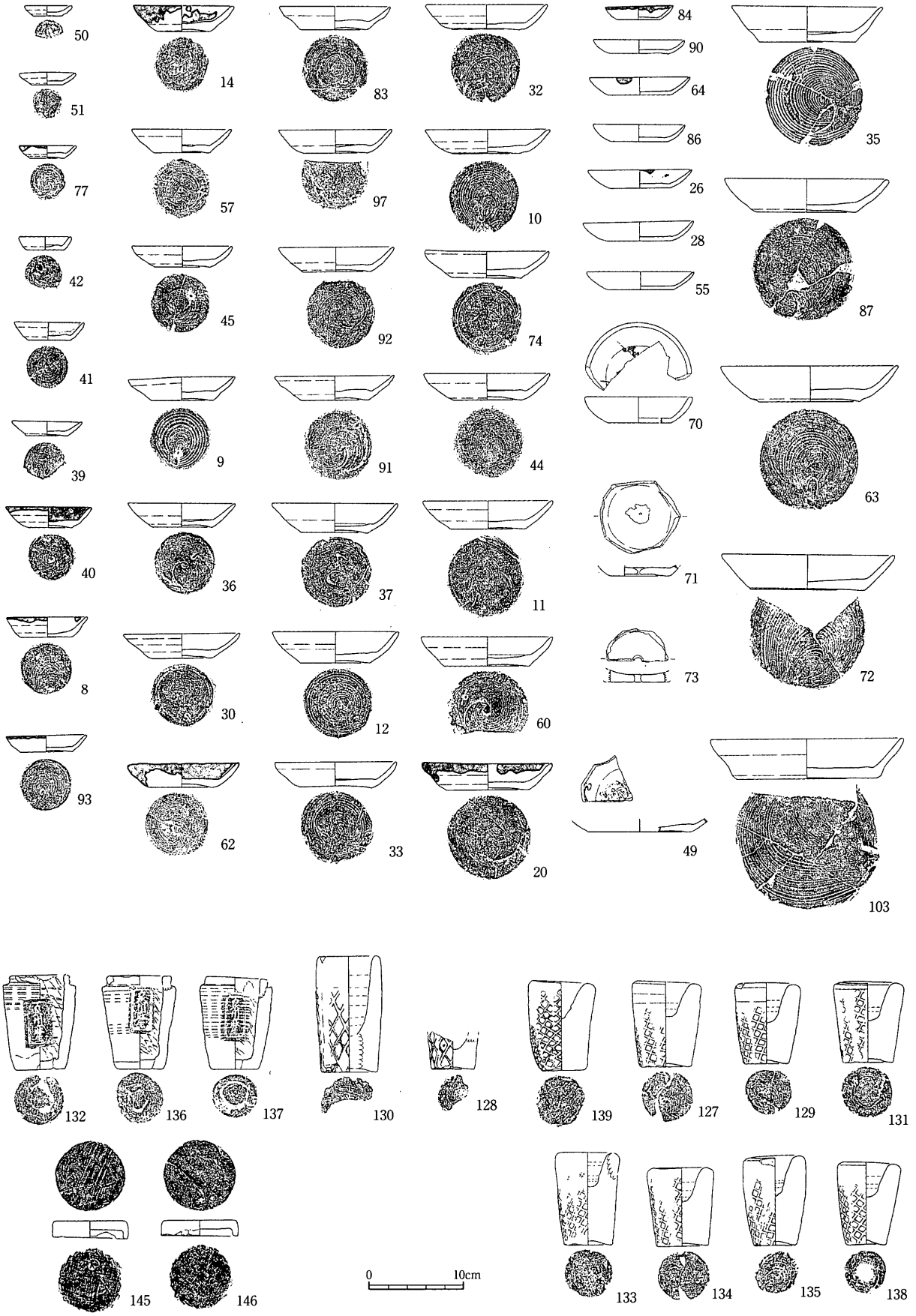


図2－13　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土土師質土器皿・焼塩壺
Fig.2－13　Unglazed ceramics (plates and salt baking pots) from No.2 structural remains at BK7

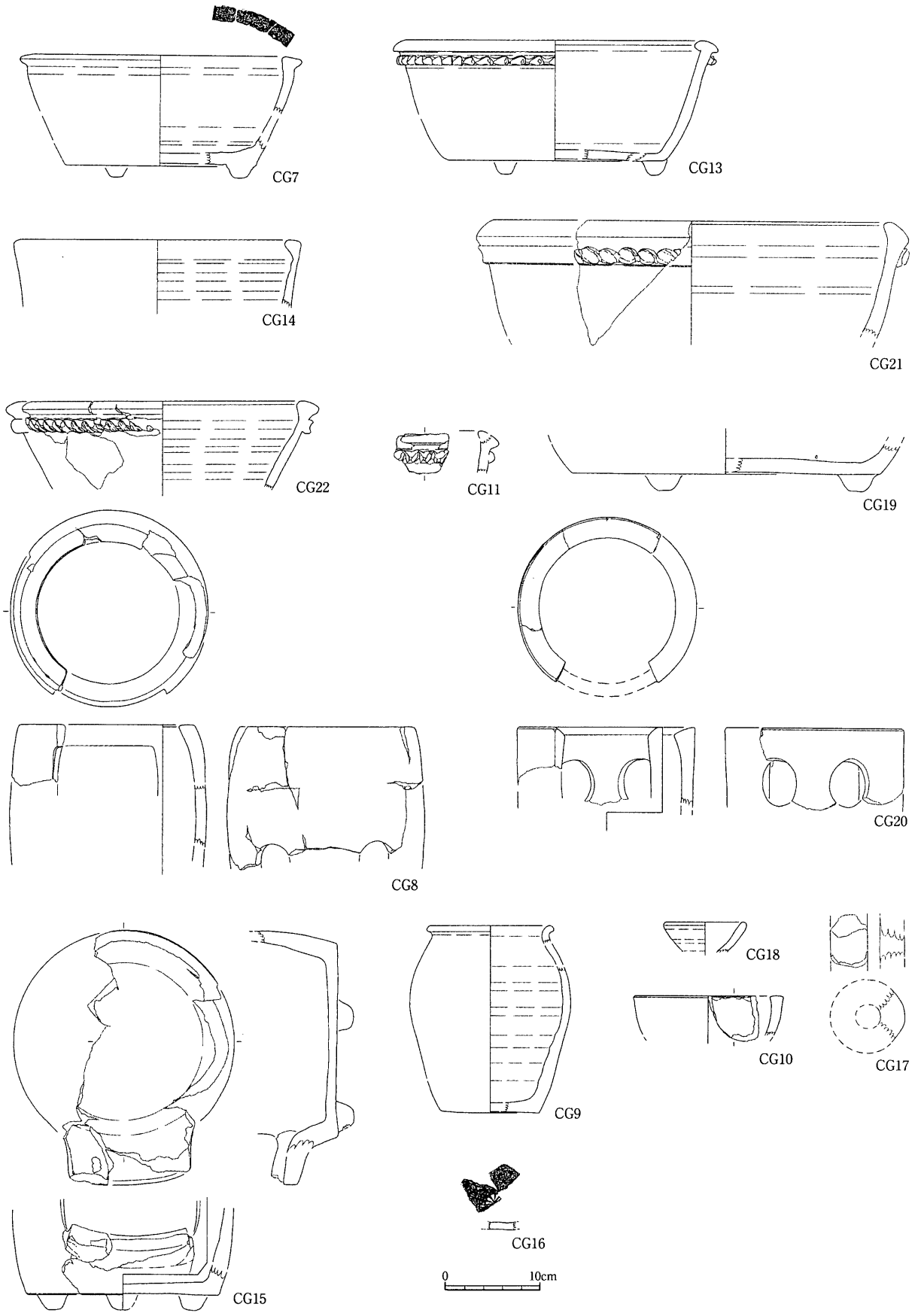


図2－14　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土瓦質土器
Fig.2－14　Various unglazed ceramics from No.2 structural remains at BK7

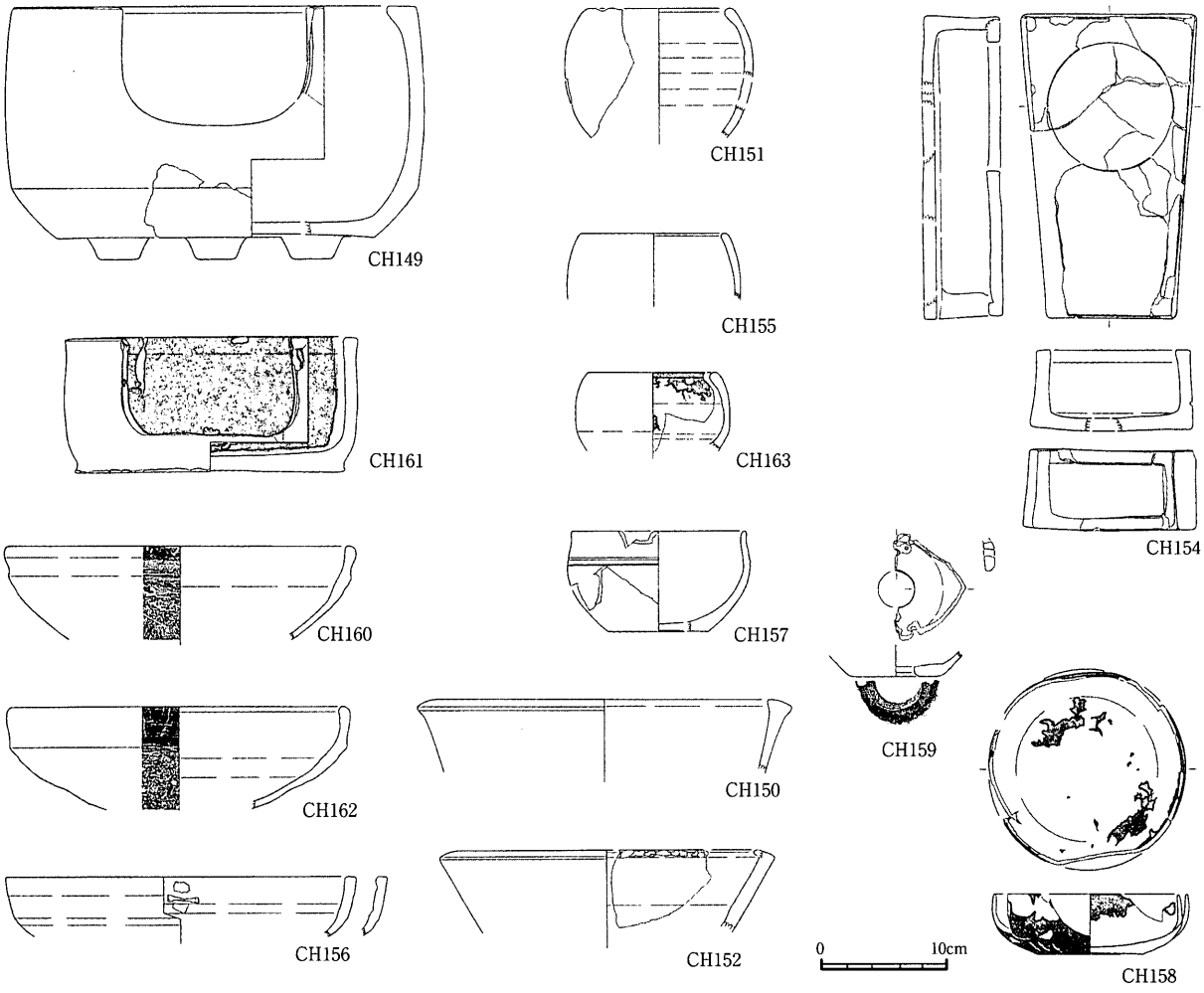


図2－15　武家屋敷地区第７地点２号遺構出土その他の土師質土器
Fig.2－15　Various unglazed ceramics from No.2 structural remains at BK7

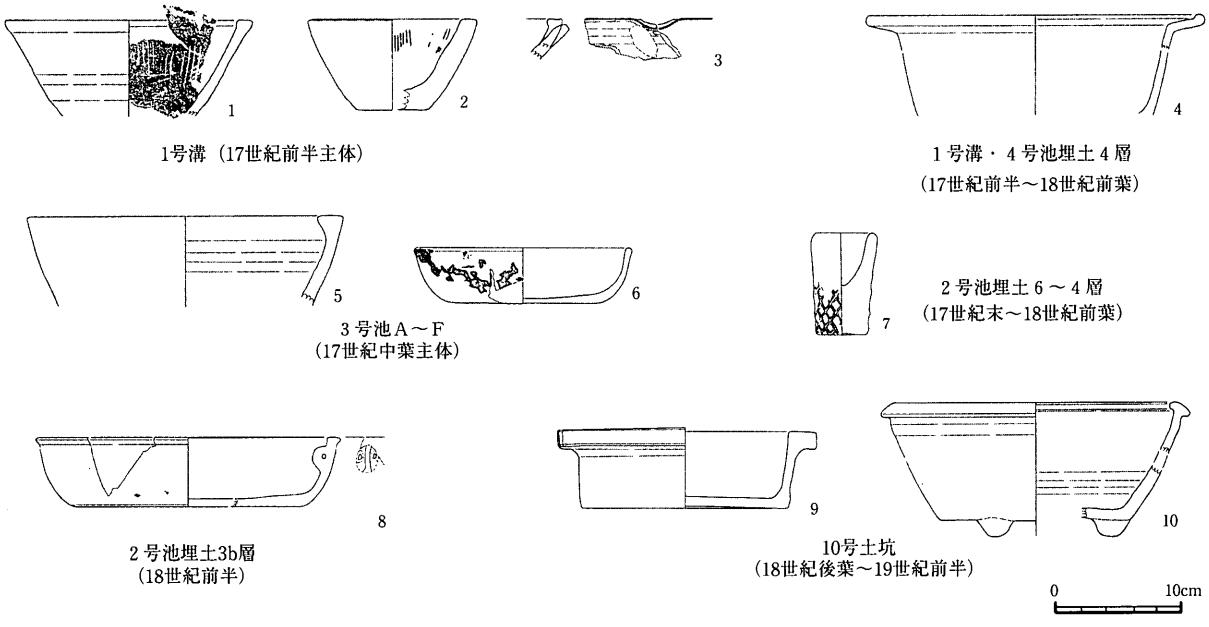


図2－16　武家屋敷地区第４地点出土土師質土器・瓦質土器
Fig.2－16　Various unglazed ceramics from BK4

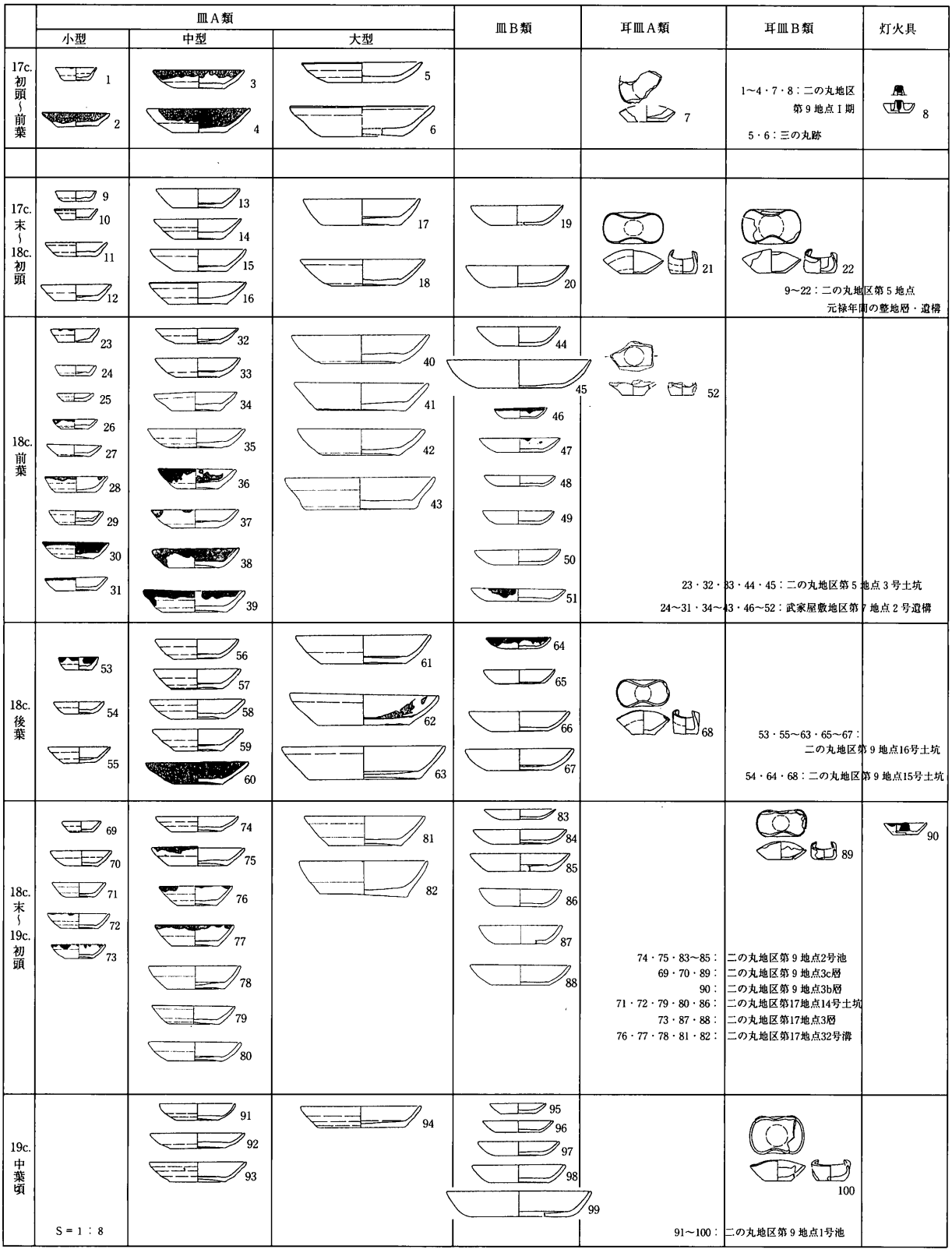


図2－17　仙台城跡出土土師質土器皿類の変遷
Fig.2－17　Chronological sequence of ceramic plates from Sendai Castle

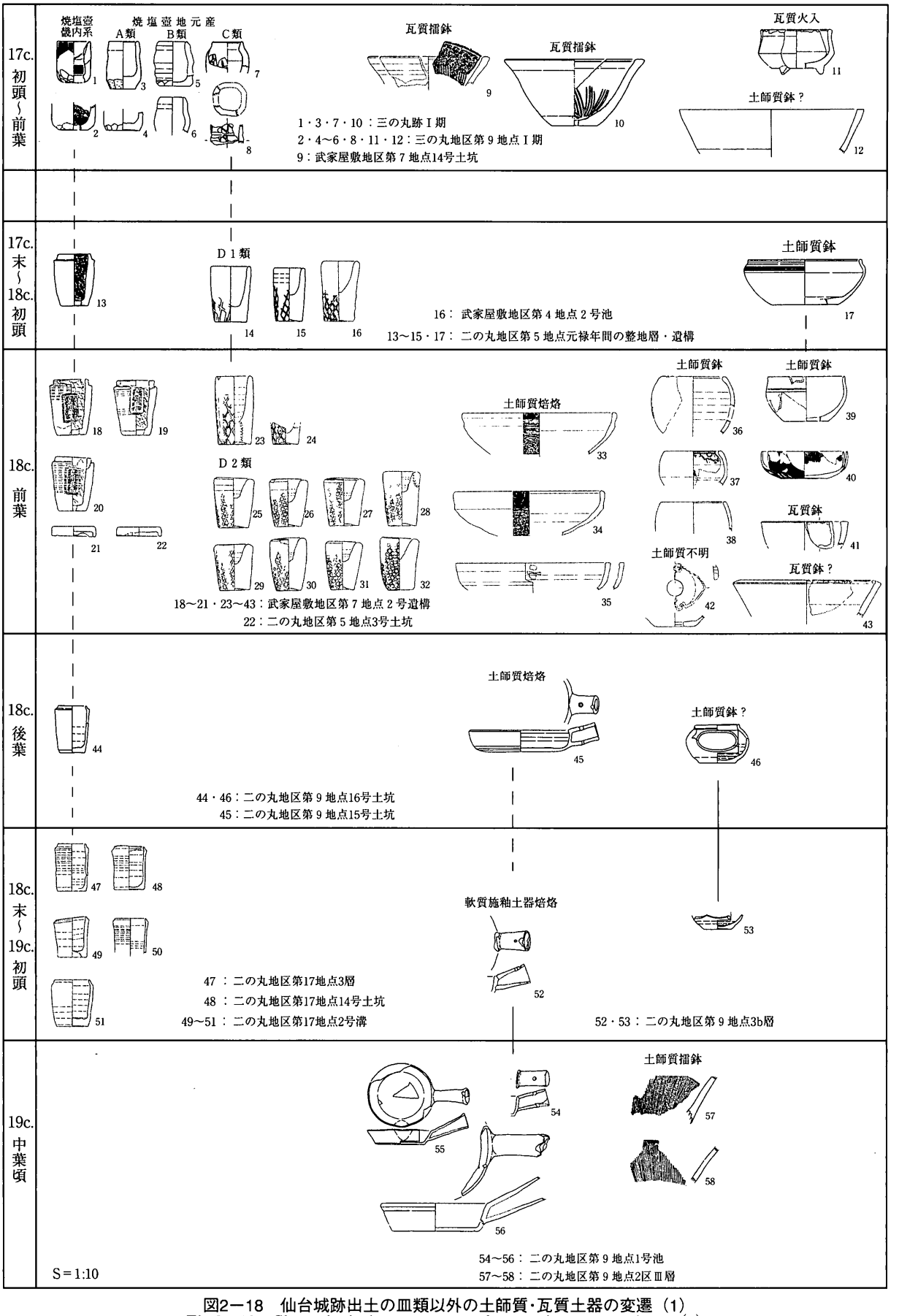


図2－18　仙台城跡出土の皿類以外の土師質・瓦質土器の変遷（1）
Fig.2－18　Chronological sequence of ceramics except plates (1)

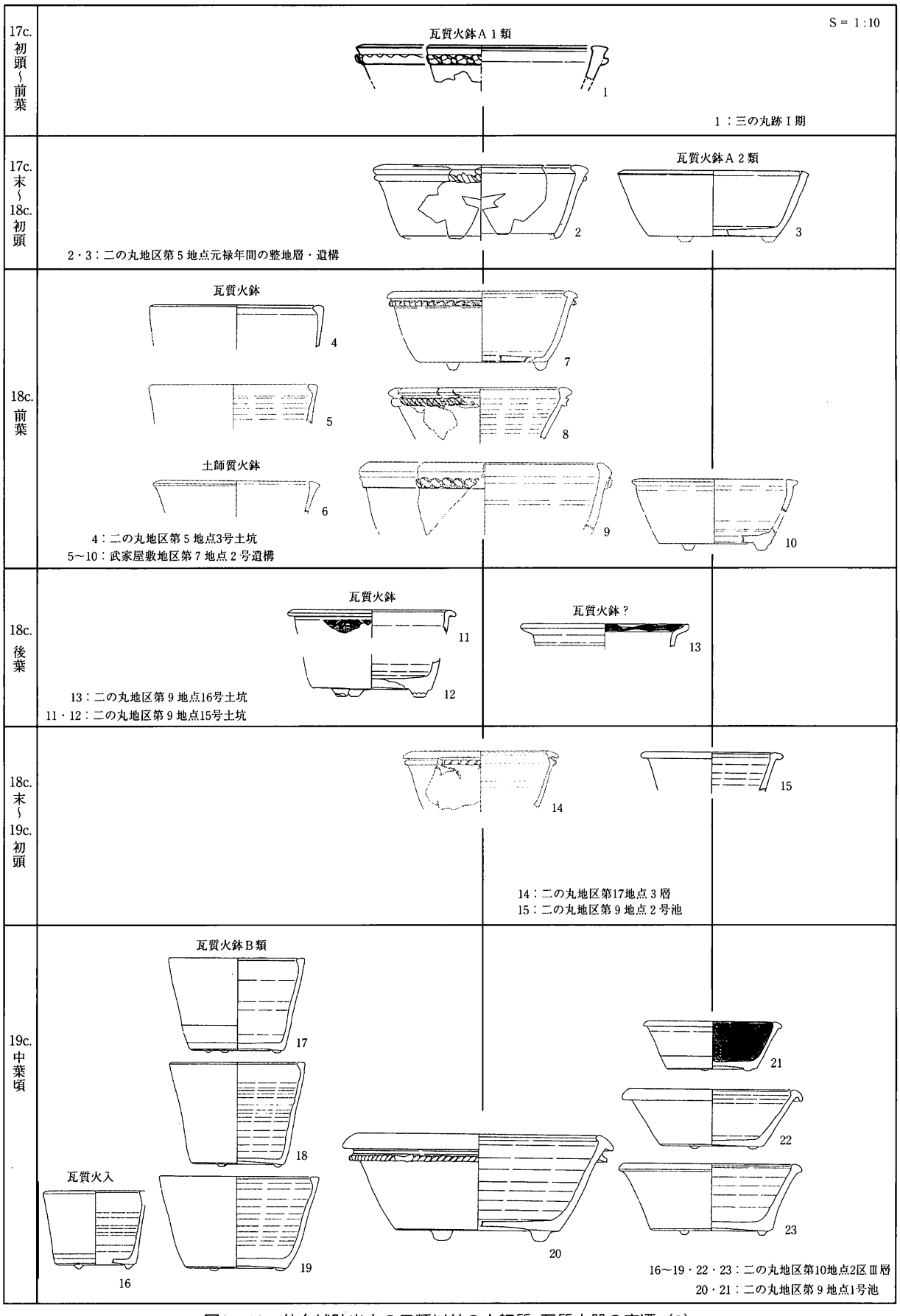


図2－19　仙台城跡出土の皿類以外の土師質・瓦質土器の変遷（2）
Fig.2－19　Chronological sequence of ceramics except plates (2)

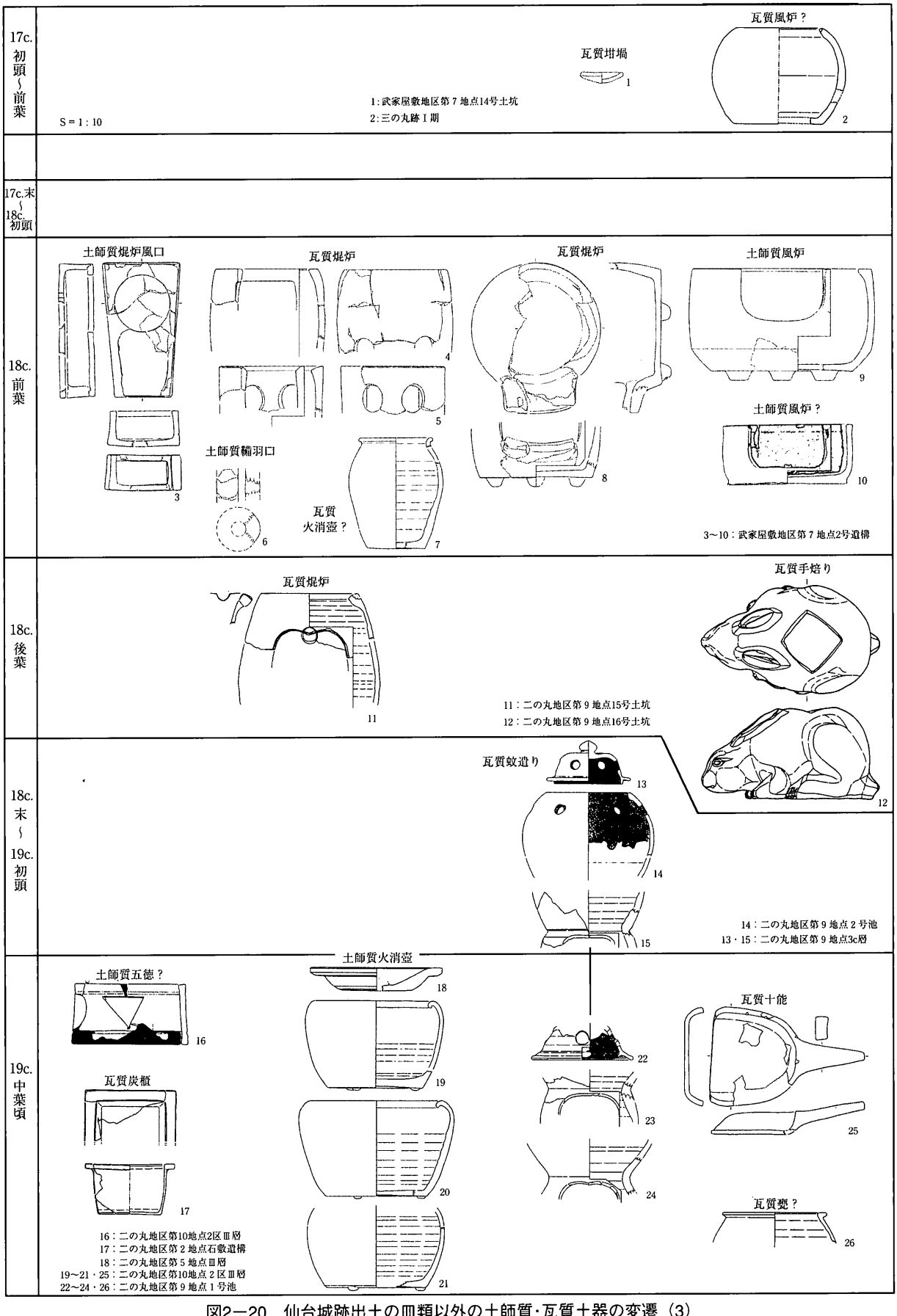
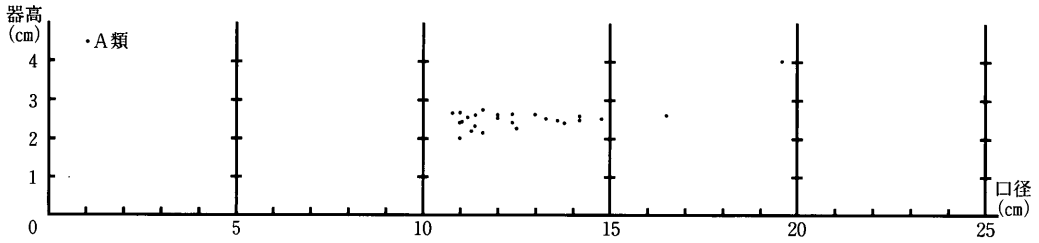
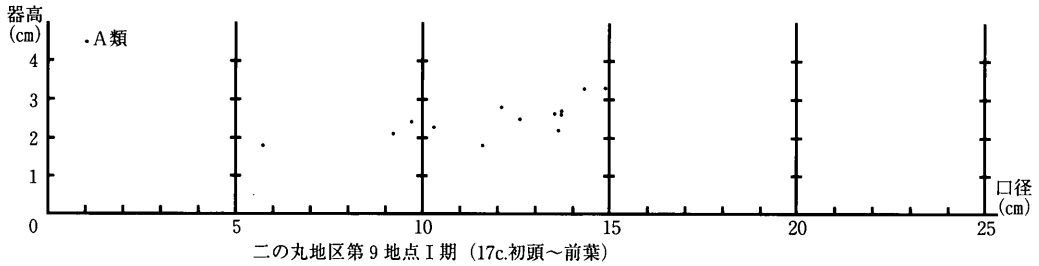


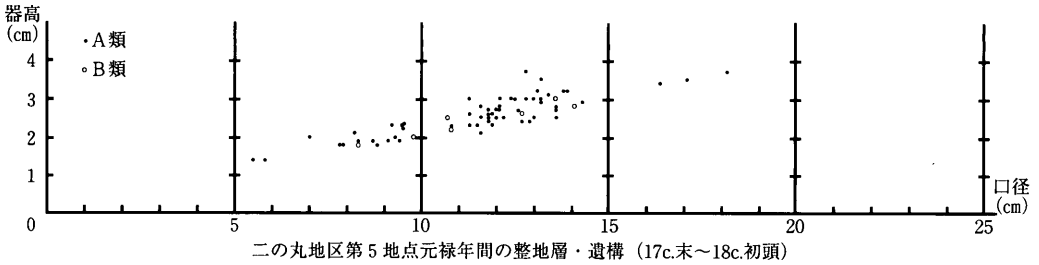
図2－20　仙台城跡出土の皿類以外の土師質・瓦質土器の変遷（3）
Fig.2－20　Chronological sequence of ceramics except plates (3)



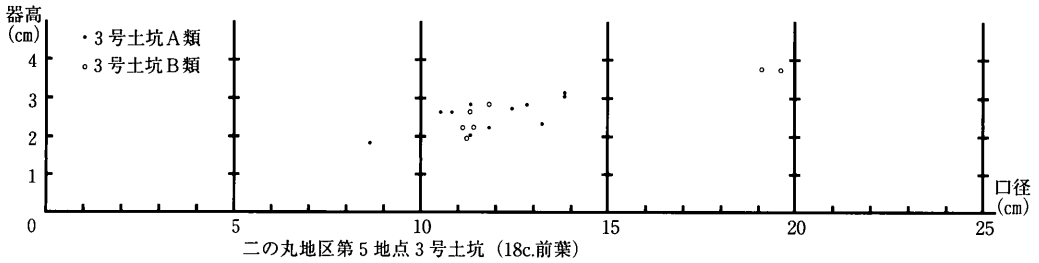
三の丸跡Ⅰ期（17c.初頭～前葉）



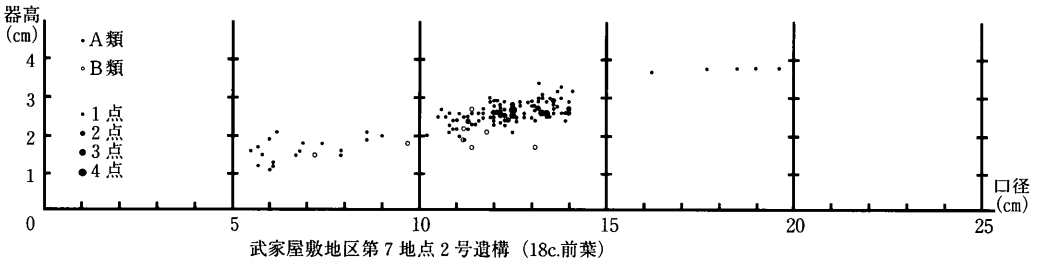
二の丸地区第9地点Ⅰ期（17c.初頭～前葉）



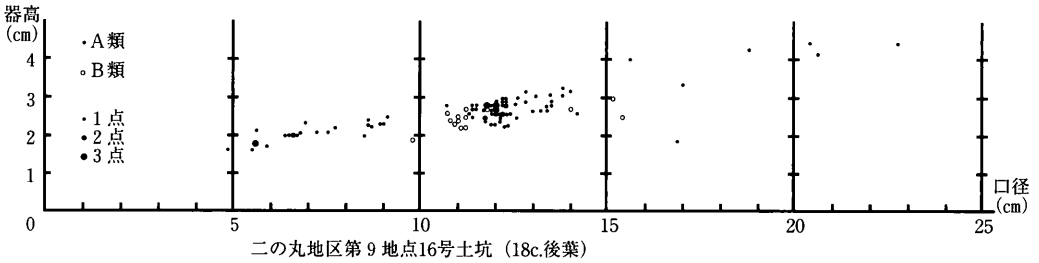
二の丸地区第5地点元禄年間の整地層・遺構（17c.末～18c.初頭）



二の丸地区第5地点3号土坑（18c.前葉）

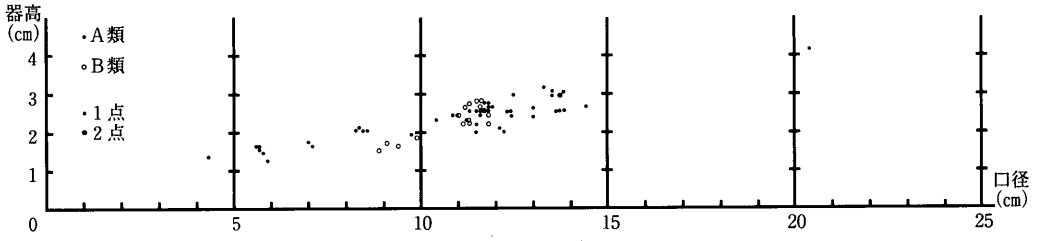


武家屋敷地区第7地点2号遺構（18c.前葉）

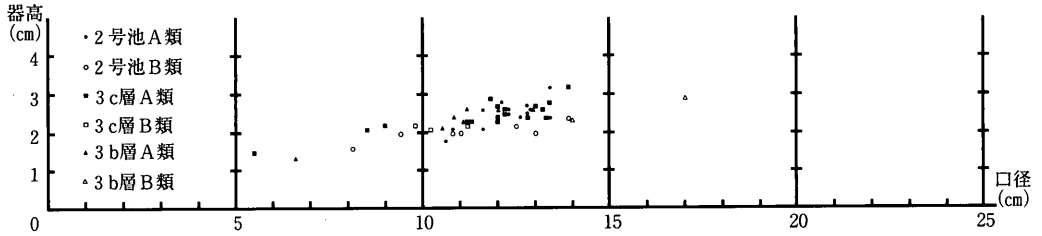


二の丸地区第9地点16号土坑（18c.後葉）

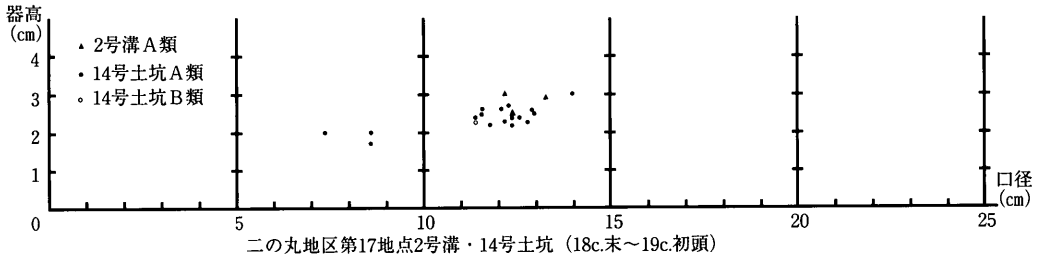
図2－21　仙台城跡出土土師質土器皿の法量分布（1）
Fig.2－21　Scatter diagrams of size of unglazed ceramic plates from Sendai Castle（1）



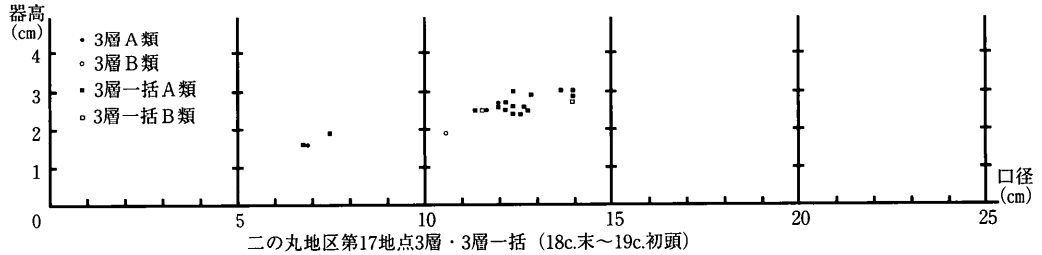
二の丸地区第9地点15号土坑（18c.後葉）



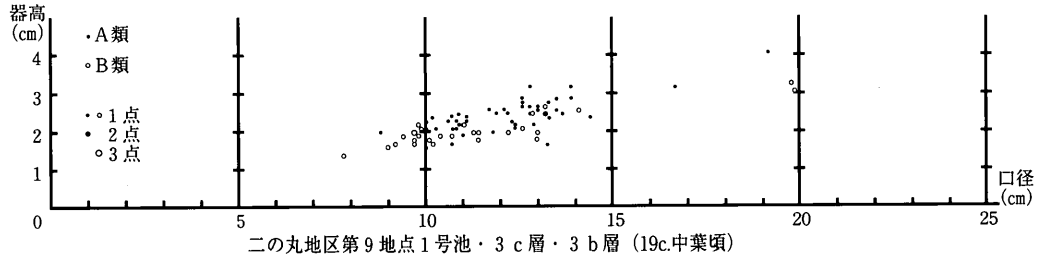
二の丸地区第9地点2号池・3c層・3b層（18c.末～19c.初頭）



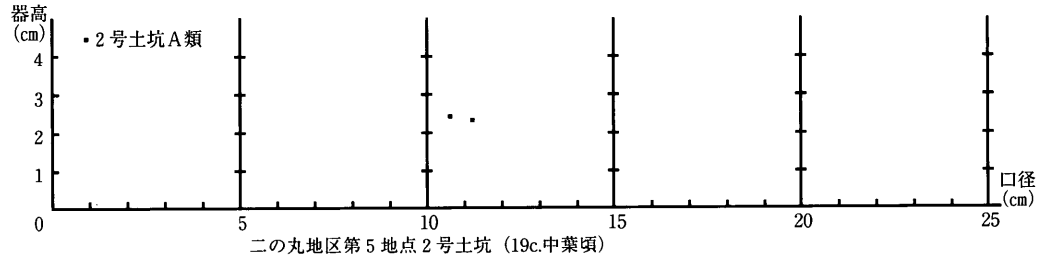
二の丸地区第17地点2号溝・14号土坑（18c.末～19c.初頭）



二の丸地区第17地点3層・3層一括（18c.末～19c.初頭）



二の丸地区第9地点1号池・3c層・3b層（19c.中葉頃）



二の丸地区第5地点2号土坑（19c.中葉頃）

図2－22　仙台城跡出土土師質土器皿の法量分布（2）
Fig.2－22　Scatter diagrams of size of unglazed ceramic plates from Sendai Castle（2）

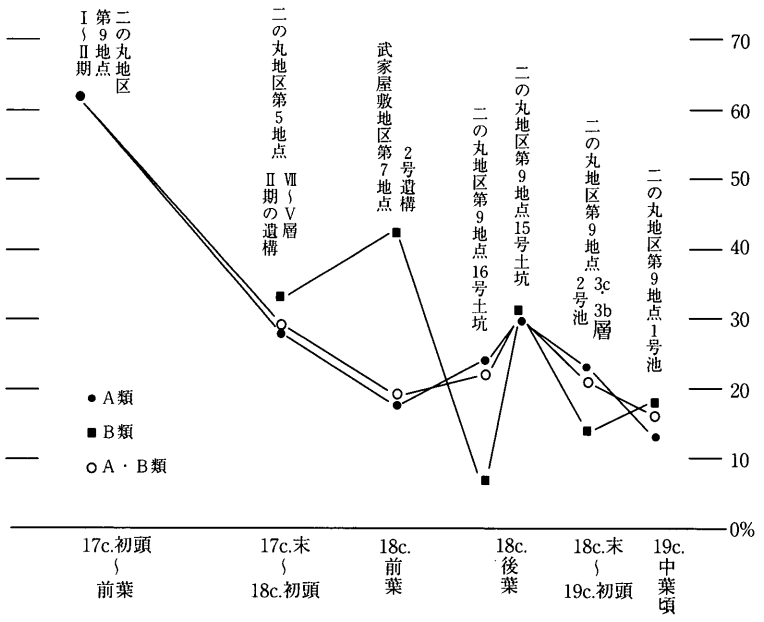


図2－23　仙台城跡出土土師質土器皿のススの付着割合
Fig.2－23　Percentages of soot－covered ceramics plates from Sendai Castle

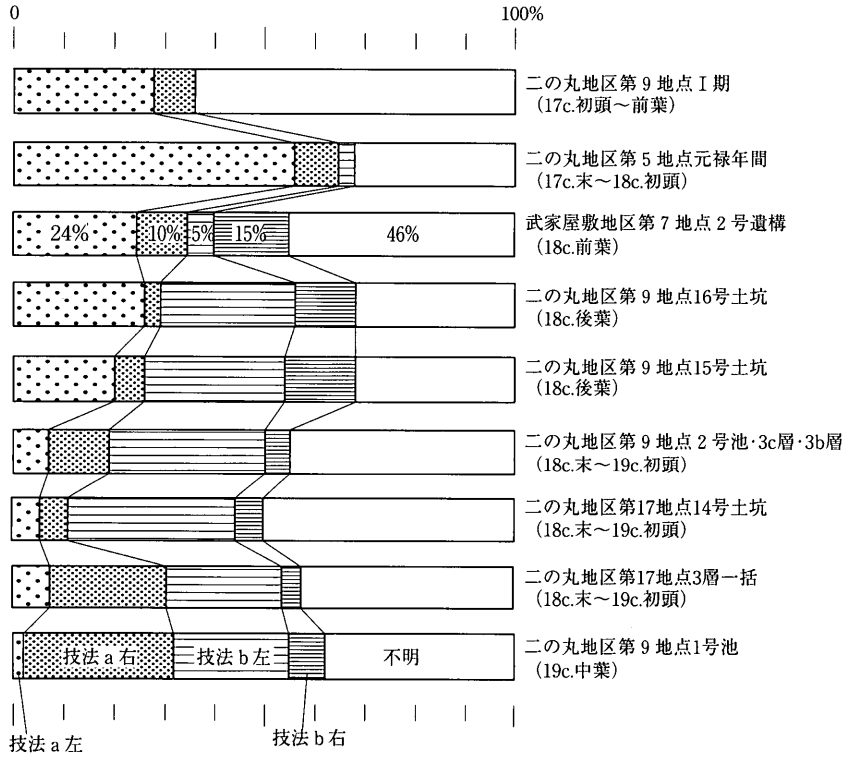


図2－24　仙台城跡出土土師質土器皿の糸切り技法と回転方向の比率
Fig.2－24　Histograms of ceramic dishes from the second citadel of Sendai Castle by kind of string-cut bases

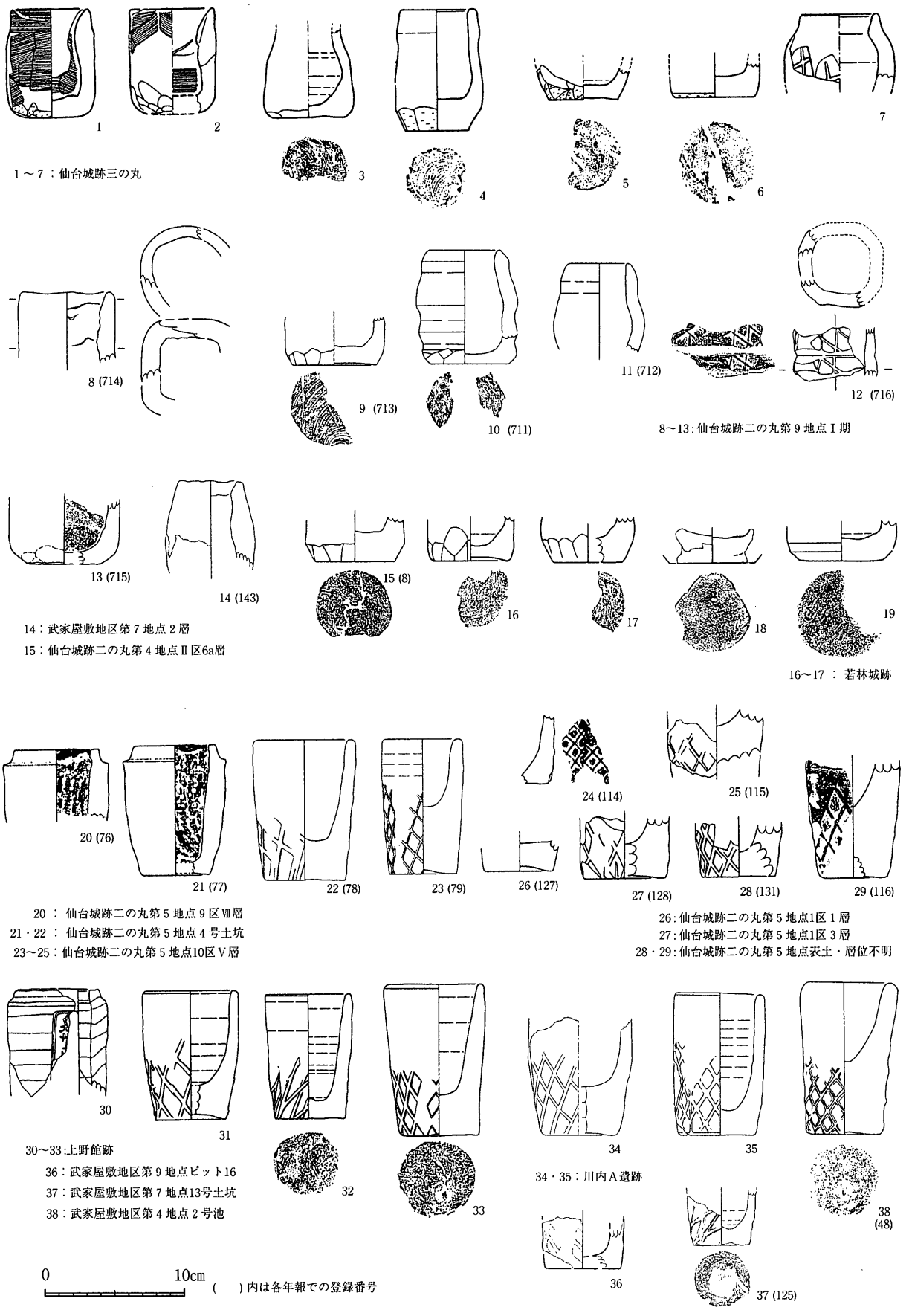


図2－25　仙台藩領内出土の焼塩壺（1）
Fig.2－25　Ceramic salt pots from the area of Sendai domain（1）

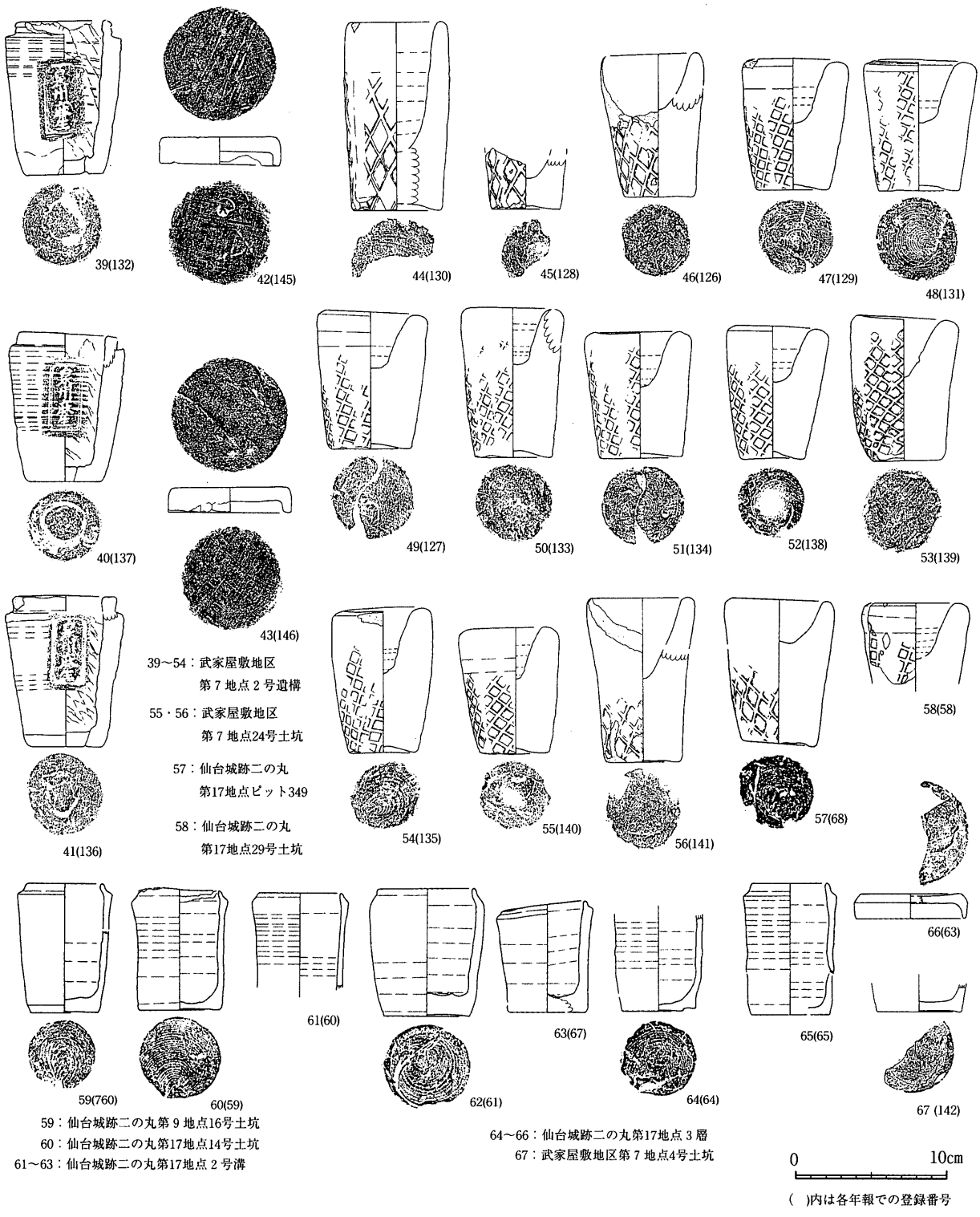


図2－26　仙台藩領内出土の焼塩壺（2）
Fig.2－26　Ceramic salt pots from the area of Sendai domain (2)

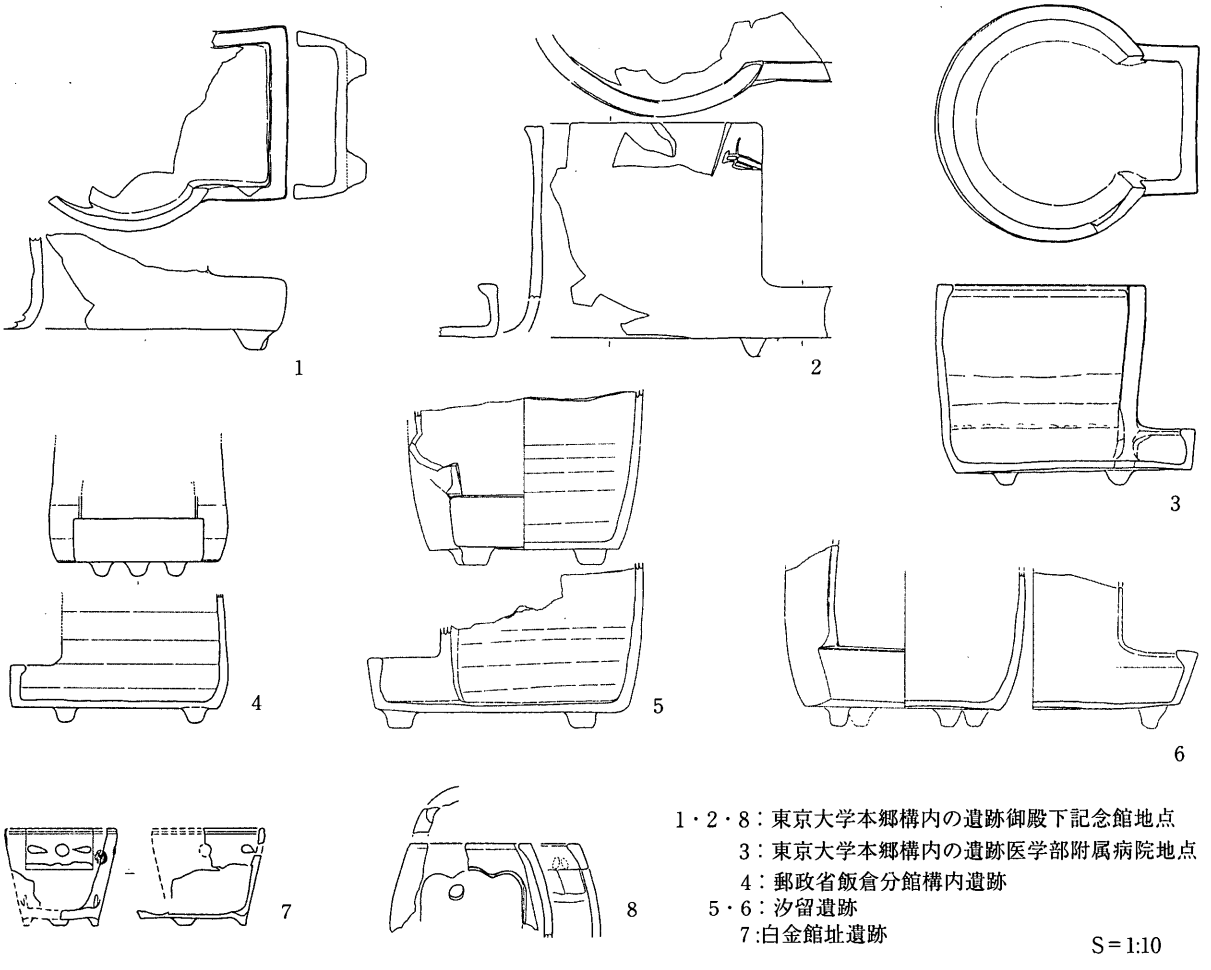


図2—27　江戸の遺跡出土の焜炉類
Fig. 2－27　Various portable cooking stove from the Edo sites

③漆器

漆器については、年報９において、仙台城跡二の丸地区第５地点と第９地点の出土資料を基として、周辺の近世遺跡出土の資料を補い、仙台藩領内での漆器の変遷を示している。その中で、18世紀前葉の段階は良好な資料に欠ける時期であった。武家屋敷地区第７地点２号遺構からは、18世紀前葉の良好な一括資料が出土しており、漆器も多数出土している。ここでは、２号遺構出土の漆器を追加し、18世紀前葉の時期を含めた仙台藩領内での漆器の変遷について考察していきたい。

新たな資料が加わったことで、一部の器形の椀で、年報９で行った漆器の分類には当てはまらないものがみられた。そのため、改めて基準を検討し、分類し直したのが、図2－28・図2－29の変遷図である。分類の基準は、以下の通りである。

椀身Ａ類　口径と深さの比率が２：１より深めの椀。高台が高く、全体に大型である。胴部下半は膨らみを帯びているが、胴部上半から口縁にかけては直線的に立ち上がる。高台内のロクロ挽き込みが極端に浅く、底部が厚い。

椀身Ｂ類　口径が深さの２～３倍の椀。Ａ類に比して浅めであるが、口径は同じか、若干大きめの値をとり、Ａ類同様、比較的大型の椀である。体部と高台の形状により、次の４類型に細分できる。

Ｂ1a類　体部に稜線を持たず、高台は、Ａ類同様、高めである。ロクロ挽き込みが極端に浅く、底部が厚い。

Ｂ1b類　体部に稜線を持たず、高台は低めで、底部も薄い。

Ｂ2a類　体部に稜線を持ち、高台が高めである。ロクロ挽き込みが浅く、底部が厚い。

Ｂ2b類　体部に稜線を持ち、高台は低めで、底部も薄い。

椀身Ｃ類　口径が深さの３～４倍ある浅めの椀。体部と高台の形状により細分できる。

Ｃ1a類　稜線を持たす、体部下半が膨らみ、口縁の立ち上がりも急で直線的である。高台は高めで、ロクロ挽き込みが浅く、底部が厚い。

Ｃ1b類　稜線を持たず、体部下半が膨らみ、口縁の立ち上がりも急で直線的である。高台は低めで、底部も薄い。

Ｃ2a類　稜線を持ち、高台が高めである。ロクロ挽き込みが浅く、底部が厚い。

Ｃ2b類　稜線を持ち、高台は低めで、底部も薄い。

Ｃ3類　体部が筒状に短く直立する。体部の中位に、タガ状の隆帯や２条の稜線（「面取り」）を持つ場合がある。高台はいずれも低い。

Ｃ4類　体部のカーブは緩やかで、半球状を呈する。高台は低い。

Ｂ2類は、高台が高く、底部が厚いものと、高台が低めで、底部も薄いものの２つがみられたため、Ｂ2a類とＢ2b類の２つに細分した。また、Ｃ類の中で、稜線を持つ器形のものが新たにみられ、Ｂ類と分類上の整合性を取るため、Ｃ2類とし、さらに高台の形状によってa類、b類に細分した。そのため、従来のＣ2類、Ｃ3類は、それぞれＣ3類、Ｃ4類に名称を移行させた。

次に、18世紀前葉の２号遺構出土の漆椀を中心に、各類型について述べていく。なお、分類に際しては、欠損部分のあるものや、土圧によって器形がゆがんでいるものもあり、器形の判明するものを中心に行っている。

椀身Ａ類は、数の多寡や文様に違いはみられるが、各年代を通してみられる器形であることがわかる。18世紀前葉では、確実にＡ類に分類されるものは、29のみであり、非常に少ない。17世紀初頭～前葉や17世紀後半の椀身Ａ類では、いずれも内外両面黒地で、文様は内面と外面ともに朱漆によって描かれている。これらとは異なり、18世紀前葉の29では、内面が朱地、外面は黒地で、外面に朱漆で文様が描かれている。また、高台内は黒地に朱漆の銘をもつ。後述するB1b類、B2a類、B2b類などで、内面が朱地、外面は黒地で、外面に朱漆による文様を持つ一群がみられ、器形は異なるものの、装飾においてはこれらとの関連がみられる。

B1a類にあたるものは、17世紀後半同様、18世紀前葉においてもみられなかった。この時期には、B1a類は欠落するものと考えられる。B1b類は、比較的多くみられ（30～36）、家紋を配した文様と、木の葉や植物文を中心とした文様とに大別できる。B1b類は、いずれも内面朱地・外面黒地であり、文様は朱漆で描かれたものが多いが、銀？や金？などを用いたものもみられる。

B2a類とB2b類は、腰部に1本の稜線を持つ「一文字腰」と呼ばれる器形で、高台の形態によって分類することができる。江戸では、17世紀後半の出土例が最も古く、18世紀代には一般的な器形とされている（中井さやか1992）。仙台藩領内においても、同様の傾向が考えられる。仙台藩領内においても17世紀後半でB2a類にあたるものが出現している（27）。18世紀前葉ではB2a類に加え、新たにB2b類が出現し、出土数も増え、装飾にもいくつかのパターンが生まれている。B2a類とB2b類は、装飾の点では共通しており、文様の種類やそれに伴った地の漆の配色の点から、大きく3つに分けられる。1つは、内外両面朱地のもので、高台内のみ黒地に朱漆で銘が入るものである（40・42・43・46・47）。ほとんどのものは、文様を伴わないが、38のみ外面に黒漆で文様が描かれている。2つめは、内面朱地・外面黒地で、外面に朱漆によって文様が描かれるものである（37・38・41・45・48・49）。描かれる文様は家紋に限られている。高台内には、黒地に朱漆の銘がみられるものもある。このタイプの椀は、A類やB1b類にも、意匠の点で共通するものが存在する。3つめは、内外両面および高台内が黒地のものである（44・50）。外面は無文であり、高台内には朱漆によって銘がみられるものもある。

C1a類は、16世紀末～17世紀初頭にみられるのみで、それ以降には存在せず、18世紀前葉の資料にも含まれてはいない。C1b類は、13世紀以降、中世全体を通して主体となるような伝統的な椀の形態であり（年報9）、16世紀末～17世紀初頭においては、C1a類とともに椀の中で主体を占める器形であった（7～10）。しかし、やや時代が下る17世紀初頭～前葉の仙台城出土の資料（19～21）では、量的に激減する。17世紀後半においても、C1b類は存在するものの、その点数はわずかである（28）。18世紀前葉では、3点が分類されるが、全体の出土点数を考えると多くはなく、これ以降の年代では、C1b類はみられなくなる。これら3点は共通した文様を持つことから、組みになる椀の可能性が考えられる（51・52）。いずれも内外両面および高台内が黒地で、見込みには朱漆で丸文が描かれている。52のみ外面に朱漆によって2条の線文が描かれる。16世紀末～17世紀初頭にみられるC1b類の椀（7～10）は、高台径が大きい傾向にあるが、17世紀後半や18世紀前葉の資料では、そのような特徴はみられなくなるなど、器形においては変化もみられる。

C2a類は、今のところ、各年代を通して出土していない。C2b類は、18世紀前葉段階で出現する形態である。いずれも内外両面朱地で、高台内のみ黒地のものに限られている。高台内には朱漆による銘がみられる場合もある。いずれも外面は無文である。同様の特徴の椀は、B2b類の一群（46・47）にも存在する。C2b類とB2b類は、共に18世紀前葉段階で新たに加わる形態であり、いずれも「一文字腰」と呼ばれる器形である。B2b類の器高を低くしたものが、このC2b類に相当するものと考えられる。

C3類は、17世紀初頭～前葉段階で出土例が確認されており、18世紀前葉においても、わずかながら出土している（59・60）。17世紀後半の資料では欠けているものの、19世紀まで継続してみられる器形である。C3類は、年報9において、「浄法寺椀」（松田・羽野1939）との関連を指摘していた椀である。18世紀前葉の資料では、内外両面および高台内も黒地で、文様などは認められない。地の漆の配色は、18世紀後半や19世紀の資料とは異なっている。

蓋では、内面朱地、外面と高台内が黒地で、外面に家紋が配されるものが最も多い。家紋は、朱漆の他に、金色、銀色を用いている場合がみられる。三引両文もみられるが、伊達家以外の家紋の方が多い傾向は、身の意匠と同様である。この他に、内外両面および高台内も黒地のものや、すべて朱地のものもみられ、身の意匠に対応するものと考えられる。

以上をふまえて、漆椀の変遷について、まとめていく。

16世紀末～17世紀初頭段階では、Ａ類、Ｂ1a類、Ｃ1a類、Ｃ1b類がみられ、中でも主体となるのはＣ1a類、Ｃ1b類である。Ｃ1b類は中世からの伝統的な形態の椀である。Ａ類、Ｂ1a類、Ｃ1a類のような高台が高く、ロクロ挽き込みが浅い椀は、16世紀になって出現した形態である（年報９）。Ｃ1a類に関しては、中世的なＣ1b類の体部に、近世的な高い高台が付く形態をしており、中世から近世への過渡的な様相を現しているものと考えられ、16世紀末～17世紀初頭にみられるのみで、それ以降は存在していない。文様では、Ａ類は内外両面黒地に朱漆で文様を描き、Ｂ1a類、Ｃ1b類は内朱外黒地に朱漆で文様を描くものが多い。

次の17世紀初頭～前葉では、Ｂ1b類・Ｃ3類が新たに出現する一方で、Ｃ1a類はなくなり、Ｃ1b類は量的に激減する。文様では、内外両面黒地で、内面にも朱漆によって文様が描かれるものが多い時期である。

17世紀後半では、Ｂ2a類が加わり、18世紀前葉では、さらにＢ2b類とＣ2b類が加わる。Ｂ1a類は、17世紀後半から18世紀前葉の時期には確認されず、18世紀後半には再びみられるようになる。

18世紀前葉の段階では、Ａ類、Ｂ1b類、Ｂ2a類、Ｂ2b類、Ｃ1b類、Ｃ2b類、Ｃ3類がみられ、主体となる椀はＢ1b類、Ｂ2a類、Ｂ2b類、Ｃ2b類である。これらは器形や装飾の点で相互に共通する要素が認められる。Ｂ1b類、Ｂ2a類、Ｂ2b類には、内朱外黒地で、朱漆によって家紋が描かれる一群がみられる。Ｂ2a類、Ｂ2b類、Ｃ2b類には、内外両面朱地、高台内のみ黒地で、外面に文様を持たないものがみられる。高台内には、朱漆によって銘がみられる場合もある。Ｂ2a類とＢ2b類には、無文で、内外両面および高台内も黒地のものがみられる。

文様では、草花文系の文様、家紋、それ以外の大きく３つに分類される。草花文系の文様は、Ａ類とＢ1b類についてみられる。菊花文、竹文、紅葉文、草文、鶴文などを、椀の外面にのみ展開させている。家紋については、17世紀初頭～前葉の段階では、伊達家の家紋の一つである三引両文が圧倒的に多く、17世紀後半になると、伊達家以外の家紋をあしらったものが認められるようになり、それ以降、伊達家以外の家紋が主体となる傾向にあった。18世紀前葉の資料でも、その傾向に矛盾はなく、三引両文もみられるが数は少なく、多くは伊達家以外の家紋である。家紋は、器面に3ヵ所配するのを基本としている。また、一見すると同じ家紋に見える椀もいくつかあるが、家紋の葉や花の形など、細部の表現に違いがみられる場合が多い。草花文系と家紋以外の文様はごくわずかである。これら以外の文様のものは比較的少なく、Ｃ1b類で見込み円文と外面に２条の線文がみられるほか、Ｂ2a類で外面に２条の線文がみられる。

高台内には銘を持つものも多くみられる。銘は、内外面の地の色に関わらず、高台内は黒地で、朱漆によって銘が描かれているものが大半である。しかし、内外両面朱地の椀に限っては、一部のもので、高台内も朱地で、黒色や金色によって銘が描かれているものもみられる。

18世紀後半になると、中世以来の伝統的な器形を受け継いだＣ1b類がみられなくなり、これ以降、確認されていない。また、18世紀前葉では比較的多くみられたＢ2a類、Ｃ2b類も、18世紀後半以降は欠落する。一方で、17世紀後半や18世紀前葉で欠落していたＢ1a類は、18世紀後半や19世紀の資料では、再びみられるようになる。19世紀の資料では、一部に、胴部下半の器壁が厚く、底部から口縁部に向かって次第に薄くなるように作られた椀がみられ、特徴的である。

小結

以上、18世紀前葉の新たな資料を加えた漆器の椀について、その変遷をみてきた。18世紀前葉の段階は、陶磁器の項でも述べたが、供膳具の中で漆器がまだ一定程度の割合を占めている時期であり、出土量も比較的豊富である。しかし、器形や文様では、17世紀前半代とは大きく様相を異にしていることが理解され、その変化は17世紀後半の資料で現れ始めているものと考えられる。17世紀前半は、供膳具に占める漆器の割合が非常に高い時期であるが、17世紀末葉では、陶磁器が浸透し、漆器の割合が大きく変化する（図2－8、図2－9）。この変化が、漆器の様相にも大きく影響を与えているものと考えられる。

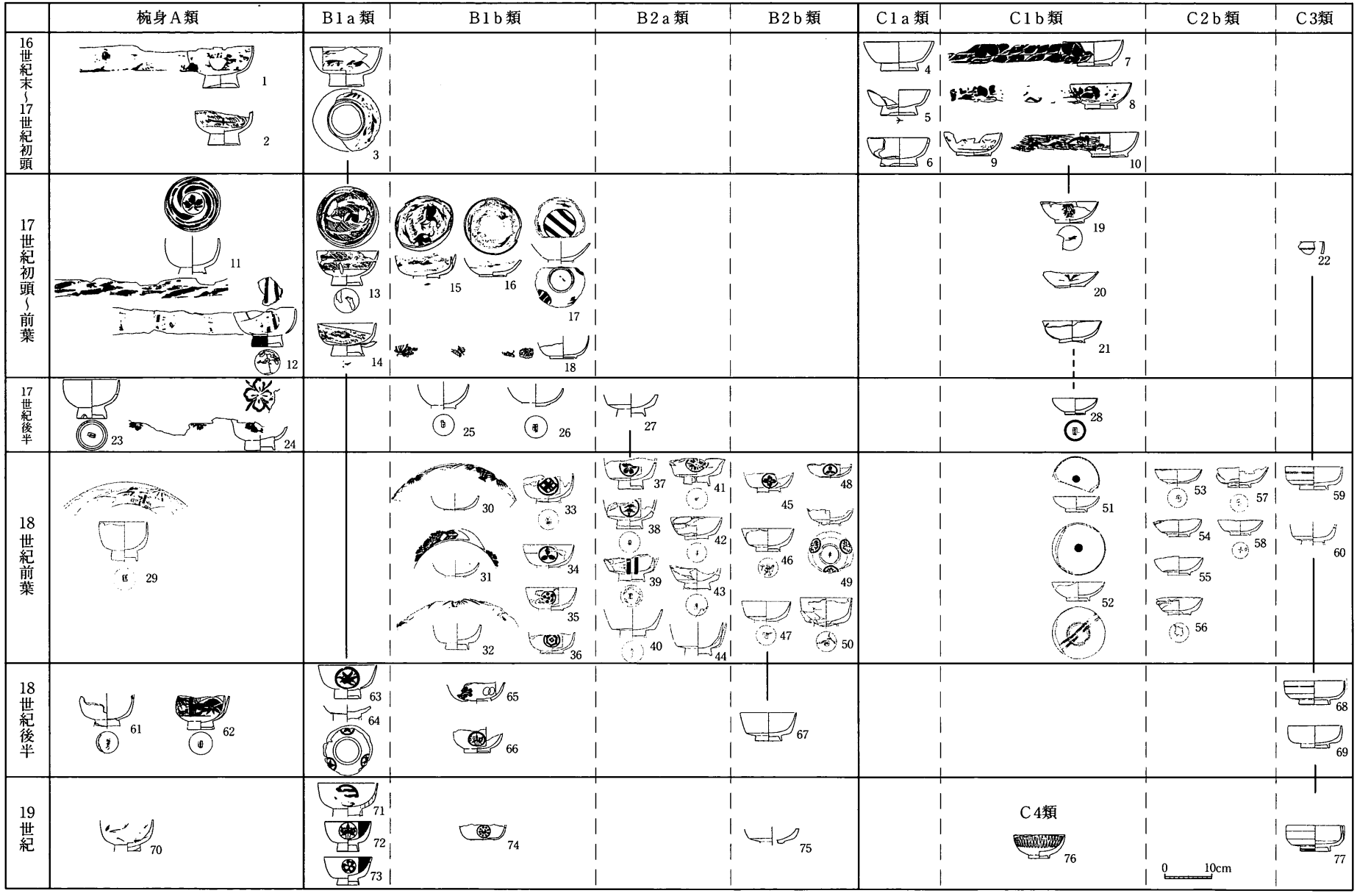
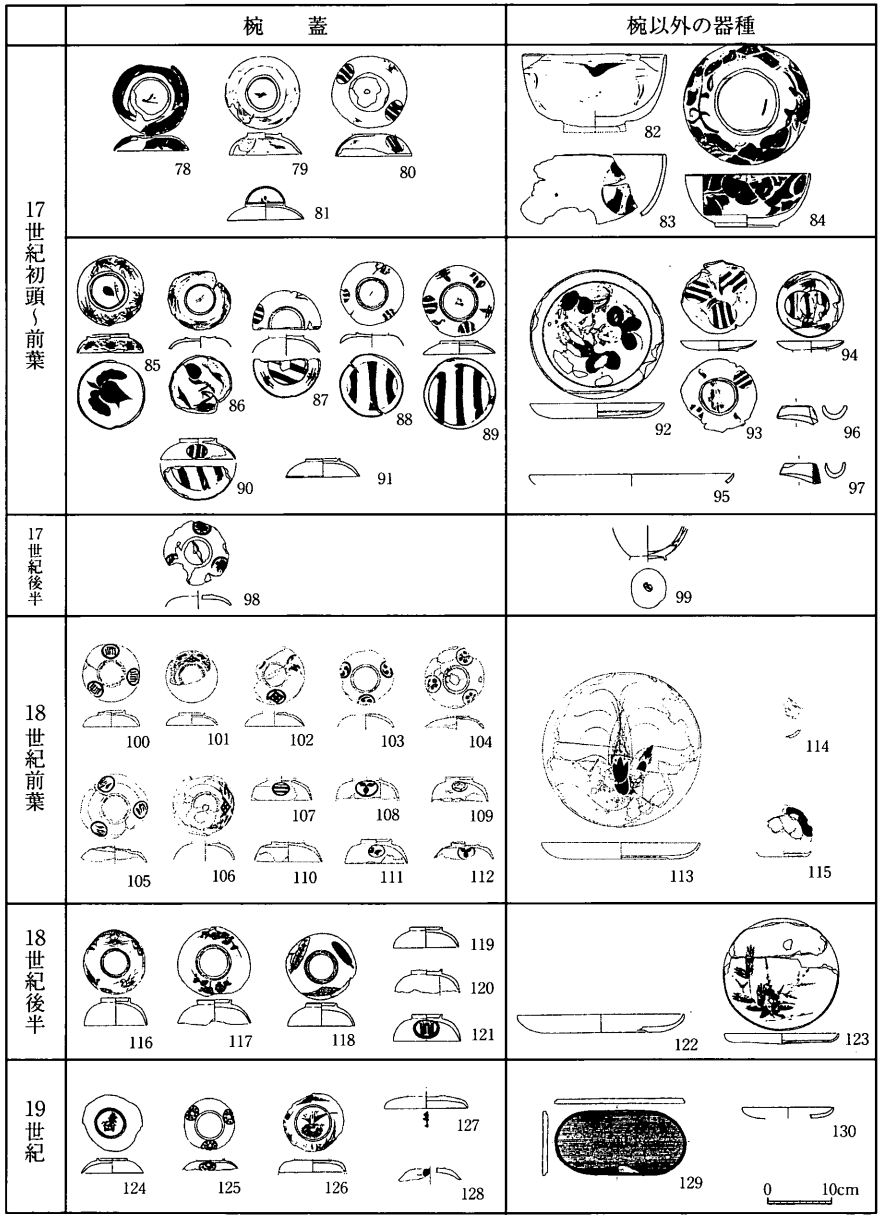


図2－28　仙台藩領内出土の漆器の変遷（1）
Fig.2－28　Chronological sequence of lacquerwares belonging to pre－modern period from sites in Sendai－han（1）



1～10、78～84：下草古城跡
11：仙台城跡二の丸地区第5地点6号池
12、13、17、19、22、87、89～92、94、95：仙台城跡二の丸第9地点8層、7層、16号溝
14～16、20、21、85、86、88、93、96、97：仙台城跡三の丸6号土坑
18：仙台城跡二の丸地区第6地点1号溝
23、28：泉崎浦遺跡25号墓
24～27、98、99：仙台城跡二の丸地区第5地点北区Ⅶ層
29～60、100～114：仙台城跡武家屋敷地区第7地点2号遺構、24号土坑
61～64、66～69、116～123：仙台城跡二の丸地区第9地点16号土坑
65：仙台城跡二の丸地区第9地点15号土坑
70、71：八沢要害遺跡C平場1号井戸
72、73、129：切込窯跡貯水池
74、125、126：佐沼城跡SK13
75～77、127、128、130：仙台城跡二の丸地区第9地点1号池
124：富沢遺跡（88次）第1号土坑

図2－29　仙台藩領内出土の漆器の変遷（2）
Fig.2－29　Chronological sequence of lacquerwares belonging to pre-modern period from sites in Sendai-han (2)

④箸状木製品

武家屋敷地区第７地点の調査では、２号遺構から多量の箸状木製品が出土している。２号遺構出土の箸状木製品は、完形のものが4611点、一端が欠損したものが14320点、両端が欠損したものが9213点と、これまでの仙台城跡二の丸地区、武家屋敷地区の調査で出土した箸状木製品をはるかに超えた数が出土している。２号遺構については、武家屋敷地区ではあまり多くない傾向にある土師質土器の皿が大量に出土する点、木簡の記載内容に「二の丸」を示すものが多い点などから、２号遺構は仙台城二の丸から搬出されたごみが廃棄された土坑であろうと考えられる（年報19第１分冊、第２分冊、第３分冊）。そのため、これらの大量の箸状木製品についても、土師質土器の皿とともに、二の丸内で行われる武家の儀礼的な饗宴の場で使用され、そのまま廃棄されたものであろうと推測される。２号遺構の出土遺物は、木簡に記載されている年号から、18世紀前葉の一括資料と考えられ、これらの箸状木製品も、18世紀前葉に位置づけられるものである。

表2－5は、年報９で示した箸状木製品の先端形状の集計に、武家屋敷地区第７地点２号遺構の資料を加えて示したものである。２号遺構の資料については、両端が残存している完形の箸状木製品について、その先端形状を集計しており、一端が欠損したものの点数は含まれていない。先端形状は、年報９で示したＡ類～Ｄ類の他に、新たにＥ類、Ｆ類を追加している。Ａ類～Ｄ類は、先端に特に加工を加えず切断面を残すも（Ａ類）、先細に作り出すが切断面を残すもの（Ｂ類）、先端を尖らせ切断面を残さないもの（Ｃ類）、ヘラ状に作り出すもの（Ｄ類）である。Ｅ類としたものは、先端の一側面からだけを削って尖らせたもの（年報19第４分冊W125・W126）、Ｆ類としたものは、Ａ類～Ｅ類以外の特殊な先端形状のもの（年報19第４分冊W128）である。

２号遺構出土の箸状木製品では、両端とも加工を加えず、断面が略楕円形のAA類が量的に圧倒的に多い。次いで、一端は加工を加えず切断面を残し、他端を尖らせるAC類や、他端を先細に作り出すが切断面を残すAB類が多くなる。しかし、AA類はこれらをはるかに超えた点数が出土しており、主体となるのはAA類の箸状木製品であると考えられる。また、一端は加工を加えず、他端を一側面から削って尖らせたAE類や、他端をヘラ状に作り出すAD類なども、多くはないが一定程度みられる。BB、BD、BE、CCなど、両端ともに加工がみられる形状の箸状木製品もみられるが、出土点数が1～数点程度であり、ごく限られた特殊なものであろうと考えられる。

圧倒的に多いAA類は、「寸胴箸」と呼ばれるものに相当する（萩尾昌枝1992）。AB類やAC類の中で、AA類と同程度の長さのものは、「片口箸」に相当するものと考えられる。AB類・AC類のうち、AA類と比べて、長さが短いものについては、すべてが箸として用いられたものとは考えがたく、箸以外の用途のものも含まれていると考えられる。BB類やBC類、CC類はほとんど出土していないが、「両口箸」に相当するものと考えられる。大多数が白木の箸であり、漆塗りの箸は９点出土しているのみである。白木の箸に関しては、整形・調整の非常に丁寧なものもみられるが、多いのは調整痕が残る状態のものである。

次に、２号遺構出土の箸状木製品の長さについて、図2－30に示している。なお、２号遺構出土の資料のうち、断面が方形を呈するものは、その形状から箸以外の串や楊枝のような用途の可能性が高いものが多いため、点数からは除外している。18世紀前葉の2号遺構では、210～219mmに顕著な集中がみられる。他の時期と比較すると、17世紀末葉では240mm前後に、18世紀後葉は210mm前後に顕著な集中がみられ、18世紀前葉の段階で箸の長さが短くなっていることが読み取れる。17世紀末葉では八寸箸が用いられ、18世紀前葉の段階で七寸の長さに短くなり、18世紀後葉の段階でも七寸の箸が用いられていることが明らかとなった。

また、２号遺構の箸状木製品では、比較的短いものも一定量みられることが注目される。短いものについては、特に集中する箇所はみられない。長さの境としては、長さ210～219mmのものは比較的多く出土しており、七寸の箸のばらつきの範疇に含まれるものと考えられ、長さ190～199mmで急激に点数が少なくなることから、この前後に境があるものと推測される。

表2—5　仙台城跡二の丸地区および武家屋敷地区出土箸状木製品の先端形状
Tab.2－5　Count of chopsticks from the secondary citadel of Sendai Castle and *samurai* residence

箸状木製品の先端形状	AA	AB	AC	AD	AE	BB	BC	BD	BE	CC	CD	CE	CF	DD	DE	EE	合計
二の丸地区第9地点 8・7層、16号溝 (17世紀初頭～前葉)	0	0	1 (1)	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5 (1)
二の丸地区第9地点 基礎9区Ⅶ層 (17世紀末葉)	138 (1)	8	6	0	0	3 (1)	1	8	0	1	2	0	0	0	0	0	167 (2)
武家屋敷地区第7地点 2号遺構 (18世紀前葉)	4171 (8)	140 (51)	224 (32)	18 (1)	44	3	0	3 (2)	1	1	1	1 (1)	1	1	1	1	4611 (95)
二の丸地区第9地点 16号土坑 (18世紀後葉)	370	1	3 (1)	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1 (1)	0	0	379 (2)

(　)内は断面が方形を呈するもの

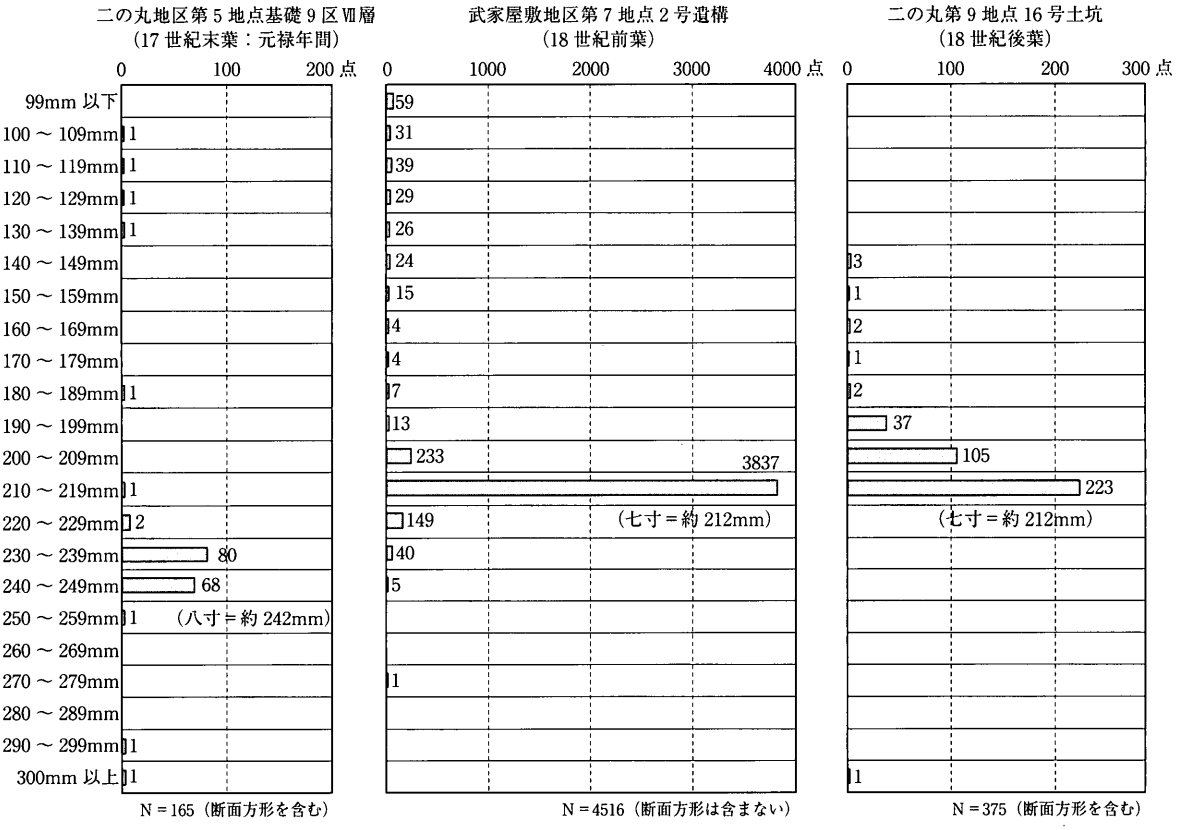


図2—30　仙台城跡二の丸地区および武家屋敷地区出土箸状木製品の長さ
Fig.2－30　Histograms for length of chopsticks from the second citadel of Sendai Castle and *samurai* residence

表2－6　仙台城跡武家屋敷地区第７地点２号遺構出土箸状木製品の先端形状
Tab.2－6　Count of chopsticks from No.2 structural remains at BK7

長さ	先端形状														合計
	ＡＡ	ＡＢ	ＡＣ	ＡＤ	ＡＥ	ＢＢ	ＢＤ	ＢＥ	ＣＣ	ＣＤ	ＣＦ	ＤＤ	ＤＥ	ＥＥ	
99mm 以下	2	8	36	1	9	1						1		1	59
100 ～ 109mm		2	18	3	7						1				31
110 ～ 119mm		3	28	3	4			1							39
120 ～ 129mm	1	5	21		2										29
130 ～ 139mm	1	2	18		5										26
140 ～ 149mm	1	5	13	2	3										24
150 ～ 159mm	1		11		2								1		15
160 ～ 169mm			2	1	1										4
170 ～ 179mm	1		2			1									4
180 ～ 189mm	1	3	3												7
190 ～ 199mm		3	7		2				1						13
200 ～ 209mm	205	8	14	2	2	1	1								233
210 ～ 219mm	3766	43	16	5	6					1					3837
220 ～ 229mm	143	3	2		1										149
230 ～ 239mm	35	4	1												40
240 ～ 249mm	5														5
270 ～ 279mm	1														1
合計	4163	89	192	17	44	3	1	1	1	1	1	1	1	1	4516

表2－6は、2号遺構出土の箸状木製品について、先端形状を長さの違いによって比較したものである。なお、断面が方形を呈するものは除外している。長さが集中する210～219mmやその前後の200～209mm、220～229mm、230～239mmでは、ＡＣ類、ＡＤ類、ＡＥ類などの先端が尖る加工がなされているものも含まれてはいるが、先端形状ＡＡ類の方が多数である。一方、190～199mm以下の長さでは、先端形状ＡＡ類はわずかで、先端が尖る形状のものの方が多くなっていることが読み取れる。このことから、長さが短い箸状木製品では、箸以外の、例えば串のような用途のものが含まれているものと考えられる。短い箸状木製品の１つ１つを観察すると、整形や調整の痕跡は、箸状木製品の主体を占める先端形状ＡＡ類で長さが七寸のものと同様である。これらの先端を加工して短い箸状木製品が作られていることが考えられ、加工途中とみられる資料も出土している（年報19第４分冊W105・W109)。そのため、先端が尖るものは七寸より短い方に多くなり、用途が様々であるため、分布にも集中がみられないのであろうと考えられる。

小結

これらの箸は、多量の土師質土器の皿とともに出土しており、それらは、儀礼的色彩を帯びた饗宴の席で使われた後、まとめて捨てられたものと考えられる。白木の箸が短小化することについては、２号遺構出土資料を検討することによって、18世紀前葉の段階で、７寸の箸に短くなっていることが明らかとなった。その背景については、伝統的な儀礼が、形を維持しながらも次第に形骸化していくという事情が存在するものと考えていた（年報９)。箸の長さという視点からは、17世紀末葉から18世紀前葉の間に、時代が変化していく様相の一端が伺えるものと考えられる。

⑤駒形木製品

武家屋敷地区第７地点の調査では、駒形の木製品が５点出土している（図2－31）。W241は24号土坑から、W242～245は２号遺構からの出土である。24号土坑は、２号遺構に隣接する廃棄土坑である（年報19第1分冊）。24号土坑の出土遺物は、陶磁器や木簡の内容から、２号遺構と同様に18世紀前葉の資料であることが考えられている（年報19第２分冊、第３分冊）。W241、243、245は、欠損部分もあるが、馬の立像であり、W242、244は馬の頭部から頸部を表したものである。

仙台城下における馬の立像については、近世に遡ることが考えられるものとして、木ノ下駒が挙げられる。木ノ下駒とは、旧暦三月三日の木ノ下白山神社の祭礼の際に、参道の露店で売られていたもので、「青葉駒」（永田久光1956）、「ウマッコ」（小野寺正人1998）などの呼び方がある。白山神社は、陸奥国分寺一山の鎮守神として勧請された一山十八伽藍の一社である。白山神社の神事では、舞楽奉納が終わると神楽が演じられ、その後に流鏑馬が執行された。白山神社の祭りでは、参道の露店で、木ノ下駒や松川達磨が売られ、参詣に来た人々がこれらを買い求めた（小野寺正人1998）。木ノ下駒の起源は、江戸時代に陸奥国分寺境内で催された馬の競り市であるとされている（仙台鉄道局編1937、永田久光1956）。この馬の競り市では、良馬が選ばれ、多賀の国府から、朝廷に奉ずる習慣があった。その献馬の胸に下げた馬形が木ノ下駒のはじまりとされ、後に、厩の守護信仰として、これを奉る風習が生じたと伝えられている。しかし、木ノ下駒自体が、具体的にいつの年代に誕生したものかについては不明である。東北地方には名馬の産地が多く、三春駒（福島県）、八幡駒（青森県）など、他にも類似した木製の駒形の郷土玩具が知られる。近世まで遡ることを確実に確認できるものは少ないが、木製の他にも張子製、土製など、東北地方には馬を模った郷土玩具が多数存在しており、馬の産地として、馬が身近な存在であったことが推測される。

木ノ下駒の伝世品としては、仙台市博物館所蔵の三原良吉コレクションに収蔵されているものがある（図2－32、仙台市博物館1996）。近世と推測されているものでは、3233、3234、3235の３点があるが、詳細な年代は不明である。大きさは、3233が高さ20.1cmとやや大きく、3234、3235はこれより小さく、それぞれ高さ16.2cm、高さ15.8cmである。

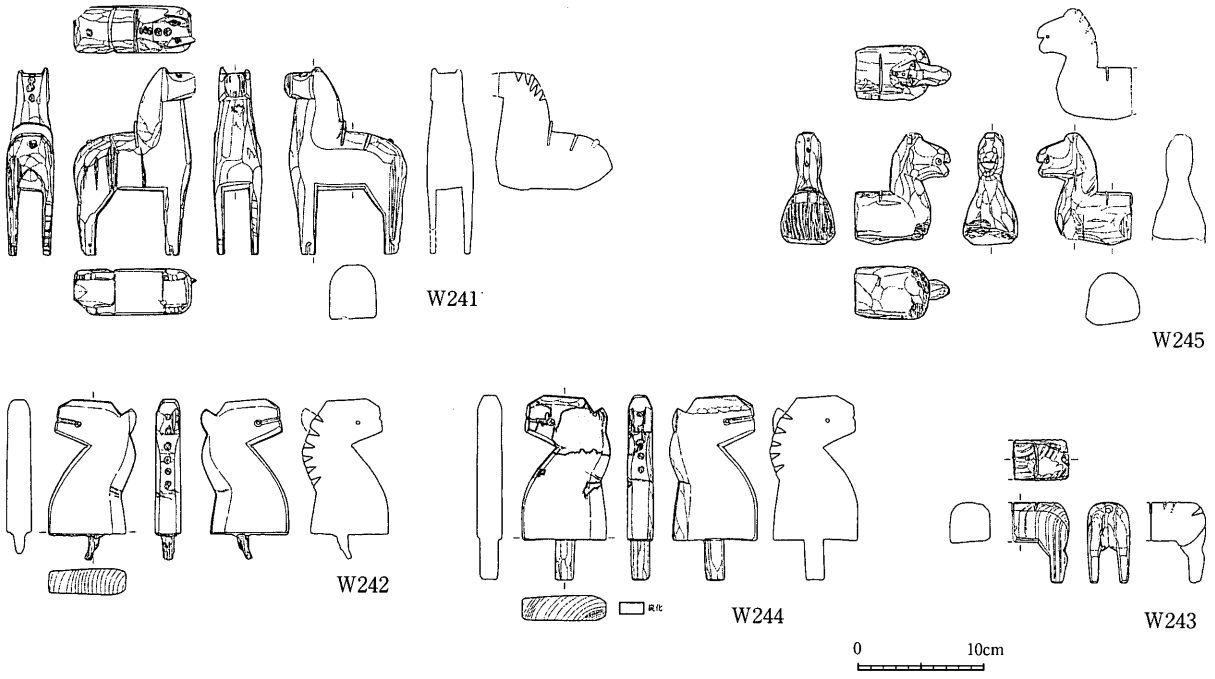


図2－31　武家屋敷地区第７地点出土駒形木製品
Fig.2－31　Various wooden implements shaped horse from BK7

伝世品の木ノ下駒と、W241、243、245を比較して、類似する点では、鞍と尾の作り方が挙げられる。伝世品においても、W241、243、245においても、鞍の部分は、前後２ヵ所に溝状の切り込みが入り、そこに薄い板を挿し込んで表現されている。残存状態によって、薄い板は欠落している場合もみられる。尾については、いずれも小孔が穿たれている。近代の民芸品では、シュロなどの繊維を挿し込んで尾を表現したものがみられるため、これらの小孔についても同様のものであったと考えられる。大きさでは、W241のみ高さが判明するが、15.0cmであり、伝世品のうち、比較的小さいものとおおよそ同じ大きさと考えてよいであろう。

一方、全体的な形状には違いがみられる。伝世品の木ノ下駒では、各部位が直線的で角張った形を基本としている。耳から後頭部にかけては直線的に削られており、背部から見ると逆Ｖ字状に耳の形が作られている。後頭部から背部の繋がりも直線的で、脚部も直線的で太い作りである。それに対してW241、245では後頭部と背部の繋がり、胸部や後背部の作りに丸みがみられる。また、たてがみについては、W241、245では、後頭部にそれぞれ５ヵ所、４ヵ所の小孔がみられる。伝世品では、両耳の間に小孔が３ヵ所（3223）、後頭部に２ヵ所（3234）、後頭部に１ヵ所（3235）とそれぞれ観察される。これらの小孔は、尾と同じように繊維を挿し込んで、たてがみを表現したものとみられるが、伝世品ではW241、245よりも形式的に表現されている。さらに、伝世品では、表面が黒色に塗られ、口部、胸部、胴部、臀部、脚部などに、白・赤などの色で銜、鞍や腹帯、前掛けなどの装飾が描かれていることが特徴である。W241、243、245では、埋没段階で消えた可能性もあるが、彩色や表面が黒色に塗られた痕跡は観察されない。また、W245では、口部側面に小孔が貫通しており、紐などを通して、手綱の装飾を加えたことが考えられるが、伝世品では観察されない。

結論として、W241、243、245の駒形木製品と、伝世品の木ノ下駒とは、共通点もみられるが相違点も大きく、W241、243、245が木ノ下駒であるかどうかは、現状では判断がつかない。伝世品の木ノ下駒は、各部位が直線的で、たてがみや耳、胴部、脚部の表現が形式化しているのに対して、W241、243、245は比較的馬の形態を写実的に表している。木ノ下駒は、藩士の手内職として製作されていたとの記載もみられることから（仙台鉄道局編1937）、製作者によって、仕上がりに差がみられる可能性も考えられる。また、年代によっても形態に違いがある可能性も考えられる。２号遺構出土の駒形木製品は、供伴する遺物の年代から、18世紀前葉頃のものであることが考えられる。伝世品の木ノ下駒は、近世のものであろうと推測されているが、その詳細な年代は判明していない。そのため、年代が異なれば、形態に違いがみられる可能性も考えられる。

W241では、４本の脚部に側面から穿たれた小孔がみられる。形状から推測して、車輪などを通して、馬が動くように作られていたのではないかと考えられる。木ノ下駒では確認できなかったが、福島県の三春駒では、年代は不明であるが、車付きのものもみられ（斎藤良輔1968）、木ノ下駒にもこのような形があった可能性も考えられる。現在知ることができる郷土玩具にも、木製や張子製など材質はさまざまであるが、馬や牛に車輪が付いたものが各地で存在している。また、浮世絵や絵本などの資料でも、馬に車輪が付いた玩具がみられ（図2－34の１・２）、玩具の形態としては珍しくはないようである。絵や郷土玩具では、馬や牛が台車の上に乗っているものが多いが、脚部に車輪が付くものも存在した可能性が推測される。

次に、馬の頭部から頸部を表したW242、244であるが、木ノ下駒や仙台周辺の郷土玩具の資料の中には、このような木製品はみられなかった。浮世絵や絵本などの絵画資料や郷土玩具には、木製や張子製、練り物製と材質はさまざまであるが、春駒や首馬と呼ばれる駒形の玩具がみられる（図2－33、図2－34）。首馬とは、木製や張子製で、馬の頭部から頸部を模した玩具である。春駒とは、丸竹の先端にこの首馬を取り付け、他の端に小さい車輪を付けたもので（斎藤良輔1968、佐久間良彦2005）、馬に乗っている状態を真似て、子供が遊ぶ玩具である。喜多川守貞の『守貞漫稿』（朝倉治彦・柏川修一編1992）にも、絵とともに春駒に関する記述がみられる（図2－34の3）。首馬や春駒は、材質、形態、由来など、全国に色々な種類があり、郷土玩具として現在確認できるものには、大山の竹馬（鳥取県）、首馬（大阪府）、竜泉寺の串馬（愛知県）などが挙げられる（西沢笛畝1965）。

W242、244と最も形状が似ているのは、大山の竹馬で、板で作られた馬の頭部から頸部に、竹の棒を付けたものである。W242、244にも、下部に突起がみられ、この突起は竹に差し込むためのものではないかと推測される。

大山の竹馬にみられない特徴としては、W242、244では、口部側面に小孔が貫通しており、W245と同様に、紐などを通して、手綱としたのであろうと推測される。絵画資料では、張子製とみられるが、春駒に手綱が付き、子供がその手綱を持っている様子が多数描かれている（図2－34の2・4・6）。また、W242、244には、馬の頭部にそれぞれ6ヵ所、5ヵ所の小孔がみられる。これらは、繊維を差し込んでたてがみとしたものと考えられ、図2－34からもたてがみの様子がうかがえる。

春駒は、生竹に紐を付けて手綱とし、これを馬に見立ててまたがって遊ぶものから転化したとされている。江戸時代頃から、木製や張子製の首馬や、竹に車輪が付く形になったようであるが、その発祥について詳細な年代はわかっていない。江戸時代の絵本や浮世絵などからは、18世紀中葉～末頃には、このような形のものがすでにあったことがうかがえる。図2－34の4は、柳原関月の『絵本二葉松』の絵で、春駒にまたがって遊ぶ童子が描かれている。柳原関月は生没年が延享四年（1747年）～寛政九年（1797年）の人物であり、この頃にはすでに春駒が子供の玩具として存在しているようである。図2－34の6は、西川祐信の『絵本西川東童』の中の絵で、初版が延享三年（1746年）の刊行と考えられているものである（加藤康子1997）。神田明神祭の様子が表されており、春駒にまたがる子どもの様子が描かれている。図2－34の5は、享保十五年（1730年）に出版された長谷川光信の『絵本御伽品鏡』の中の挿絵である。大阪および付近の名物風俗が描かれたものであるが、春駒の様子が描かれている。これによると、子供の玩具だけでなく、鼓や三味線を伴った芸能の様子が見られる（西沢笛畝1957）。また、図2－34の7は、作者不詳で、「元禄頃の凧　　周辺は焼けて失なわれたもの　　作者不詳」の但し書きが付く資料である。凧揚げをする様子が描かれているが、春駒もしくは首馬を持つ童子が傍らに描かれていることがわかる（久保田米所1936・西沢笛畝1957）。作者や出典が不明であり、描かれた年代も不明であるが、この絵が元禄頃の様子を描いたものであるとするならば、元禄頃まで春駒もしくは首馬の存在を追うことができる可能性もある。W241、245は、2号遺構からの出土であり、供伴遺物から18世紀前葉の年代が推測される資料である。18世紀前葉の資料に春駒が含まれていることは、年代的には矛盾はないものと考えられる。

小結

以上のように、武家屋敷地区第7地点2号遺構、24号土坑から出土した駒形の木製品は、木製の玩具類である可能性が考えられる。駒形の玩具は、材質、形状はさまざまであり、年代によっても違いはあると考えられるが、近世において比較的身近な形の玩具であったようである。見落としがあるかもしれないが、江戸の遺跡では駒形の木製品の出土例は確認できなかった。絵本や浮世絵などには駒形の玩具が多く登場しており、これらは張子製など、木製以外のように観察され、遺物として残存しにくいことも考えられる。

これらの駒形木製品以外にも、武家屋敷地区第7地点の調査では、木製品では羽子板、竹とんぼ、将棋の駒、独楽など、土製品のミニチュア玩具、人形、箱庭道具、陶磁器の円盤状加工品、石製品の碁石など、玩具類と考えられる遺物が出土している。江戸の遺跡から比べると、必ずしも多い出土点数とは言えず、年代別の様相や地域性などを考えられるような状況にはないが、仙台城下においてもさまざまな玩具が作られ、用いられていたことが推測される。

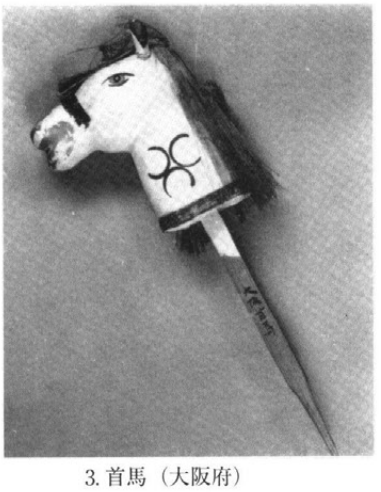
3233　　3234　　3235

仙台市博物館 1996
『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅷ
－三原良吉コレクション－』巻頭写真

図2－32　伝世品の木下駒
Fig.2－32　The picture of the Kinoshita－koma handed down to posterity

1. 木ノ下駒（宮城県）

2. 三春駒（福島県）

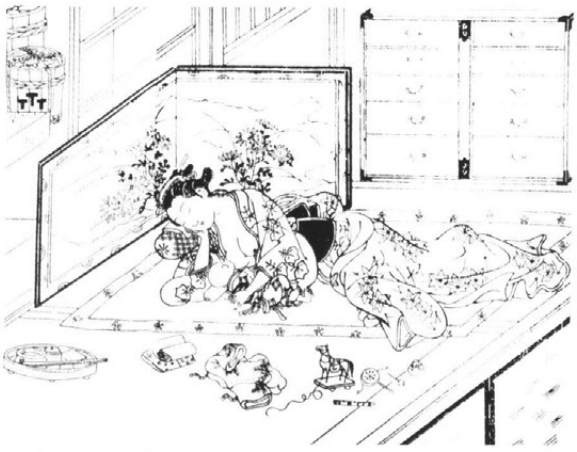


3. 首馬（大阪府）

4. 大山の竹馬（鳥取県）

1～4：西沢笛畝 1965『日本の郷土玩具』

図2－33　駒形の郷土玩具
Fig.2－33　The folk toys in the shape of a horse



1　石川豊信『絵本江戸紫』 明和二年刊行
出典：樋口清之監修 1991
『ヴィジュアル百科江戸事情第一巻生活編』

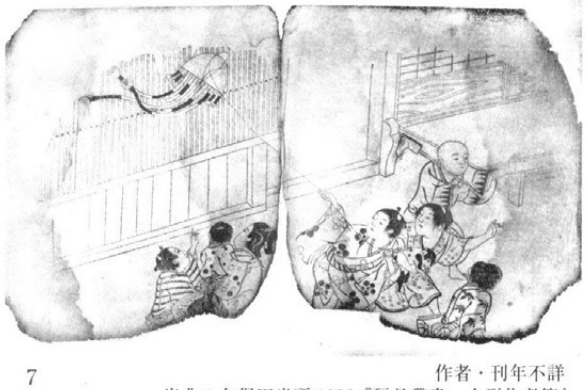
2　松園（序文）・辰景（絵）
『竹馬之友』刊年不明
出典：笹間良彦 2005
『日本こどものあそび大図鑑』

3
喜多川守貞著『守貞謾稿』
出典：朝倉治彦・柏川修一編
1992『守貞謾稿第四巻』

4　柳原寒月筆 『絵本二葉松』刊年不明
出典：樋口清之監修 1994『ヴィジュアル百科江戸事情第六巻服飾編』

5　長谷川光信筆『絵本御伽品鏡』挿絵
享保十五年版
出典：西沢笛畝 1957『日本の人形と玩具』

6　西川祐信「絵本西川東童」 延享三年刊行か
出典：加藤康子 1997『日本子どもの歴史叢書 7』



7　作者・刊年不詳
出典：久保田米所 1936『玩具叢書　人形作者篇』

図2－34　絵本などにおける春駒・首馬
Fig.2－34　Harukoma and Kubiuma;the toys in the shape of a horse,on the Picture book

《引用・参考文献》

赤松和佳　2006　「畿内出土の17～18世紀の京焼について」『京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－』関西陶磁史研究会研究集会資料　pp.24－48

朝倉治彦・柏川修一編　1992　『守貞謾稿』第四巻

岩橋陽一・上條朝宏他　1994　『東京都千代田区丸の内三丁目遺跡　東京国際フォーラム建設予定地の発掘調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第17集

江戸遺跡研究会編　2001　『図説　江戸考古学研究事典』

大西清右衛門・小田栄一ほか　1985　『茶道聚錦12　茶の道具（三）』

小川　望　1992　「大名屋敷出土の焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　pp.128－162

小川　望　1996　「焼塩壺の刻印による年代観について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』pp.115－134

小川　望　2008　『焼塩壷と近世の考古学』

小野寺正人　1998　「第Ⅶ章　祈りのかたち」『仙台市史　特別編６民俗』

加藤康子　1997　『日本子どもの歴史叢書７　絵本西川東童/絵本大和童/竹馬之友/幼心学図絵/江戸二色』

久保田米所　1936　『玩具叢書　人形作者篇』

小々高幸一　1982　「仙台藩における塩専売制度について」『宮城県の地理と歴史』Ⅲ　pp.224－239

小林謙一　1991　「江戸における近世瓦質・土師質焜炉について」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』pp.1－46

小林謙一　1996　「江戸在地系土器と江戸出土土師質塩壺類の編年（要旨）」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』pp.99－113

小林謙一　2000　「暖房具にみる考古資料と民具資料の関係」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会編　pp.243－248

小林博範・斎藤進・小島正裕ほか　2000　『汐留遺跡Ⅱ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第79集

小林博範・西澤明・小林裕ほか　2003　『汐留遺跡Ⅲ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第125集

佐久間光平・佐藤憲幸・千葉正康　1993　『上野館跡－近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第156集

笹間良彦　2005　『日本こどものあそび大図鑑』

佐藤淳　2007　『若林城跡』　仙台市文化財調査報告書第306集

斎藤良輔　1968　『日本人形玩具辞典』

書誌研究懇談会　1980　『風俗画報目次総覧』

仙台市史図録編纂委員会　1959　『目で見る仙台の歴史』

仙台市博物館　1996　『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅷ－三原良吉コレクション－』

仙台鉄道局編　1937　『東北の玩具』

関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』pp.51－86

両角まり　1996　「瓦質土器類の分類について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』pp.85－98

滝口宏・高山優ほか　1988　『白金館址遺跡Ⅰ』

滝口宏・鈴木公雄ほか　1989　『白金館址遺跡Ⅲ－研究編』

千葉雄市　1998　「第Ⅷ章　舞い踊る人びと」『仙台市史　特別編６民俗』

寺島孝一・西田泰民ほか　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報１』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報２』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報３』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報４・５』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報６』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報10』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報11』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報13』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2006　『東北大学埋蔵文化財調査年報19第１分冊』

東北大学埋蔵文化財調査室　2009　『東北大学埋蔵文化財調査年報19第２分冊』

東北大学埋蔵文化財調査室　2007　『東北大学埋蔵文化財調査年報19第３分冊』

東北大学埋蔵文化財調査室　2008　『東北大学埋蔵文化財調査年報19第４分冊』

東陽堂　1894　『風俗畫報』第七十三号
永田久光　1956　『日本の郷土玩具』
西沢笛畝　1957　『日本の人形と玩具』
西沢笛畝　1965　『日本郷土玩具事典』
丹羽基二　1971　『家紋大図鑑』
萩尾昌枝　1992　「江戸時代初期の宴会の食器類」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　pp.205－219
畑中英二　2003　『信楽焼の考古学的研究』
林辰三郎ほか　2002　『角川茶道大辞典』
樋口清之監修　1991　『ヴィジュアル百科　江戸事情　第一巻生活編』
樋口清之監修　1992　『ヴィジュアル百科　江戸事情　第四巻文化編』
樋口清之監修　1994　『ヴィジュアル百科　江戸事情　第六巻服飾編』
福田敏一・石崎俊也ほか　1997　『汐留遺跡Ⅰ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
福田敏一・石崎俊哉ほか　2006　『汐留遺跡Ⅳ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第189集
藤本強・小川望ほか　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点－医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点－』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３
松本権六・羽野禎三　1939　『時代椀大観』
港区麻布台一丁目遺跡調査会　1986　『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』
米川幸子　2000　「民具に見る多摩の暖房具」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会編　pp.249－259
渡辺誠　1985　「物資の流れ－江戸の焼塩壺」『季刊考古学』第13号　pp.42－48
渡辺誠　1992　「焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　pp.107－127

(3) 武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種

小川とみ・鈴木三男（東北大学植物園）

仙台城二の丸地区から出土した木簡の樹種を調べた。これらは遺構に大量に廃棄されたもので、そのほとんどは伊達領内からの物資に付けられていた荷札と思われる。出土資料から剃刀刃を用いて木口、板目、柾目の薄切片を切り取り、ガムクロラールで封入してプレパラートとし、光学顕微鏡で観察同定した。プレパラートにはMYG－4592～5000、5644～5665の番号が付されているが、若干の重複サンプリングを除き、同定された合計点数は428点である。この中から以下の樹種が同定された。

１．カヤ　Torreya nucifera (L.) Sieb. et Zucc.　イチイ科

写真　1a-c.（MYG－4862）

保存性がよい出土材で、晩材部はとても幅狭く、年輪は目立たない。樹脂細胞はなく、仮道管と放射組織だけからなる。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、２～３本づつまとまって走る。放射組織は柔細胞からなり、細胞内容物は黒褐色にならない。分野壁孔は小さいヒノキ型～スギ型で１分野あたり１、２個ある。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イチイとはらせん肥厚が２～３本づつまとまって走る事により、イヌガヤとは樹脂細胞を欠くことにより区別される。

カヤは東北地方南部（岩手県一関市、宮城県気仙沼市）以南の暖温帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径１m、樹高25mの大高木となる。木理通直で、堅く緻密で弾性があり、切削加工が容易、木肌美しく、香りがあって保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。建築材、各種器具材など多様な用途があるが、美術工芸品、とくに木彫像、碁盤、将棋盤などの特用がある。

２．モミ属　Abies　マツ科

写真　2a-c.（MYG－4630）

一見スギ材に似た年輪の明瞭な針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかである。仮道管にらせん肥厚はなく、樹脂細胞も無い。放射組織は柔細胞のみからなり、その垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔があるモミ型壁孔となる。特に垂直壁は串団子状となる。分野壁孔は小型のスギ型で２－４個ある。これらの形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には暖温帯に広く分布するモミのほか、太平洋側地域では冷温帯に多いウラジロモミ、亜高山帯に多いシラベ等があり、その材構造での区別は困難である。

モミは東北地方中部（太平洋側では岩手県宮古市付近）以南の本州、四国、九州の暖温帯から冷温帯下部にかけて普通に生える針葉樹で、幹径1.5m、樹高30mになる。材は木理通直で割裂性がよく、加工は容易だが、肌目が粗く、軽軟で、狂いやすい等の欠点がある。保存性も低い。各種建築材、箱ものなどの器具材、小細工もの、棺桶、卒塔婆などの用途がある。

３．アカマツPinus densiflora Sieb. et Zucc.　マツ科

写真　3a-c.（MYG－4618）

年輪が幅広く、幅広い晩材部を持ち年輪界が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をともに持つ。早材から晩材への移行は緩やかで、樹脂道は多くは晩材部にある。放射組織は単列と中央に放射樹脂道を持つ紡錘形の２種類があり、その上下には１～数細胞層の放射仮道管があり、その内面は、細胞壁が断面で鋭角な鋸歯状に不規則に肥厚している。放射柔組織の水平壁は平滑で薄く、分野壁孔は大型の窓状で普通一分野に一つある。以上の

形質より、マツ科のアカマツの材と同定した。五葉松類とは放射仮道管の内壁が厚く肥厚することで、同じ二葉松類のクロマツとはその内壁の肥厚が鋭く鋸歯状になることで区別される。

アカマツは下北、津軽両半島以南の本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯にかけてもっとも普通に生える針葉樹で、特に痩せ地、岩盤の露出した急傾斜地、二次林に多い。幹径1m、樹高30mになり、材は木理通直で重硬、樹脂分が多く加工が難しいが水湿に良く耐え、保存性がよい。材は建築材、各種器具材、土木用材、製鉄用の炭材、薄く剥いで経木や縄にするなど、広い用途がある。

3'．二葉松類（マツ属複維管束亜属）　Pinus subgenus Diploxylon　マツ科

マツ属は葉の維管束が１本のもの（単位管束亜属）と２本のもの（複維管束亜属）の二つに分けられ、我が国では前者にはヒメコマツ、ハイマツなどの短枝に５本の葉が付く、いわゆる「五葉松類」が、後者にはアカマツ、クロマツなどの短枝に2本の葉が付く「二葉松類」がある。二葉松類の材は幅広い年輪と幅広い晩材部を持ち、放射仮道管の内壁は多かれ少なかれ不規則に肥厚することから、次項に記載した五葉松類から区別される。一方、宮城県地方には二葉松類はアカマツとクロマツがあるが、前者は放射仮道管の鋸歯状突起が激しいことでそれほどでもないクロマツから区別されるが、これは出土材の保存性が良く、細部まで観察できる場合に限られる。ここで二葉松類と同定したものはアカマツかクロマツかの区別が出来なかったものである。ただし、種まで同定できたものがアカマツのみに限られることからこれらのほとんどもアカマツであると考えることが出来る。

4．五葉松類（マツ属単維管束亜属）　Pinus subgenus Hapluxylon　マツ科

写真　4a-c.（MYG－4628）

年輪は狭いかやや広く、広い早材部と狭い晩材部を持つ針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかである。垂直樹脂道が年輪のあちこちに散在する。放射組織は単列のものと水平樹脂道を持つ紡錘形のものがあり、背は低く、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を取り囲む分泌細胞からなる。分野壁孔は大きな窓状で１個、放射仮道管の内壁の肥厚は緩やかに起伏する。以上の形質からマツ属のうち、チョウセンゴヨウマツ、ヒメコマツ、ハイマツなどの五葉松類（単維管束亜属）の材と同定した。

ヒメコマツは本州及び北海道の暖温帯上部から冷温帯にかけて広く分布し、宮城県地方では山間部の急傾斜地の尾根筋に分布する。幹径60cm、樹高20m以上になり、木理通直で柔らかく、肌目はアカマツより精である。

5．スギ　Cryptomeria japonica (Linn. f.) D. Don　スギ科

写真　5a-c.（MYG－4601）

年輪が明瞭な針葉樹材で、年輪幅は通常広く、広い早材部と比較的広い晩材部からなり、早材から晩材への移行は幅広い年輪ではゆるやかで、目の詰んだ年輪ではかなり急である。樹脂細胞は晩材部に多く、やや接線方向にあつまって散在する。樹脂細胞中には黒褐色の物質が充填しており、細胞の水平壁は平滑で薄いか、やや厚く、多少数珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、背はかなり高くなり、垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型の楕円形で開孔部は厚いレンズ状となり長軸がほぼ水平方向で、スギ型、１分野に１～２個ある。以上の形質からスギの材と同定した。

スギは本州北部（青森県津軽地方南部）から九州屋久島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する針葉樹で、日本海側と東海地方に特に多い。宮城県地方では天然分布は殆どない。一般に、幹径２m、樹高35mを超える大高木となり、材は木理通直で割裂性がよく、軽軟で強靭、加工性がよく仕上げは中位であるが大材が多量に得られるので、大型から個人住宅まで建築物のありとあらゆるところ、ありとあらゆる器具材、その他、国産材ではもっとも広い用途がある。

6．クロベ（ネズコ）　Thuja standishii (Gord.) Carriere　ヒノキ科

写真　6a-c.（MYG－4989）

アスナロに似た針葉樹材で、水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる。晩材部は一般に幅狭く、早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、接線方向に連なる傾向にある。樹脂細胞には黒褐色物質が含まれ、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は小さく、孔口が大きく開いたスギ型で丸く、開孔部の長軸方向は斜めから水平に近くなり、１分野に２～４個存在する。以上の形質からクロベ（別名ネズコ）の材と同定した。

クロベは青森県南部から中部地方、紀伊半島、四国の冷温帯上部から亜高山帯下部に分布する針葉樹で、幹径60cm、樹高20mになる。宮城県地方では山形県境の奥羽山脈に沿って分布する。木材は木理通直で軽軟、割裂性良く、耐朽性にすぐれ、建築材、器具材等に広く使われる。

7．アスナロ　Thujopsis dolabrata (Lin. Fil.) Sieb. et Zucc.　ヒノキ科

写真　7a-c.（MYG－4784）

保存性の良い出土材で、年輪は明瞭で幅狭いものから広いものまである。垂直・水平のいずれの樹脂道も欠き、スギ、ヒノキに似る。晩材はヒノキ同様幅狭く、材の大部分は早材が占め、早材から晩材への移行は急、仮道管直径は早材でもスギ、ヒノキより小さい。仮道管の内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞は接線方向にあつまって散在し、内部に黒褐色の樹脂をもち、水平壁は結節状となる。放射組織は単列、柔細胞のみからなり、分野壁孔は小型のヒノキ型～トウヒ形で１分野に２～４個ある。これらの形質からアスナロ（変種のヒノキアスナロ=ヒバThujopsis dolabrata var. hondae Makinoを含む）と同定した。

母種のアスナロは宮城最南部・山形県南部から九州鹿児島県まで、変種のヒノキアスナロ（ヒバ）は北海道南部（渡島半島）から尾瀬、日光地域および能登半島に分布し、いずれも樹高30m、幹径80cmになる。宮城県地方ではヒノキアスナロ（ヒバ）は山形県境の奥羽山脈に沿って分布する。材はやや堅く、強靭できめ細かく、保存性が大変良い。建築材、各種器具材などに広く用いられる。

7'．ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞、放射組織からなり、樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪幅は一般に広くなく、広い早材と狭い晩材、樹脂細胞には黒褐色の物質があり、水平壁はしばしば数珠状になる、等の形質から、ヒノキ科の材であることは分かるが分野壁孔が細胞壁の劣化によりほとんど観察できないため、クロベ属かアスナロ属か、あるいは他のヒノキ科の属かの区別ができないものを「ヒノキ科」とした。ただしヒノキ科ではクロベとアスナロが識別されているのみなので、この何れかであると考えられる。

8．ハンノキ属ハンノキ節　Alnus sect. Gymnothursus　カバノキ科

写真　8a-c.（MYG－4667）

薄壁で多角形の小道管が均一に分布する散孔材で、集合放射組織が放射方向に走って道管のない部分をつくる。道管は2～多数が放射方向につながるか単独で分布する。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状で、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在するが目立たない。放射組織は単列同性と集合放射組織がある。以上の形質からブナ科ハンノキ属のハンノキ節の材と同定した。

宮城県地方ではハンノキ節の樹木は低山地、沢沿いにケヤマハンノキが、また低湿地、河川敷などにはハンノキが広く分布する。互いに材構造はよく似ており識別は困難である。いずれも幹径50cm、樹高15mに達する落

葉高木で、ケヤマハンノキの材はやや硬く脆く、ハンノキの材は柔軟だがやはり脆い。

9．クマシデ属クマシデ節　Carpinus sect. Distegocarpus　カバノキ科

写真　9a-c.（MYG－4637）

小型で丸い道管が単独あるいは数個放射方向に複合し、放射方向に波打って散在する散孔材で、道管の直径は年輪の後半で徐々に減少する。木部柔組織は接線状に連なる。道管の穿孔は数本の横棒からなる階段状と単一の両方がある。放射組織は同性にちかい異性で、２～３細胞幅である。これらの形質からクマシデ属クマシデ節の材と同定した。

クマシデ節にはクマシデとサワシバがあり、温帯の落葉樹林に広く見られる。宮城県地方ではサワシバは県内全体の山間部に生育するが、クマシデは県南に限られる。いずれの材も硬く粘りがあり、柄物、各種器具材に利用される。

10．クリCastanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

写真　10a-c.（MYG－5647）

年輪の始めに丸い大道管が単独で1～3層に配列し、晩材部にかけて道管は小型薄壁となり、徐々に径を減じ、火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織は接線状～短接線状に配列する。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は対列状、あるいは柵状となる。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道南部から九州まで広く分布する落葉高木で、二次林に最も普遍的な種の一つである。材はやや硬く、割裂容易で、保存性にすぐれ、特に水湿に強い。大材が得られることもあって建築材、器具材、土木用材など実にさまざまな用途がある。

11．コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

写真　11a-c（MYG－4980）

クリ同様、年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が火炎状に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状、散在状及び独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織で、後者にはしばしば結晶細胞を含む。道管－放射組織間壁孔は縦長の楕円形で柵状に並ぶ。以上の形質からコナラ属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には北海道南部から九州種子島までの冷温帯下部から暖温帯の二次林に広く分布するコナラ、北海道北部から九州までの冷温帯から暖温帯上部に広く分布するミズナラ、主に青森県以南の冷温帯から暖温帯に希に分布するナラガシワ、北海道から九州の冷温帯、暖温帯に分布するカシワなどがあるが、それぞれの種を材構造で区別するのは困難である。コナラは幹径50cm、樹高20mくらいになる落葉高木で、材質はやや堅く、肌目は粗い。建築材、器具材、薪炭材に用いられる。ミズナラは幹径１m、樹高30mになる落葉大高木で、材質は大変よく、重硬で緻密なため加工は難しいが木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第1級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材など極めて広い用途がある。ミズナラ、コナラとも薪炭材、椎茸のほだ木に用いられる。

12．ケヤキ　Zelkova serrata Thunb.　ニレ科

写真　12a-c.（MYG-4606）

年輪始めに大道管が2層に並ぶ環孔材で、孔圏外では小道管が多数接線方向に集まって波状の紋をなす。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に密に配列し、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状だが目立たない。放射組織は紡錘形で、鞘細胞はなく、上下端に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県から鹿児島県までの暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径1.5m、樹高30mを超える大木となる。材は堅硬強靭で弾力があり、材質に優れ、大材が得られることもあって、大きな建造物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、刳物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。

13. モクレン属　Magnolia　モクレン科

写真　13a-c.（MYG－4622）

黒ずんだ出土材で、やや角張った楕円形の小道管が単独、あるいは放射方向に数個複合して均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、道管側壁の壁孔は顕著な階段状を呈する。放射組織は多くは2列、同性に近い異性で、道管相互壁孔は階段状となる。以上の形質より、モクレン科のモクレン属の材と同定した。

日本に自生するモクレン属には、ホオノキを含み6種があり、仙台地方ではホオノキ、コブシ、タムシバが見られる。いずれも落葉の高木または低木で、ホオノキは幹径50cm、樹高20mになる。ホオノキの材は軽軟で均質、緻密で木理通直、肌目は精で加工用に、仕上がりがよい。建具などの建築材、漆器木地、箱物、曲物、彫刻、下駄（朴歯）など非常に広い用途がある。

同定された出土木簡の樹種組成と木簡への樹種選択

仙台城二の丸地区の遺構から出土した木簡は、そのほとんどが、伊達藩領内各地から仙台城に送られた物資に付けられていた荷札と考えられているが、荷そのものの検討は別項に譲るとしても、その木簡の大部分が領内農漁村の産物に付けられていたものであると考えると、使用された木簡の樹種とその木簡が付けられた地域と荷はある程度の関連を見て取ることが可能と考えられる。

表1は同定された428点の木簡の樹種組成である。最も多いのはスギで259点、全体の60.5%を占める。次いで多いのはアスナロで93点（21.7%）、アカマツ（24点、5.6%）、モミ属（17点、4.0%）、クロベ（14点、3.3%）と針葉樹が続く。針葉樹全体で97.4%となり、広葉樹はわずか11点、2.6%に過ぎない。

木簡の大部分を占めるのはスギだが、記載の項に記述してあるように宮城県地方にはスギはほとんど天然分布していないと言える。一方、スギは中世以降には全国各地で植栽され、近世には東北地方でもごく普通に植林されたと考えられることから、スギ材を建築材や各種器具材等に利用したときの端材や残材を木簡材料として活用したことはごく普通に考えることが出来、荷札を付ける立場の者にとって、一番手に入りやすい素材であったといえる。

スギ同様、伊達領内全域で手に入りやすい素材としてアカマツとモミ属が挙げられる。アカマツは海岸部から山間部まで広く天然分布しており、また、森林の伐採で出来る二次林、雑木林にもごく普通に生育し、木材も利用されてきた。モミ属としたものは、その分布から見てモミであると考えて差し支えなく、これも海岸から山間部の低標高地で手に入りやすい素材であったと言える。

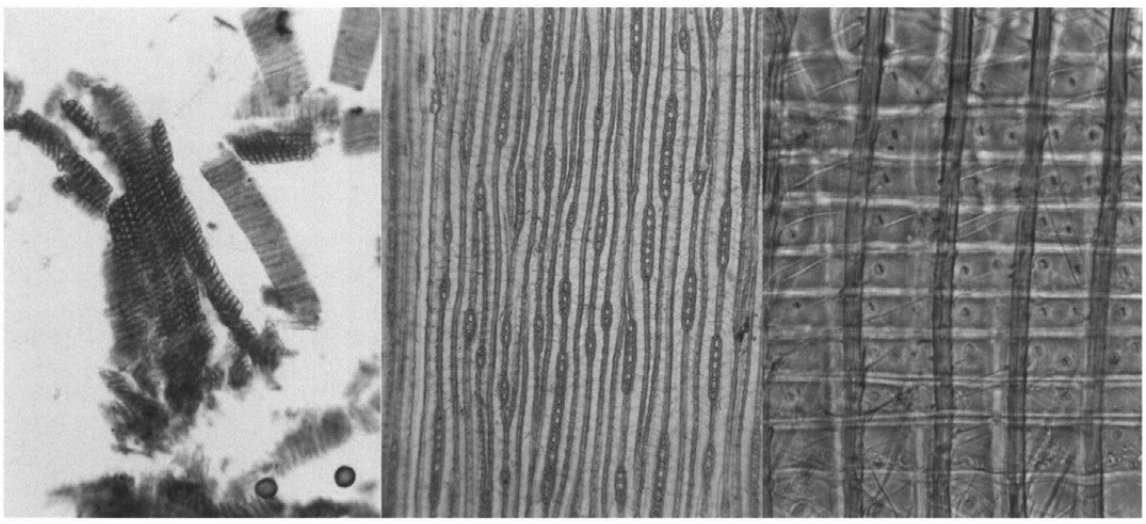
一方、荷札の「産地」が山間部に特定できる可能性がある樹種がいくつかある。アスナロとされたものはその分布から見て変種のヒノキアスナロ（ヒバ）であると見なせる。アスナロに類似した種類にクロベ（ネズコ）があり、これらはいずれも奥羽山脈に沿った山間地に天然分布している。植林はそこより標高の低いところまでされてはいるものの、山間部が主であることから、その供給地を山間部と見ることが出来よう。五葉松類の木簡も

その分布域が同様であることから同様に考えることが出来る。

針葉樹の分布等から以上のような「産地」がある程度推察されたが、広葉樹についてはそのような傾向を読み取ることは出来ない。それはもちろん、出土点数が少ない、即ち広葉樹が少ししか利用されていないことに依るもので、「木簡」という用途から見て当然と言える。そして利用されている樹種はクリ（4点）、ナラ（コナラ節、2点）、モクレン属（恐らくはホオノキ、2点）にケヤキ、ハンノキ節、クマシデ節（以上各1点）であり、これらは、荷札を付ける立場の者が「荷札にする木はないか」と辺りを見回したときに、まさにその場にあって然るべき樹種であり、特段の選択等は一切働いていない結果であると言える。

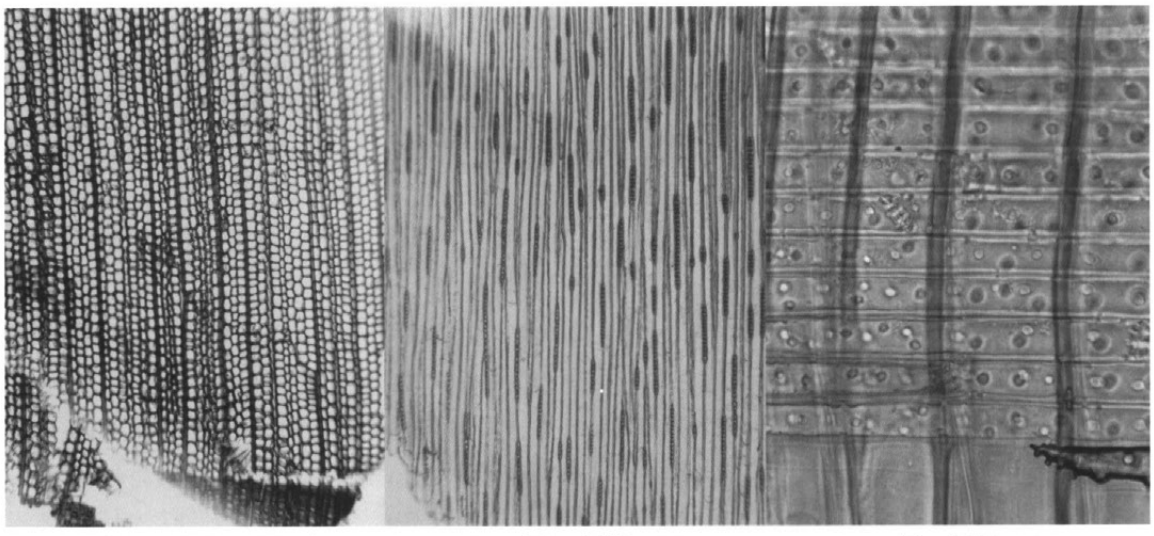
表3－1　同定された樹種
Tab.3－1　Identified wood species of wooden tablets excavated at BK7

	点数	比率（%）
カヤ	1	0.2
モミ属	17	4.0
アカマツ	24	5.6
マツ属複維管束亜属	2	0.5
マツ属単維管束亜属	3	0.7
スギ	259	60.5
クロベ	14	3.3
アスナロ	93	21.7
ヒノキ科	4	0.9
ハンノキ属ハンノキ節	1	0.2
クマシデ属クマシデ節	1	0.2
クリ	4	0.9
コナラ属コナラ節	2	0.5
ケヤキ	1	0.2
モクレン属	2	0.5
総　　計	428	

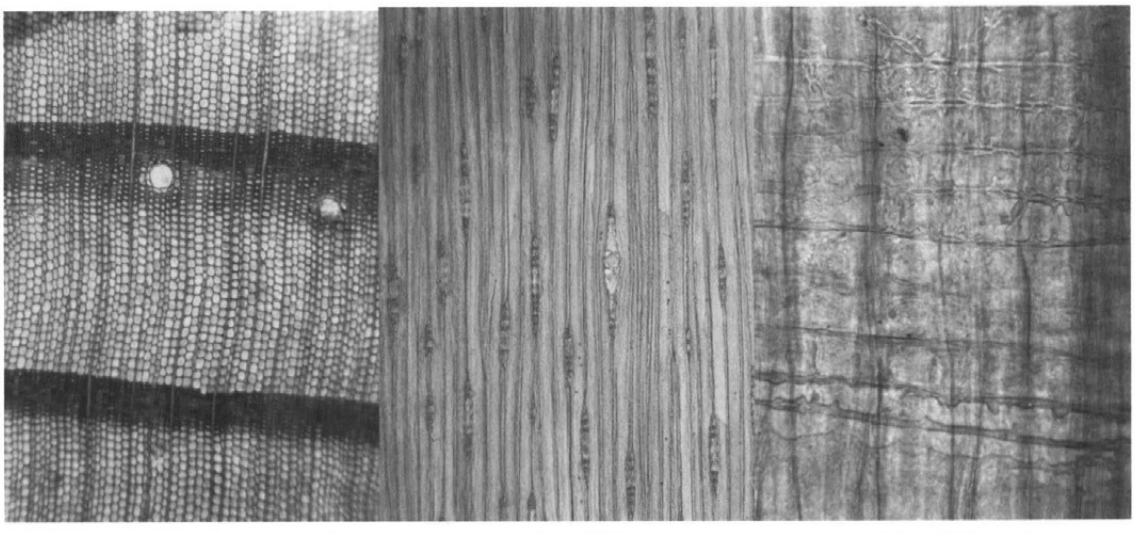


1a.カヤ　MYG－4862.木口×30.　　1b.　同　板目×60.　　1c.　同　柾目×300.

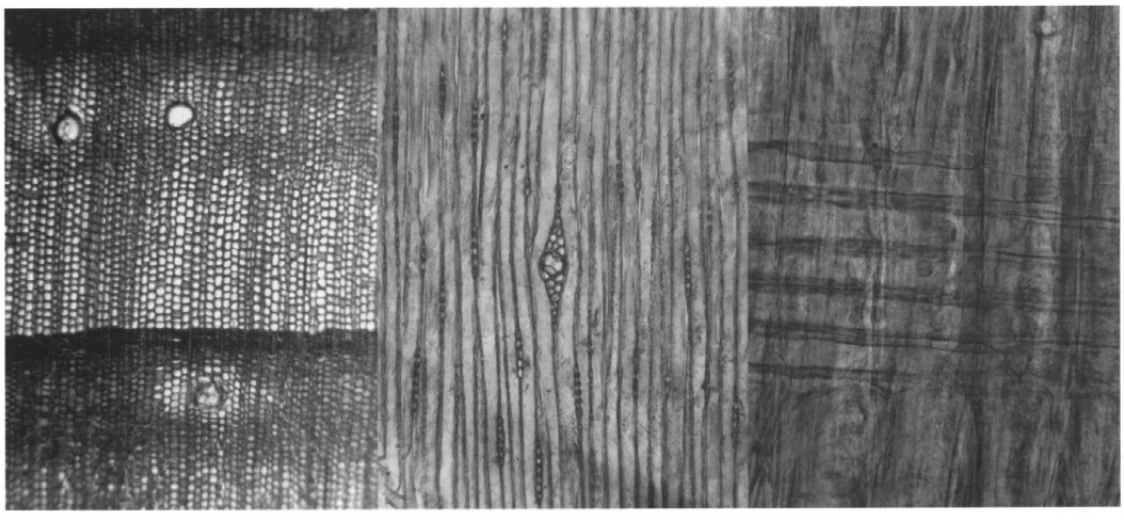
図3－1　武家屋敷地区第7地点出土木簡の樹種同定写真（1）
Fig.3－1　Pictures of Species Identification used for wooden tablets at BK7（1）



2a. モミ属　MYG−4630.木口×30.　2b.　同　板目×60.　2c.　同　柾目×300.

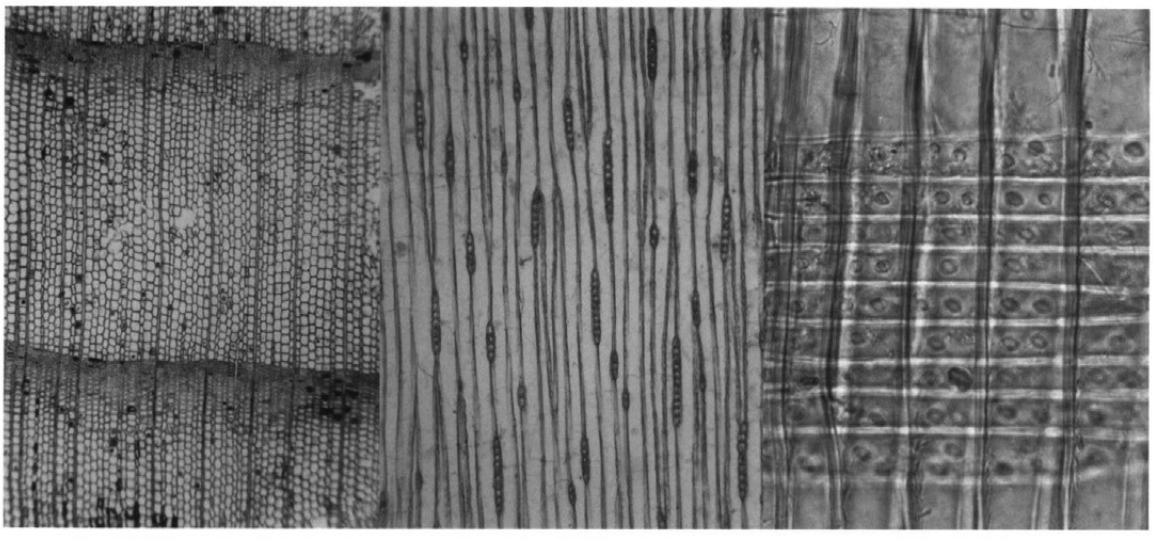


3a.. アカマツ MYG−4618.木口×30.　3b.　同　板目×60.　3c.　同　柾目×30.

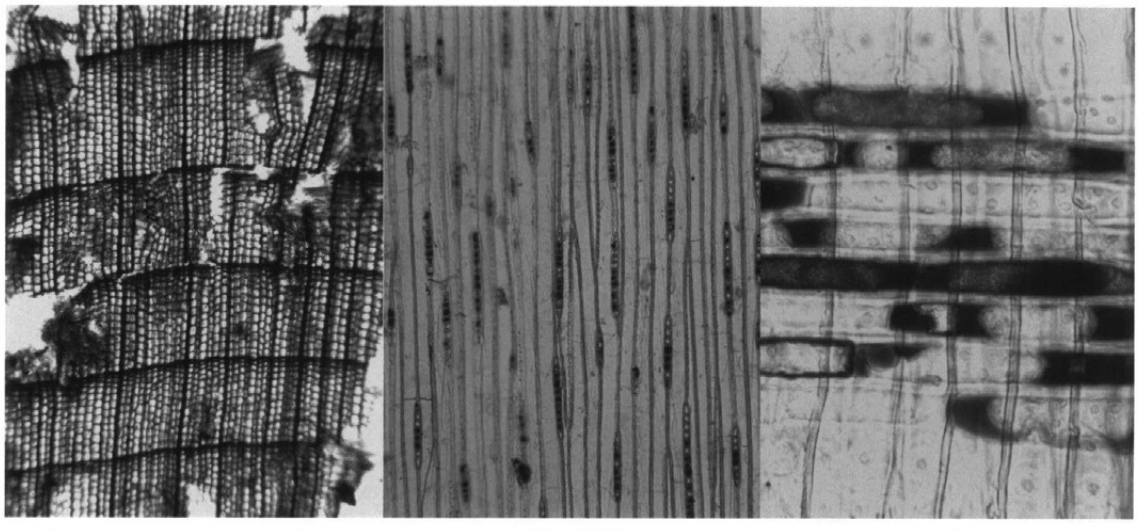


4a.五葉松類 MYG−4628.木口×30.　4b.　同　板目×60.　4c.　同　柾目×300.

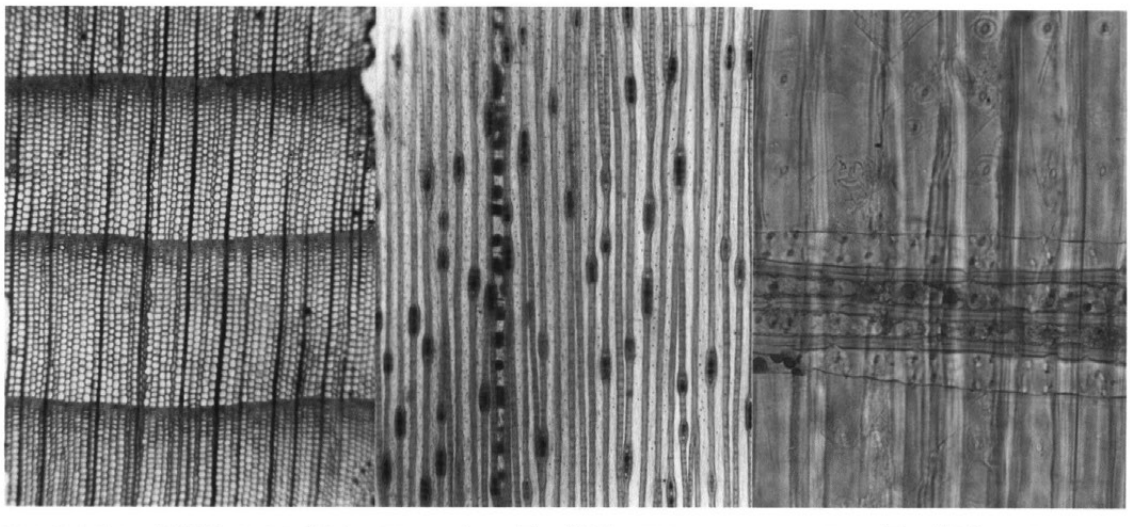
図3−2　武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種同定写真（2）
Fig.3−2　Pictures of Species Identification used for wooden tablets at BK7(2)



5a.スギ　MYG−4601.木口×30.　　5b.　同　板目×60.　　5c.　同　柾目×300.



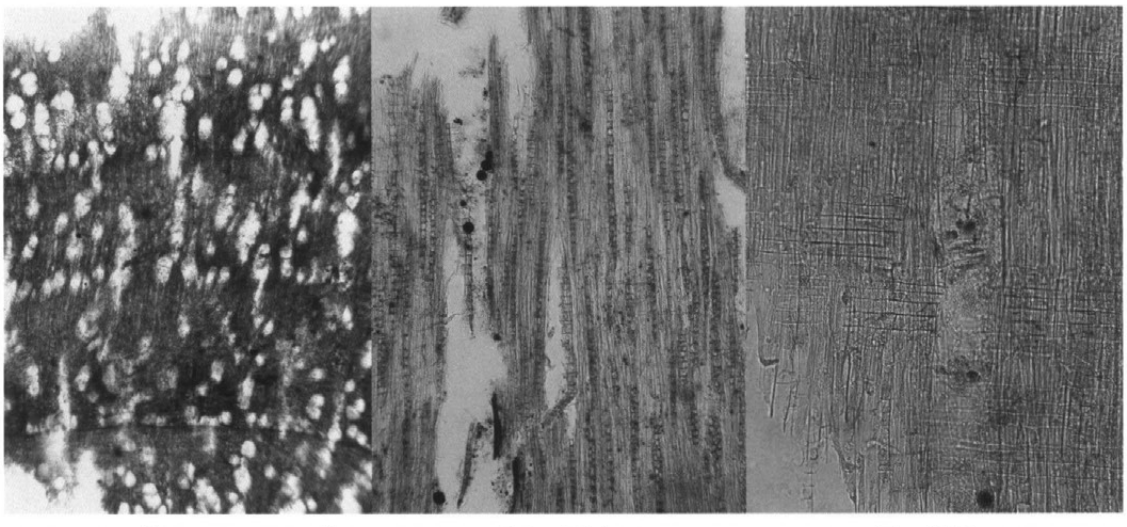
6a.クロベ　MYG−4989.木口×30.　　6b.　同　板目×60.　　6c.　同　柾目×300.



7a.アスナロ　MYG−4784.木口×30.　　7b.　同　板目×60.　　7c.　同　柾目×300.

図3−3　武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種同定写真（3）
Fig3−3　Pictures of Species Identification used for wooden tablets at BK7（3）

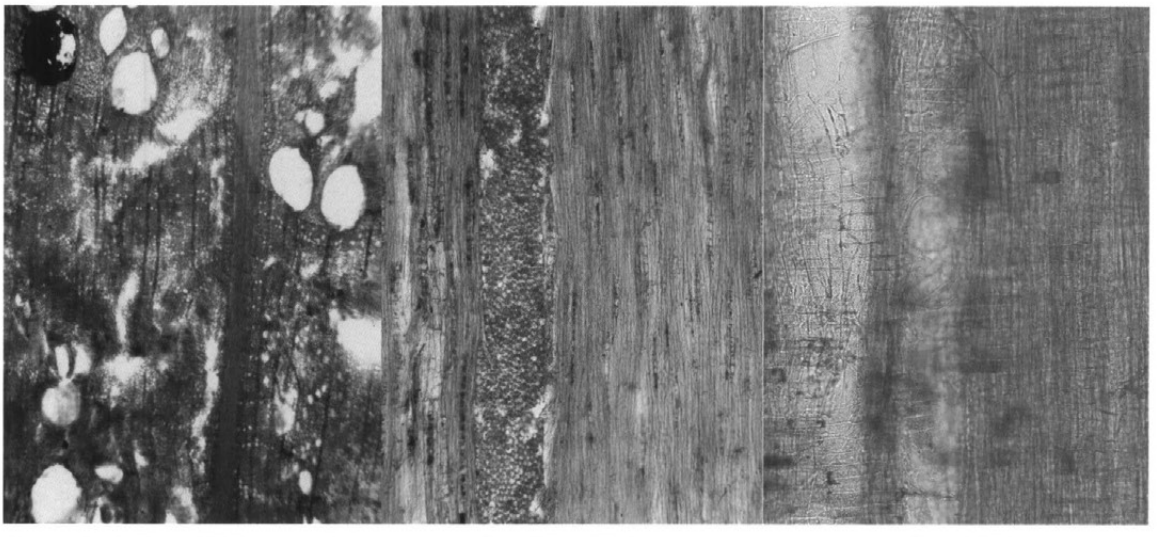
8a.ハンノキ節 MYG−4667.木口×30.　8b.　同　板目×60.　8c.　同　柾目×120.



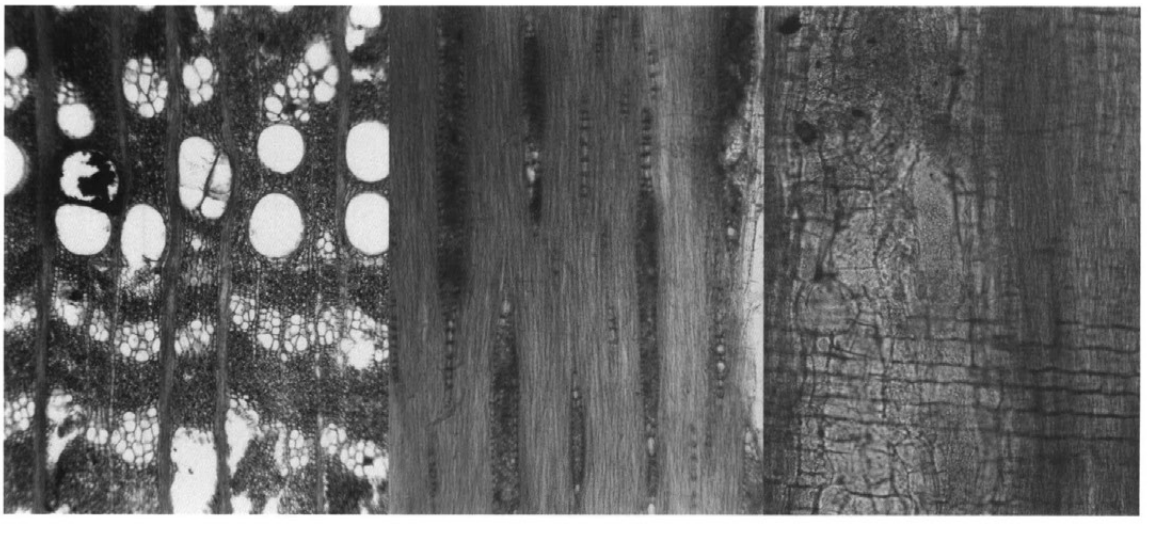
9a.クマシデ節 MYG−4637.木口×30.　9b.　同　板目×60.　9c.　同　柾目×120.

10a.クリ　MYG−5647.木口×30.　10b.　同　板目×60.　10c.　同　柾目×120.

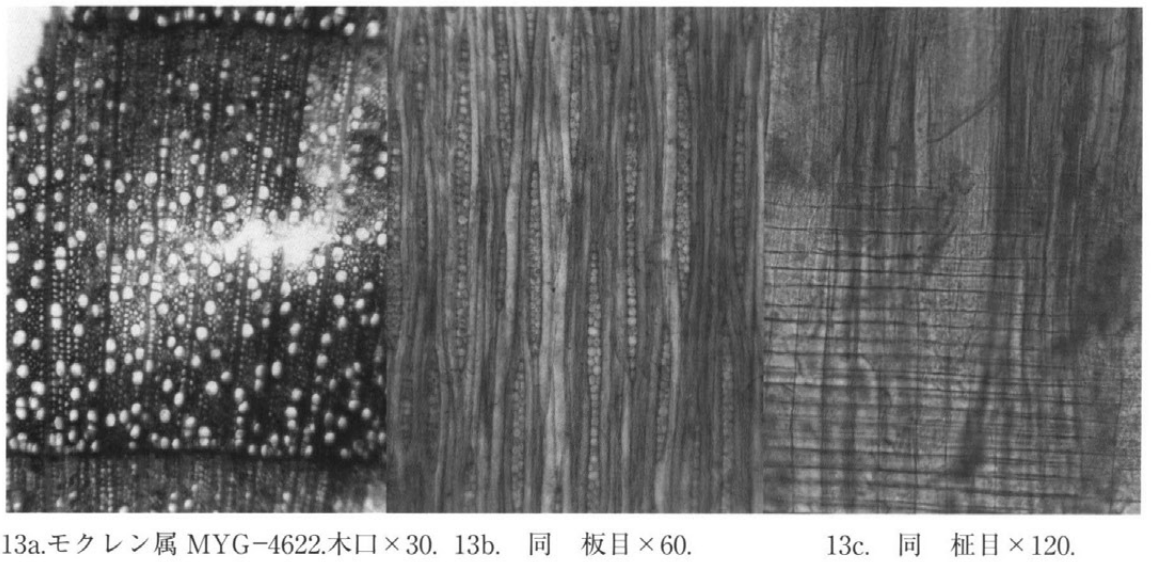
図3−4　武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種同定写真（4）
Fig.3−4　Pictures of Species Identification used for wooden tablets at BK7（4）



11a.コナラ節　MYG−4980.木口×30.　11b.　同　板目×60.　　11 c.　同　柾目×120.



12a.ケヤキ　MYG−4606.木口×30.　　12b.　同　板目×60.　　12c.　同　柾目×120.



13a.モクレン属 MYG−4622.木口×30.　13b.　同　板目×60.　　13c.　同　柾目×120.

図3−5　武家屋敷地区第７地点出土木簡の樹種同定写真（5）
Fig.3−5　Pictures of Species Identification used for wooden tablets at BK7（5）

表3－2　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（1）
Tab.3－2　Notes on wooden tablets from BK7（1）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT001	2号遺構	G-9	埋土1	051	横	137.0	29.0	7.2	・「o米四斗五升入」	・「o鶴ヶ谷村六□□〔兵衛カ〕」	4826	スギ	9	1
WT002	2号遺構	G-10	埋土2	051		172.0	32.0	6.5	・「米四斗五升入」	・「岩沼村［　　］」	4787	スギ	9	1
WT003	2号遺構	G-11	埋土2	051	中央	149.0	17.0	4.7	・「o御年貢米四斗五升入」	・「o享保五年 →　十一月廿五日　　琳［　　］」	4724	スギ	9	1
WT004	2号遺構	H-9	埋土3	051		149.0	20.0	6.3	・「享保□〔五カ〕年十月廿六日 →御年貢米四斗五升入」	・「江刺人首村六兵衛」	4737	スギ	9	1
WT005	2号遺構	G-10	埋土3	051	中央	165.0	25.0	6.2	・「o米四斗五升入」	・「o［　　］　飯田村□□ →［　　］　　」	4749	スギ	9	1
WT006	2号遺構	H-10	埋土2	051		167.0	35.5	3.4	・「御年□〔貢カ〕米四斗五升入」	・「□□〔川カ〕村五□〔郎カ〕七」	4783	スギ	10	1
WT007	2号遺構	H-10	埋土2b	051		164.0	30.0	3.1	・「御米四斗入限□」	・「子ノ七月十□日」	4786	スギ	10	1
WT008	2号遺構	G-10	埋土2b	051		137.0	(25.0)	5.1	・「米四斗五升入」	・「名取富田村五左衛門」	4838	スギ	10	1
WT009	2号遺構	G-11	埋土2b	051		134.0	22.0	4.2	・「御用米□□□□〔四斗五升カ〕」	・「渡邊二郎右衛門」	4856	スギ	10	2
WT010	2号遺構	G-10	埋土2b	051	中央	177.0	23.5	4.4	・「o御年貢四斗五升入」	・「o宮城郡加瀬村喜右衛門」	4744	スギ	10	2
WT011	2号遺構	G-10	埋土2	051	横	152.0	27.0	7.0	・「o当御年貢米四斗五升入」	・「o名取日辺村長四□〔郎カ〕」	4830	クロベ	11	2
WT012	2号遺構	H-10	埋土2	051		147.0	38.0	6.7	・「八月　七日 →黒川下草村［　　］」	・「七月［　　］ →米四斗五升入」	4683	スギ	11	2
WT013	2号遺構	H-10	埋土2	051		156.0	20.0	7.8	・「御年貢米四斗［　　］」	・「名取北目村□［　　］」	4687	スギ	11	2
WT014	2号遺構	H-9	埋土2	051	横	128.0	29.0	2.2	・「o御年貢米四斗五升入」	・「o名取川上村権十郎 →　六月廿五日」	4714	アスナロ	11	2
WT015	2号遺構	H-9	埋土2	051		145.0	21.0	5.1	・「名取今泉四斗五升入」	・「名取今泉□□郎」	4761	アスナロ	11	2
WT016	2号遺構	H-9	埋土2	051	中央	124.0	18.9	4.0	・「o米四斗五升入丑ノ十月□□日」	・「o名取郡種次村孫兵衛」	4658	スギ	12	2
WT017	2号遺構	H-9	埋土2	051	横	132.0	31.0	9.1	・「o米四斗五升入」	・「o名取今泉村□〔文カ〕七」	4735	スギ	12	3
WT018	2号遺構	G-10	埋土2b	051		127.0	23.0	3.8	・「　十二月十六日 →米四斗五升入　」	・「名取植松村□〔作カ〕兵衛」	4847	スギ	12	3
WT019	2号遺構	H-10	埋土2	051	中央	112.0	23.0	7.6	・「o熊谷村長右衛門 →米四斗五升入　　」	・「o八月十四日」	4690	スギ	12	3
WT020	2号遺構	H-10	埋土2	051		145.0	26.0	5.0	・「御米四斗五升入」	・「名取北方□〔柳カ〕生村　清右衛門」	4694	アカマツ	12	3
WT021	2号遺構	G-11	埋土2b	051	横	145.3	24.0	5.3	・「o享保□〔四カ〕年御年具四斗五升入」	・「o□〔名カ〕［　　］ →［　　］忠右衛門 →　〃　　〃　〃〃〃」	4863	スギ	12	3
WT022	2号遺構	H-9	埋土2	051		(129.0)	22.0	3.9	・「米四斗五升入」	・「［　　］」	4760	スギ	13	3
WT023	2号遺構	G-11	埋土2b	051		160.0	33.0	6.6	・「□□□□□□〔米四斗五升入カ〕」	・「名取□□村新四郎」			13	3
WT024	2号遺構	G-10	埋土2b	051-b	横	154.0	25.0	5.5	・「o米四斗五升入［　　］」	・「o［　　］」	4839	スギ	13	3
WT025	2号遺構	H-10	埋土2	051	中央	134.0	30.0	7.4	・「o米四斗五升入」	・「o［　　］」	4678	スギ	13	4
WT026	2号遺構	H-11	埋土2b	051	中央	131.0	36.0	4.5	・「o米四斗五升入」	・「o［　］□〔村カ〕［　　］」	4825	スギ	13	4
WT027	2号遺構	H-10	埋土2b	051	中央	152.0	28.8	8.5	・「o御年貢米［　　］」	・「o［　　］」	4820	スギ	14	4
WT028	2号遺構	G-10	埋土2	051	横	142.0	31.0	6.0	・「o□〔米カ〕」	・「o［　　］」	4837	スギ	14	4
WT029	2号遺構	H-8	埋土2	051		(147.0)	25.0	6.1	「□〔米カ〕［　　］」				14	4
WT030	2号遺構	G-10	埋土2b	051	横	151.0	38.0	9.0	・「o米四斗五升入」	・「o名取増田村久兵衛」	4844	スギ	14	4
WT031	2号遺構	H-8	最下層	051	横	189.0	34.5	5.7	・「o□〔御カ〕［　］□〔四カ〕［　］」	・「o［　　］ →　名取□□〔郡山カ〕村［　　］」	4759	スギ	14	4
WT032	2号遺構	G-10	埋土2b	051		163.0	28.5	4.3	・「米［　　］」	・「増沢村［　　］」	4843	スギ	15	5
WT033	2号遺構	G-10	埋土3	051	中央	173.0	27.1	4.1	・「o［　　］御年貢米　四斗五升入」	・「o［　　］」	4748	アスナロ	15	5
WT034	2号遺構	H-9	埋土3	051		135.0	20.0	5.5	・「米四斗五升入」	・「［　　］」	4816	スギ	15	5
WT035	2号遺構	H-8	最下層	051		(134.0)	30.0	7.6	・「［　］村庄三」	・「米之（ママ）［　　］」	4776	スギ	15	5
WT036	2号遺構	G-11	埋土2	051		145.0	27.0	7.5	・「御［　　］〔年貢カ〕米四斗五升入」	・「［　　］」	4984	クリ	15	5
WT037	2号遺構	H-9	埋土1	051		212.0	(24.0)	8.6	・「保六年御年貢米四斗五升入 →丑十一月□	・「［　　］名右衛門	4933	スギ	16	5
WT038	2号遺構	H-10	埋土2b	051		(171.0)	30.0	7.0	・米四斗五升入」	・「［　　］」	4785	スギ	16	5
WT039	2号遺構	H-9	埋土2	051		161.0	25.8	6.5	・「享保六年［　　］ →　　×斗五升入」	・「□□〔富カ〕村与五郎」	4661	スギ	16	5
WT040	2号遺構	H-10	埋土2b	051		140.0	31.0	7.2	「米四斗［　　］」		4703	スギ	16	6
WT041	2号遺構	H-8	埋土3	051	横	159.0	27.0	7.0	・「o御年貢米［　　］入」	・「o名取四郎□〔丸カ〕村 →　子ノ十一月　　八郎兵へ」	4642	アスナロ	16	6
WT042	2号遺構	H-8	最下層	051		173.0	28.0	2.4	・「米四斗五升入」	・「ひきわりの［　　］」	4931	アスナロ	17	6
WT043	2号遺構	G-10	埋土2	051-b	中央	187.0	24.0	5.1	・「o米四斗弐升入［　　］」	・「o名取□□〔種次カ〕村」	4722	スギ	17	6
WT044	2号遺構	G-10	埋土2	051-b		187.0	23.0	5.7	・「米四斗五升入」	・「名取柳生村［　　］」	4890	スギ	17	6
WT045	2号遺構	H-10	埋土2b	051-b	中央	171.0	(41.3)	1.1	・「o御年貢□〔米カ〕［　　］」	・「o名取増田筧四郎」	4887	スギ	17	6
WT046	2号遺構	H-7	埋土3	051-b	横	146.0	28.1	3.6	・「o御年□□〔貢米カ〕四斗五升」	・「o名取下余田村　米主 →　　長左」	4638	スギ	17	6
WT047	2号遺構	G-10	埋土3	051-b	中央	160.0	21.5	5.6	・「o御米四斗五升入」	・「o名取上〔植カ〕松村半兵衛」	4953	スギ	18	7
WT048	2号遺構	H-9	埋土1	051-b		102.0	25.0	3.6	・「米四斗五升入」	・「［　　］」	4608	スギ	18	7
WT049	2号遺構	G-10	埋土2	051-b		128.0	23.0	4.7	・「米四斗五升入」	・「［　　］」	4828	スギ	18	7

表3－3　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（2）
Tab.3－3　Notes on wooden tablets from BK7（2）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT050	2号遺構	G-11	埋土2	011-c		131.0	27.0	4.6	・「名取植松村七郎［　　］内 →　　米［　　］八百助」	・「［　　］ →御割［　　］ →［　　］　　」	4723	スギ	18	7
WT051	2号遺構	H-8	埋土2	011-c	中央	162.0	32.0	4.5	「o米四斗五升入」		4645	アスナロ	18	7
WT052	2号遺構	H-11	埋土2	011-c	横	145.0	23.5	4.1	・「o御刺付御せん糯米四斗五升入」	・「o［　］十三本［　］ →　享保七年九月十六日八助」	4823	スギ	18	7
WT053	2号遺構	G-10	埋土2	011-c		139.0	29.0	8.0	・「御年貢米四斗五升入」	・「享保［　］六月三日 →宮□〔城カ〕岡田村弥兵衛」	4831	スギ	19	7
WT054	2号遺構	H-9	埋土2	011-c		121.0	28.0	7.5	・「米四斗五升入」	・「□□〔伊手カ〕村［　　］」	4715	スギ	19	7
WT055	2号遺構	H-10	埋土2	011-c		165.0	28.0	8.0	・「米四斗五升入」	・「川上村□〔五カ〕作」	4691	スギ	19	8
WT056	2号遺構	H-11	埋土2b	011-c		157.0	37.0	5.5	・「米四斗五升入」	・「宮城郡田子村清」	4824	スギ	19	8
WT057	2号遺構	H-10	埋土2b	011-c	横	186.0	(38.8)	9.5	・「o米四斗五升入」	・「o□□〔富沢カ〕村□〔百カ〕［　］」	4884	スギ	20	8
WT058	2号遺構	H-10	埋土2b	011-c		175.0	35.2	6.8	・「御年貢米四斗五升入」	・「□〔宮カ〕城岡田村［　　］」	4741	モミ属	20	8
WT059	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c		141.5	25.5	6.4	・「年貢米四斗五升入」	・「宮城田子村□四郎 →　　十月廿八日　　」	4896	スギ	20	8
WT060	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c		123.9	29.1	4.7	・「米四斗」	・「名取今泉村」	4964	アスナロ	20	8
WT061	2号遺構	H-9	埋土3	011-c		144.0	17.0	4.7	・「米四斗五升入」	・「岩切村文四郎」	4674	スギ	20	8
WT062	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c	中央	151.5	43.0	8.3	・「o享保四×　［　　］ →　　□□□〔五升入カ〕〔表〕	・「o江刺石　［　　］ →　　□清左衛門」	4626	アカマツ	21	9
WT063	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c	横	(146.0)	39.0	8.0	・「o米四斗五升入	・「o柳生村　善助	5659	スギ	21	9
WT064	2号遺構	H-8	埋土3	011-c		(132.0)	26.0	4.6	・×斗五升」	・×□〔助カ〕［　　］」	4603	スギ	21	9
WT065	2号遺構	G-10	埋土2b	019-b	横	(136.0)	28.0	6.6	「o米四斗五升入」		4901	スギ	21	9
WT066	2号遺構	H-7	埋土3	011-c	中央2箇所	153.0	31.4	5.3	・「o米［　　］o」	・「o［　　］o」	4733	スギ	21	9
WT067	2号遺構	G-10	埋土3	011-c		152.0	40.0	6.2	・「御米四斗五升入 →宮城福室村瀬右衛門」	・「享保五年 →十月廿八日」	4850	スギ	22	9
WT068	2号遺構	H-8	最下層	011-c		175.0	27.5	4.3	・「米四斗五升入」	・「宮キ森郷村［　］」	4726	アスナロ	22	9
WT069	2号遺構	G-11	埋土2b	011-c		179.0	30.0	7.2	・「御年貢　米　四斗五 →御年貢　米　　斗五升升入」	・「名名取［　　］沢村□五郎右衛門 →名　取　　五郎右衛門」	4865	スギ	22	10
WT070	2号遺構	H-8	埋土2	011		132.0	22.0	5.7	・「米四斗五升入」	・「名取上余田村太郎兵衛」	4648	アスナロ	22	10
WT071	2号遺構	H-9	埋土2	011		115.0	24.0	6.2	・「米四斗五升入」	・「名取今泉村［　］」	4858	スギ	23	10
WT072	2号遺構	H-9	埋土2	011	中央	117.0	20.5	6.0	・「o御年貢四斗五升」	・「o菅谷村□〔善カ〕□」	4665	スギ	23	10
WT073	2号遺構	H-10	埋土2	011		144.0	21.0	8.1	・「米四斗五升入」	・「□〔衣カ〕川村久四郎」	4781	スギ	23	10
WT074	2号遺構	H-8	埋土2	011	横	163.0	22.0	7.5	・「米四斗五升入o」	・「□〔岡カ〕田村久兵衛o」	4734	モミ属	23	10
WT075	2号遺構	G-10	埋土2	011		119.0	38.0	7.3	・「米一□〔俵カ〕四斗五升入」	・「柳□〔生カ〕村□左［　］〔衛門カ〕」	4860	スギ	23	10
WT076	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	145.0	28.0	10.8	・「o御年貢米四斗五升入」	・「o名取高柳［　　］之□〔允カ〕」	4716	スギ	24	10
WT077	2号遺構	H-10	埋土2	011		127.0	22.0	4.0	・「米四斗五升」	・「名取郡藤塚村［　　］」	4693	スギ	24	11
WT078	2号遺構	G-10	埋土2	011	横2箇所	127.0	25.0	5.0	・「o御年貢米四斗五升入」	・「o富沢村喜□〔次カ〕［　］」	4835	アスナロ	24	11
WT079	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	125.0	30.0	8.2	・「o米四斗五升入」	・「o名取川上村［　　］」	MY4692	スギ	24	11
WT080	2号遺構	H-9	埋土2	011		135.0	27.0	7.3	・「米四斗五升入」	・「名取郡植松村［　］」	4811	スギ	24	11
WT081	2号遺構	H-9	埋土2	011		99.4	24.8	5.9	・「御年貢 →米四斗五升入」	・「下余田村　□□ →　　弥□〔五カ〕平」	-	-	24	11
WT082	2号遺構	G-11	埋土2	011		98.0	22.5	5.2	・「米四斗五升入」	・「上余田村□〔喜カ〕助□」	4801	スギ	24	11
WT083	2号遺構	G-10	埋土2b	011		147.0	36.0	6.8	・「米四斗［　　］」	・「名取袋［　　］〔原村カ〕与兵衛」	4841	アカマツ	25	11
WT084	2号遺構	G-10	埋土2b	011	中央	138.0	30.0	6.2	・「o御年貢米四斗五升入」	・「o名取増田村［　　］」	4627	モミ属	25	11
WT085	2号遺構	H-10	埋土2b	011		95.5	22.8	4.1	・「御年貢米四斗五升入」	・「名取増田村［　　］」	4700	スギ	25	12
WT086	2号遺構	G-10	埋土2b	011		110.0	22.0	4.2	・「米四斗五升入」	・「郡山村次郎兵衛」	4846	アスナロ	25	12
WT087	2号遺構	G-10	埋土2b	011		146.0	23.0	5.5	・「御米四斗五升入」	・「名取下余田村孫□□□〔右衛門カ〕」	4862	カヤ	25	12
WT088	2号遺構	G-10	埋土2b	011		139.0	30.0	6.7	「寅二月六日 →御年貢四斗五升入」		4745	アスナロ	25	12
WT089	2号遺構	H-7	埋土3	011		149.0	26.7	6.4	・「御年貢米四斗五升入」	・「名取北方 →四郎丸村　助太郎」	4639	スギ	26	12
WT090	2号遺構	G-10	埋土2b	011		169.0	26.2	6.5	・「享保六年 →御年貢米四斗五升入」	・「名取郡富田村 →八月三日　　吉蔵」	4849	スギ	26	12
WT091	2号遺構	G-11	埋土2b	011	中央	148.0	26.0	6.8	・「o米四斗五升入［　　］」	・「o九月廿五日［　　］」	4854	スギ	26	12
WT092	2号遺構	H-8	埋土3	011		118.0	22.0	6.0	・「米四斗五升入」	・「名取下余田村［　　］」	4711	スギ	26	12
WT093	2号遺構	G-10	埋土3	011		148.0	26.0	5.9	・「米四斗五升入」	・「名取大□□〔野田カ〕村［　］」	4905	スギ	26	13
WT094	2号遺構	G-10	埋土3	011		93.0	30.0	4.2	・「御年貢米 →　　四斗五升入」	・「名取増田村助七郎」	4799	スギ	27	13
WT095	2号遺構	H-8	埋土3	011		128.0	26.0	3.9	・「米四斗五升入」	・「あらい村与三郎」	4641	モミ属	27	13
WT096	2号遺構	G-11	埋土2	011	横	127.0	(34.7)	3.5	・「o米四斗五升入」	・「o［　　］」	4966	アカマツ	27	13
WT097	2号遺構	G-10	埋土3	011	中央	134.0	28.0	6.2	・「o米四斗五升入八郎兵衛」	・「o名取下余田村」	4952	スギ	27	13
WT098	2号遺構	H-9	埋土2	011		162.0	27.0	7.9	・「御せん□〔登カ〕米　四斗五升入」	・「［　　］」	4659	スギ	27	13

表3－4　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（3）
Tab.3－4　Notes on wooden tablets from BK7（3）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT099	2号遺構	H-11	埋土2	011		135.0	24.0	4.0	・「御年貢米四斗五升入」	・「[　　]」	4721	アスナロ	28	13
WT100	2号遺構	G-10	埋土2	011		133.5	21.0	7.0	・「米四斗五升入」	・「[　　]」	4795	スギ	28	13
WT101	2号遺構	H-9	埋土2	011	中央	105.0	18.1	8.8	・「o米四斗五升入」	・「o [　　]」	4959	スギ	28	14
WT102	2号遺構	G-10	埋土3	011	中央	182.0	33.0	7.1	・「o□御年貢米四斗五升入」	・「o名取下余田村伝兵衛」	4798	スギ	28	14
WT103	2号遺構	G-10	埋土2b	011		126.0	(23.0)	9.0	・「御年貢米四斗五升入」	・「名取□□〔平岡カ〕村喜四郎」	4897	スギ	28	14
WT104	2号遺構	H-7	埋土3	011		107.0	27.0	22.0	・「御米四斗五升」	・「保十二年［　］ →［　　］村」	4880	アカマツ	29	14
WT105	2号遺構	G-11	埋土2b	011		122.0	22.0	3.0	・「［　］四斗五升入」	・「[　　]」	4985	アスナロ	29	14
WT106	2号遺構	H-8	最下層	011		129.0	23.0	4.7	・「米四斗五升入」	・「[　]」	4713	スギ	29	14
WT107	2号遺構	G-11	埋土2	011	中央	138.0	28.0	5.6	・「o御米四斗［　　］入」	・「o名取［　　］村［　　]」	5663	スギ	29	14
WT108	2号遺構	H-9	埋土2	021	中央	84.0	14.0	4.1	・「米四斗五升o」	・「[　　]o」	4657	アスナロ	29	14
WT109	2号遺構	G-10	埋土2	021	横	66.0	30.0	5.1	・「o米四斗×」	・「o [　　]」	4767	スギ	29	14
WT110	2号遺構	H-8	埋土2	032-b	中央	108.0	16.0	2.9	・「o□□□〔村カ〕∨」	・「o [　　] ∧」	4643	スギ	29	15
WT111	2号遺構	H-8	埋土3	032-b		134.0	17.0	5.3	・「∧享保五年御年貢米 →　　四斗五升入」	・「∨名取北方□□〔宮田カ〕村庄助」	4758	スギ	29	15
WT112	2号遺構	H-9	埋土2	019		(172.0)	(44.0)	7.5	・「∨ → ∧□□□□〔米四斗カ〕[　　]」	・「∨名取［　　］重□ →　　六右衛門 → ∧□□〔笠島カ〕村　十月　」	4670	スギ	30	15
WT113	2号遺構	H-10	埋土2b	019		(174.0)	34.1	6.0	・「御年貢米四斗五升入	・「ミやき田子村喜［　　］	4940	クロベ	30	15
WT114	2号遺構	H-11	埋土2b	019		(97.0)	31.0	5.8	・「米四斗五升	・「名取	4888	スギ	30	15
WT115	2号遺構	G-10	埋土2b	019		(93.0)	28.0	5.3	・「米四斗五×	・「名取北方高柳×	4625	アスナロ	30	15
WT116	2号遺構	H-9	埋土2	019		(153.0)	27.0	7.9	・「御米四斗五升入□	・「□□村［　　］	4921	スギ	30	15
WT117	2号遺構	H-9	埋土2	019		(93.0)	28.0	4.4	・「米四斗五升入	・「□□〔名取カ〕[　　]	4656	スギ	31	15
WT118	2号遺構	H-7	埋土3	019		(133.0)	14.0	4.9	・×貢米四斗［　]」	・[　　]」	4601	スギ	31	16
WT119	2号遺構	H-9	埋土1	019		(133.4)	24.8	8.0	・「米四斗五升入[　　]	・「佐々作之［　　]	4932	アカマツ	31	16
WT120	2号遺構	G-11	埋土2	019		143.0	29.0	6.5	・「御年□〔貢カ〕米四斗五升入	・「[　　] □□〔村茂カ〕四郎	5662	スギ	31	16
WT121	2号遺構	G-10	埋土2	019		80.0	24.0	6.9	・「米四斗□〔五カ〕」	・「岩沼村」	4619	スギ	31	16
WT122	2号遺構	G-10	埋土3	019		(125.0)	(17.5)	4.9	・米四斗五升入」	・名取□〔富カ〕 」	4904	スギ	31	16
WT123	2号遺構	H-8	埋土2	019	中央	(137.0)	22.0	4.7	・「o米四斗五升入	・「o名取藤塚村□之丞	4930	アスナロ	31	16
WT124	2号遺構	G-10	埋土2b	019-b	横	117.0	27.0	4.4	・「o米四斗五升入	・「o柳生村万平	4902	スギ	32	16
WT125	2号遺構	G-10	埋土2b	019	中央	(84.0)	17.0	4.5	・「o御年貢米四□〔斗カ〕	・「o享保五年□	4913	スギ	32	16
WT126	2号遺構	H-7	埋土3	059		(126.0)	(19.1)	7.6	・米四斗五升入	・[　　] 村［　　]	4640	モミ属	32	16
WT127	2号遺構	G-10	埋土2	019		114.0	35.0	9.0	・「米四斗五升入	・「名取三本□〔院カ〕□	4889	スギ	32	16
WT128	2号遺構	G-11	埋土2	019		(60.0)	44.0	8.0	・「御年貢× → 享保六×	・「名取北方× →袋原×	4907	スギ	32	16
WT129	2号遺構	G-11	埋土2b	081		205.0	(17.0)	5.0	・「米四斗五升入」	・「宮城郡□［　　]」	4634	スギ	32	17
WT130	2号遺構	H-8	最下層	019-b		(88.0)	28.0	8.2	・「[　　]	・「米四斗五升入	4650	モクレン属	33	17
WT131	2号遺構	G-10	埋土2b	081	中央	(75.0)	(17.0)	4.5	・「o米四斗	・「o名取前田	4951	スギ	33	17
WT132	2号遺構	H-10	埋土2	081		(54.0)	(18.0)	2.6	・×貢米四□〔斗カ〕×	・□□□村×	4689	スギ	33	17
WT133	2号遺構	G-10	埋土2b	011		136.0	(31.0)	9.0	・「享保四年御□籾 →　五斗入　　」	・「一迫長崎村又四郎」	4894	スギ	33	17
WT134	2号遺構	G-10	埋土2b	033		(116.0)	28.0	5.0	・「∨□〔並カ〕餅四斗［　　]	・「∨笠島村	4895	スギ	33	17
WT135	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c	中央	201.0	35.9	6.3	・「oもち米四斗五升入」	・「o名取下余田村八郎兵衛」	4708	スギ	33	17
WT136	2号遺構	G-10	埋土2	022-b	中央	97.0	34.5	3.7	「oもち粉」		4793	スギ	33	17
WT137	2号遺構	G-10	埋土1	051	横	157.0	25.5	4.7	・「o引わり付餅四斗五升□」	・「o名取北方二木村兵七郎」	4827	スギ	34	17
WT138	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	170.0	34.0	7.0	・「o□□ →□□〔もちカ〕四斗五升入」	・「o名取飯田村強四郎」	4817	スギ	34	17
WT139	2号遺構	H-11	埋土2	011-b	横	147.0	23.0	5.3	・「御刺付もち四斗五升o」	・「□□村［　　] o」	4941	アスナロ	34	18
WT140	2号遺構	H-11	埋土2	051		175.0	32.0	5.8	・「御台所塩三斗入 →　　子ノ九月」	・「[　　] □〔釜カ〕[　　]」	4704	スギ	34	18
WT141	2号遺構	G-10	埋土2	051		166.0	25.5	6.3	・「御台所塩三斗入子ノ八月」	・「□□〔菅野カ〕善四郎」	4829	スギ	35	18
WT142	2号遺構	G-11	埋土2b	051		134.0	22.5	4.8	・「御大所塩 →三斗［　　]」	・「子ノ八月［　　]」	4725	スギ	35	18
WT143	2号遺構	G-11	埋土2b	051？		149.0	20.0	4.2	・「御大所□〔塩カ〕三斗入わたのは」	・「子ノ八月迄　流留村」	4910	スギ	35	18
WT144	2号遺構	G-10	埋土2b	051		157.0	25.5	5.0	・「御大所塩三斗入渡波町」	・「子ノ八月迄清右衛門」	4845	スギ	35	18
WT145	2号遺構	G-11	埋土2b	051		183.0	26.0	4.4	・「御台所塩□斗［　　]」	・「□〔未カ〕ノ六月［　　]」	4772	スギ	35	18
WT146	2号遺構	G-10	埋土2b	051-b		151.0	24.0	5.2	・「御台所三斗六升」	・「□〔わカ〕[　　] 次右衛門」	4770	スギ	36	18
WT147	2号遺構	H-8	埋土2	051-b		128.0	31.0	6.8	「御台所塩［　　] →弐斗三升入」		4646	アスナロ	36	19
WT148	2号遺構	H-9	埋土1	011		168.0	(26.0)	7.2	・「御台所□〔塩カ〕三斗入［　]」	・「[　　]」	4778	スギ	36	19
WT149	2号遺構	G-11	埋土2b	011	中央	156.0	30.0	4.9	・「o御台所塩三斗入」	・「o享保五年　　沢田村 →　　□月［　　] 勘兵衛」	4852	スギ	36	19

表3－5　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（4）
Tab.3－5　Notes on wooden tablets from BK7（4）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号（MYG-）	樹種	図	図版
WT150	2号遺構	G-10	埋土3	011	中央	133.0	29.0	10.0	・「御大所塩三斗六升 →八月九日迄　　o」	・「流留村長次郎　o」	4906	スギ	36	19
WT151	2号遺構	G-11	埋土2b	011-c		152.0	24.7	5.1	・「御大所□〔塩カ〕三斗［　　］」	・「子ノ →□〔弐カ〕月迄［　　］」	4788	スギ	37	19
WT152	2号遺構	H-10	埋土2	011		125.0	25.0	6.5	・「御大所塩三斗入 →丑之五月［　　］」	・「［　　］」	4763	スギ	37	19
WT153	2号遺構	H-9	埋土2	019-b		(134.0)	27.0	3.9	・「御清所塩［　］	・「［　　］	4936	スギ	37	19
WT154	2号遺構	G-11	埋土2b	019		(79.0)	25.0	3.1	・「御大所塩三斗	・「子ノ →　［　　］	4909	スギ	37	19
WT155	2号遺構	H-10	埋土2b	000		(164.0)	41.0	1.0	・「□□初流 →御膳御塩三升入　□ →□□□□□上一□□	・「寅ノ →正月十五日	-	-	37	19
WT156	2号遺構	H-9	埋土2	999		(264.0)	37.0	4.6	「次右衛門様　坂□〔本カ〕彦四郎 →　　薄□〔塩カ〕四□〔斗カ〕		4779	アスナロ	37	20
WT157	2号遺構	H-9	埋土2	032	中央	163.0	32.0	4.5	・「∨o但木土佐様　伊達安房」	・「∨o蜆」	4812	モミ属	38	20
WT158	2号遺構	G-10	埋土2	011	中央	155.0	30.5	3.9	「o菱喰一　茂庭筑後」		4832	スギ	38	20
WT159	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	165.0	26.0	3.2	「o玉造郡松尾梨子入」		4688	スギ	38	20
WT160	2号遺構	G-10	埋土2b	011	中央	115.0	28.0	9.1	「o小成田村雄子」		4796	スギ	38	20
WT161	2号遺構	H-10	埋土2b	011-c		131.0	20.0	4.7	・「弐斗三升	・「□〔茶カ〕［　　］	4702	アスナロ	38	20
WT162	2号遺構	G-10	埋土2	011-c		145.0	36.0	9.0	・「大豆五斗入」	・「名取上余田村源之助」	4836	スギ	38	20
WT163	2号遺構	H-8	埋土3	000		(51.3)	(125.0)	1.3	たまこ（ママ）入 →うこ →□		-	-	38	20
WT164	2号遺構	H-10	埋土2b	051		129.0	20.4	3.4	・「□〔酒カ〕［　　］」	・「［　　］」	4821	スギ	39	20
WT165	2号遺構	H-9	埋土2	011		145.0	24.0	2.3	「御用竹ノ子弐拾五本入」		4669	スギ	39	21
WT166	2号遺構	H-9	埋土2	011	中央	146.0	24.4	2.5	「o御用　竹ノ子弐拾五本入」		4813	スギ	39	21
WT167	2号遺構	G-11	埋土2b	011	中央	168.0	28.5	3.0	「o御用竹子貳拾本入玉造郡」		4853	スギ	39	21
WT168	2号遺構	G-10	埋土2b	011	中央	168.0	29.0	3.5	「o御用竹子弐拾本入玉造郡」		4728	スギ	39	21
WT169	2号遺構	H-9	埋土2	019		(202.0)	32.0	8.9	「　八兵衛□ 佻（ママ）生郡深谷前谷地村	(全面黒塗り)	4660	スギ	39	21
WT170	2号遺構	H-9	埋土2	011	中央	184.0	40.0	1.9	「o竹之子五寸廻弐拾五本　　深谷」		4662	スギ	39	21
WT171	2号遺構	H-11	埋土2	051		164.0	27.5	6.5	・「御［　　］」	・「牡鹿淡□〔郡カ〕弥五右衛門□□〔番頭カ〕 →　　勘［　　］」	4727	スギ	40	21
WT172	2号遺構	H-10	埋土2	051		(142.0)	34.0	4.1	・「［　　］ →［　　］四升□」	・「名取袋原村 →十一月十五日清□〔助カ〕」	4818	スギ	40	21
WT173	2号遺構	H-10	埋土2	051		142.0	27.0	5.8	・「享保［　　］ →［　　］」	・「［　　］」	4819	アスナロ	40	21
WT174	2号遺構	G-10	埋土2b	051		127.0	20.0	3.4	・「こ□〔はカ〕り →子ノ八月迄」	・「沢村仁左衛門」	4840	スギ	40	22
WT175	2号遺構	G-10	埋土2b	051		148.0	22.5	4.3	・「［　　］ →［　］み□リ」	・「子ノ七月□〔七カ〕日」	4864	アスナロ	40	22
WT176	2号遺構	H-9	埋土1	051		186.0	27.2	5.1	・「［　　］」	・「［　　］」	4777	スギ	41	22
WT177	2号遺構	G-11	埋土2b	051		151.0	29.0	7.6	・「［　　］」	・「［　　］□〔助カ〕［　　］」	4773	スギ	41	22
WT178	2号遺構	H-10	埋土2	051	中央	169.0	17.0	3.7	・「o［　　］□□〔九斗カ〕」	・「o［　　］」	4717	アスナロ	41	22
WT179	2号遺構	H-10	埋土2	051		134.0	24.0	3.4	・「［　　］」	・「［　　］」	4740	スギ	41	22
WT180	2号遺構	G-10	埋土2	051		90.0	23.0	6.9	・「久□郎」	・「［　　］」	4618	アカマツ	41	22
WT181	2号遺構	H-10	埋土2b	051		109.0	27.0	5.3	・「□〔寅カ〕ノ七年 →　　四月八日」	・「［　　］ →　［　　］」	4870	スギ	42	22
WT182	2号遺構	H-11	埋土2	011-c	中央	176.5	32.0	8.2	・「o［　　］」	・「o［　　］」	4705	アスナロ	42	22
WT183	2号遺構	H-10	埋土2	051		161.0	26.0	8.0	・「［　　］」	・「［　　］」	4617	スギ	42	23
WT184	2号遺構	H-9	埋土2	051-b		100.0	23.0	6.5	「四月［　］」		4666	スギ	42	23
WT185	2号遺構	G-10	埋土2b	059		(118.0)	23.5	5.7	□孫作」		4797	マツ属単維管束亜属	42	23
WT186	2号遺構	H-9	埋土3	059		110.0	29.0	3.7	・「□六斗□〔五カ〕升入」	・「［　　］」	4613	アカマツ	43	23
WT187	2号遺構	H-9	埋土2	059		(145.0)	29.0	6.4	・□岡□〔田カ〕村 →［　　］伝七」	・［　］」	4664	アスナロ	43	23
WT188	2号遺構	H-9	埋土2	051-b		121.0	27.0	3.5	「御大所［　　］」		4815	スギ	43	23
WT189	2号遺構	H-10	埋土1	051-b		(130.0)	21.8	4.7	・「［　　］」	・「［　　］」	4738	スギ	43	23
WT190	2号遺構	H-10	埋土2	051-b		128.0	(17.0)	5.2	・「□□□右衛門」	・「［　　］」	4679	スギ	43	23
WT191	2号遺構	G-10	埋土3	051-b	中央	136.0	28.0	6.4	「o名取□□〔増田カ〕村［　　］」		4750	スギ	43	23
WT192	2号遺構	H-10	埋土2b	051-b	中央	151.0	(20.0)	3.9	・「o気仙沼」	・「o［　　］」	4886	ヒノキ科	44	23
WT193	2号遺構	G-11	埋土2	011-c		148.1	27.0	7.9	・「［　　］ →□月十一日□〔六カ〕［　　］」	・「［　　］」	5000	スギ	44	23

表3－6　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（5）
Tab.3－6　Notes on wooden tablets from BK7（5）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT194	2号遺構	H-10	埋土2	011-c		144.0	28.0	8.0	「筆甫村」		4699	スギ	44	24
WT195	2号遺構	H-10	埋土2	011-c		(164.0)	27.0	5.9	・「[　　]原三［　　］」	・「[　　]」	4782	スギ	44	24
WT196	2号遺構	H-10	埋土2b	011-c	中央	118.0	33.0	7.8	・「o名〔カ〕[　]村覚右衛門」	・「o享□□〔保四カ〕 →［　　］　　」	4859	アカマツ	44	24
WT197	2号遺構	H-8	埋土2	011-c		128.0	(16.0)	3.3	・「[　]十二年五月」	・「[　]」	4644	スギ	45	24
WT198	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c	中央	139.0	28.0	5.5	・「o［　　］□〔沢カ〕[　　]」	・「o［　　]」	4729	スギ	45	24
WT199	2号遺構	H-10	埋土2b	019-b		(135.0)	20.0	7.0	・「[　　]」	・「名取［　］与左衛門	4701	スギ	45	24
WT200	2号遺構	H-9	埋土3	011-c		143.0	26.0	8.3	・「名取大［　　]」	・「[　　]」	4675	クロベ	45	24
WT201	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	102.0	20.0	3.2	・「o名取［　　］村□」	・「o七月七日」	4718	スギ	45	24
WT202	2号遺構	G-10	埋土2	011	中央	167.0	22.0	6.0	・「o［　　]」	・「o［　　]」	4834	スギ	45	24
WT203	2号遺構	H-10	埋土2b	011		127.0	23.5	4.6	・「御［　　]」	・「下 →［　　]」	4720	スギ	46	24
WT204	2号遺構	G-10	埋土2b	011	中央	121.0	22.0	8.9	「o名取北目村□□郎」		4893	スギ	46	25
WT205	2号遺構	H-10	埋土2b	011		144.5	22.5	5.6	・「御座□　四月五日」	・「名取郡富沢村」	4766	スギ	46	25
WT206	2号遺構	G-10	埋土2b	011		102.0	(27.0)	5.0	「柴田□〔郡カ〕」		4624	スギ	46	25
WT207	2号遺構	G-10	埋土2b	011		159.0	4.3	2.0	・「大□〔所カ〕[　　]」	・「[　　]」	4746	アスナロ	46	25
WT208	2号遺構	G-10	埋土2b	011	横	136.0	31.0	4.9	・「o［　　]」	・「o名取［　　］村［　　]	4842	アスナロ	46	25
WT209	2号遺構	G-11	埋土2b	011	横	174.0	41.0	2.1	・「o［　　]」	・「o□五郎［　　]」	4710	アスナロ	47	25
WT210	2号遺構	H-9	埋土1	011		109.0	19.0	2.0	・「三斗入九月二」	・「□□彦左衛門」	4652	スギ	47	25
WT211	2号遺構	H-8	埋土2	019		(98.0)	16.0	3.2	・「御使ノ善四郎	・「卯ノ八月迄	4928	アスナロ	47	25
WT212	2号遺構	G-10	埋土2b	019		(122.0)	(34.0)	9.0	「△　(ママ)		4623	アスナロ	47	25
WT213	2号遺構	H-10	埋土2	019		(170.0)	(38.8)	6.2	×弐□之内下伊沢」		4684	スギ	47	26
WT214	2号遺構	G-11	埋土2	019		(71.0)	26.0	4.9	・「享保五年十月	・「[　　]	4955	スギ	48	26
WT215	2号遺構	G-10	埋土2	019		(64.5)	17.0	2.2	・□崎清左衛門」	・常崎□□□□〔清左衛門カ〕」	4946	マツ属単維管束亜属	48	26
WT216	2号遺構	H-10	埋土2b	019	中央	(187.0)	23.0	4.6	「oけせん□〔朝カ〕□		4885	ヒノキ科	48	26
WT217	2号遺構	G-10	埋土2b	019	中央	(153.0)	25.0	4.6	・「o［　　]	・「o［　　]	4891	スギ	48	26
WT218	2号遺構	G-10	埋土2b	019-b	横	(137.0)	30.5	6.7	・「o享保五子ノ四月	・「o江刺□〔鴨カ〕沢村十内	4900	スギ	48	26
WT219	2号遺構	H-11	埋土2b	019		205.0	28.7	2.8	・「いぬ年□□〔二月カ〕[　]	・「[　　]	4996	アスナロ	48	26
WT220	2号遺構	G-11	埋土2	022-b	中央	67.0	21.0	4.5	「o御獲」		4800	スギ	49	26
WT221	2号遺構	G-10	埋土1	022-b	中央	67.0	21.5	4.5	「o御獲」		4792	スギ	49	26
WT222	2号遺構	H-9	埋土2	021	中央	67.0	20.5	4.6	「o御□〔獲カ〕」		4653	スギ	49	26
WT223	2号遺構	H-9	埋土2	021	中央	67.0	20.0	4.5	「o御□」		4654	スギ	49	26
WT224	2号遺構	G-11	埋土2	022-b	中央	66.0	18.0	5.0	「o矢野左近」		4802	アスナロ	49	26
WT225	2号遺構	H-10	埋土1	021	中央	66.5	18.5	4.0	「o□□〔矢野カ〕左近」		4676	スギ	49	26
WT226	2号遺構	H-10	埋土2	021	中央	66.0	13.0	3.4	・「o□〔樽横カ〕川」	・「o［　　］□兵衛」	4764	アスナロ	49	26
WT227	2号遺構	G-11	埋土1	022-b	中央	66.0	18.0	2.2	「o小鳥□〔道カ〕五郎」		4981	スギ	49	26
WT228	2号遺構	G-11	埋土2	011	中央	79.0	17.0	3.6	・「o□〔早カ〕籠」	・「o□□□」	4983	アスナロ	49	26
WT229	2号遺構	G-10	埋土2	022-b	中央	67.0	19.0	3.9	・「[　　]」	・「o丑ノ十八年」	4768	スギ	49	26
WT230	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	79.0	13.0	3.5	「o［　　]」		-	-	49	27
WT231	2号遺構	H-10	埋土2	021	中央	69.0	26.5	5.8	・「o御□や□」	・「o御□や」	4762	スギ	49	27
WT232	2号遺構	H-10	埋土2	021		78.0	24.0	3.3	・「吉田仁蔵」	・「仁蔵」	4686	スギ	49	27
WT233	2号遺構	H-7	埋土3	021	中央	58.0	(14.0)	8.0	・「o岩切」	・「o［　　]」	4598	アスナロ	49	27
WT234	2号遺構	G-10	埋土2	022-b	中央	75.0	19.0	3.3	・「o円真寺流」	・「o御醤油」	4833	スギ	50	27
WT235	2号遺構	H-9	埋土2	022-b	中央	72.0	22.0	3.3	・「o赤味噌」	・「o三ノ口」	4671	スギ	50	27
WT236	2号遺構	H-9	埋土3	021	中央	106.0	33.0	5.0	「o米蔵［　　]」		4612	アカマツ	50	27
WT237	2号遺構	H-10	埋土2	022-b	中央	112.0	43.0	3.7	・「o諸白赤味噌」	・「o［　　]」	4681	スギ	50	27
WT238	2号遺構	H-10	埋土2	022-b	中央	103.0	40.0	8.0	・「o御□□布」	・「o［　　]」	4739	スギ	50	27
WT239	2号遺構	G-10	埋土2b	011	中央	118.0	28.0	5.2	・「o木村寿程〔焼印〕」	・「o木村寿程〔焼印〕」	4848	アスナロ	50	27
WT240	2号遺構	H-10	埋土2	011		111.0	28.0	4.5	・「□部屋□〔鎰カ〕」	・「御□□〔茶挽カ〕部屋□〔鎰カ〕」	4682	アスナロ	50	27
WT241	2号遺構	H-10	埋土2b	011	中央2箇所	100.0	20.0	5.0	・「o吉浜早篭o」	・「o石田三太夫o」	4822	アスナロ	51	27
WT242	2号遺構	H-10	埋土1	011	中央	122.0	18.3	3.8	・「o吉浜早篭」	・「o石田三大夫」	4677	クロベ	51	27
WT243	2号遺構	H-9	埋土2	011-c	中央	119.0	15.5	3.8	・「o吉浜披□〔鮭カ〕」	・「o石田三太夫」	4736	アスナロ	51	27
WT244	2号遺構	H-9	埋土3	021	横	長(86.7)	短50.5	14.6	・「o (ママ)」	・「o［　　]」	－	－	51	28
WT245	2号遺構	G-10	埋土2b	022-b		84.0	58.5	9.5	墨書不明	墨書不明	－	－	51	28
WT246	2号遺構	G-10	埋土2b	021	横	59.0	61.0	7.5	・「oい」	・「oい」	－	－	52	28
WT247	2号遺構	G-10	埋土2	021	横	60.0	66.0	8.5	・「o□」	・「oに」	－	－	52	28
WT248	2号遺構	G-10	埋土2b	021	横	57.0	61.0	8.2	・「o三之 →　内　」	・「o松」	－	－	52	28
WT249	2号遺構	G-10	埋土2	021	横	42.0	44.0	13.0	・「oろ」	・「oろ」	－	－	52	28
WT250	2号遺構	G-10	埋土2b	021	横	64.0	56.0	10.6	・「oに」	・「oに」	－	－	52	28
WT251	2号遺構	H-10	埋土2	022-b	横	59.0	61.0	6.8	墨書不明	墨書不明	－	－	52	28
WT252	2号遺構	H-8	最下層	011-d	中央	102.0	64.0	7.6	・「o〔鳥の絵〕屋□ →　　〔焼印〕」	・「o深谷上下堤 →［　　]」	4712	モミ属	53	28

表3－7　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（6）
Tab.3－7　Notes on wooden tablets from BK7（6）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT253	2号遺構	H-9	埋土2	081	中央	96.0	(31.0)	4.1	「o〔焼印〕」	「o□〔下カ〕信濃ヤ□〔野カ〕」	4673	モミ属	53	29
WT254	2号遺構	H-9	埋土2	011-d	中央	100.0	(37.0)	6.0	「o〔焼印〕」	「oや　□□ →→→善助」	4668	モミ属	53	29
WT255	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d	中央	107.5	61.0	9.6	「o［　　］」	「o〔焼印〕」	-	-	53	29
WT256	2号遺構	H-9	埋土2	019	中央	(175.0)	(48.0)	8.9	・「o仙蓋大所□ →　□□□〔六十四カ〕」	・「o武右衛門」	4882	アカマツ	54	29
WT257	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	172.0	26.4	7.0	「o仙蓋　小嶋重次郎」		4695	スギ	54	29
WT258	2号遺構	H-10	埋土2	011-d	中央	245.0	57.0	9.1	「o仙蓋　荷物」		4697	スギ	54	29
WT259	2号遺構	G-10	埋土2b	011		137.0	26.0	4.3	・「遠田御荷物　彦［　　］ →　　［　　］」	・「□儀□□□［　　］」	4912	スギ	54	29
WT260	2号遺構	G-10	埋土2	011-d	中央	274.0	65.0	11.8	・「o仙蓋荷物」	「　跡部新之丞殿　　皆川与平次 ・　o高橋源助殿 →　□□彦六郎殿　　加藤平助　」	4794	アカマツ	55	30
WT261	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d	中央	272.0	6.9	13.3	「o仙蓋勝手□□〔長松カ〕」		4709	アカマツ	55	30
WT262	2号遺構	H-10	埋土2	011-d	中央	268.0	63.0	10.6	・「o［　　］ →□〔気カ〕せん□　御台所御用」	・「o沼田□〔権カ〕左衛門殿 →　遠藤□左衛門殿　　」	4719	モミ属	56	31
WT263	2号遺構	H-10	埋土2	011-d	中央	272.0	(3.6)	10.0	・「o［　　］」	・「o畠中□　二瓶覚之丞」	4696	アカマツ	56	31
WT264	2号遺構	H-10	埋土2b	011	中央	158.0	41.0	9.5	・「o二瓶覚之丞」	・「o［　　］」	4742	スギ	57	30
WT265	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	142.0	37.0	9.1	・「o□〔御カ〕［　　］」	・「o［　　］」	4698	アスナロ	57	30
WT266	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d	中央	63.0	(119.0)	10.5	・「o姫君様	・「o［　　］	－	－	57	31
WT267	2号遺構	H-10	埋土2b	011-d	中央	(101.5)	64.3	11.3	「o□〔白カ〕□		－	－	57	31
WT268	2号遺構	G-11	埋土2b	011		155.0	62.0	2.7	・「［　　］」	・「［　　］」	4855	クロベ	58	32
WT269	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d		(94.0)	(28.0)	2.3	・［　　］」	・□御□〔試カ〕」	－	－	58	32
WT270	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d		(94.6)	(40.0)	6.3	・「［　　］」	・「［　　］ →□谷順与」	－	－	58	32
WT271	2号遺構	G-11	埋土2b	011		149.3	75.0	2.5	・「享保六年 →［　　］□□〔三百カ〕 →七月廿六日」	・「　　様 →［　　］ →　　喜三郎」	－	－	58	32
WT272	2号遺構	H-9	埋土2	011-d		126.0	(45.0)	9.8	・「十二村新八郎 →高梨善兵衛　」	・「□□□」	4881	モミ属	59	32
WT273	2号遺構	G-10	埋土3	011-d		100.0	60.0	5.3	「大□〔儀カ〕二口□ぬ人□と［　　］ →〃〃　　〃〃 →五前 →〃〃 →甲□〔吉カ〕」		－	－	59	32
WT274	2号遺構	H-10	埋土2	011-d	中央	89.5	61.0	11.2	・「o□□□□朗」	・「　□□町 →o松原□□郎 →→合川　」	4765	スギ	59	32
WT275	2号遺構	G-11	埋土2b	011-d		129.0	(61.0)	5.0	「［　　］ →六［　　］ →瓜漬七十切入 →　　□〔千カ〕久左□□〔衛門カ〕 →御上大所御用　　」		－	－	59	33
WT276	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d	中央	(99.7)	65.4	11.0	「o丸小瓜□〔漬カ〕 →　□〔名カ〕□」		－	－	59	33
WT277	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d	中央	268.0	62.5	10.1	・「　享保六年　　三平 →o瓜漬千六百四拾切　脇御用 →　七月　　平□〔八カ〕」	・「　［　　］拾六樽内　　□□入 →o　　七十入」	4707	マツ属複維管束亜属	60	33
WT278	2号遺構	H-10	埋土2b	011-d		164.0	61.0	12.0	「御用茄子漬三千□」		4706	マツ属複維管束亜属	60	33
WT279	2号遺構	G-10	埋土2	011-d		129.0	56.5	2.9	「瓜漬七拾切入 →□□月［　］日」		－	－	61	33
WT280	2号遺構	H-9	埋土2	011-d	中央	128.0	56.0	6.5	・「o御表漬　瓜□〔樽カ〕」	・「o白石流（ママ）瓜」	4814	アカマツ	61	33
WT281	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d		298.0	90.0	3.0	・「享保七年 →御漬　　せんまい貳百抱入 →三月廿七日　　」	・「三平 →平八」	4747	アスナロ	61	34
WT282	2号遺構	G-11	埋土2b	011-d		137.0	90.0	3.1	「いノ　　□〔持カ〕人 →六月廿一日 →白石様〔流カ〕瓜八拾切入 →御□□□ →　　□付方　　」		4851	アスナロ	62	34
WT283	2号遺構	G-10	埋土2	051	中央	187.0	25.0	3.5	・「oけせん漬物」	・「o［　　］」	4743	アスナロ	62	34

表3－8　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（7）
Tab.3－8　Notes on wooden tablets from BK7（7）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT284	2号遺構	G-11	埋土2b	000		163.0	73.3	1.7	「瓜漬六拾五切入 →□□若様　平八 →　　御用　」		4911	アスナロ	62	35
WT285	2号遺構	G-11	埋土2b	000		138.0	(47.0)	0.8	「千五郎様御用　　権左衛門 →　　［　　］ →□□〔大根カ〕漬百弐拾本入」		－	－	62	35
WT286	2号遺構	H-9	埋土2	000		130.0	83.0	0.8	「丑ノ →壬七月五日　□□〔加賀カ〕粕 →瓜漬七拾切入 →□□□　　三平 →［　　］□〔分カ〕　　平八」		－	－	63	35
WT287	2号遺構	H-10	埋土2b	000		149.3	61.0	1.2	「　御台所御用　　六平 →瓜漬□拾□切入　　」		－	－	63	35
WT288	2号遺構	H-11	埋土2b	000		114.0	(44.0)	0.7	「［　　］ →瓜漬七拾」		－	－	63	35
WT289	2号遺構	H-9	埋土2	000		115.0	66.0	0.9	「　丑ノ　　平八 →壬七月五日　　三平 →瓜付七拾切入 →□□〔三歩カ〕なり　　」		－	－	63	35
WT290	2号遺構	H-9	埋土2	000		139.0	(34.4)	0.7	「閏七月五日 →瓜漬三拾切入」		－	－	63	35
WT291	2号遺構	H-10	埋土2b	000		118.0	22.6	0.9	「瓜付拾切入」		－	－	63	35
WT292	2号遺構	G-11	埋土2	000		150.0	59.0	1.9	・「享保□□〔四子カ〕 →　　閏七月 →瓜漬六拾五切入 →　　□八」	・「［　　］」	－	－	64	36
WT293	2号遺構	G-10	埋土2b	000		129.0	(29.5)	1.1	「瓜漬四拾切入」		4899	アスナロ	64	36
WT294	2号遺構	G-11	埋土2b	000		123.0	(28.0)	1.8	・「瓜漬六拾切入」	・「なはなふ（ママ）や十右衛門」	－	－	64	36
WT295	2号遺構	G-10	埋土2b	000		134.0	44.0	0.7	・「享保七年 →瓜漬六拾五切入」	・「粕□別［　　］」	－	－	64	36
WT296	2号遺構	G-10	埋土2b	000		121.0	(43.8)	1.2	「□□や□也 →　　平八 →［　　］　」		－	－	64	36
WT297	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(135.4)	(21.5)	0.6	「瓜付七拾切入」		－	－	65	36
WT298	2号遺構	H-9	埋土2	000		128.0	29.5	3.2	「三平 →［　］」		－	－	65	36
WT299	2号遺構	G-11	埋土2b	000		163.0	28.3	2.0	「享保六年　　三平 →　　六月十□〔九カ〕日」		－	－	65	36
WT300	2号遺構	G-10	埋土2b	000		159.0	34.5	1.5	・「御上台［　　］」	・「九月廿六日」	－	－	65	37
WT301	2号遺構	G-10	埋土2b	000		166.5	(34.5)	1.6	・「□□□〔丑村カ〕三郎」	・「与四郎」	4903	アスナロ	65	37
WT302	2号遺構	H-10	埋土2b	000		143.2	45.0	1.3	・「　　権之丞 →かす□らや　　」	・「大［　　］ →十月十［　］」	－	－	66	37
WT303	2号遺構	G-10	埋土2b	000		124.0	(25.0)	1.2	・「　　三平」	・「七月四日」	－	－	66	37
WT304	2号遺構	G-10	埋土2b	000		119.0	(30.0)	1.0	「［　　］ →千五や（ママ）　御用」		－	－	66	37
WT305	2号遺構	H-10	埋土2	000		184.0	40.0	1.9	「□□〔御天カ〕［　　］□〔天カ〕」		4784	アスナロ	66	37
WT306	2号遺構	G-10	埋土2b	000		157.0	24.9	1.1	・「享保六年」	・「［　　］」	－	－	66	37
WT307	2号遺構	G-10	埋土2b	000		116.0	(18.3)	0.6	「［　］様 →［　］□〔分カ〕三平」		－	－	66	37
WT308	2号遺構	G-10	埋土2b	000		140.0	(35.0)	0.6	「辛□〔丑カ〕 →享保六年分 →十月廿三日　　柏□〔色カ〕や」		－	－	67	38
WT309	2号遺構	H-10	埋土2b	000		137.0	(28.0)	0.8	「　　三平 →御上大所御用　」		－	－	67	38
WT310	2号遺構	H-9	埋土2	000		136.0	28.0	1.3	・「享保六年 →［　　］	・「［　　］	－	－	67	38
WT311	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(118.0)	(19.0)	0.8	・「□□□□〔鮑魚御用カ〕［　］」	・「［　　］」	－	－	67	38
WT312	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(112.0)	(35.0)	0.8	「［　　］ →享保五年□□」		－	－	67	38
WT313	2号遺構	G-10	埋土2b	000		123.0	27.0	1.5	・「享保七年」	・「へいはら」	－	－	67	38
WT314	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(112.0)	(20.0)	1.0	「□□様御用」		－	－	67	38
WT315	2号遺構	G-11	埋土2b	000		115.0	(23.0)	0.7	・「七月十日」	・「三□〔名カ〕」	－	－	68	38
WT316	2号遺構	G-10	埋土2b	000		148.3	27.0	2.1	「享保六年［　］」		－	－	68	38

表3－9　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（8）
Tab.3－9　Notes on wooden tablets from BK7（8）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT317	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(134.0)	37.5	1.3	・「閏九月拾	・「[　　]	－	－	68	38
WT318	2号遺構	G-11	埋土2b	000	中央	96.0	18.0	1.0	「o志本可ま」		－	－	68	38
WT319	2号遺構	G-10	埋土1	000		(80.0)	(11.0)	2.2	・□□□□〔御用荷入カ〕	・[　　]	－	－	68	38
WT320	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(57.0)	32.8	2.1	(文様のママ)		－	－	68	38
WT321	2号遺構	H-10	埋土2b	000		52.0	28.0	1.9	(文様のママ)		－	－	68	38
WT322	2号遺構	G-11	埋土2b	065		39.0	49.0	4.7	「□□〔五郎カ〕 →□□□〔四斗入カ〕」		－	－	68	39
WT323	2号遺構	H-8	埋土2	033		90.0	24.0	2.5	墨書不明		4647	アスナロ	68	39
WT324	2号遺構	H-10	埋土2b	011?		42.0	29.0	9.3	「□ノ子」		－	－	68	39
WT325	2号遺構	G-10	埋土2b	021		51.8	35.7	3.0	「□□〔一切カ〕」		－	－	68	39
WT326	2号遺構	H-9	埋土	011		163.0	26.0	7.4	・「[　　] 米四斗 [　　]」	・「[　　]」	5647	クリ	69	－
WT327	2号遺構	H-8	埋土2	011		140.0	21.0	5.8	・「□〔米カ〕[　　]」	・「[　　]」	4866	スギ	69	－
WT328	2号遺構	H-10	埋土2	011-c		94.0	17.0	4.5	・「[　　]〔米四斗五升入りカ〕」	・「□〔次カ〕合十□」	5653	スギ	69	－
WT329	2号遺構	H-10	埋土2b	051-b	横	131.5	26.8	7.3	・「o□□□□〔四斗五升カ〕」	・「o [　　]」	4962	スギ	69	－
WT330	2号遺構	G-10	埋土2	051	中央	137.0	24.0	4.4	・「o御 [　] 米四斗五升入」	・「o [　　]」	4861	スギ	69	－
WT331	2号遺構	H-10	埋土2	019	横	227.5	42.7	5.2	「o御米四斗五升入」		4993	アスナロ	69	－
WT332	2号遺構	G-10	埋土2b	019-b		(132.0)	24.0	4.4	・「御米四斗 [　　]	・「名取 [　　] □□〔助八カ〕	5661	スギ	70	－
WT333	2号遺構	H-9	埋土2	019	横	(86.8)	25.3	3.8	・「o米四斗	・「o□〔田カ〕□	4960	アスナロ	70	－
WT334	2号遺構	H-9	埋土2	019		60.0	(20.0)	4.6	・「御米四斗	・「□□〔名取カ〕□□	4924	スギ	70	－
WT335	2号遺構	G-11	埋土2	019		(51.0)	32.0	3.9	・「米四	・「熊野	4630	モミ属	70	－
WT336	2号遺構	G-11	埋土2	019		(85.0)	18.0	6.3	・「御年□〔貢カ〕	・「[　　]	4629	スギ	70	－
WT337	2号遺構	G-10	埋土2b	019		(70.0)	25.5	6.1	・米 [　　]	・宮沢村	4620	スギ	70	－
WT338	2号遺構	H-8	埋土2	019		(44.0)	25.0	9.5	「米×		4605	スギ	70	－
WT339	2号遺構	G-10	埋土2b	019	中央	(69.0)	24.0	5.4	・「o米四斗□〔五カ〕×	・「o宮田×	5658	クロベ	70	－
WT340	2号遺構	H-8 H-9	埋土3 埋土	081		(90.0)	(20.0)	7.5	・四斗五×	・□□村 [　　]	4606	ケヤキ	70	－
WT341	2号遺構	H-9	埋土3	019		(42.1)	20.0	5.4	・「□〔米カ〕四斗×	・「名□〔取カ〕×	4611	スギ	70	－
WT342	2号遺構	H-9	埋土2	081		(39.0)	(26.5)	5.6	・御年□ → [　]	・□□	－	－	70	－
WT343	2号遺構	G-11	埋土2	081		(59.0)	18.0	5.9	・×□□□〔斗五升カ〕×	・□□村×	4908	スギ	71	－
WT344	2号遺構	G-10	埋土2b	081		(55.0)	20.0	2.0	・×四斗五升×	・×村□次郎	4621	アスナロ	71	－
WT345	2号遺構	H-7	埋土3	081		(84.0)	30.0	9.3	・米四×	・[　] 村	4602	スギ	71	－
WT346	2号遺構	H-10	埋土2	081		(96.0)	(17.0)	2.2	□〔米カ〕[　]		4614	スギ	71	－
WT347	2号遺構	H-7	埋土3	019		(60.0)	16.0	7.3	・餅四斗	・[　　]	4599	スギ	71	－
WT348	2号遺構	G-11	埋土2b	081		(37.0)	13.0	2.9	「塩引□		－	－	71	－
WT349	2号遺構	H-9	埋土2	019		(79.5)	21.5	4.3	・「[　　] □〔茸カ〕	・「[　　]	4918	アカマツ	71	－
WT350	2号遺構	G-10	埋土2b	011		121.0	(23.0)	7.6	・「三斗入□〔弥カ〕[　　]」	・「七月□」	4950	スギ	71	－
WT351	2号遺構	G-10	埋土2b	011		188.0	(28.0)	4.5	・「名取 [　　]」	・「四月 [　　] → [　　]」	4898	スギ	71	－
WT352	2号遺構	H-7	埋土1	011		140.0	15.0	3.6	・[　　]	・[　　]	4635	アスナロ	71	－
WT353	2号遺構	H-9	埋土1	011	中央	110.0	11.0	2.5	墨書不明		－	－	72	－
WT354	2号遺構	H-9	埋土2	011		133.0	25.0	4.0	・「[　　]」	・「[　　]」	4925	スギ	72	－
WT355	2号遺構	G-11	埋土2	011		149.0	34.5	6.6	・「[　　]」	・「[　　]」	4771	スギ	72	－
WT356	2号遺構	G-10	埋土2	011	中央	102.0	17.0	2.4	「o□」		－	－	72	－
WT357	2号遺構	H-9	埋土2	011		168.0	29.0	2.6	・「[　　]」	・「[　　]」	4923	アスナロ	72	－
WT358	2号遺構	H-9	埋土2	011	中央	144.0	22.0	2.8	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4926	アスナロ	72	－
WT359	2号遺構	H-8	埋土2	011	中央	134.0	1.5	3.2	墨書不明		－	－	72	－
WT360	2号遺構	H-10	埋土2	011	中央	108.0	21.0	3.1	・「o [　　]」	・「o [　　]」	5651	アスナロ	73	－
WT361	2号遺構	H-10	埋土2	011		142.0	28.0	6.0	墨書不明		－	－	73	－
WT362	2号遺構	H-10	埋土2b	011		142.8	20.6	2.1	「[　　]」		4995	アスナロ	73	－
WT363	2号遺構	H-10	埋土2b	011	中央	158.0	21.0	5.1	墨書不明		－	－	73	－
WT364	2号遺構	H-11	埋土2b	011	中央	95.0	15.0	1.6	墨書不明		－	－	73	－
WT365	2号遺構	H-10	埋土2b	011		133.0	24.0	1.3	・「[　　]」	・「□□」	4927	アスナロ	73	－
WT366	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c	中央	150.0	33.0	7.5	・「o [　　]」	・「o [　　]」	5660	スギ	73	－
WT367	2号遺構	H-10	埋土2b	011		160.0	23.0	10.0	・「[　　]」	・「[　　]」	5656	スギ	73	－
WT368	2号遺構	H-11	埋土2b	011		152.0	(13.0)	5.1	・「[　　]」	・「[　　]」	5657	アスナロ	73	－
WT369	2号遺構	H-10	埋土2	011-c	中央	168.0	21.0	4.3	「o□」		－	－	74	－
WT370	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c	中央	171.0	35.0	6.6	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4977	スギ	74	－
WT371	2号遺構	G-10	埋土2b	011-c		210.0	30.0	3.3	墨書不明		－	－	74	－
WT372	2号遺構	H-10	埋土2b	011-c	中央	154.0	17.0	2.2	墨書不明		－	－	74	－
WT373	2号遺構	H-8	最下層	011-c	中央	177.0	32.0	8.8	「o [　　]」		4980	コナラ節	74	－
WT374	2号遺構	H-9	埋土2	051		144.5	(16.6)	6.3	・「十二月十一日善四郎」	・「[　　]」	4991	スギ	74	－
WT375	2号遺構	H-9	埋土2	051		152.0	24.0	4.5	・「子ノ [　　]」	・「[　　]」	4868	スギ	74	－

表3－10　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（9）
Tab.3－10　Notes on wooden tablets from BK7（9）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT376	2号遺構	H-9	埋土2	051		207.0	18.6	2.2	「[　　]」		4920	アスナロ	74	－
WT377	2号遺構	G-10	埋土2	051		163.5	27.9	2.6	・「[　　]」	・「[　　]」	4871	スギ	75	－
WT378	2号遺構	H-9	埋土2	051-b	中央	154.0	32.8	7.2	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4957	アスナロ	75	－
WT379	2号遺構	H-10	埋土2	051	中央	195.0	26.0	4.6	墨書不明		－	－	75	－
WT380	2号遺構	H-9	埋土2	051	中央	159.0	22.9	5.7	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4958	モミ属	75	－
WT381	2号遺構	H-9	埋土2	051		159.0	23.0	3.4	・「[　　]」	・「[　　]」	4968	スギ	75	－
WT382	2号遺構	G-11	埋土2	051	横	155.0	29.0	6.5	・「o [　　]」	・「o [　　]」	5644	スギ	75	－
WT383	2号遺構	H-10	埋土2	051	横	157.0	32.0	8.2	・「o [　　] 入」	・「o [　　]」	5652	スギ	76	－
WT384	2号遺構	G-10	埋土2b	051	中央	138.0	(24.0)	(4.4)	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4979	スギ	76	－
WT385	2号遺構	G-10	埋土2	051	中央	182.0	22.0	8.2	墨書不明		－	－	76	－
WT386	2号遺構	H-9	埋土2	051-b	中央	144.0	20.0	4.0	墨書不明	墨書不明	4970	アスナロ	76	－
WT387	2号遺構	G-10	埋土2b	051		133.0	(17.5)	4.3	・[　　] 玉□	・[　　]	4949	スギ	76	－
WT388	2号遺構	G-10	埋土2b	051		156.0	26.0	4.3	・「[　　]」	・「[　　]」	4976	スギ	76	－
WT389	2号遺構	H-10	埋土2b	051-b	中央	151.0	20.0	3.1	・「o [　　] 入」	・「o [　　]」	5654	アスナロ	77	－
WT390	2号遺構	H-10	埋土2b	051	中央	158.0	29.0	3.8	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4975	クロベ	77	－
WT391	2号遺構	G-10	埋土2b	051-b	中央	147.0	19.0	3.6	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4929	スギ	77	－
WT392	2号遺構	H-10	埋土2b	051		135.4	23.4	5.0	・「[　　]」	・「[　　]」	4961	スギ	77	－
WT393	2号遺構	H-10	埋土2b	051		132.0	24.0	5.0	墨書不明	墨書不明	4974	スギ	77	－
WT394	2号遺構	H-8	埋土3	051		146.0	(18.0)	5.5	・「名取〔　　]」	・「[　　]」	4917	スギ	77	－
WT395	2号遺構	G-10	埋土2b	051	横	174.0	34.0	5.1	「o□」		4978	アスナロ	78	－
WT396	2号遺構	H-8	埋土3	051		181.0	31.0	9.0	墨書不明		－	－	78	－
WT397	2号遺構	H-8	埋土3	051		144.0	35.0	4.2	墨書不明		－	－	78	－
WT398	2号遺構	H-7	埋土3	051		181.0	16.0	2.3	墨書不明		－	－	78	－
WT399	2号遺構	H-8	埋土3	051-b	中央	143.0	18.2	2.6	「o [　　]」		4867	アスナロ	78	－
WT400	2号遺構	H-11	埋土2b	051		108.0	24.2	4.6	・「[　　] → [　] 村勝之」	・「□□四月」	4963	アスナロ	78	－
WT401	2号遺構	H-7	埋土3	059		(108.0)	22.0	4.9	・[　　]」	・[　　]」	4600	スギ	78	－
WT402	2号遺構	H-9	埋土2	059		(100.0)	21.0	4.2	・[　　]」	・[　　]」	4922	スギ	78	－
WT403	2号遺構	G-10	埋土2b	059		(130.0)	28.0	5.8	墨書不明		－	－	78	－
WT404	2号遺構	G-10	埋土1	019		(73.0)	24.0	2.6	・×□〔屋カ〕八之助」	・[　　]」	4942	ヒノキ科	78	－
WT405	2号遺構	H-9	埋土1	019		(50.0)	18.0	1.3	「享保×		5648	クロベ	78	－
WT406	2号遺構	H-9	埋土2	019		(53.0)	19.0	3.8	・□右衛門」	・□入」	－	－	78	－
WT407	2号遺構	H-10	埋土2	019		(176.0)	43.0	2.1	・「名取□〔九カ〕月 [　]	・「千□□□村	4883	アスナロ	79	－
WT408	2号遺構	H-10	埋土2	019		108.0	(14.0)	2.7	・「年七月□〔七カ〕」	・「[　] → [　　]」	4939	スギ	79	－
WT409	2号遺構	H-9	埋土2	019		(82.2)	20.5	2.1	「[　　] →六月五日		－	－	79	－
WT410	2号遺構	G-11	埋土2	019		(44.0)	23.0	1.7	「夜□		－	－	79	－
WT411	2号遺構	G-10	埋土2b	019		(94.5)	27.0	3.4	・「[　　] 三斗□〔六カ〕	・「[　　]	4948	スギ	79	－
WT412	2号遺構	G-10	埋土2b	019		(74.0)	(20.0)	3.5	・「四斗□〔三カ〕升	・「[　　]	4947	スギ	79	－
WT413	2号遺構	H-9	埋土3	019		(42.9)	24.7	6.6	・「御□	・「□〔名カ〕□	－	－	79	－
WT414	2号遺構	H-9	埋土2	019		(54.0)	22.0	2.9	「□□		4663	アスナロ	79	－
WT415	2号遺構	H-9	埋土3	019		(81.0)	24.4	4.5	・「名取北方種次	・「[　　]	4937	スギ	79	－
WT416	2号遺構	H-9	埋土2	019		(96.0)	15.0	3.0	・「[　　]」	・「[　　]」	4935	アスナロ	79	－
WT417	2号遺構	H-9	埋土2	019-b		119.2	20.9	2.3	・「□　□」	・「o[　　]」	4990	アスナロ	79	－
WT418	2号遺構	H-9	埋土2	019	中央	(59.0)	24.0	5.5	・「o[　　]	・「o□□	4609	スギ	80	－
WT419	2号遺構	G-10	埋土2	019		(86.0)	(23.0)	3.2	・□□□□」	・□〔筋カ〕」	4945	スギ	80	－
WT420	2号遺構	G-11	埋土2	019		(49.0)	17.0	5.3	・「[　　]	・「[　　]	4628	マツ属単維管束亜属	80	－
WT421	2号遺構	H-8	埋土2	019	中央	(112.6)	33.0	6.5	「o [　　] → [　　]		4916	スギ	80	－
WT422	2号遺構	H-10	埋土2	019	中央	(94.0)	30.0	3.3	「o [　　]		5655	スギ	80	－
WT423	2号遺構	H-10	埋土2	019	中央	(140.0)	(14.1)	5.5	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4992	クロベ	80	－
WT424	2号遺構	H-9	埋土2	019		190.0	10.7	3.6	・「[　　]	・「[　　]	4919	スギ	80	－
WT425	2号遺構	H-9	埋土2	019		80.0	20.0	3.2	墨書不明	墨書不明	5649	アスナロ	80	－
WT426	2号遺構	G-10	埋土2	019		66.0	24.0	2.6	「[　　]		5665	アスナロ	80	－
WT427	2号遺構	G-11	埋土2b	019		(40.0)	29.0	5.0	・「[　]	・「□	4633	スギ	80	－
WT428	2号遺構	G-10	埋土2b	019		126.0	21.0	2.6	・「[　　]」	・「[　　]」	4769	アスナロ	80	－
WT429	2号遺構	G-10	埋土2	019		90.0	25.2	2.7	・「[　　]	・「[　　]	4998	スギ	80	－
WT430	2号遺構	G-10	埋土2b	019		(105.0)	20.0	1.4	・[　　]」	・[　　]」	4892	アスナロ	81	－
WT431	2号遺構	H-7	埋土3	019		(82.0)	25.0	5.3	(読解不可)	(読解不可)	4637	クマシベ節	81	－
WT432	2号遺構	G-10	埋土3	019		89.1	12.0	1.7	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	81	－
WT433	2号遺構	G-10	埋土3	019		(44.1)	26.4	4.5	・「□	・「□	－	－	81	－
WT434	2号遺構	G-11	埋土2	019		97.0	12.0	2.1	・「[　　]	・「[　　]	5664	クロベ	81	－

表3－11　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（10）
Tab.3－11　Notes on wooden tablets from BK7（10）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT435	2号遺構	G-11	埋土1	019		50.0	18.0	2.0	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	81	－
WT436	2号遺構	H-7	埋土3	081		(103.0)	(13.5)	8.1	[　　]		－	－	81	－
WT437	2号遺構	H-8	最下層	081		(89.0)	25.0	6.3	・「[　　]	・「[　　]	－	－	81	－
WT438	2号遺構	H-9	埋土2	081		(57.0)	(34.0)	4.0	・□〔村カ〕	・[　　]	5650	アスナロ	81	－
WT439	2号遺構	H-8	最下層	081		(67.0)	24.0	3.8	・[　　]	・[　　]	－	－	81	－
WT440	2号遺構	H-10	埋土2	081		(80.0)	31.0	7.1	□村×		4616	アカマツ	81	－
WT441	2号遺構	G-11	埋土2	081		(56.0)	(28.0)	8.3	文太郎		4631	アカマツ	81	－
WT442	2号遺構	H-10	埋土2	081		(57.7)	(26.9)	1.7	「四十七×		4680	アスナロ	81	－
WT443	2号遺構	G-10	埋土2	081		(147.0)	(21.0)	3.5	・「子ノ四月五日」	・「[　　]」	4944	スギ	82	－
WT444	2号遺構	H-10	埋土2	081		(152.2)	(36.5)	9.0	・[　　] → [　　]	・[　　] → [　　]	4615	クロベ	82	－
WT445	2号遺構	G-10	埋土2	081		(150.0)	(11.0)	2.5	・「[　　]	・「[　　]	－	－	82	－
WT446	2号遺構	G-10	埋土2	081		(132.0)	26.0	5.0	・[　　]	・[　　]	4943	クリ	82	－
WT447	2号遺構	H-10	埋土2	081		(78.0)	(14.0)	6.1	・「[　　]	・「[　　]	4685	モミ属	82	－
WT448	2号遺構	H-9	埋土3	081		(49.0)	(25.0)	8.5	・×五升	・×村人作	4610	スギ	82	－
WT449	2号遺構	H-9	埋土2	081		(45.0)	25.0	5.9	・清助	・×入	4667	ハンノキ節	82	－
WT450	2号遺構	G-11	埋土2b	081		182.0	(22.8)	4.1	・「[　　]」	・「[　　]」	4956	スギ	82	－
WT451	2号遺構	H-8	埋土3	081		157.0	27.5	6.8	・「[　　]」	・「[　　]」	4604	コナラ節	83	－
WT452	2号遺構	H-10	埋土2	081		(136.7)	32.1	3.7	□」		－	－	83	－
WT453	2号遺構	G-10	埋土2b	081		(83.5)	26.0	8.5	[　　]		4622	モクレン属	83	－
WT454	2号遺構	H-10	埋土2	032		130.0	14.0	6.8	「　∨□」		－	－	83	－
WT455	2号遺構	H-7	埋土3	081		(55.0)	23.0	4.3	・[　　]」	・×斗 [　　]」	4597	スギ	83	－
WT456	2号遺構	H-11	埋土2b	081		(34.2)	(32.2)	7.3	・「名取	・「□	－	－	83	－
WT457	2号遺構	G-11	埋土2b	081		(35.0)	(25.0)	3.6	・升〔九カ〕□	・□	－	－	83	－
WT458	2号遺構	H-10	埋土1	021	中央	75.0	25.0	5.1	墨書不明	墨書不明	－	－	83	－
WT459	2号遺構	G-11	埋土1	022-b	中央	66.0	20.0	4.1	墨書不明	墨書不明	－	－	83	－
WT460	2号遺構	G-10	埋土1	022-b	中央	66.0	(15.5)	4.3	墨書不明	墨書不明	－	－	83	－
WT461	2号遺構	H-10	埋土2	022-b	中央	68.0	20.0	4.4	・「o [　　]」		4971	スギ	83	－
WT462	2号遺構	G-10	埋土2	022-b	中央	67.5	20.0	4.6	墨書不明		4972	アスナロ	83	－
WT463	2号遺構	G-11	埋土2	022-b	中央	67.5	21.0	4.5	「o□□」		4973	スギ	83	－
WT464	2号遺構	H-10	埋土2	022-b	中央	65.0	20.0	4.0	「o□」		－	－	83	－
WT465	2号遺構	H-9	埋土2	022-b	中央	67.0	20.0	4.0	「o□」		－	－	83	－
WT466	2号遺構	G-10	埋土2	022-b	中央	66.0	19.0	5.1	墨書不明	墨書不明	4986	アスナロ	84	－
WT467	2号遺構	H-8	埋土2	022-b	中央	67.0	19.0	4.2	・「o□」	・「o□」	－	－	84	－
WT468	2号遺構	G-11	埋土2	022-b	中央	74.0	21.0	2.1	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4982	ヒノキ科	84	－
WT469	2号遺構	H-10	埋土2	021	中央	75.5	12.6	3.2	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4994	アスナロ	84	－
WT470	2号遺構	H-11	埋土2	021	中央	75.0	14.0	3.0	墨書不明		－	－	84	－
WT471	2号遺構	H-9	埋土2	021		73.0	(10.0)	4.2	墨書不明		4655	スギ	84	－
WT472	2号遺構	G-11	埋土2b	022-b		93.5	(10.0)	2.0	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	84	－
WT473	2号遺構	H-9	埋土2	021	中央	73.6	14.0	3.7	・「o□□□川」	・「o [　　]」	4869	アスナロ	84	－
WT474	2号遺構	G-11	埋土2	011		(73.0)	(9.0)	1.3	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	84	－
WT475	2号遺構	H-8	埋土2	022		95.0	22.0	4.9	「□」		－	－	84	－
WT476	2号遺構	H-9	埋土2	011-d	中央	197.0	40.0	6.4	墨書不明		－	－	84	－
WT477	2号遺構	H-10	埋土2	011		(211.0)	44.0	3.2	× [　　]」		4938	スギ	84	－
WT478	2号遺構	G-11	埋土1	011	中央	241.5	38.9	5.6	「o [　　]」		4965	スギ	85	－
WT479	2号遺構	H-9	埋土2	011-d	中央	320.0	54.0	9.5	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4969	スギ	85	－
WT480	2号遺構	H-9	埋土2	011-d		123.5	54.0	3.5	・「[　　] → [　　]」	・「[　　]」	－	－	85	－
WT481	2号遺構	H-9	埋土2	011	中央	240.0	45.0	8.5	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4873	スギ	86	－
WT482	2号遺構	H-8	埋土2	011-d	中央2箇所	275.0	58.0	11.0	墨書不明		－	－	86	－
WT483	2号遺構	H-10	埋土2b	081		114.0	65.0	2.3	「　　」		－	－	86	－
WT484	2号遺構	G-10	埋土2b	011-d		107.0	50.0	5.3	「[　　]」		－	－	86	－
WT485	2号遺構	G-10	埋土2	011	中央	204.0	51.2	2.8	・「o [　　]」	・「o [　　]」	4987	スギ	87	－
WT486	2号遺構	H-9	埋土2	019		(72.4)	70.4	2.7	「[　　]	「[　　] → [　　]	－	－	87	－
WT487	2号遺構	H-9	埋土2	011		280.0	(25.0)	2.2	「あ□□」		4934	アスナロ	87	－
WT488	2号遺構	G-11	埋土2	019		(134.4)	(67.5)	12.0	「四月		4954	アカマツ	87	－
WT489	2号遺構	G-11	埋土2b	081		121.0	(57.0)	6.5	「[　　]」		－	－	87	－
WT490	2号遺構	H-10	埋土2b	000		114.0	(3.4)	1.1	・「□〔瓜カ〕[　　]」	・「[　　]」	－	－	88	－
WT491	2号遺構	H-11	埋土2	000		72.7	(23.8)	0.9	・「享保□		－	－	88	－
WT492	2号遺構	H-9	埋土2	000		(72.8)	(35.0)	0.7	□荷入」		－	－	88	－

表3－12　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（11）
Tab.3－12　Notes on wooden tablets from BK7（11）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号(MYG-)	樹種	図	図版
WT493	2号遺構	H-8	埋土2	000		(76.0)	(17.0)	0.8	・「享保×	・「[　　]	－	－	88	－
WT494	2号遺構	G-10	埋土2b	081		(87.5)	(29.5)	1.8	・[　　]」	・[　　]」	－	－	88	－
WT495	2号遺構	H-9	埋土2	000		121.4	51.0	1.7	「[　　] 六□ →□ [　　]		4988	アスナロ	88	－
WT496	2号遺構	G-11	埋土2b	000		106.0	(40.0)	1.4	「[　　]」		－	－	88	－
WT497	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(100.4)	(27.2)	1.5	・「[　　]	・「[　　]	－	－	88	－
WT498	2号遺構	G-10	埋土2b	000		117.0	(15.0)	0.7	「□□ヤ□□□」		－	－	88	－
WT499	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(133.0)	(32.0)	0.6	「[　　] →□月二日		－	－	88	－
WT500	2号遺構	G-11	埋土2	000		(96.0)	(31.0)	1.0	「[　　] □〔台カ〕 →取		－	－	89	－
WT501	2号遺構	H-9	埋土2	000		(85.0)	(13.2)	0.5	「[　　]		－	－	89	－
WT502	2号遺構	G-10	埋土2b	000		117.0	(26.0)	0.9	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	89	－
WT503	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(92.8)	(12.6)	1.0	・[　　]」	・[　　]」	－	－	89	－
WT504	2号遺構	H-8	埋土2	000		(144.0)	(27.5)	1.1	・「[　　]	・「[　　]	－	－	89	－
WT505	2号遺構	G-10	埋土2	000		110.0	16.4	1.6	墨書不明	墨書不明	4999	クロベ	89	－
WT506	2号遺構	G-10	埋土2b	000		117.0	(18.0)	0.7	・[　　]	・[　　]	－	－	89	－
WT507	2号遺構	H-9	埋土2	000		(100.0)	(40.7)	1.2	[　　] → [　　]」		－	－	89	－
WT508	2号遺構	H-10	埋土2	000		(86.0)	(20.0)	1.3	「[　　]		－	－	89	－
WT509	2号遺構	G-10	埋土2b	000		117.0	(7.1)	0.8	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	89	－
WT510	2号遺構	H-9	埋土2	000		(87.0)	(15.0)	1.8	・[　　]	・[　　]	－	－	89	－
WT511	2号遺構	G-10	埋土2	000		(42.0)	(11.0)	1.8	・「[　　]	・「[　　]	－	－	89	－
WT512	2号遺構	G-10	埋土2	000		120.0	(10.0)	1.1	「□□」		－	－	90	－
WT513	2号遺構	H-10	埋土2	000		(45.0)	(12.0)	1.0	[　　]		－	－	90	－
WT514	2号遺構	G-10	埋土2	019		(109.0)	12.0	1.2	「[　　]		4997	アスナロ	90	－
WT515	2号遺構	H-9	埋土2	000		(115.0)	(6.0)	1.3	「[　　]		4672	アスナロ	90	－
WT516	2号遺構	G-10	埋土2b	000		116.0	(19.0)	0.9	「[　　]」		－	－	90	－
WT517	2号遺構	H-10	埋土2b	000		(93.0)	13.0	0.9	「[　　]		－	－	90	－
WT518	2号遺構	H-10	埋土2b	000		(95.0)	(38.0)	1.2	[　　]		－	－	90	－
WT519	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(56.1)	(12.0)	1.0	・[　　]	・[　　]	－	－	90	－
WT520	2号遺構	G-10	埋土2b	000		(64.8)	10.0	1.1	・[　　]」	・[　　]」	－	－	90	－
WT521	2号遺構	H-10	埋土2b	000		(88.0)	(12.0)	1.3	・[　　]	・[　　]	－	－	90	－
WT522	2号遺構	G-10	埋土2b	000		58.0	(18.0)	1.8	「[　　]」		－	－	90	－
WT523	2号遺構	H-9	埋土3	000		(101.7)	(18.4)	1.0	・「[　　]	・「□	－	－	90	－
WT524	2号遺構	G-10	埋土3	000		(80.9)	(19.3)	0.6	□□		－	－	90	－
WT525	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(35.0)	(19.0)	0.9	平」		－	－	90	－
WT526	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(48.0)	(14.0)	0.4	「亭、□		－	－	90	－
WT527	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(70.0)	(40.0)	1.3	「 [　　] → [　　] → [　　]		－	－	90	－
WT528	2号遺構	G-11	埋土2b	000		(35.0)	(13.0)	0.5	「□		－	－	90	－
WT529	2号遺構	H-9	埋土2	019		(62.0)	43.7	3.0	・「[　　]	・「[　　]	4989	クロベ	90	－
WT530	2号遺構	G-11	埋土2	019		(54.0)	(17.0)	1.0	・□□	・[　　]	－	－	91	－
WT531	2号遺構	G-11	埋土2	019		(47.0)	(15.0)	4.1	・「[　　]	・「[　　]	－	－	91	－
WT532	2号遺構	G-11	埋土2	081		(34.0)	(16.0)	4.8	・□	・□	－	－	91	－
WT533	2号遺構	H-7	埋土3	081		(53.0)	(16.0)	3.6	[　　]		4636	スギ	91	－
WT534	2号遺構	H-7	埋土3	019		(88.0)	13.5	2.3	(読解不可)		4879	アスナロ	91	－
WT535	2号遺構	G-10	埋土2	081		(70.0)	(12.0)	2.5	・□□」	・□」	－	－	91	－
WT536	2号遺構	G-11	埋土2	081		(59.0)	(19.0)	1.0	・[　　]	・[　　]	－	－	91	－
WT537	2号遺構	G-10	埋土2b	011		110.0	12.0	9.8	・「[　　]」	・「[　　]」	4914	アスナロ	91	－
WT538	2号遺構	H－9	埋土2	081		(90.4)	(8.4)	1.1	「[　　]		－	－	91	－
WT539	2号遺構	G-10	埋土2	081		(75.0)	(8.0)	3.2	「[　　]		－	－	91	－
WT540	2号遺構	G-11	埋土2	081		(36.0)	(32.0)	8.7	・□	・□	4632	アカマツ	91	－
WT541	2号遺構	G-11	埋土2b	081		(118.0)	(20.0)	2.0	[　　]		－	－	91	－
WT542	2号遺構	H-8	埋土3	081		(119.0)	(9.0)	2.3	・[　　]	・[　　]	－	－	91	－
WT543	2号遺構	G-10	埋土2b	081		115.0	(8.0)	2.7	「[　　]」		－	－	91	－
WT544	2号遺構	G-10	埋土2b	011		123.0	(14.0)	1.8	・「[　　]」	・「[　　]」	－	－	91	－
WT545	2号遺構	H-8	最下層	081		151.0	(7.5)	3.0	・「[　　]」	・「[　　]」	4651	スギ	91	－
WT546	1号遺構	G・H-8	埋土3	019-b	中央	165.0	29.0	7.7	・「o [　　] →御 [　　]」	・「o [　　]」	4596	クリ	92	39
WT547	1号遺構		埋土3	011	中央	125.0	24.5	4.9	「o増田村 [　　]」		4810	モミ属	92	39

表3－13　武家屋敷地区第７地点出土木簡観察表（12）
Tab.3－13　Notes on wooden tablets from BK7（12）

登録番号	遺構名	区	層位	型式	孔	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	記載事項〔表〕	記載事項〔裏〕	樹種同定番号（MYG-）	樹種	図	図版
WT548	1号遺構	G･H-8	埋土3	019		(55.0)	24.0	2.2	「□□□		－	－	92	－
WT549	1号遺構		埋土3	051	横	(201.0)	34.0	8.2	「o　　」		－	－	92	－
WT550	1号遺構		埋土3	011		153.0	(11.0)	2.4	・「□〔下カ〕ノ［　　］」	・「［　　］」	4915	スギ	92	－
WT551	1号遺構		埋土3	011-c		150.0	18.0	6.0	墨書不明	墨書不明	－	－	92	－
WT552	1号遺構	H-8	埋土3	051		126.0	23.0	3.9	・「名取［　　］」	・「［　　］」	5646	アスナロ	92	－
WT553	1号遺構		埋土3	059		123.0	(7.0)	3.7	「［　　］」		－	－	92	－
WT554	24号土坑	F-10	埋土2	051		175.0	29.5	4.0	・「御歳入四斗五升入」	・「国分郡（ママ）六丁目村久佐衛門」	4806	スギ	93	39
WT555	24号土坑	F-10	埋土3	051	横	(154.0)	31.0	9.3	・「o□□〔御前カ〕米四斗五升入」	・「o名取藤塚次郎七」	4808	スギ	93	39
WT556	24号土坑	F-10	埋土3	051		130.0	20.6	3.3	・「米四斗五升入」	・「国分□〔実カ〕沢村半□〔木カ〕」	4757	アスナロ	93	39
WT557	24号土坑	F-11	埋土1 埋土2	051-b		(158.5)	25.0	7.2	・「御年貢米四斗五升入 →享保二年十一月廿日	・「名取袋原村勘次右衛門	4875	スギ	93	40
WT558	24号土坑		埋土2	011-c	中央	145.0	27.0	3.9	・「o米四斗［　　］」	・「o牟甫村［　　］」	4754	スギ	94	40
WT559	24号土坑	F-10	埋土3	011-c		114.0	39.0	4.7	・「□□□〔米四斗カ〕［　　］」	・「丑［　　］ →［　　］　」	4756	スギ	94	40
WT560	24号土坑	F-11	埋土1 埋土2	011-c		123.0	18.5	7.8	・「米四斗五升入」	・「名取吉〔増カ〕田村□」	4752	スギ	94	40
WT561	24号土坑	F-10	埋土3	011-c		144.0	32.5	7.7	・「米四斗五升入」	・「□〔日カ〕□村□□郎」	4809	スギ	94	40
WT562	24号土坑	F-10	埋土2	011		152.0	26.5	6.3	・「米四斗五升入」	・「名取上余田村吉郎兵衛」	4805	スギ	95	40
WT563	24号土坑		埋土2	019-b		(131.0)	33.5	8.2	・「三斗入［　　］	・「□	4804	スギ	95	40
WT564	24号土坑	F-11	埋土1 埋土2	019		181.0	35.0	8.0	・「御年貢米四斗五升」	・「名取高柳村市之丞」	4876	スギ	95	41
WT565	24号土坑	F-11	埋土2	051-b		243.0	34.0	4.4	・「［　　］」	・「三［　　］」	4732	アスナロ	95	41
WT566	24号土坑	F-11	埋土1 埋土2	051		144.0	22.0	8.3	・「［　　］□〔村カ〕［　　］」	・「丑九月」	4753	モミ属	96	41
WT567	24号土坑	F-11	埋土2	019	横	111.0	26.0	6.2	・「o［　　］	・「o□□□□□	4593	スギ	96	41
WT568			埋土3	011-d	中央	106.0	59.0	9.8	「　□ o→［　　］田 →　［　　］」	「o〔焼印〕」	4857	アカマツ	96	41
WT569	24号土坑	F-11	埋土3	011	中央	171.0	31.5	7.1	「o仙蓋　小嶋十次郎o」		4807	スギ	96	41
WT570	24号土坑	F-10	埋土3	065	横	36.0	35.0	10.4	・「o□」（■何かの記号カ）	・「o□」（■何かの記号カ）	4790	アカマツ	96	41
WT571	24号土坑	F-11	埋土3	011		134.0	21.0	2.7	・「［　　］」	・「［　　］」	4755	アスナロ	97	－
WT572	24号土坑		埋土2	051		161.0	30.0	8.0	墨書不明		－	－	97	－
WT573	24号土坑	F-11	埋土3	051	中央	177.0	22.0	4.9	・「o［　　］」	・「o［　　］」	4872	アスナロ	97	－
WT574	24号土坑	F-10	埋土3	051		205.0	30.0	8.2	□」		－	－	97	－
WT575	24号土坑		埋土2	051		127.0	32.0	4.3	「□□」		－	－	97	－
WT576	24号土坑		埋土2	019		(134.0)	27.5	4.4	・×田村［　　］右衛門」	・［　　］」	4877	スギ	98	－
WT577	24号土坑	F-10	埋土3	019		92.0	26.0	7.5	・「［　　］」	・「［　　］」	4878	スギ	98	－
WT578	24号土坑	G-10	埋土2	022-b	中央	66.0	19.0	4.7	「o□」		-	-	98	－
WT579	24号土坑	F-10	埋土3	081		(96.0)	(22.0)	3.5	・□□〔善カ〕	・□四年五月	4595	スギ	98	－
WT580	24号土坑	F-11	埋土3	081		(69.0)	30.0	6.2	・米四斗	・□〔当カ〕成賈	4594	アカマツ	98	－
WT581	24号土坑	G-10	埋土1	081		(42.0)	(22.0)	4.9	四斗		4592	スギ	98	－
WT582	2号土坑		埋土1	011		190.0	32.0	12.5	「名取□□〔柳生カ〕村［　　］」		4775	スギ	99	42
WT583	2号土坑		埋土1	011-b	中央	160.0	24.0	10.5	「o［　　］」		4789	アカマツ	99	42
WT584	2号土坑		埋土1	011	中央	130.0	27.9	8.0	「o名取種次村古内分」		4803	クロベ	99	42
WT585	2号土坑		埋土	011		210.0	42.0	4.3	「［　　］」		4731	スギ	99	42
WT586	29号土坑		埋土1	011		133.0	25.0	4.3	・「子ノ［　　］」	・「享［　　］ →□□〔御年カ〕［　　］」	4967	アスナロ	100	42
WT587	撹乱			011	中央	138.0	61.0	3.3	・「o［　］」	・「o［　　］」	4774	アスナロ	100	42
WT588	撹乱			051	中央	155.0	26.0	4.8	「o［　　］」		4730	スギ	100	42
WT589	2号土坑		埋土	011		86.5	(17.0)	2.6	・「［　　］」	・「［　　］」	4751	スギ	100	－
WT590	2号土坑		埋土	081		(118.0)	(32.0)	2.0	［　　］		－	－	100	－
WT591	2号土坑		埋土	019		(35.6)	26.8	4.1	・「米×	・「□	4607	モミ属	100	－
WT592	2号土坑		埋土	019		(35.0)	(14.5)	2.1	［　　］		－	－	100	－
WT593	18号土坑		埋土2	019		149.0	(17.5)	4.9	「［　　］」		4874	スギ	100	－
WT594	27号溝	E-10	埋土2	019		(95.0)	(18.0)	5.3	・「［　　］」	・「［　　］」	5645	スギ	100	－

（　）付きで示した法量は、残存する長さ・幅・厚さを示す。
表中の図・図版番号は『年報19　第３分冊』の図・図版番号である。

(4) 木簡の樹種と型式との関係について

「(3) 武家屋敷地区第7地点出土木簡の検討①木簡と樹種」の同定結果を受けて、木簡の型式や記載内容と樹種との関係について考察を加えていきたい。木簡の型式的特徴や記載内容については、年報19第3分冊に掲載しており、そちらを参照されたい。表3－2～表3－13には、すべての木簡の観察表を掲載している。この表は、年報19第3分冊で掲載した観察表に、樹種同定番号とその樹種を追加したものである。

木簡全点の樹種同定を行うことは困難であるため、木簡の樹種同定は選択的に行っている。樹種同定を行う木簡の選択基準については、型式や記載内容と樹種との関係を考察するため、比較的残りがよく、形態がよくわかるもの、記載内容が判読可能なものを中心に行っている。また、肉眼の観察で木目や木肌が特徴的なものについては、樹種同定を行うものに加えている。木簡594点中、樹種同定を行った木簡は428点である。

表4－1は、木簡の型式と樹種との関係を示したものである。「(3) 武家屋敷地区第7地点出土木簡の検討①木簡と樹種」で、小川とみ・鈴木三男氏らが示しているように、樹種を分析した428点のうち、259点（60.5%）がスギである。針葉樹全体では97.4%を示しており、木簡として用いられた樹種は、圧倒的に針葉樹が多く、中でもスギが卓越していると言える。そのため、木簡の型式別にみても、主要な型式では、スギが半数以上を占めるという結果を示している。スギ以外はいずれも少ないが、その中でも針葉樹が中心であると理解される。

木簡の型式の中で主要となり、出土点数も多いのは、短冊型の011型式、一端を尖らせた051型式、011型式と051型式の中間的な形態を示す011-c型式である。これらが破損したものが、019型式、059型式であり、準じて出土点数が多くなっている。これらの木簡には、主に「米」、「塩」などの品物名が記載されており、年貢として、各村から藩に納められたものが中心である。これらの木簡のほとんどは、木材を簡単に割っただけの粗雑な成形のものが多く、木目が粗く、節が残っているものもみられた。これらの型式では、スギの点数が圧倒的に多い。他の針葉樹もわずかにみられるが、スギ以外の樹種では、種類も点数もごく限られている。

021型式は小型矩形のもの、022-b型式は小型矩形で両端を圭頭にしたものである。これらは、点数が少ないものの、やはりスギを中心としており、アスナロなどの針葉樹が用いられているものもわずかに存在する。

型式別に樹種を検討した際に注目されるのは、000型式である。これは、非常に薄い材に墨書があるものである。非常に薄い材のため、木目に沿って裂けやすく、破損している場合が多い。そのため、記載内容が明確に確認されるものはあまり多くはない。品物名のほとんどは、瓜漬けや茄子漬けといった「漬け」の品物名である。「漬け」以外では、「塩」、「粕魚」、「卵？」の記載が確認されるが、いずれも各1点である。

000型式の樹種では、スギが全くみられず、アスナロが中心となり、クロベが1点みられる。他の型式では、スギが大半であるが、スギが全くみられないという点で、他の型式とは大きく異なっている。これは、非常に薄い材であるという特徴による可能性が考えられる。小川とみ・鈴木三男氏による「①木簡の樹種」の分析によると、「アスナロとされたものは、その分布からみて変種のヒノキアスナロ（ヒバ）である」と考えられ、ヒノキアスナロ（ヒバ）の材は、「やや堅く、強靱できめ細かく、保存性が大変よい」という特徴を持っている。000型式のように非常に薄い材に加工するのに、強靱できめ細かいといった特徴が適していたのであろうと推測される。

011-d型式は、長方形で厚手のものである。この型式では、やはり針葉樹を中心としていることに違いはないが、スギが主体ではなく、モミ属、アカマツ、アスナロなどの樹種とほぼ同程度の比率である。スギよりも他の針葉樹を用いた方が、厚手で大型といった特徴には適していたのかもしれない。

次に、記載されている品物別に樹種を検討していきたい。表4－2は、木簡に記載されている品物名別に樹種の点数を示している。上述のように、この資料群の樹種は、品物別にみても、スギがほとんどであることに変わりはない。「米」と記載されている木簡は、最も点数が多いため、樹種の種類も比較的多いが、スギが大半である。他の品物では、それぞれの出土点数が多くはないが、スギを主体としていることが読み取れる。

その中で、瓜漬けや茄子漬けといった「漬け」の木簡は、スギが用いられているものは全くない。「漬け」の木簡は、000型式と011-d型式に限定され、000型式のものはアスナロが、011-d型式のものはアカマツ、マツ属複維管束亜属に樹種が限定されている。マツ属複維管束亜属については、「(3) 武家屋敷地区第7地点出土木簡の検討①木簡と樹種」で、「種まで同定できたものがアカマツのみに限られることから、これらのほとんどもアカマツであると考えることが出来る」とあり、「漬け」の木簡の樹種は、型式別に対応して、アスナロとアカマツに2分される可能性も考えられる。

同様の011-d型式のものでは、「台所宛て荷物」と分類したものに、アカマツの樹種が用いられている。「台所宛て荷物」としたものは、具体的な記載では、「仙臺大所□」、「仙臺荷物」、「仙臺勝手□□」、「□せん□御台所御用」など、細部に違いはあるものの、二の丸の御大所に宛てられた荷物であり、このようにまとめて扱うこととした。いずれも011-d型式の木簡である。これらのうち、1点はモミ属であるが、他の3点はアカマツである。点数が少ないものの、比較的厚手で大型の木簡には、アカマツが用いられる傾向が考えられる。アカマツは、「重硬で、樹脂分が多く加工が難しいが水湿に良く耐え、保存性がよい」という特徴があり、比較的厚手でやや大きな木簡を作るのに使いやすい材であった可能性が推測される。

「蜆」、「菱喰」、「雉子」、「梨子」、「竹ノ子」などの品物名が記載された、比較的丁寧な作りの木簡と樹種の関係についてみていく。「米」やその他の品物が記載された木簡の大半が、簡単に木材を割り、粗く削った状態のものであるのに対し、木目が細かく整い、材質のよい木材が用いられ、四隅が面取りされているなど、成形や加工が丁寧な木簡がいくつか出土している。これらは、記載内容と木簡の特徴から、贈答品に付けられたものとみられる。中でも、「蜆」は、仙台藩の重臣である「伊達安房」が、重臣の「但木土佐」に贈った木簡である。「菱喰」の木簡には、贈り主として重臣の「茂庭筑後」の名前が記載されている。「雉子」、「梨子」、「竹ノ子」には、贈り主や差出人の名前は記載されていないが、材質のよい木材が用いられ、成形や加工が丁寧であることなどから、藩に献上された品に付けられた木簡であろうと推測される。これら丁寧な作りの木簡の樹種では、「蜆」の木簡のみモミ属が用いられているが、他はスギである。これらは表面的特徴の観察では、「米」などに多い粗い作りの木簡とは、明らかに材質や成形・加工の質が良いものであるが、樹種においては同じ種類が用いられていることが明らかとなった。しかし、同じ樹種でも、特別の品に付けられる木簡と、年貢米に付けられる木簡では、木材の質や加工の程度に明らかな違いが生まれることが明らかとなった。

次に、木簡に記載されている地名と樹種の関係についてみていく。「(3) 武家屋敷地区第7地点出土木簡の検討①木簡と樹種」の指摘では、アスナロもしくは、ヒノキアスナロ（ヒバ）、クロベ（ネズコ）について、「奥羽山脈に沿った山間地に天然分布して」おり、「植林はそこより標高の低いところまでされてはいるものの、山間部が主であることから、その供給地を山間部とみることができよう」としている。出土した木簡に記載されている地名と樹種との関係を示したのが表4－3である。図4－1は、木簡に記載されている村名を地図に示したものである。資料の特徴として、宮城郡、名取郡の村名が多く、その他の地名が記載された木簡が元々少ないという傾向はあるものの、奥羽山脈の栗原郡一迫長崎村、玉造郡、北上山地の江刺郡増沢村、人首村、阿武隈山地の伊具郡東根伊手村、筆甫村など、山間部に属するとみられる村のいずれにおいてもアスナロやクロベ（ネズコ）の樹種の木簡はみられず、スギにのみ偏っていることが理解される。一方、宮城郡や名取郡など、主に仙台平野に存在する村名の木簡では、多くはないもののアスナロやクロベ（ネズコ）の樹種がいくつかみられ、樹種の天然分布と実際の地名とは必ずしも一致しない結果となった。このことから、アスナロやクロベ（ネズコ）といった樹種についても、天然のものではなく、植林されたものである可能性が推測される。

近世の仙台藩において、水源は農耕の基であり、水源の根源となる山林原野の育成と管理こそ農政の基本であった。仙台藩領の山林原野は、藩有林としての「御林」、藩士が領有する「拝領山」「預御山」、百姓の私有地である「居久根」「地付山」、私有の山林原野をもたない百姓のために、一村あるいは複数の村が共同で利用する

「入会山」「渡世山」に大別される。藩有林であっても、百姓が利用できる居久根、地付山、入会山であっても、森林保護を基本としているため、「留木」や「青木」として藩が伐採を規制した樹種については、郡奉行の許可がなければ伐採することはできなかった。留木、青木として藩が規制した樹木は、時代によって変わるが、木簡の年代に近い江戸時代中期では、留木は樫、朴、桐、槻（欅）、桂、山漆であり、青木は松、杉、樅、榧である。江戸時代後期では、留木、樫、朴、桐、槻、桂、檜、塩地、槐であり、青木は松、杉、樅、榧、櫟、檜葉、梅、桜となっている（高倉淳2003）。その一方で、仙台藩は杉、松、竹などの植林を奨励しており、中でもスギに関しては、藩内各所に藩営の樹木苗圃を設け、植林用の苗を育てている（飯泉茂1994）。名取郡四郎丸村に置かれた藩の「御杉苗畑」もその一つで、藩から支給されたスギの種子を杉苗畑に蒔き、三年間育成した後に藩に供出し、大肝入の裁量で必要な村に割り当てられ、植林されていた（高倉淳2003）。

また、百姓の屋敷林である居久根であっても、仙台藩では居久根を保護するため、樹木を伐採するには藩の許可を必要としていた。居久根にはスギ以外にも、榛木、栗、欅、赤松、桜、檜、竹など多種多様な樹種が植えられており、防風、防雪、防蔵の効果や、燃料・堆肥・食料など、多様な恩恵を与えていた（千葉正樹2004）。図4－2では、屋敷地が居久根で囲まれている様子がよくわかり、樹木が生活の身近に存在することが伺える。

以上のような仙台藩での山林に対する政策を考慮すると、木簡の樹種に、スギが圧倒的に多いことは当然の結果と考えることができる。青木であるスギは、伐採には規制があったものの、一方で、苗が藩から供給される仕組みができあがっており、スギの植林が奨励されていた。また、大木に育ったスギを伐採することは容易にできなくても、藩の許可を得て、植林されたスギを計画的に活用することはできたであろうし、樹木の維持・管理のためには、間伐や枝打ちなどの作業を計画的に行う必要があり、そこから得られた樹木や枝も貴重な資源であったと考えられる。「米」などに付けられた典型的な木簡の大きさは、長さ10～20cm程度、幅2～4cm程度であり、間伐や枝打ちなどで得られた木材や、他に活用した残りの端材であっても十分利用できる大きさであろう。

アスナロ、クロベ（ネズコ）などの樹種が比較的多かったことについても、スギと同様に、植林されたものが村の周辺に多かったためであろうと推測される。木簡に記載された村名と樹種との関係で、奥羽山脈などの山間部に天然分布するアスナロやクロベ（ネズコ）が、山間部とみられる村名の木簡からは確認されなかった。一方で、天然分布がみられない平野部の宮城郡や名取郡の村名の木簡で、アスナロやクロベ（ネズコ）が少なくない数で確認されるのは、植林されたものが村の周辺に多かったためであろうと考えられる。クロベ（ネズコ）は、ヒノキ科の針葉樹で、アスナロは、変種のヒノキアスナロ（ヒバ）である可能性が指摘されている（「(3) 武家屋敷地区第７地点出土木簡の検討①木簡と樹種」）。木簡の年代に近い江戸時代中期には、ヒノキアスナロ（ヒバ）やクロベ（ネズコ）は、留木、青木には含まれていないものと考えられるが、山林の維持・管理を重視した仙台藩の政策をみると、伐採することは容易ではなかったであろうと推測される。上述のように、居久根には檜、赤松など多種多様な樹種が植えられており、スギと同様に、端材程度の大きさであれば、十分得られた木材であったと推測される。木簡と樹種との関係から、山林の保護・管理といった仙台藩の藩政に基づいた村のいとなみの一端を伺い知ることができるものと考えられる。

《引用・参考文献》

飯泉茂　1994　「Ⅲ自然の移り変わり３仙台開府からの植生の変化（2）林業との関わり」『仙台市史特別編1自然』pp.360－pp.364

飯泉茂、大友敬雄　1994　「Ⅲ自然の移り変わり５育んできた自然（2）街や村の樹木相」『仙台市史特別編1自然』pp.148－pp.422

高倉　淳　2003　「第六章村々の生活　第三節山村の実態」『仙台市史　通史編４　近世２』pp.424－pp.440

千葉正樹　2004　「第三章村のなりわい　第四節村の景観」『仙台市史　通史編５近世３』pp.193－pp.218

東北大学埋蔵文化財調査室　2007　『東北大学埋蔵文化財調査年報19第３分冊』

日比野紘一郎　1994　「Ⅲ自然の移り変わり　５育んできた自然　（3）海岸林」『仙台市史　特別編１自然』pp.422－424

渡辺信夫　2001　「第三章政宗の政治　第四節領内の整備」『仙台市史　通史編３近世１』pp.169－pp.182

表4－1　武家屋敷地区第７地点出土木簡の型式と樹種の関係
Tab.4－1　Interration between type of wooden tablets and identified wood specis at BK7

型式		針葉樹									広葉樹						総計
		カヤ	モミ属	アカマツ	維管束亜属マツ属複	維管束亜属マツ属単	スギ	クロベ	アスナロ	ヒノキ科	ハンノキ節	クマシベ節	クリ	コナラ節	ケヤキ	モクレン属	
011	短冊型	1	4	3			64	3	26				1				102
011-b	短冊型で一部に加工			1					1								2
011-c	長方形でも下端がやや細くなる		1	2			29	1	6					1			40
011-d	長方形で厚手		4	5	2		3		2								16
019	一端が方頭で、他端は破損・腐食で不明		2	4		2	39	6	16	2		1					72
019-b	一端が方頭、他端は細くなるが破損で不明						7		1				1			1	10
021	小型矩形			1			7		5								13
022-b	小型矩形の一端を圭頭						11		3	1							15
032	長方形の材の一端の左右に切り込み		1														1
032-b	長方形の材の片側に切り込み						2										2
033	長方形の一端の左右に切込み、他端は尖る						1		1								2
051	長方形の材の一端を尖らせる		2	2			63	2	15				1				85
051-b	長方形の材の一端の片側を削って尖らせる						17		6	1							24
059	長方形の材の一端を尖らせる、他端は欠損		1	1		1	2		1								6
065	用途未詳の木製品に墨書がある			1													1
081	折損、腐食によって原形不明		2	4			14	1	3		1		1	1	1	1	29
999	両端が尖る								1								1
000	木羽のような非常に薄い材							1	6								7
総計		1	17	24	2	3	259	14	93	4	1	1	4	2	1	2	428

表4－2　武家屋敷地区第７地点出土木簡に記載された品物名別の樹種
Tab.4－2　Interration between goods writen on wooden tablets and identified wood specis at BK7

品物名		針葉樹									広葉樹						総計
		カヤ	モミ属	アカマツ	維管束亜属マツ属複	維管束亜属マツ属単	スギ	クロベ	アスナロ	ヒノキ科	ハンノキ節	クマシベ節	クリ	コナラ節	ケヤキ	モクレン属	
米・モチ	米	1	7	7			110	3	21				2		1	1	153
	せん糯米						2										2
	モチ						6		1								7
	籾						1										1
漬け	瓜漬け			1	1				3								5
	茄子漬け				1												1
	漬け								2								2
塩							14		2								16
醤油味噌	諸白赤味噌						1										1
	赤味噌						1										1
	円真寺流御醤油						1										1
その他食品	酒?						1										1
	大豆						1										1
	茸?			1													1
	竹の子						5										5
	茶?								1								1
贈答品	蜆		1														1
	菱喰						1										1
	梨						1										1
	雉子						1										1
荷物	台所宛て荷物		1	3													4
	仙台荷物						3										3
	荷物						1										1
その他	名前札			1		1	4		2								8
	記号札			1					1								2
	焼き印札		3	1													4
	早籠							1	3								4
	御獲						4										4
	鎰の札								1								1
	品物不明		5	9		2	101	10	56	4	1	1	2	2		1	194
総計		1	17	24	2	3	259	14	93	4	1	1	4	2	1	2	428

表4－3　武家屋敷地区第７地点出土木簡に記載された地名と樹種の関係
Tab.4－3　Interration between place name written on wooden tablets and identified wood specis at BK7

郡名	村名		針葉樹									広葉樹						総計
			カヤ	モミ属	アカマツ	維管束亜属マツ属単	維管束亜属マツ属複	スギ	クロベ	アスナロ	ヒノキ科	ハンノキ節	クマシデ節	クリ	コナラ節	ケヤキ	モクレン属	
胆沢郡	衣川							1										1
江刺郡	郡名のみ				1			1										2
	増沢村							1										1
	人首村							1										1
本吉郡	北方	気仙		1														1
		気仙沼									1							1
栗原郡	一迫	長崎村						1										1
牡鹿郡	陸方	沢田村						1										1
		流留村						2										2
		根岸村渡波町						1										1
		牡鹿湊						1										1
桃生郡	深谷	上下堤村		1														1
		前谷地村						1										1
		村名不明						1										1
玉造郡	郡名のみ							2										2
	村名不明							1										1
黒川郡	下草村							1										1
宮城郡	荒井村			1														1
	岩切村							1		1								2
	岡田村			1				1		1								3
	加瀬村							1										1
	実沢村									1								1
	菅谷村							1										1
	田子村							2	1									3
	鶴ヶ谷村							1										1
	福室村							1										1
	森郷村									1								1
	六丁目							1										1
	郡名のみ							1										1
名取郡	北方	飯田村						2										2
		今泉村						2		2								4
		大野田村						1										1
		北目村						2										2
		郡山村								1								1
		四郎丸村						1		1								2
		高柳村						2		1								3
		種次村						2	1									3
		富沢村						2		1								3
		富田村						3	1									4
		日辺村							1									1
		平岡村						1										1
		袋原村			1			3										4
		藤塚村						2		1								3
		二木村						1										1
		前田村						1										1
		柳生村			1			5										6
	南方	岩沼郷						2										2
		植松村						4										4
		笠島村						1										1
		上余田村						3		1								4
		川上村						2		1								3
		下余田村	1					5										6
		増田村		2				4										5
		吉田村						1										
	村名不明							13	1	3								17
柴田郡	北方	小成田						1										1
	郡名のみ							1										1
伊具郡	東根	伊手村						1										1
		筆甫村						2										2
不明	吉浜　熊谷　熊野 □〔下〕信濃			2				1	1	2								6
地名なし、もしくは不明				9	21	3	2	163	8	75	3	1	1	4	2	1	2	295
総計			1	17	24	3	2	258	14	93	4	1	1	4	2	1	2	428

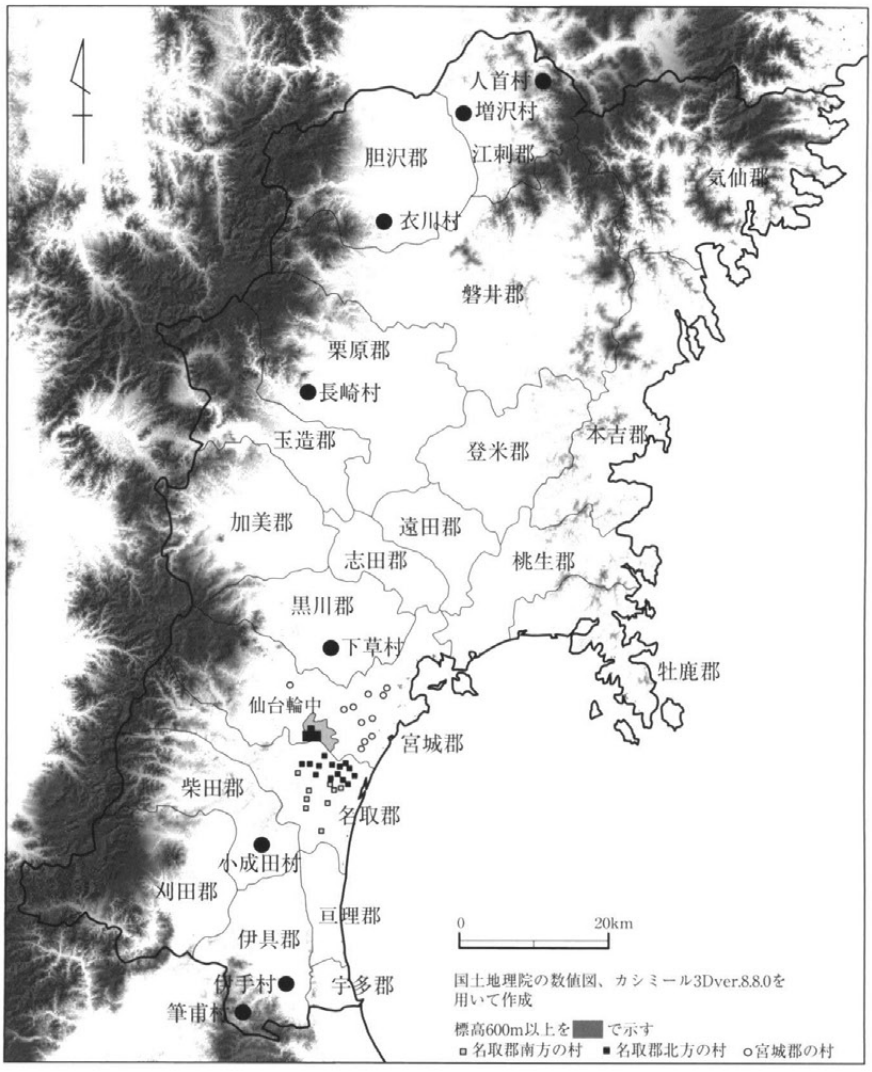
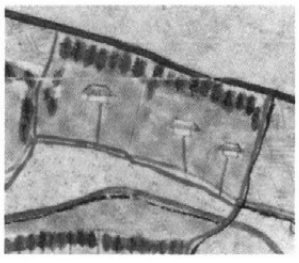
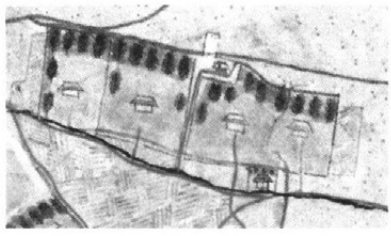
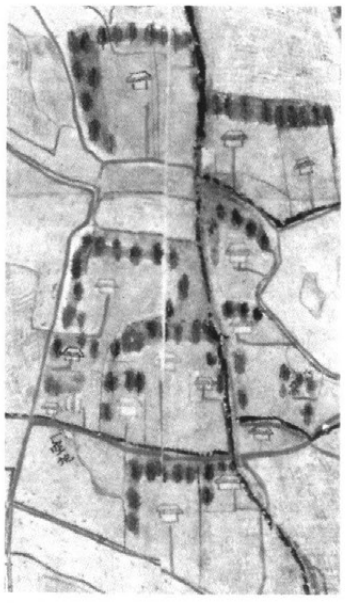


図4－1　武家屋敷地区第7地点出土木簡記載の地名
Fig.4－1　Didtribution map of various place names wrtten on wooden tablets from BK7







「第三章村のなりわい第四節村の景観」
『仙台市史通史編5近世3』より

図4－2　『柳生村絵図』に見える居久根の様子
Fig.4－2　Drawing of *Igune* at an old map of "Yanagiu village map" (*Igune* is the hedge around a peasant residence)

(5) 武家屋敷地区第７地点出土の植物遺存体

吉川純子（古代の森研究舎）

A．はじめに

仙台城二の丸北方武家屋敷地区第７地点は二の丸の北側に位置し、近世には付近に武家屋敷が置かれていたが、本地点は絵図との対比により空き地や屋敷境の可能性があるとされている。本地点では、17世紀代の溝と使用目的不明の土坑、18世紀代の井戸、大規模廃棄土坑、溝と使用目的不明の土坑、幕末から明治初頭にかけての池状遺構、柱列と使用目的不明の土坑、明治前半の基本層の4時期各遺構から種実遺体が検出されたため、当時の植物利用を調査する目的でこれらの種実遺体の同定を行った。

B．同定結果

表5－1～5－4に種実試料の同定結果を示した。以下に同定された種実のうち、特筆すべき種実遺体の形態記載をおこなう。

カヤ：種子は紡錘形で縦に浅いすじが入り、種子壁は薄いが堅い。食用の他油脂を取り利用する。

クロマツ：球果は円錐形で種鱗の先端が菱形を呈し、種鱗中央が平坦かややくぼむ。類似するアカマツの場合は種鱗中央が突出する。

ヒノキ：球果は四角から多角形の種鱗が集まって球形をなし、乾燥すると開果する。径は12ミリ程度。

オニグルミ：内果皮壁に痕跡があるものとしては、人間による割跡、ネズミによる食痕が挙げられる。人間は道具を用いてオニグルミの上下に破砕痕を残し、ときに内部までひびが入る。また、炭化している内果皮も人間による痕跡である。ネズミは内果皮の横に歯でかじって丸い穴を開ける。

ヒメグルミ：オニグルミと比べて、内果皮表面が平滑で内果皮壁が薄く、割りやすい。ヒメグルミにも人間による割跡が確認できる。

モモ：径は30mm程度であり、食用のモモと考えられる。モモは縄文時代晩期以降中国から渡来し江戸時代には食用と観賞用のモモの品種がほぼ定着していたと考えられている。観賞用のハナモモは核がほぼ球形で12ミリ前後と小さいため区別ができる。

ウメ：Aは径15ミリ前後の小さい核、Bは径25ミリ前後の大きい核でいわゆる豊後系とみられる。どちらも花は観賞用、果実は食用とする。

サクラ属サクラ節：Aは径13ミリ程度の大きいほぼ球形の核で、果実を食用とするミザクラではないかと考えられる。Bは径７ミリ程度の楕円形の核でヤマザクラなどと考えられる。

キササゲ：中国原産のマメ科で、細長い果実をむくみの薬や利尿剤として利用する。

ヤブツバキ、チャ：いずれもツバキ属で、ヤブツバキは径20ミリ程度の三角形で種子壁はかなり厚く堅く、チャは径10ミリ前後のほぼ球形で種子壁はツバキよりやや薄いが堅い。

キュウリ属メロン仲間：種子は丸みを帯びた水滴型で表面は平滑であり、微細模様は正方形に近い四角の網目である。同属のキュウリは種子がやや細長く基部がメロン仲間よりも尖り、網目模様は長方形であるため区別できる。

表5－1　武家屋敷地区第７地点出土種実観察表（1）
Tab.5－1　Notes on seeds and nuts at BK7（1）

種No	遺構	区	層位	分類群	部位	個数	部位	個数
1	2号遺構	H-9	埋土2層	モモ	核完形	1		
2	2号遺構	H-10	埋土1層	ウメA	核欠け	1		
3	-	E-5	2層	ウメA	核破片	1		
4	4号土坑	-	埋土9層	ウメA	核完形	1		
5	28号土坑	-	埋土1層	ウメA	核破片	4		
6	2号遺構	H-10	埋土2b層	ウメA	核半分	1		
7	1号遺構	G-7	埋土3層	ウメA	核完形	1		
8	2号遺構	H-11	埋土2層	ウメA	核破片	1		
9	1号遺構	G-7	埋土3層	ウメA	核完形	1		
10	2号遺構	G-11	埋土1層	ウメA	核欠け	1		
11	2号遺構	H-10	埋土2b層	ウメA	核完形	1		
12	2号土坑	-	埋土1層	ウメA	核完形	1	核欠け	1
13	2号遺構	H-10	埋土1層	ウメA	核破片	1		
14	2号遺構	H-10	埋土1層	ウメA	核半分	1		
15	2号遺構	H-11	埋土2層	ウメA	核破片	1		
16	1号柱列柱5	-	埋土	ウメA	核破片	1		
17	2号遺構	G-10	埋土3層	ウメA	核破片	1		
18	2号遺構	H-8	埋土2層	ウメA	核完形	1		
19	2号遺構	H-7	埋土3層	ウメA	核欠け	1	核破片	2
20	2号遺構	H-10	埋土2層	ウメA	核半分	1		
21	2号遺構	H-10	埋土2層	ウメA	核完形	1	核破片	1
22	4号土坑	-	埋土4層	サクラ節A	核完形	14	核欠け	1
23	4号土坑	-	埋土9層	サクラ節A	核完形	44	核半分	1
23	4号土坑	-	埋土9層	サクラ節A	核食痕	1	核欠け	1
24	4号土坑	-	埋土4層	サクラ節A	核完形	2		
25	4号土坑	-	埋土9層	サクラ節A	核完形	1		
26	4号土坑	-	埋土4層	サクラ節A	核完形	2	核欠け	3
27	4号土坑	-	埋土4層	サクラ節A	核完形	2	核破片	2
28	4号土坑	-	埋土9層	サクラ節A	核半分炭化	1	果実?	2
29	4号土坑	-	埋土4層	サクラ節B	核完形	5		
30	4号土坑	-	埋土4層	サクラ節B	核完形	1		
31	1号遺構	G-7	埋土3層	ミツバウツギ	種子	1		
32	2号遺構	H-9	埋土2層	ウメB	核完形	1		
33	2号遺構	H-7	埋土3層	カヤ	種子破片	1		
34	2号遺構	G-10	埋土2層	イチョウ	種子完形	1		
35	2号遺構	H-10	埋土2層	イチョウ	種子完形	1		
36	2号遺構	H-8	埋土2層	チャ	種子完形	1		
37	2号遺構	H-10	埋土2層	チャ	種子完形	1		
38	2号遺構	H-10	埋土2層	ヤブツバキ	種子完形	1		
39	2号遺構	H-9	埋土2層	チャ	種子完形	1		
40	2号遺構	H-10	埋土2b層	ヤブツバキ	種子完形	1		
41	28号土坑	-	埋土2層	カヤ	種子破片	1		
41	28号土坑	-	埋土2層	チャ	種子破片	1		
42	池状遺構新段階	-	埋土	ヒメグルミ	内果皮半分割跡	1		
43	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮完形	1		
44	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮半分割跡	1	内果皮破片	4
45	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮半分割跡	3		
46	池状遺構新段階	F-11	埋土2層	ヒメグルミ	内果皮破片	1		
47	2号土坑	-	埋土	ヒメグルミ	内果皮破片	1		
48	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮半分割跡	1	内果皮半分	2
48	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮破片	3		
49	4号土坑	-	埋土2層	ヒメグルミ	内果皮半分	1	内果皮破片	1
50	1号柱列柱4・13	-	埋土	ヒメグルミ	内果皮破片	9		
51	2号遺構	H-9	埋土2層	ヒメグルミ	内果皮半分	1		
52	2号遺構	G-10	埋土2層	土器片				
53	2号遺構	H-11	埋土2層	クリ	果皮破片	1		
54	2号遺構	H-10	埋土2層	クリ	果皮破片	1		
55	2号遺構	H-11	埋土2層	クリ	果皮破片	1		
56	2号遺構	H-8	最下層	クリ	果皮破片	1		
56	2号遺構	H-8	最下層	イタヤカエデ	種子破片	1		
57	2号遺構	G-10	埋土1層	クリ	果皮破片	6		
58	2号遺構	H-11	埋土2b層	クリ	果皮破片	1		
59	2号遺構	H-11	埋土2層	クリ	果皮破片	1		
60	2号遺構	H-8	埋土2層	オニグルミ	内果皮破片	4		
61	14号土坑	-	埋土	モモ	核風化	6		
62	4号土坑	-	埋土9層	モモ	核風化	1		
63	4号土坑	-	埋土9層	モモ	核半分	2		
64	4号土坑	-	埋土10層	モモ	核完形	1		
65	4号土坑	-	埋土5層	モモ	核完形	1		
66	4号土坑	-	埋土3層	モモ	核完形	1		
67	2号土坑	-	埋土	モモ	核完形	1		
68	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	1		
69	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	1		
70	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	5	核半分	1
71	2号土坑	-	埋土	モモ	核完形	2	核半分	2
72	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	3	核半分	1
73	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	1	核半分	2
74	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	1	核半分	2
75	14号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	1		
76	14号土坑	-	埋土1層	モモ	核風化	1		
77	15号土坑	-	埋土1層	モモ	核風化	1		
78	18号土坑	-	埋土2層	モモ	核完形	1		
79	18号土坑	-	埋土1層	モモ	核完形	1	核半分	2
80	18号土坑	-	埋土1層	モモ	核半分	1		

表5－2　武家屋敷地区第７地点出土種実観察表（2）
Tab.5－2　Notes on seeds and nuts at BK7（2）

種No	遺構	区	層位	分類群	部位	個数	部位	個数
81	24号土坑	F-11	埋土1・2層	モモ	核風化	1		
82	2号遺構	G-10	埋土2層	モモ	核完形	1		
83	2号遺構	H-9	埋土2層	モモ	核半分	1		
84	2号遺構	H-10	埋土1層	モモ	核半分	1		
85	2号遺構	H-10	埋土1層	モモ	核破片	2		
86	2号遺構	H-9	埋土2層	モモ	核完形	1		
87	2号遺構	H-10	埋土2b層	モモ	核完形	2		
88	2号遺構	G-11	埋土2層	モモ	核完形	1	核半分	1
89	2号遺構	H-10	埋土2b層	モモ	核完形	2		
90	2号遺構	H-10	埋土1層	モモ	核完形	1		
91	2号遺構	H-11	埋土2層	モモ	核完形	1		
92	2号遺構	H-9	埋土2層	モモ	核半分	1		
93	2号遺構	G-10	埋土2b層	モモ	核完形	1		
94	2号遺構	H-10	埋土2層	モモ	核完形	2		
95	2号遺構	G-11	埋土1層	ウメA	核完形	1		
96	2号遺構	G-10	埋土1層	ウメA	核完形	1		
97	2号遺構	H-10	埋土2層	モモ	核完形	2		
98	2号遺構	H-10	埋土2層	モモ	核完形	1		
99	2号遺構	H-9	埋土1層	モモ	核完形	1		
100	1号遺構	G-8	埋土2層	モモ	核完形	1		
101	池状遺構新段階	F-11	埋土2層	モモ	核半分	1		
102	池状遺構新段階	-	底面小礫内	モモ	核破片	1		
103	-	D-3	2層	モモ	核風化	1		
104	-	E-4	2層	モモ	核破片	1		
105	1号遺構	H-7	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
106	1号遺構	G-8	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
107	1号遺構	G-7	埋土3層	オニグルミ	内果皮完形	2	内果皮半分	1
107	1号遺構	G-7	埋土3層	オニグルミ	内果皮風化	1		
108	2号遺構	H-7	埋土3層	オニグルミ	内果皮破片	2		
109	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮破片	1		
110	2号遺構	H-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
111	2号遺構	H-7・8	埋土4層	オニグルミ	内果皮破片	3		
112	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	4	内果皮破片	1
113	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2		
114	2号遺構	G-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2		
115	2号遺構	H-10	埋土2b層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	4		
116	2号遺構	G-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分	1		
117	2号遺構	H-9	埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
118	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	4		
119	2号遺構	G-11	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分	1		
120	2号遺構	G-11	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	6		
121	2号遺構	G-11	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
122	2号遺構	H-10	埋土2層	ヒメグルミ	内果皮半分割跡	2		
123	2号遺構	H-7	埋土	オニグルミ	内果皮食痕	1	内果皮半分割跡	3
124	2号遺構	H-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮風化	1		
125	2号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮食痕	1	内果皮半分割跡	2
125	2号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮破片	2		
126	2号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分	1	内果皮半分割跡	1
127	2号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分	1		
128	4号土坑	-	埋土3層	オニグルミ	内果皮風化	1		
129	9号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮破片	2		
130	15号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮破片	1		
131	18号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分	1		
132	28号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2		
133	池状遺構新段階	E-11	埋土2層	ヒメグルミ	内果皮破片	1		
134	池状遺構新段階	E-11	埋土1層	オニグルミ	内果皮破片	3		
135	1号井戸	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮破片	1		
136	27号溝	E-10	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
137	-	E-4	2層	オニグルミ	内果皮風化	1		
138	1号遺構	G-7	埋土3層	オニグルミ	内果皮破片	1		
139	1号遺構	G・H-8	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分	2		
140	2号遺構	G-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
141	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	8	内果皮破片	1
142	2号遺構	G-10	埋土2b層	オニグルミ	内果皮完形炭化	1		
143	2号遺構	H-8	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形	1	内果皮半分	1
143	2号遺構	H-8	埋土2層	オニグルミ	内果皮風化	1		
144	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
145	2号遺構	H-7	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2	内果皮食痕	1
146	2号遺構	G-11	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
147	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
148	2号遺構	G-11	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分	1		
149	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形	1		
150	2号遺構	H-10	埋土2b層	オニグルミ	内果皮完形	1	内果皮半分	1
151	2号遺構	G-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
152	2号遺構	H-9	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2	内果皮破片	1
153	2号遺構	H-10	埋土2b層	オニグルミ	内果皮半分	1		
154	2号遺構	G-9	埋土1層	オニグルミ	内果皮風化	1		
155	2号遺構	H-9	埋土3層	オニグルミ	内果皮食痕	1		
156	2号遺構	H-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮破片	1		
157	2号土坑	-	埋土	オニグルミ	内果皮破片	1		
158	2号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮風化	1		
159	4号土坑	-	埋土11層	オニグルミ	内果皮半分	1		
160	4号土坑	-	埋土9層	オニグルミ	内果皮食痕	1		

表5－3　武家屋敷地区第７地点出土種実観察表（3）
Tab.5－3　Notes on seeds and nuts at BK7（3）

種No	遺構	区	層位	分類群	部位	個数	部位	個数
161	4号土坑	-	埋土4層	オニグルミ	内果皮完形	1	内果皮半分	1
162	15号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分	1		
163	15号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2		
164	28号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2	内果皮半分	1
165	28号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形	1		
166	12号溝	I-2	埋土1層	オニグルミ	内果皮風化	5	内果皮破片	1
167	12号溝	I-4	埋土2層	オニグルミ	内果皮風化	1		
168	24号土坑	F-10	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分	2		
169	12号溝	H・I-8	埋土	オニグルミ	内果皮半分	1	内果皮食痕	1
170	池状遺構新段階	-	底面小礫内	オニグルミ	内果皮半分	1	内果皮破片	2
171	-	E-4	2層	オニグルミ	内果皮破片	1		
172	-	G-10	3a層	オニグルミ	内果皮半分	1		
173	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分	1		
174	2号遺構	H-11	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1	不明枝	1
175	2号遺構	G-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
176	2号遺構	H-9	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分	1	内果皮半分割跡	2
176	2号遺構	H-9	埋土3層	オニグルミ	内果皮食痕	1	内果皮破片	3
176	2号遺構	H-9	埋土3層	モモ	核完形	1		
177	2号遺構	H-11	埋土2b層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
178	2号遺構	H-9	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1	内果皮破片	3
178	2号遺構	H-9	埋土1層	モモ	核完形	1	核半分	1
178	2号遺構	H-9	埋土1層	モモ	核破片	1		
178	2号遺構	H-9	埋土1層	ウメA	核完形	1		
179	2号遺構	G-10	埋土2b層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
180	2号遺構	H-10	埋土2b層	ウメA	核完形	3		
180	2号遺構	H-10	埋土2b層	ヒノキ	球果	1		
181	2号遺構	G-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2		
182	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形炭化	1	内果皮半分割跡	1
182	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
183	2号遺構	G-10	埋土2b層	オニグルミ	内果皮完形炭化	1		
184	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形	1		
185	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
186	2号遺構	H-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
187	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
188	2号遺構	H-11	2層下部	ヒョウタン仲間	果皮破片	1		
189	2号遺構	H-10	埋土2層	樹皮				
190	2号遺構	H-9・G-10	埋土2・1層	ウメA	核完形	1	核破片	2
190	2号遺構	H-9・G-10	埋土2・1層	ウメB	核完形	3		
191	2号遺構	H-9	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
192	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1	内果皮破片	1
192	2号遺構	H-9	埋土2層	ヒノキ	球果	1		
193	2号遺構	H-10	埋土2b層	ウメA	核完形	1		
194	2号遺構	H-9	埋土2層	ウメA	核破片	1		
195	2号遺構	H-10	埋土2b層	スギ	球果	1		
196	2号遺構	H-8	埋土2層	ウメA	核完形	1		
197	2号遺構	H-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
198	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮破片	2		
199	2号遺構	G-10	埋土2b層	ウメA	核完形	1		
200	2号遺構	H-10	埋土2b層	メロン仲間	種子	6		
201	2号遺構	H-10	埋土2b層	メロン仲間	種子	8		
201	2号遺構	H-10	埋土2b層	カボチャ仲間	種子	2		
202	2号遺構	G-10	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
202	2号遺構	G-10	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮半分割跡	1		
203	2号遺構	H-10	埋土2b層	ウメA	核完形	1		
204	2号遺構	H-10	埋土2層	ウメB	核完形	1		
205	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
206	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
206	2号遺構	H-9	埋土2層	モモ	核半分	1		
207	2号遺構	H-10	埋土2b層	メロン仲間	種子	361		
208	2号遺構	G-10	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
208	2号遺構	G-10	埋土2層	ウメA	核完形	1		
209	2号遺構	H-8	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
210	2号遺構	H-11	埋土2層	カボチャ仲間	種子	1		
211	2号遺構	H-8	埋土2層	モモ	核風化	1		
211	2号遺構	H-8	埋土2層	ウメA	核破片	1		
212	2号遺構	G-10	埋土2b層	ウメA	核完形	1		
213	2号遺構	H-10	埋土2b層	カヤ	種子	1		
214	2号遺構	H-10	埋土2層	ウメA	核完形	1		
215	2号遺構	H-9	埋土2層	ウメA	核完形	1		
215	2号遺構	H-9	埋土2層	チャ	種子	1		
216	2号遺構	G-10	埋土2層	チャ	種子	1		
217	2号遺構	H-10	埋土1層	ウメB	核完形	1		
218	2号遺構	H-8	埋土2層	ウメA	核完形	1	核半分	1
219	2号遺構	H-10	埋土2層	メロン仲間	種子	2		
220	2号遺構	H-9	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
221	2号遺構	H-10	埋土1層	ウメB	核完形	1		
221	2号遺構	H-10	埋土1層	チャ	種子	1		
222	2号遺構	H-9	埋土2層	ウメA	核半分	1		
222	2号遺構	H-9	埋土2層	ウメB	核完形	1		
223	2号遺構	H-8	埋土1層	ウメA	核完形	1		
223	2号遺構	H-8	埋土1層	メロン仲間	種子	90		
224	2号遺構	G-11	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
225	2号遺構	H-8	埋土2層	オニグルミ	内果皮風化	1		
226	2号遺構	H-11	埋土2b層	モモ	核完形	1		
227	2号遺構	-	土	イチョウ	種子	1		
227	2号遺構	-	土	カヤ	種子破片	1		
227	2号遺構	-	土	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
227	2号遺構	-	土	ウメB	核完形	3		
228	2号遺構	-	土D6	ウメA	核完形	1		
229	2号遺構	-	土I	オニグルミ	内果皮半分	1		
230	2号遺構	-	土N	モモ	核完形	1		

表5－4　武家屋敷地区第７地点出土種実観察表（4）
Tab.5－4　Notes on seeds and nuts at BK7（4）

種No	遺構	区	層位	分類群	部位	個数	部位	個数
231	2号遺構	-	-	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
232	2号遺構	H-8	埋土2層	モモ	核完形	1		
233	2号遺構	G-10	埋土2b層	スギ	球果	1		
234	2号遺構	G-10	埋土2b層	ウメA	核完形	3		
235	1号遺構	-	犬の下	オニグルミ	内果皮半分割跡	2	内果皮半分割跡炭化	1
235	1号遺構	-	犬の下	チャ	種子	1		
236	1号遺構	-	犬の下	オニグルミ	内果皮食痕	1		
236	1号遺構	-	犬の下	ヤブツバキ	種子破片	1		
236	1号遺構	-	犬の下	メロン仲間	種子	4		
237	1号遺構	-	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	2		
238	1号遺構	H-8	埋土3層	カボチャ仲間	種子	1		
239	1号遺構	G・H-8	埋土3層	イタヤカエデ	種子	1		
240	1号遺構	-	埋土3層	オニグルミ	内果皮食痕	1	内果皮半分割跡	2
240	1号遺構	-	埋土3層	オニグルミ	内果皮破片	1		
241	1号遺構	-	埋土3層	オニグルミ	内果皮食痕	1		
242	1号遺構	H-8	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	3		
243	2号土坑	-	埋土1層	モモ	核破片	1		
244	2号土坑	-	埋土1層	キンポウゲ属	果実	51		
245	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮破片	1		
246	2号土坑	-	埋土1層	ウメA	核完形	1		
247	2号土坑	-	埋土1層	ヒメグルミ	内果皮風化	1		
248	4号土坑	-	埋土9層	サクラ節	核破片	1		
249	4号土坑	-	埋土9層	昆虫				
250	4号土坑	-	埋土11層	ヒシ	果実	1		
251	13号土坑	-	-	ヒョウタン仲間	種子	16		
252	13号土坑	-	-	ヒョウタン仲間	種子	136		
253	28号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
254	28号土坑	-	埋土1層	オニグルミ	内果皮半分割跡炭化	1		
255	24号土坑	F-10	埋土3層	ウメB	核完形	1		
256	24号土坑	F-11	埋土2・1層	オニグルミ	内果皮完形	1		
257	24号土坑	F-10	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡	2		
258	24号土坑	F-10	埋土3層	ウメA	核完形	2		
259	15号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形	1	内果皮半分割跡	5
259	15号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮破片	3		
259	15号土坑	-	埋土2層	モモ	核完形	2	核半分	2
259	15号土坑	-	埋土2層	モモ	核破片	1		
260	15号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
261	18号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮完形炭化	1		
261	18号土坑	-	埋土2層	ウメA	核完形	1	核破片	1
262	18号土坑	-	埋土2層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
263	27号溝	E-10	埋土3層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1		
264	9号土坑	-	埋土1層	クルミ属	内果皮破片	20		
265	池状遺構新段階	E-11	埋土3層	フジ属	果皮破片	1		
266	2号遺構	H-9	埋土2層	クロマツ	球果	2		
267	2号遺構	H-9	埋土2層	クロマツ	球果	3		
268	1号遺構	G・H-8	埋土3層	クロマツ	球果	1		
269	2号遺構	H-8	埋土2層	クリ	果皮破片	1		
270	2号遺構	H-11	埋土2層	クリ	果皮破片	5		
271	2号遺構	G-10	埋土2層	マツ属	球果風化	1		
272	4号土坑	-	埋土13層	クロマツ	球果	1		
273	2号土坑	-	埋土1層	クロマツ	球果	1		
274	2号遺構	H-11	埋土2層	クロマツ	球果	1		
275	15号土坑	-	埋土2層	クロマツ	球果	2		
276	15号土坑	-	埋土2層	クロマツ	球果	1		
277	4号土坑	-	埋土9層	クロマツ	球果	1		
278	池状遺構新段階	-	-	クロマツ	球果	1		
279	1号遺構	G・H-8	埋土3層	クロマツ	球果	1		
280	1号遺構	-	犬の下	モミ属	種鱗	5		
280	1号遺構	-	犬の下	クリ	果皮破片	1		
281	1号遺構	-	埋土3層	クリ	果皮破片	2		
282	2号遺構	H-9	埋土2層	昆虫				
283	2号土坑	-	埋土1層	フジ属	果皮破片	5		
284	1号遺構	-	埋土3層	クロマツ	球果	5		
285	2号土坑	-	埋土1層	クロマツ	球果	1		
286	2号土坑	-	埋土1層	フジ属	果皮破片	4		
287	2号土坑	-	埋土1層	フジ属	果皮破片	7		
287	2号土坑	-	埋土1層	キササゲ	果実	2		
288	1号遺構	-	埋土3層	クロマツ	球果	4		
289	4号土坑	-	埋土4層	マツ属	球果風化	1		
290	4号土坑	-	-	クロマツ	球果	1		
291	2号遺構	G-11	埋土1層	マツ属	球果風化	2		
292	1号遺構	-	犬の下	モミ属	種鱗	1	種子	1
293	1号遺構	G・H-8	埋土3層	クロマツ	球果	1		
294	2号土坑	-	埋土	マツ属	球果風化	1		
295	2号土坑	-	埋土1層	クロマツ	球果	2		
296	2号土坑	-	埋土1層	スギ	球果	1		
297	15号土坑	-	埋土2層	クロマツ	球果	1		
298	1号遺構	G-7	埋土3層	クロマツ	球果	9		
299	2号土坑	-	埋土1層	フジ属	果皮破片	6		
300	2号土坑	-	埋土1層	フジ属	果皮破片	6		
300	2号土坑	-	埋土1層	キササゲ	果実	10		
301	2号土坑	-	埋土	フジ属	果皮破片	5		

C．第７地点における種実出土傾向と当時の植物利用

a．17世紀代：表5－5には17世紀代の遺構から出土した種実をまとめた。12号溝と９号土坑からオニグルミが検出されたが、溝内は割跡のない内果皮と小動物による食痕のある内果皮、風化内果皮であるのに対し、土坑は人が割った残渣と見られる破片を検出しているため溝の付近にオニグルミが生育し、それを利用していたと考えられる。13号土坑は目的不明であるが、ヒョウタン仲間の種子を多数出土したが他の種類をまったく出土しない。他のゴミもほとんど無いとすれば水関連の遺構の可能性も考えられる。14号はモモのみ出土した。

表5－5　武家屋敷地区第７地点17世紀代遺構別出土種実
Tab.5－5　Count the seeds and nuts from the each features dated 17th century at BK7

分類群名		出土部位＼遺構	12号溝	9号土坑	13号土坑	14号土坑
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分	1	-	-	-
	var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮食痕	1	-	-	-
		内果皮破片	1	2	-	-
		内果皮風化	6	-	-	-
クルミ属	*Juglans*	内果皮破片	-	20	-	-
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核完形	-	-	-	1
		核風化	-	-	-	7
ヒョウタン仲間	*Lagenaria siceraria* L.	種子	-	-	152	-

b．18世紀代：表5－6～表5－7には18世紀代の遺構から出土した種実をまとめた。大規模廃棄土坑のうち１号と２号は多種類の種実が埋積しており、オニグルミやクリ、モモ、メロン仲間、カボチャ仲間などの食用とクロ

表5－6　武家屋敷地区第７地点18世紀代遺構別出土種実（1）
Tab.5－6　Count the seeds and nuts from the each features dated 18th century at BK7（1）

			大規模廃棄土坑			廃棄土坑	井戸	溝
分類群名		出土部位＼遺構	1号遺構	2号遺構	24号土坑	15号土坑	1号井戸	27号溝
イチョウ	*Ginkgo biloba* L.	種子	-	3	-	-	-	-
カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	種子	-	1	-	-	-	-
		種子破片	-	2	-	-	-	-
クロマツ	*Pinus thunbergii* Parl.	球果	21	6	-	4	-	-
マツ属	*Pinus*	球果風化	-	3	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	種鱗	6	-	-	-	-	-
		種子	1	-	-	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don	球果	-	2	-	-	-	-
ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl.	球果	-	2	-	-	-	-
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分割跡	6	53	2	8	-	2
	var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮半分割跡炭化	6	18	-	-	-	-
		内果皮完形炭化	-	3	-	-	-	-
		内果皮完形	2	4	1	1	-	-
		内果皮食痕	3	4	-	-	-	-
		内果皮風化	1	4	-	-	-	-
		内果皮半分	3	9	2	1	-	-
		内果皮破片	2	25	-	4	1	-
ヒメグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分割跡	-	3	-	-	-	-
	var. *subcordiformis* Dode	内果皮半分	-	1	-	-	-	-
クリ		果皮破片	3	18	-	-	-	-
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核完形	1	22	-	2	-	-
		核風化	-	1	1	1	-	-
		核半分	-	6	-	2	-	-
		核破片	-	3	-	1	-	-
ウメA	*Prunus mume* L. typeA	核完形	2	24	2	-	-	-
		核半分	-	5	-	-	-	-
		核欠け	-	3	-	-	-	-
		核破片	-	11	-	-	-	-
ウメB	*Prunus mume* L. typeB	核完形	-	11	1	-	-	-
イタヤカエデ	*Acer mono* L.	種子	1	1	-	-	-	-
ヤブツバキ	*Camelia japonica* L.	種子完形	-	2	-	-	-	-
		種子破片	1	-	-	-	-	-
チャ	*Camelia sinensis* O. Kuntze	種子	1	6	-	-	-	-
ミツバウツギ	*Staphylea bumalda* DC.	種子	1	-	-	-	-	-
ヒョウタン仲間	*Lagenaria siceraria* L.	果皮破片	-	1	-	-	-	-
メロン仲間	*Cucumis melo* L.	種子	4	467	-	-	-	-
カボチャ仲間	*Cucurbita moschata* Duch. ex Poiret.	種子	1	3	-	-	-	-

表5－7　武家屋敷地区第７地点18世紀代遺構別出土種実（2）
Tab.5－7　Count the seeds and nuts from the each features dated 18th century at BK7（2）

分類群名		出土部位＼遺構	使用目的不明土坑 4号土坑	18号土坑	28号土坑	基本層 3a層
カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	種子破片	-	-	1	-
クロマツ	*Pinus thunbergii* Parl.	球果	3	-	-	-
マツ属	*Pinus*	球果風化	1	-	-	-
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分割跡	-	1	5	-
	var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮半分割跡炭化	-	-	1	-
		内果皮完形炭化	-	1	-	-
		内果皮完形	1	-	1	-
		内果皮食痕	1	-	-	-
		内果皮風化	1	-	-	-
		内果皮半分	2	1	1	1
ヒメグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分	1	-	-	-
	var. *subcordiformis* Dode	内果皮破片	1	-	-	-
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核完形	3	2	-	-
		核風化	1	-	-	-
		核半分	2	3	-	-
ウメA	*Prunus mume* L. typeA	核完形	1	1	-	-
		核破片	-	1	4	-
サクラ節A	*Prunus* sect.Pseudocerasus typeA	核完形	65	-	-	-
		核食痕	1	-	-	-
		核半分炭化	1	-	-	-
		核欠け	5	-	-	-
		核半分	1	-	-	-
		果実?	2	-	-	-
		核破片	2	-	-	-
サクラ節B	*Prunus* sect.Pseudocerasus typeB	核完形	6	-	-	-
サクラ節	*Prunus* sect.Pseudocerasus	核破片	1	-	-	-
チャ	*Camelia sinensis* O. Kuntze	種子破片	-	-	1	-
ヒシ	*Trapa bispinosa* Roxb. var. *iinumai* Nakano	果実	1	-	-	-

マツ、モミ属などの庭木がともに堆積していることから食糧残渣だけでなく様々なゴミを捨てる穴だったと判断される。また、24号土坑はオニグルミ、モモ、ウメを出土することから食料廃棄中心だった可能性もある。15号土坑はオニグルミやモモの他クロマツを出土した。１号井戸と27号溝からはオニグルミを少量出土した。使用目的不明の土坑のうち、４号土坑はサクラ節やオニグルミ、ヒメグルミ、モモ、ヒシなどの食糧残渣と、クロマツも出土しているためやはりゴミ廃棄土坑の可能性がある。18号土坑、28号土坑からは廃棄土坑とされる15号土坑と同程度の数量の種実が出土し、種類もオニグルミ、モモ、ウメなど食料が中心となっているが量は少ない。基本層からはオニグルミ１個を出土した。

表5－8　武家屋敷地区第７地点幕末から明治初頭の遺構別出土種実
Tab.5－8　Count the seeds and nuts from the each features dated the final edo period to the initial Meiji period

分類群名		出土部位＼遺構	池状遺構新段階	2号土坑	1号柱列柱4･13	1号柱列柱5
クロマツ	*Pinus thunbergii* Parl.	球果	1	4	-	-
マツ属	*Pinus*	球果風化	-	1	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don	球果	-	1	-	-
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分	1	2	-	-
	var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮半分割跡	-	3	-	-
		内果皮食痕	-	1	-	-
		内果皮風化	-	1	-	-
		内果皮破片	5	3	-	-
ヒメグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分割跡	1	5	-	-
	var. *subcordiformis* Dode	内果皮半分	-	2	-	-
		内果皮完形	-	1	-	-
		内果皮風化	-	1	-	-
		内果皮破片	2	9	9	-
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核半分	1	8	-	-
		核完形	-	15	-	-
		核破片	1	1	-	-
ウメA	*Prunus mume* L. typeA	核完形	-	2	-	-
		核欠け	-	1	-	-
		核破片	-	-	-	1
フジ属	*Wisteria*	果皮破片	1	33	-	-
キササゲ	*Catalpa ovata* G. Don	果実	-	12	-	-
キンポウゲ属	*Ranunculus*	果実	-	51	-	-

c．幕末から明治初頭：表5－8には幕末から明治初頭にかけての遺構から出土した種実をまとめた。池状遺構からはクロマツ、オニグルミ、ヒメグルミ、モモ、フジ属を出土したがいずれも少量である。水生植物の種子はまったく出土せず、池として機能している間はおそらく底を頻繁に清掃していたとみられ、放棄直後に埋め戻ししたために種実が少量しか出土しなかった可能性がある。使用目的不明の２号土坑は、食用とするオニグルミ、ヒメグルミ、モモ、ウメのほか、周囲に植栽されていたクロマツ、スギ、フジ属、キササゲ、キンポウゲ属を出土し、表5－6・表5－7の廃棄土坑と出土傾向が似ている。柱列からはヒメグルミとウメを少量出土し、おそらく柱が抜かれた跡に入り込んだと見られる。

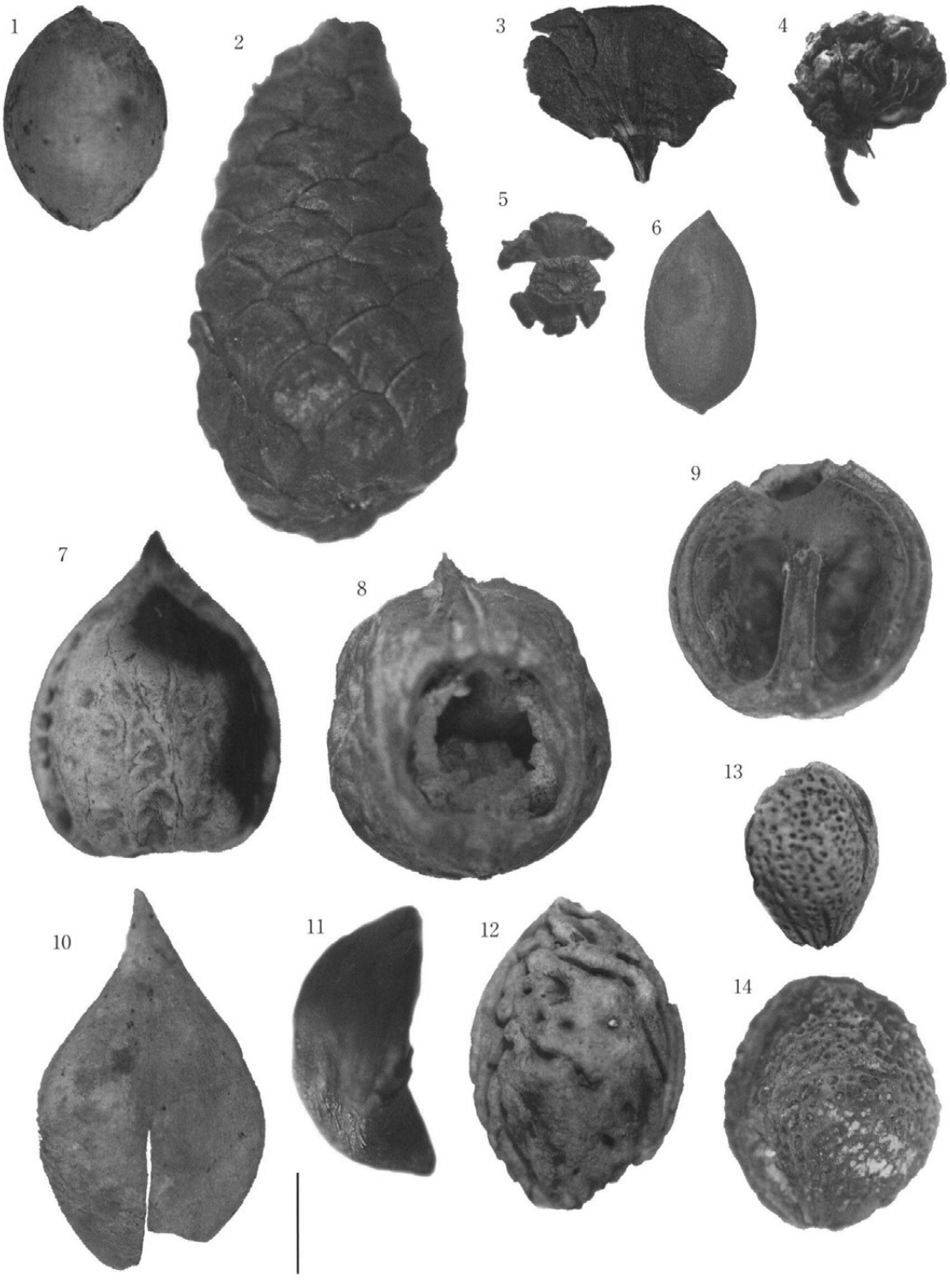
d．明治前半：表5－9には明治前半から出土した種実をまとめた。出土は基本層のみで、オニグルミ、モモ、ウメを少量出土した。

表5－9　武家屋敷地区第７地点明治前半の遺構別出土種実

Tab.5－9　Count the seeds and nuts from the each features dated the early Meiji period

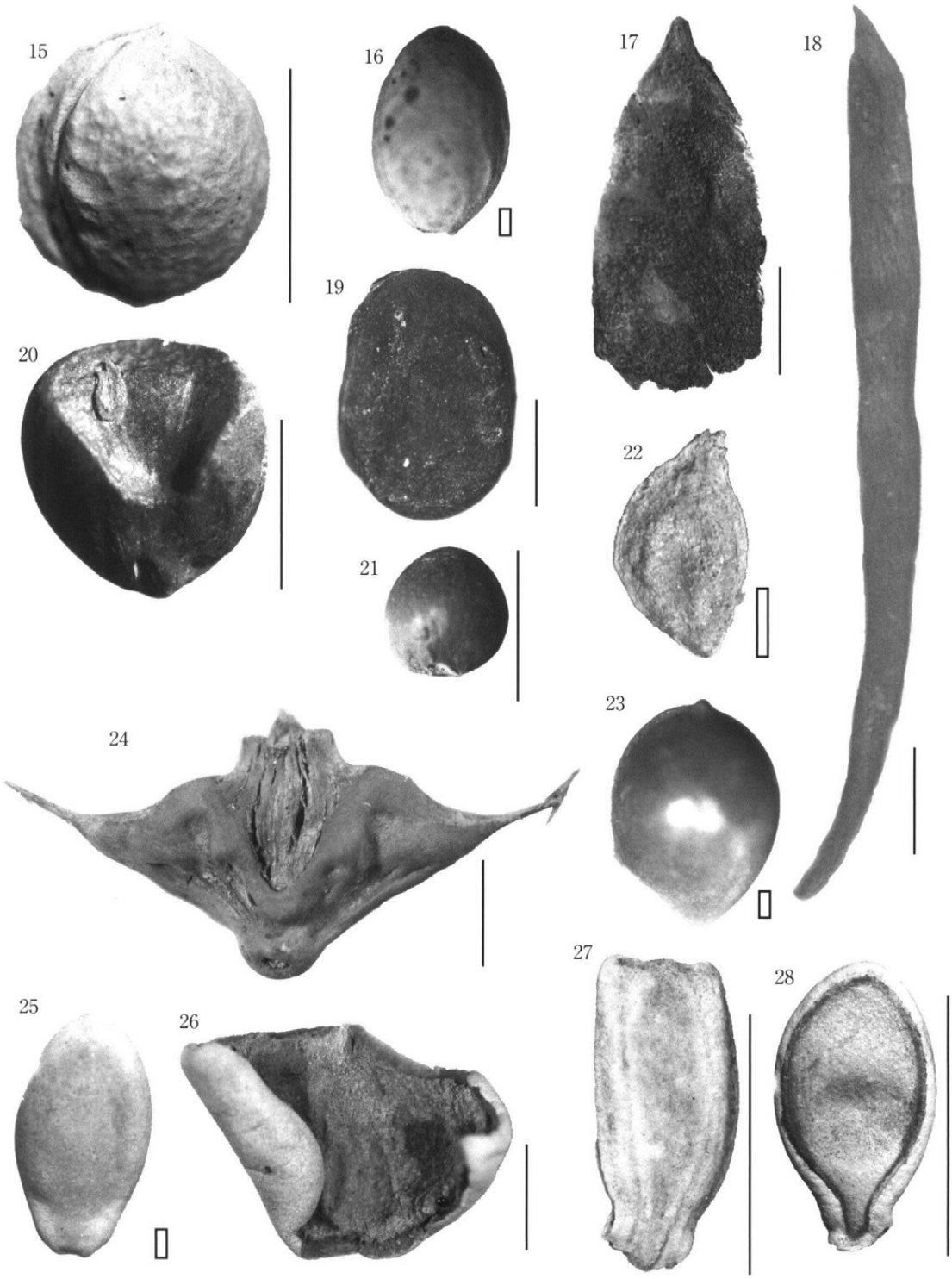
分類群名		出土部位＼遺構	2層
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮風化	1
	var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮破片	1
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核風化	1
ウメA	*Prunus mume* L. typeA	核破片	1
		核破片	1

e．まとめ：仙台城二の丸北方武家屋敷第7地点では、クロマツやスギなどとともに、近接する屋敷で利用するための食糧としてオニグルミ、モモ、ウメなどを敷地内に植栽していたとみられる。廃棄遺構には植栽されていた植物種実とこれらの食物残渣がともに廃棄されたと考えられ、それらの一部がほかの遺構や溝にも流れ込んでいた。18世紀代の４号土坑では水生植物のヒシを出土したが、４号土坑は水域とは考えられないため、このヒシは利用のために持ち込まれた後土坑に廃棄されたと考えられる。オニグルミ、モモ、ウメは18世紀代から明治前半まで連続して出土しており、屋敷内に食糧とできる庭木を敷地内に植栽するという習慣が現在まで継続していると考えられる。



1.イチョウ、種子（35） 2.クロマツ、球果（267） 3.モミ属、種鱗（280） 4.スギ、球果（195）
5.ヒノキ、球果（180） 6.カヤ、種子（213） 7.オニグルミ、内果皮炭化（110） 8.オニグルミ、内果皮食痕（123）
9.オニグルミ、内果皮半分割跡（123） 10.ヒメグルミ、内果皮半分割跡（42） 11.クリ、果皮破片（55）
12.モモ、核（70） 13.ウメA、核（20） 14.ウメB、核（32）
（スケールは10mm）

図5－1　武家屋敷地区第７地点出土種実（1）
Fig.5－1　Seeds and nuts at BK7（1）



15.サクラ節A、核（22） 16.サクラ節B、核（29） 17.フジ属、果皮破片（300） 18.キササゲ、果実（300）
19.イタヤカエデ、種子（56） 20.ヤブツバキ、種子（40） 21.チャ、種子（39） 22.キンポウゲ属、果実（244）
23.ミツバウツギ、種子（31） 24.ヒシ、果実（250） 25.メロン仲間、種子（201） 26.ヒョウタン、果皮破片（188）
27.ヒョウタン、種子（251） 28.カボチャ仲間、種子（201）
（スケールは10mm、ただし16, 22, 23, 25は1mm）

図5－2　武家屋敷地区第７地点出土種実（2）
Fig.5－2　Seeds and nuts at BK7（2）

(6) 武家屋敷地区第７地点出土の動物遺存体

門脇　隆志（鳥取県埋蔵文化財センター）

①資料の採集方法

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点では、図6－1に示した遺構から、動物遺存体が出土している。

武家屋敷地区第７地点出土の動物遺存体は、その採集方法において大きく２種類に分けられる。

ひとつは、発掘時に目視で確認されたものである。このなかには、単独で取り上げられたものだけでなく、ある程度のブロックとして土壌ごと採取したものもある。これらの土壌は、５mm篩と１mm篩を用いた水洗選別を行った。なお、木製品などの洗浄の際検出された資料もこれに含める。以下、これを目視資料として扱う。

もうひとつは、２号遺構の南端で採取した柱状土壌サンプルから検出された資料である（図6－2)。土壌サンプルはＡ～Ｑの細別層に対応した採取がなされている。アルファベットの次に付された丸囲み数字は、それぞれのサンプルでの採集回数を示す。サンプルごとに10リットルの土壌を、目視資料と同様５mmと１mmの篩を用いた水洗選別による資料の検出を行った。以下これを土壌サンプル資料として扱う。

②同定および算定について

【貝類】

残存状況、標本との照合ができないなどの要因から、種レベルまで同定ができない場合もあった。アワビは生物学的な分類ではミミガイ科となるが、アワビ類として算定した。食用としたと考えられる貝種は限られたものであり（ヤマトシジミ、アワビ類、マガキ、フネガイ科、アカニシ、アサリ)、柄杓に用いられたイタヤガイを除き、そのほかの貝種は、アワビ類やマガキに混じって搬入されたものと考えられる。

食用の貝種については殻頂による算定に加え、重量も示した。そのほかの貝種は点数のみを示す。また、同定の困難な稚貝も多く含まれるが、これらは分かる範囲で同定、記載するに止めたい。

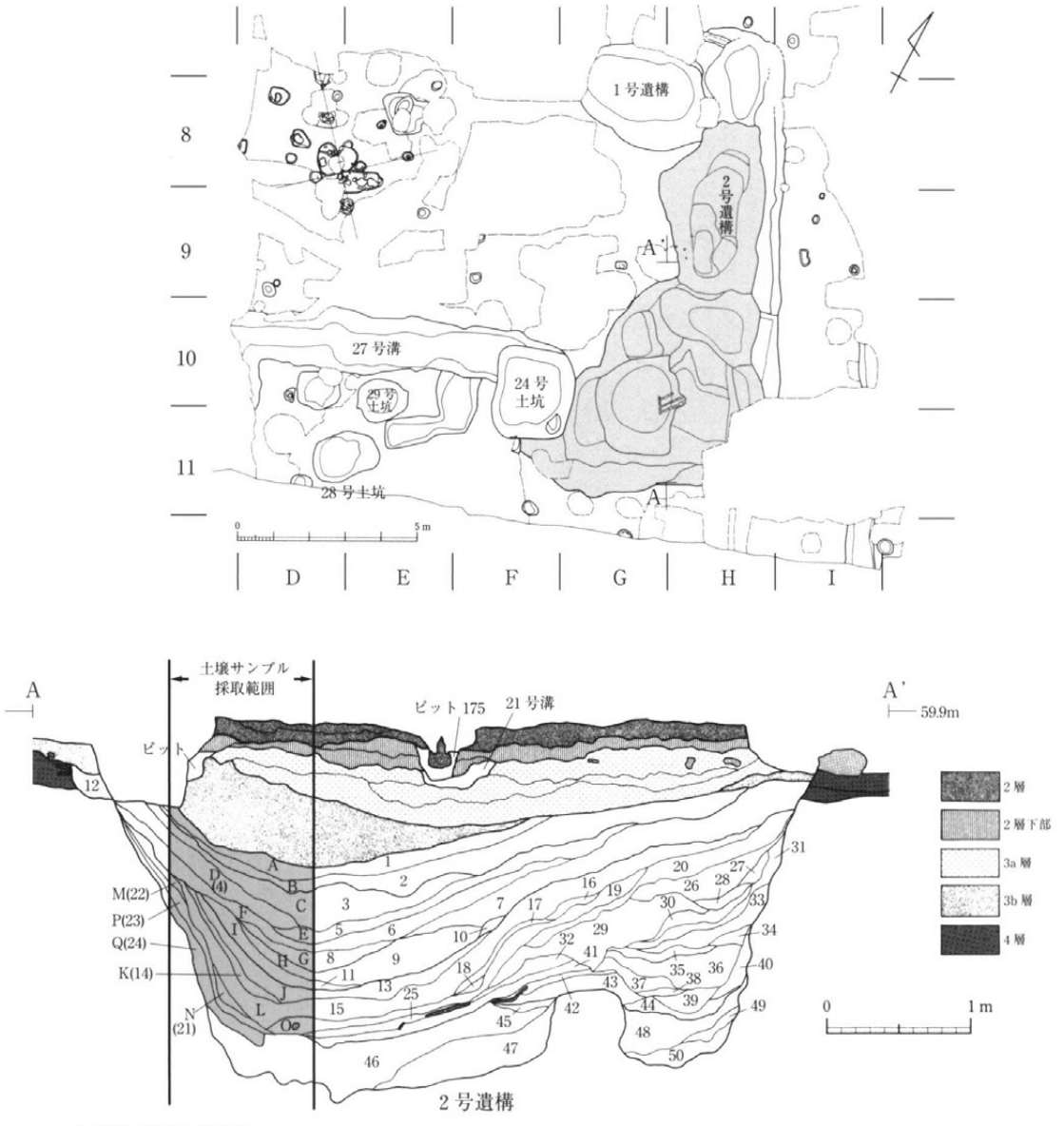
【魚類】

魚類の同定については、その種類が多岐にわたるため、遺跡から出土する可能性の高い魚類をリストアップし、候補を絞り込む手法を用いた。当地点から出土する可能性の高いと考えられる魚類については、仙台湾でおこなわれた魚類群の調査を参照とした（川崎・佐々木1980)。一般的に遺跡産魚類の同定に用いられる部位骨と中心として同定をおこなったが、魚類の種類によっては、その種類に特化した部位骨による同定もおこなった（カレイ科魚類の第一血管間棘など)。同定は生物学的な系統分類に基づくべきであるが、遺跡産魚類の同定においては、生物学的な分類に当てはめることができない場合もある。例えば、椎骨は、生物学的な分類においては異なるグループであっても、その形態が類似している場合も少なくない。そのような場合には、～型というような分類をおこなった。このような分類は、あくまで考古学側の分類であり、生物学的には意味をなさないものではある。また、そのグループに属する種が多いため、先に述べた候補から絞り込むことはできないが、形質が一致すること、食材としての利用価値から考えて、特定の種である可能性が非常に高いことを指摘できるものもある(マハゼ、カナガシラなど)。魚類には同定ができなかったものもあるが、一般的に同定に用いられる部位骨と判断ができるものに関しては、「不明」とした。

出土した部位骨には破損しているものが多い。したがって、ダブリングを防ぐために、間接部が半分以上残存しているものを算定した。椎骨に関しては半分以上残存しているものを算定した。このようにして、算定した値が、同定破片数（NISP）となる。最小個体数（MNI）は、同定破片数をもとに算出するものであるが、求め方(左右の考慮、大きさによるペアリングなど）によって、値が大きく異なる。また、分析の結果から、魚種によって部位別の組成が大きく異なる。このような点を踏まえると、同定破片数は、研究者によるバイアスが働きに

Ⅰ期遺構配置図　　Ⅱ期遺構配置図

図6－1　武家屋敷地区第７地点における動物遺存体が出土した遺構
Fig.6－1　Distribution of features with animal remains at BK7



2号遺構土壌サンプル註記

A＝1　10YR2/1黒　粘土　粘性強　しまり弱　小礫・炭化物をわずかに含む
B＝2　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　小礫・木製品をわずかに、炭化物を多く含む
C＝3　10YR1.7/1黒　砂質シルト　粘性強・しまり弱　小礫・木製品をわずかに、炭化物を多く含む
D＝4　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木製品・炭化物を多く含む
E＝5　10YR2/1砂質シルト　粘性強・しまり中　炭化物・木製品を多く含む
F＝6　10YR1.7/1黒　シルト　粘性強・しまり中　炭化物・木製品を多く含む
G＝8　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・木製品を多く含む
H＝9　10YR3/1黒褐色　砂　粘性弱・しまり弱　木製品・礫を多く含む
I＝11　10YR2/2黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱　木製品を多量に含む
J＝13　10yr3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　小礫をわずかに含む
K＝14　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　炭化物・砂をわずかに含む
L＝15　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を多量に含む
M＝22　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・黄褐色粘土を含む
N＝21　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり弱　多量の種子含む　17と同一層
O＝19　10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・多量の木製品を含む　種子をわずかに含む
P＝23　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　炭化物を多く含む
Q＝24　10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり弱　多量の木製品を含む

2号遺構

A・B　埋土1層
C～I　埋土2層
J～Q　埋土2b層

図6－2　武家屋敷地区第7地点2号遺構土壌サンプル採取範囲
Fig.6－2　Distribution of soil samples of No.2 structural remains at BK7

くい値であるといえる。しかし、残存しやすい部位骨や、同定しやすい特徴的な部位骨を多く有する魚類が多く算定されている可能性は高いといえる。

【鳥類】

鳥類は、現生標本の確保が充分でないことから、種レベルでの同定は不可能であった。出土した鳥類は、ガン・カモ科とキジ科がほとんどであったため、同定可能な部位骨では不明のものは多くはなかった。しかし、ガン・カモ科は多くの種を含むグループであるため、大きさによる分類をおこなった。カモ類の分類基準は『中沢目貝塚Ⅱ』（富岡1997）によるA～E類の5段階に分類する方法をとった。このような分類も、考古学側の分類であるが、大きさを捉えることはできる。『中沢目貝塚Ⅱ』（富岡　前掲）では大型のガン・カモ科は上腕骨長によって、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガンに分けられているが、当遺跡出土鳥類に破片資料が多いこと、現生標本との比較が困難であったことから、ガン類と一括した。生物学的には意味をなさない大きさによる分類によって、種名を挙げることがはばかられると考えられることも、このようにした理由のひとつである。

算定の際には、近位端、遠位端ごとに捉えることが重要となる。骨端が半分以上残存しているものを算定し、骨端が破損しているものは骨幹とした。

【哺乳類】

算定の方法は、鳥類と同様である。

【その他】

点数は少ないが、フジツボ、カニ、昆虫、ウニが検出された。同定・算定が困難な資料であるが、位置情報を含めて可能な限り記載した。

③確認された動物遺存体の種名

武家屋敷地区第7地点出土の動物遺存体の種名の一覧を、以下に示す。

軟体動物門　MOLLUSCA
- 腹足綱　GASTROPODA
  - アクキガイ科　Muricidae
    - アカニシ　*Rapana venosa* (Valenciennes)
  - ウミニナ科　Potamididae
    - ホソウミニナ　*Batillaria cumingii* (Crosse)
  - タマキビ科　Littorinidae gen. et sp. indet
  - ミミガイ科　Haliotidae gen. et sp. indet
  - ムカデガイ科　Vermetidae
    - オオヘビガイ　*Serpulorbis* (*cladopoma*) *imbricatus* (Dunker)
  - ユキノカサガイ科　Acmaeidae
    - コウダカアオガイ *Notoacmea concinna* (Lischke)
  - リソツボ科　Rissoidae gen. et sp. indet
- 斧足綱　PELECYPODA
  - イタボガキ科　Ostreidae
    - マガキ　*Crassostrea gigas* (Thunberg)
  - イタヤガイ科　Pectinidae
    - イタヤガイ　*Pectin* (*notovola*) *albicans*

シジミ科　Corbiculidae

ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

ミノガイ科　Limidae

ナミマガシワ　*Anomiwa Chinensis* (Philippi)

フネガイ科　Arcidae gen. et sp. indet

マルスダレガイ科　Veneridae

アサリ　*Ruditapes philippinarum* (Adams et Reeve)

ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Roeding)

節足動物門　ARTHROPODA

甲殻綱　CRUSTACEA

完脚目　Thoracica

フジツボ科　Balanus gen. et sp. indet

十脚目　Decapoda fam. indet

昆虫綱　INSECTA

鞘翅目　Coleoptera fam.indet

双翅目　Diotera fam.indet

棘皮動物門　ECHINODERMATA

ウニ綱　ECHINOIDEA

エキヌス目　Echinoida

ナガウニ科　Echinometidae gen. et sp. indet

脊椎動物門　VERTEBRATA

魚上綱　PISCES

硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

アイナメ科　Hexagrammidae sp. indet

アイナメ属　*Hexagrammos* sp. indet

アジ科　Carangidae sp. indet

マアジ属　*Trachurus* sp. indet

ブリ属　*Seriola* sp. indet

アナゴ科　Congridae

マアナゴ　*Conger myriaster* (Brevoort)

アユ科　Plecoglossidae

アユ　*Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel)

ウナギ科　Anguillidae

ウナギ　*Anguilla japonica* (Temminck et Schlegel)

ウミタナゴ科　Embiotocidae

ウミタナゴ　*Ditrema temmincki temmincki* (Bleeker)

カタクチイワシ科　Engraulidae

カタクチイワシ　*Engraulis japonica* (Houttuyn)

カレイ科　Pleuronectidae gen. et sp. indet

コイ科　Cyprinidae gen. et sp. indet

コチ科　Platycephalidae gen. et sp. indet
サケ科　Salmonidae gen. et sp. indet
サバ科　Scombridae sp. indet
カツオ　*Kastuwonus pelamis* (Linaeus)
マグロ属　*Thunnus* sp. indet
サヨリ科　Hemiramphidae
サヨリ　*Hemiramphus sajori* (Temminck et Schlegel)
スズキ科　Serranidae
スズキ　*Lateolabrax japonicus* (Cuvier et Valenciennes)
タイ科　Sparidae
マダイ　*Pagrus major* (Temminck et Schlegel)
チダイ　*Evynnis japonica* (Tanaka)
タラ科　Gadidae gen. et sp. indet
ニシン科　Clupeidae gen. et sp. indet
ハゼ科　Gobiidae gen. et sp. indet
ヒラメ科　Paralichthyidae
ヒラメ　*Paralichthys olivaceus* (Temminck et Schlegel)
フサカサゴ科　Scorpaenidae gen. et sp. indet
ホウボウ科　Triglidae
カナガシラ　*Lapidotrigla microptera* (Gunther)
軟骨魚綱　CHONDRICHTHYES
板鰓亜綱　ELASMOBRANCHII
エイ目　Rajiformes fam. indet
鳥綱　AVES
ガン・カモ目　Anseriformes
ガン・カモ科 Anatidae gen. et sp. indet
【カモ類】　Ducks
Aタイプ　Atype
Bタイプ　Btype
Cタイプ　Ctype
Dタイプ　Dtype
Eタイプ　Etype
キジ目　Galliformes
キジ科　Phasianidae gen. et sp. indet
スズメ目　Passeres
カラス科　Corvidae gen. et sp. indet
チドリ目　Charadriiformes
シギ科　Scolopacidae gen. et sp. indet
哺乳綱
ウシ目（偶蹄目）　Artiodactyla

イノシシ科　Suidae

イノシシ　*Sus scrofa* (Linnaeus)

シカ科　Cervidae

ニホンジカ　*Cervus nippon* (Temminck)

ネズミ目（齧歯類）　Rodentia

ネズミ科　Muridae gen. et sp. indet

ネコ目（食肉目）　Carnivora

イヌ科　Canidae

イヌ　*Canis lupus familiaris* (Linnaeus)

ネコ科　Felidae

ネコ　*Felis silvestris catus* (Linnaeus)

④動物遺存体の生態と出土状況

A．貝類（図6－3、表6－1･2）

貝類は2綱13科11種が同定されている。すべて、目視資料であり、土壌サンプルからは検出されなかった。当遺跡で主体となるものは、ヤマトシジミ、アワビ類（ミミガイ科）、マガキであり、その他の貝種は少ない。

アカニシ　*Rapana venosa*

大形の岩礁性貝類で食用とされる。27号溝埋土3層・4層から各1点、2号遺構埋土1層から破片が出土している。いずれも大形のものである。点数が少ないため、食用であったとしても利用頻度は低かったであろう。

ホソウミニナ　*Batillaria cumingii*

外海の干潟や岩礁の間の泥底に生息する貝。アワビ類などに付着してきたものと思われる。2号遺構埋土2b層から検出された。

タマキビ科　Littorinidae gen. et sp. indet

アワビなどに付着して搬入されたものと考えられる。24号土坑から検出された。

ミミガイ科　Haliotidae gen. et sp. indet

各種のアワビ類を含む科である。重量においてはもっとも大きな値を示し、2号遺構の各層、24号土坑から出土している。遺物の中に完形のものはなく、すべて破片である。したがって、貝殻全体の形状が明らかでなく、種レベルでの同定は困難であるが、比較的に大形の破片における表面の形状から、クロアワビが含まれていると考えられる。また、殻頂によって算定を行ったが、その中には、小形のものも多く含まれており、出土したミミガイ科のなかにはいくつかの種が含まれている可能性がある。こうしたことから、クロアワビの他に、メダカアワビ、エゾアワビ（クロアワビの環境変異型）、トコブシなどが含まれている可能性が指摘できる。

ムカデガイ科　Vermetidae

マガキやアワビ類に付着しているものが多かった。種レベルまで同定できたのはオオヘビガイだけであった。

オオヘビガイ　*Serpulorbis* (*cladopoma*) *imbricatus*

岩礁に生息する貝であるが、アワビ類に付着しているものが多かった。

ユキノカサガイ科　Acmaeidae

2号遺構埋土2層で検出。他の貝に付着していたものであると考えられる。潮間帯付近に生息する。出土した個体はキクユザラの可能性が考えられる。種レベルまで想定できたものとしてコウダカアオガイがある。

コウダカアオガイ　*Notoacmea concinna*

２号遺構埋土２層から１点検出。潮間帯岩礁に生息する貝なのでアワビ類に付着してきたものと考えられる。

リソツボ科　Rissoidae gen. et sp indet

フトウネチョウジガイの可能性が高い。２号遺構埋土2ｂ層から１点検出された。潮間帯から潮下帯、転石下に生息する。

イタボガキ科　Ostreidae

種レベルまで同定できたものはマガキのみであった。マガキ以外は、アワビ類に付着した状態で検出されたものがほとんどである。イタボガキやクロヒメガキなどが含まれる可能性が考えられる。

マガキ　*Crassostrea gigas*

汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底でしばしばカキ礁をつくる。破損しているものが多く、また、殻に決まった形がないため計測はしていないが、かなり大きなものもある。出土量もアワビ類についで多いことから、貝類の中では食材として重要なものであったと考えられる。

イタヤガイ　*Pectin* (*notovola*) *albicans*

北海道南部から九州の10～100ｍの砂底に生息する。右殻は左殻より大きく、強く膨れる。２号遺構埋土２層から２点、埋土１層から２点が確認された。そのすべてが右殻（ふくらむ方の殻）であり、さらに殻を正面からみて左下の部分が残存しているものについては例外なく２つの穿孔がある。また、２つの穿孔には大小が認められる。他の近世遺跡からも同様の状態で出土しており、貝殻杓として報告されている。このことから、当遺跡で出土しているイタヤガイも食用としてではなく、柄杓として利用された貝製品であると思われる。

ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*

日本全国の河口、潟などの汽水域の砂泥底に生息する。最小個体数のうえでは最も多く、当遺跡出土貝類のなかでも主体となるものである。

ナミマガシワ　*Anomia chinensis*

水深20ｍ以浅の岩礫底に生息する。２号遺構埋土2ｂ層から右殻が１点のみ出土している。他の貝に付着していたものであろう。

フネガイ科　Arcidae

フネガイ科のなかでも大形のものである。アカガイである可能性が高い。２号遺構の埋土１層・埋土２層・埋土2b層、わずかであるが24号土坑から出土している。殻頂が認められず、すべて破片として出土した。

アサリ　*Raditapes philippinarum*

日本各地の内湾潮干帯砂泥底に生息する。当地点からの出土は少ない。

ハマグリ　*Meretrix lusoria*

北海道以南の日本全土の内湾潮干帯砂泥底に生息する。多くの江戸遺跡において主体を占めるもののひとつであるが、当地点からの出土は少ない。

Ｂ．節足動物（図6－3、表6－3）

２綱４目１科が同定された。なお昆虫は、混入の可能性もあるため、出土点数の一覧表には記載していない。

フジツボ科　Balanus gen. et sp. indet

アワビやマガキなどに付着してきたものと考えられる。非常に大型のものも含まれており、これはオオアカフジツボである可能性が高い。そのほかには、シロスジフジツボなどが含まれていると考えられる。２号遺構の各層、24号土坑といった貝類が多く出土している層・遺構からは必ずと言っていいほど検出される。

十脚目　Decapoda

カニの仲間である。埋土１層を除く２号遺構各層から検出されたが点数は少なく、すべて可動指か不動指（ツメの部分）である。食生活の中で大きな比重を占めるものではなかったと思われる。

昆虫綱

双翅目　Diptera

各種のハエやアブを含むグループである。2号遺構からは多量のハエのさなぎが出土している。

鞘翅目　Coleoptera

いわゆる甲虫の仲間である。点数は少ないが2号遺構から出土している。破片での出土しかなく目レベル以上の同定は困難であった。

C．棘皮動物（図6－3、表6－3）

同定されたものは1綱1科のみである。

ウニ綱

ナガウニ科　Echinometidae gen. et sp. indet

24号土坑埋土3層からのみ、殻板と棘が数点検出された。ムラサキウニである可能性がある。カニ同様食物としては重要ではなかったと考えられる。

D．魚類（図6－4～6、表6－4～8）

魚類は2綱1目23科4属11種が同定されている。多種の魚類が利用されていたと考えられる。

アイナメ属　*Hexagrammos* sp. indet

同じアイナメ科に属するホッケとは各部位骨で判別できるため、アイナメ属と同定した。仙台湾においてはアイナメとクジメが含まれるが、その大きさから、出土したアイナメ属はアイナメである可能性が高い。クジメは藻場やその周辺に生息するのに対し、アイナメは沿岸の岩礁域に生息し、釣りや刺し網で捕獲される。2号遺構の各層、24号土坑から検出されている。同定破片数は315点に及び魚類の中では最も多い。当遺跡における主体魚類の1つであり、中形魚類の中では、最も重要なもののひとつであったであろう。仙台では「ネウ」と呼ばれる魚である。

マアジ属　*Trachurus* sp. indet

歯骨・前上顎骨などの頭部骨を中心として出土している。集計はしなかったが、稜鱗（いわゆる「ぜいご」の部分）も多く見られた。

ブリ属　*Seriola* sp. indet

2号遺構埋土2b層から尾椎が1点出土しているのみである。かなり大形のものである。ブリ、ヒラマサ、カンパチなどの可能性が考えられる。

マアナゴ　*Conger myriaster*

2号遺構埋土2層から尾椎が1点出土している。椎体の側面に削いだような切断痕が見られる。

アユ　*Plecoglossus altivelis altivelis*

椎骨の形状がニシン科などと類似するものがあるが、上肋骨の離脱状況などからアユと同定した。代表的な遡河魚類であり、5月～7月ごろ産卵のため河川を遡る。椎骨が主体を占めるのは頭部諸骨が脆弱であるためであると思われる。

ウナギ　*Anguilla japonica*

幼魚のシラスウナギとして河川を遡上したのち、主として、河川の中・下流域や河口域、湖に生息する。重要な食用魚である。点数は多くはないが、腹椎・尾椎を中心に、2号遺構の各層と24号土坑から出土している。

ウミタナゴ　*Ditrema temmincki temmincki*

北海道中部以南の日本各地の沿岸に分布し、ガラモ場や岩礁域に生息する。ウミタナゴ科のうち、仙台湾で捕獲される可能性の高いものはウミタナゴに限られる。量的にはあまり多いとは言えないが2号遺構、24号土坑から特徴的な咽頭骨をはじめとした出土がみられる。

カタクチイワシ　*Engraulis japonica*

北海道以南、朝鮮半島から南シナ海に分布する。腹椎、尾椎が認められたがそのほとんどが24号土坑から検出されたものであるという特異な出土状況を示した。微小なものであるため見落としがある可能性もあるが、遺構の性格を考える上で興味深い。刺身などに利用されるほか、煮干しやシラスなどの乾物とされることが多い。

カレイ科　Pleuronectidae gen. et sp. indet

日本近海には約40種が生息し、多くの漁業上の重要種を含む。2号遺構、24号土坑から非常に多く検出され、最小個体数のうえではアイナメ属を上回った。中形魚としては最も重要なもののひとつであり、また、非常に大型のものが多く含まれている。カレイ科は種レベルまで同定することが困難であったが、第一血管間棘・舌顎骨などの形状から、クロガレイ・マガレイが含まれていた可能性が高いと考えられる。そのほかには、ババガレイ・マコガレイ・マツカワなどが含まれている可能性が考えられる。宮城県の各地において、カレイ科魚類を対象とする伝統的な刺し網漁業が知られている。

コイ科　Cyprinidae gen. et sp. indet

出土量は非常に少なく、2号遺構埋土2層から椎骨1点などが確認されたにとどまった。コイ科のものとしては大型のものであり、コイの可能性が高い。食用とされたものかどうかは不明である。いずれにせよ、淡水産の魚類はあまり利用されなかったようである。

コチ科　Platycephalidae gen. et sp. indet

頭部諸骨を中心として出土し、そのほとんどが2号遺構埋土2層、埋土2b層から出土している。2号遺構H－10区埋土2層からは2個体分の頭部諸骨が集中して出土している。かなり大形になる個体のものが多い。多くの種を含むが、その大きさや食用に利用されたものとして考えると、マゴチが含まれている可能性が高い。

サケ科　Salmonidae gen. et sp. indet

サケ科の出土量は尾椎2点と少なく、いずれも2号遺構埋土1層から出土している。縄文時代の遺跡では椎骨が破片として検出されるケースがあるが、2点とも形を保った状態のもので、破片の検出もなかった。2点の内1点には側面をそぎとるような切断痕がみられた。サケ（シロザケ）、ギンザケなどが考えられる。

カツオ　*Katsuwonus pelamis*

表層遊泳性の魚類であり、世界中の熱帯～温帯海域に広く分布する。ほとんどが2号遺構G－10区埋土2層から出土するという特異な状況を示した。頭部諸骨を中心とした出土であり、その中には切断痕がみられるものもあった。カツオの鰓蓋骨は薄く脆弱であるため算定できない破片も多い。この魚に対する頭部の切断も多く行われていたのかもしれない。

マグロ属　*Thunnus* sp. indet

大規模な回遊をする大型の外洋性魚類である。出土したもののなかには、ビンチョウ・クロマグロ・キハダなどが含まれていると考えられる。魚類の検出が少ない2号遺構埋土3層から同一個体と考えられるものがまとまって出土し、4号井戸からも出土するなど、マグロ属は他の魚類と比べやや特異な埋存状態であった。他とは違う特殊な消費のされ方を反映しているのかもしれない。また、埋土3層出土のマグロ属は、歯骨や角骨といった頭部の骨も出土しているため、切り身ではなく、全体が運び込まれていたと考えられる。

サヨリ　*Hemiramphus sajori*

北海道南部以南に生息する、沿岸表層性の魚類である。春から夏にかけて藻場で産卵する。刺身や鮨種にされる高級魚であり、刺し網やタモ網などで捕獲される。小形魚類の中では、ハゼ科に次ぐ点数が検出された。しかし、そのほとんどが椎骨であるため最小個体数の上では少ない。

スズキ　*Lateolabrax japonicus*

日本各地の沿岸に生息する。当地点から出土したものは、点数が少ないがいずれも大型のものである。

タイ科　Sparidae gen. et sp. indet

鹹水から汽水にかけて生息する。種レベルまで同定できたものはマダイとチダイであった。

マダイ　*Pagrus major*

北海道以南から尖閣諸島にかけて分布し、水深30～200mの岩礁や砂礫の底層を好む。頭部諸骨を中心として出土しており、特にG－10区2号遺構埋土2b層では、6個体分もの頭部諸骨がまとまって出土している。マダイと同定できたものはいずれも大型のものである。他の近世遺跡と同様に大形のマダイは当遺跡においても、もっとも目立ったものであり、大形魚類のなかでは最も重要であると考えられる。この魚が近世において、いかに重視されていたかをうかがうことができる。古くから珍重され、今日でも慶事や神事には欠かすことのできない魚種である。また、前頭骨・上後頭骨を中心として頭部諸骨の多くに切断痕が認められた。

チダイ　*Evynnis japonica*

チダイと同定できた比較的小型の前頭骨が1点みられた。タイ科魚類のなかには少ないが小型のものもあり、チダイのものである可能性もある。今日ではマダイの代用魚として用いられることのあるチダイであるが、近世においてはどのような扱われ方をしていたのか興味が持たれる。

タラ科　Gadidae et sp. indet

水温の低い深海に生息するが、冬季に産卵のため深場を離れる。点数はさほど多くないが、2号遺構の各層から出土している。いずれも大きな個体のもので、マダラ、スケソウダラを含む可能性がある。今日では鍋物として利用されることの多い魚であるが、埋土2b層からは熱を受けて白色に変化している腹椎が出土している。

ニシン科　Clupeidae etsp. indet

表層から中層を群れをなして回遊する。重要な食用魚を多く含む。検出されたニシン科魚類には、ニシンのほか、コノシロなどをふくむ可能性がある。出土量は少なく、すべて椎骨である。ほとんどが2号遺構埋土2b層から出土している。

フサカサゴ科　Scorpaenidae et sp. indet

岩礁性の沿岸魚である。主鰓蓋骨、腹椎が検出されたが点数は少ない。クロソイ、メバルなどが含まれていると考えられる。

ハゼ科　Gobiidae　gen. et sp. indet

多くの種を含むため、科レベルでの同定でとどめたが、部位骨の形状からマハゼであると考えられる。マハゼは主に汽水域の砂泥底に生息し、成長するにつれ深場に移動する。小形魚類の中ではもっとも多く検出され、主体を占めるものの一つである。椎骨だけでなく頭部諸骨も多く検出された。マハゼとしては大型のものが多い。2号遺構においては埋土2層・埋土2b層以外からは検出されなかった。仙台では「焼きハゼ」として、正月の雑煮のダシとして利用される。

カナガシラ　*Lapidotrigla microptera*

水深100m付近からより浅い砂泥底に生息し、ほとんどは底引き網で捕獲される。中形魚のなかではアイナメ属・カレイ科につぐ出土量であった。頭部諸骨の骨質や形質からカナガシラであると思われる。東北地方においてはホウボウよりもカナガシラの方が普通にみられるという。2号遺構の各層、24号土坑で出土している。

ヒラメ　*Paralichthys olivaceus*

2号遺構埋土2層から擬鎖骨が1点出土している。比較的大きな個体のものである。

エイ目　Rajiformes fam. Indet

他の魚類と異なり、軟骨魚綱に属する。土壌サンプルから、特徴的な椎骨が3点出土している。土壌サンプルにおいてしかみられない魚種はこのエイ目のみであった。

E．鳥類（図6－7·8、表6－9·10）

鳥類の出土は多いが、主体を占めるものとしては各種のガン・カモ類とキジ科に限られる。4目4科が同定された。ほぼすべてが目視資料である。

ガン・カモ科　Anatidae gen. et sp. indet

本遺跡出土の鳥類でもっとも多く出土し主体を占めるグループである。各種の湖沼ガモ、海ガモを含む。ガン・カモ科は骨の形状によって同定する事が困難であり、また、現生標本が少ないという事情もあるため、各部位骨の大きさによってグループ分けを行うという方法をとった。出土状況の特徴としては、上腕骨・尺骨・脛骨といった四肢骨が多く出土することが挙げられる。2号遺構埋土2b層からほぼ完形の頭蓋骨とそれと同一個体の下顎骨が出土している。先に述べたように、ガン・カモ科は四肢骨の形状によって同定することは困難であるが、頭蓋骨には比較的その種の特徴が現れることが指摘されている。出土した頭蓋骨のうち1点はマガンに類似する。四肢骨の多くに金属器によると思われる切断痕・切痕が認められる。

キジ科　Phasianidae gen. et sp. indet

鳥類の中ではガン・カモ類に次ぐ出土量がみられた。他の近世遺跡においてはしばしばニワトリ・シャモ・チャボといった家畜化されたキジ科が同定・報告されているが、本遺跡出土のキジ科にはこのようなニワトリの類は含まれなかった。キジかヤマドリのいずれかであろう。切断痕は尺骨と脛骨に各1点認められたのみである。

カラス科　Corvidae gen. et sp. indet

2号遺構埋土2層から上腕骨1点・尺骨2点・中手骨2点、埋土2b層から上腕骨1点が出土している。上腕骨は比較的大型のもので、ハシブトガラスなどの可能性が考えられる。尺骨には小型のものもあり、オナガなどの可能性が考えられる。

シギ科　Scolopacidae et sp. indet

2号遺構埋土2層から出土しており、第三指骨1点・橈骨2点・上腕骨2点・尺骨1点がある。橈骨1点を除けば、ハマシギの標本より大きいものであり、オバシギ・アオアシギなどが含まれる可能性がある。

F．哺乳類（図6－9、表6－11）

すべて目視資料である。点数は少なく、3目5科4種が同定された。

イノシシorブタ　*Sus scrofa*

近世であることを考えるとブタの可能性もある。2号遺構埋土3層からは上顎骨の一部と上腕骨が1点出土している。上顎骨は破損のため、後臼歯の萌出はM1・M2までしか確認できないが、歯の磨耗から成獣のものであったと分かる。上腕骨は骨端が化骨化していない幼獣のものである。また、20号土坑の床面からは成獣の上腕骨が出土している。

ニホンジカ　*Cervus nippon*

2号遺構埋土3層と20号土坑から骨端が化骨化した成獣の橈骨が1点ずつ出土している。カットマークは認められなかった。また、13号土坑から鹿角が出土しているが、これは落角であり根本から切断されている。シカの落角を加工し何らかの製品にしたものの残りである可能性が高い。

イヌ　*Canis lupus familiaris*

1号遺構から同一個体と思われるイヌが出土している。部位は大腿骨・寛骨・脛骨・腰椎（3点）と下半身を中心としており、かなり大形の部類にはいるものと考えられる。1号遺構からは、次の（7）で検討されている、解剖学的位置を保ったイヌの骨格が出土しており、これと同一個体のものである可能性が高い。また、2号遺構埋土2層からはイヌの幼獣のものと思われる尺骨が出土している。

ネコ　*Felis silvestris catus*

2号遺構埋土2b層から集中して出土した。部位は寛骨・脛骨・大腿骨・肩甲骨・頭蓋骨・腰椎（3点）であり、同一個体であると考えられる。また、頭蓋骨は29号溝から出土したものと接合した。29号溝からは他にも距骨・

橈骨・中足骨が出土しており、これらも同一個体のものである可能性が高い。興味深いことに、大腿骨は骨幹部が著しく変形し、ふくらんでおり、これは骨折が治療した痕跡、あるいは病変によるものである。このことから、このネコが人間によって飼育されていたものと考えられる。

ネズミ科　　Muridae etsp.indet

G－10区2号遺構埋土2b層から最小個体数で2個体分が集中して検出された。おそらくここで死んだものと考えられ、古環境を復元するうえで重要な資料である。ネズミの骨は微小なものであるから、発掘の際見落とされ、検出されなかったものもあると思われる。ドブネズミなどが含まれている可能性がある。

《引用・参考文献》

阿部宗明　1983　『原色魚類検索図鑑』北隆館

阿部永編　1994　『日本の哺乳類』東海大学出版会

内田亨ほか　1972　『動物分類名辞典』中山書店

内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』北隆館

岡村収・尼岡邦夫　1997　『山渓カラー名鑑　日本の海水魚』山と渓谷社

奥谷喬司ほか　2000　『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

川崎健・佐々木浩一　1980　「仙台湾の魚類相と海洋環境」『海洋科学』127　pp.358～364

川那部浩哉・水野信彦　1963　『原色日本淡水魚類図鑑』保育社

川那部浩哉・水野信彦　1963　『山渓カラー名鑑　日本の淡水魚』山と渓谷社

酒井敬一　1986　『南三陸の沿岸魚』志津川町

高野伸二　1981　『日本産鳥類図鑑』東海大学出版会

高野伸二　1985　『山渓カラー名鑑　日本の野鳥』山と渓谷社

高野伸二　1995　『フィールドガイド　日本の野鳥（増補版）』日本野鳥の会

富岡直人　1997　「動物遺存体」『中沢目貝塚Ⅱ』pp.163～212

中坊徹次　1993　『日本産魚類検索－全種の同定－』東海大学出版会

中村守純　1968　『原色淡水魚類検索図鑑』北隆館

渡部忠重・奥谷喬司　1983 a　『学研生物図鑑　貝Ⅰ』学習研究社

渡部忠重・奥谷喬司　1983 b　『学研生物図鑑　貝Ⅱ』学習研究社

益田一ほか　1984　『日本産魚類図鑑』東海大学出版会

表6－1　武家屋敷地区第７地点出土貝類出土量表（主要貝類）
Tab.6－1　List of Mollusca from BK7（1）

（重量=g）

遺構	層位	区	ヤマトシジミ			アワビ類		マガキ			アサリ			ハマグリ			フネガイ科			アカニシ	
			L	R	重量	殻頂	重量	L	R	重量	L	R	重量	L	R	重量	L	R	重量	殻頂	重量
2号遺構	埋土1層	G-10	0	0	0.92	0	0.93	1	0	23.22	0	0	0	0	0	0	0	0	0.77	0	0
		H-10	14	15	27.02	5	198.88	1	2	77.99	0	1	1.34	0	0	0	0	0	9.22	0	15.99
		埋土1層小計	14	15	27.94	5	199.81	2	2	101.21	0	1	1.34	0	0	0	0	0	9.99	0	15.99
	埋土2層	G-10	2	0	2.35	0	36.22	12	10	316.26	0	0	1.43	0	0	0	0	0	1.33	0	0
		G-11	0	0	0.11	0	0	0	1	49.94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		H-8	42	50	134.28	25	483.64	0	0	0	13	7	22.37	0	0	0	0	0	1.34	0	0
		H-9	105	100	263	54	1791.04	7	3	220.22	1	3	8	36	40	219.01	0	0	0	0	0
		H-10	7	7	15.52	6	77.46	7	8	454.35	10	8	7.98	1	0	26.32	0	0	42.32	0	0
		H-11	0	0	0.1	0	9.89	0	0	48.05	5	2	5.7	0	0	25.72	0	0	2.3	0	0
		埋土２層小計	156	157	415.36	85	2398.25	26	22	1088.82	29	20	45.48	37	40	271.05	0	0	47.29	0	0
	埋土2b層	G-10	4	6	6.9	4	29.87	2	1	298.5	2	0	0.46	0	0	0	0	0	4.65	0	0
		H-9	1	4	2.25	0	11.57	0	1	46.81	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		H-10	190	177	361.7	27	850.03	2	0	10.49	2	1	5.85	0	0	8.61	0	0	45.17	0	0
		H-11	2	1	0.81	2	29.4	0	0	0	5	5	10.08	0	0	0	0	0	57.09	0	0
		埋土2b層小計	197	188	371.66	33	920.87	4	2	355.8	9	6	16.39	0	0	8.61	0	0	106.91	0	0
	埋土3層	G-10	0	0	0	0	5.6	2	1	396.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	２号遺構合計		367	360	814.96	123	3524.53	34	27	1942.13	38	27	63.21	37	40	279.66	0	0	164.19	0	15.99
24号土坑	一括	F-10区	9	5	12.36	8	651.67	1	1	182.48	2	1	3.12	0	0	0			1.17	0	0
	埋土2層	F-11区	0	0	0	0	0			11.68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	24号土坑合計		9	5	12.36	8	651.67	1	1	194.16	2	1	3.12	0	0	0	0	0	1.17	0	0
４号土坑	埋土9層	－	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	59.54
１号井戸	埋土2	－	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	68.09
27号溝	埋土3層	－	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	229.24
	埋土4層	－	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	151.45
	27号溝合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	380.69
カクラン	－	－	0	0	0	0	0	0	0	1.49	0	0	0.25	0	0	0	0	0	0	0	0

表6－2　武家屋敷地区第７地点出土貝類出土量表（その他の貝類）
Tab.6－2　List of Mollusca from BK7 (2)

遺構	層位	区	ホソウミニナ	タマキビ科	オオヘビガイ	ユキノカサガイ科	コウダカアオガイ	リソツボ科	イタボガキ科		イタヤガイ	ナミマガシワ科
2号遺構	埋土1層	H-10									R2	
	埋土2層	H-8			7				L3	L1・R1		
		H-9			6		1		L2		R2	
		H-10			1	1						
		埋土２層小計			14	1	1		5	2	2	
	埋土2b層	G-10	1		1			1				
		H-10			5							R1
		H-11			1							
		埋土2b層小計	1		7			1				1
	２号遺構合計		1		21	1	1	1	5	2	4	1
24号土坑	埋土3層	F-10区		1								
その他の貝類総計			1	1	21	1	1	1	5	2	4	1

表6－3　武家屋敷地区第７地点出土その他の動物遺存体出土量表
Tab.6－3　List of Arthropoda and Echinodermata from BK7

	24号土坑	2号遺構		
	埋土3層	埋土2層		埋土2b層
		H-8区	H-9区	H-10区
節足動物				
フジツボ（大型）	1		2	
十脚目	ツメ　1	ツメ　2		ツメ　2
棘皮動物				
ウニ綱	大棘、殻板			

表6－4　武家屋敷地区第７地点出土魚類出土量表（１）（発掘時取り上げ資料）
Tab.6－4　List of Pisces (fish) recovered in excavation from BK7 (1)

小分類	部位	24号土坑	2号遺構				その他の遺構	合計
		埋土3層	埋土1層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層		
アイナメ属	前鋤骨			M 3				3
	前頭骨				L 2			2
	副蝶形骨			M 2				2
	基後頭骨			M 3				3
	前上顎骨		L 1	L 3 R 5				9
	歯骨			L 1 R 2				3
	主上顎骨			L 1				1
	角骨			L 1 R 2				3
	方骨	L 1		L 2 R 3				6
	口蓋骨			L 5 R 3				8
	舌顎骨			L 1				1
	主鰓蓋骨			R 2	R 1			3
	前鰓蓋骨				L 1			1
	間鰓蓋骨			L 1 R 1	L 1			3
	下鰓蓋骨				L 1			1
	角舌骨			R 2	R 2			4
	上舌骨			L 3 R 1	R 1			5
	擬鎖骨			R 2				2
	上擬鎖骨			R 2	R 1			3
	後側頭骨			L 1 R 2				3
	第一椎骨		M 1	M 1	M 1			3
	第二椎骨			M 1				1
	腹椎	M 1	M 3	M 57	M 5			66
	尾椎	M 4	M 4	M 148	M 20	M 1		177
	尾部棒状骨			M 2				2
アイナメ属合計		6	9	263	36	1		315
マアジ属	前鋤骨	M 1						1
	副蝶形骨				M 1			1
	前上顎骨	L 1 R 1		R 2	L 1			5
	主上顎骨	L 1	R 1	L 1	L 1			4
	歯骨			L 2 R 1	L 2 R 1			6
	角骨				L 2			2
	方骨			R 1	R 1			2
	舌顎骨				L 1 R 1			2
	上舌骨				R 1			1
	角舌骨				L 1 R 1			2
	後側頭骨			R 1				1
	肩甲骨			R 1				1
	第二椎骨		M 1	M 1				2
	尾椎			M 2				2
	腹椎			M 1				1
マアジ属合計		4	2	13	14			33
ブリ属	尾椎				M 1			1
ブリ属合計					1			1
マアナゴ	尾椎			M 1				1
マアナゴ合計				1				1
アユ	角骨			R 1				1
	腹椎	M 7	M 2	M 8	M 8	M 3		28
	尾椎	M 3		M 11				14
アユ合計		10	2	20	8	3		43
ウナギ	尾椎	M 1		M 1				2
	腹椎		M 1		M 2			3
ウナギ合計		1	1	1	2			5
ウミタナゴ	咽頭骨		M 1		M 1			2
	後側頭骨	R 1						1
	舌顎骨	L 1			L 1			2
	腹椎	M 1			M 2			3
ウミタナゴ合計		3	1		4			8
カタクチイワシ	腹椎	M 11		M 2				13
	尾椎	M 25		M 1				26
カタクチイワシ合計		36		3				39

表6－5　武家屋敷地区第７地点出土魚類出土量表（2）（発掘時取り上げ資料）
Tab.6－5 List of Pisces (fish) recovered in excavation from BK7 (2)

小分類	部位	24号土坑	2号遺構				その他の遺構	合計
		埋土3層	埋土1層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層		
カレイ科	前鋤骨			M 1				1
	前上顎骨	L 1		L 1				2
	歯骨			R 1	R 1			2
	角骨			L 1				1
	方骨			R 1				1
	舌顎骨			L 1				1
	前鰓蓋骨		R 1					1
	肩甲骨			L 1				1
	上擬鎖骨			L 1				1
	後側頭骨			R 3				3
	基後頭骨			M 4				4
	第一血管間棘		M 2	M 7	M 5			14
	第二椎骨			M 1				1
	腹椎	M 1	M 1	M 13	M 2			17
	尾椎	M 5	M 9	M 90	M 23			127
カレイ科合計		7	13	126	31			177
コイ科	腹椎			M 1				1
	腹椎側突起			R 1				1
コイ科合計				2				2
コチ科	上篩骨				M 1			1
	側篩骨				R 2			2
	前頭骨				L 2 R 1			3
	前耳骨				L 2 R 1			3
	上耳骨				L 2 R 2			4
	上後頭骨				M 1			1
	基後頭骨				M 1			1
	前上顎骨			L 1				1
	歯骨			L 2	L 2 R 1			5
	主上顎骨			L 1 R 1	L 1			3
	角骨			L 1	L 1			2
	方骨				L 1			1
	涙骨			L 2 R 1	R 1			4
	舌顎骨				L 1			1
	主鰓蓋骨			R 3	L 1			4
	前鰓蓋骨	R 1		R 1				2
	間鰓蓋骨			L 1	R 1			2
	下鰓蓋骨				L 2			2
	上舌骨				L 1			1
	擬鎖骨			L 1				1
	後側頭骨				L 1 R 1			2
	肩甲骨			L 1	R 1			2
	尾椎			M 1				1
	腹椎			M 2				2
コチ科合計		1		19	31			51
サケ科	尾椎		M 2					2
サケ科合計			2					2
カツオ	側篩骨			L 1				1
	前頭骨			R 1				1
	副蝶形骨			M 1				1
	翼耳骨			L 1 R 1				2
	基後頭骨			M 1				1
	前上顎骨			R 1				1
	歯骨			L 2 R 2				4
	主上顎骨			R 1				1
	角骨			L 2 R 1				3
	方骨			L 1 R 1				2
	舌顎骨			L 1 R 1				2
	主鰓蓋骨			L 5 R 2				7
	前鰓蓋骨			L 3 R 4				7
	間鰓蓋骨			L 2 R 3				5
	下鰓蓋骨			L 5 R 2				7
	尾舌骨			M 1				1
	角舌骨	L 2		L 2 R 2				6
	上舌骨			L 1 R 3				4
	第一椎骨			M 1				1
	腹椎			M 1				1
	尾椎		M 1	M 5				6
	下尾骨			M 1				1
カツオ合計		2	1	62				65
マグロ属	角骨					L 1		1
	歯骨					L 1		1
	尾椎			M 2	M 2	M 5	4号井戸埋1層　M1	10
	腹椎					M 3		3
	下尾骨	M 1						1
マグロ属合計		1		2	2	10	1	16

表6－6　武家屋敷地区第７地点出土魚類出土量表（3）（発掘時取り上げ資料）
Tab.6－6　List of Pisces (fish) recovered in excavation from BK7 (3)

小分類	部位	24号土坑	2号遺構				その他の遺構	合計
		埋土3層	埋土1層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層		
サヨリ	基後頭骨			M 1				1
	前上顎骨			L 1	L 1 R 1			3
	歯骨				R 1			1
	角舌骨			R 1				1
	肩甲骨				L 1			1
	前頭骨				R 1			1
	腹椎		M 12	M 53	M 17			82
	尾椎	M 1	M 3	M 14	M 5			23
	尾部棒状骨				M 1			1
サヨリ合計		1	15	70	28			114
スズキ	歯骨					R 1		1
	主鰓蓋骨		R 1					1
	角舌骨			R 1		R 1		2
	尾椎			M 3				3
	腹椎			M 1				1
スズキ合計			1	5		2		8
マダイ	前頭骨		M 2	M 2	M 1	M 2	4号井戸埋1層　M1	8
	上後頭骨			M 5		M 2		7
マダイ合計			2	7	1	4	1	15
マダイ亜科	前上顎骨			L 4 R 3	L 5 R 3			15
	主上顎骨		R 2	L 1 R 1	L 5 R 4			13
	歯骨		L 1 R 3	L 1 R 1	L 6 R 4			16
	角骨			L 2 R 2	L 6 R 3		ピット５埋土　L1	14
	方骨	L 1		L 1 R 1	L 2 R 6			11
	口蓋骨		L 1	L 2 R 2	L 3 R 3			11
	舌顎骨				L 1 R 1			2
	主鰓蓋骨			L 4 R 4	L 2 R 3	R 1		14
	前鰓蓋骨		L 1	L 3 R 2	L 8 R 3	L 1 R 1		19
	尾舌骨	M 2		M 7	M 9			18
	角舌骨		L 1 R 1	L 1 R 3	L 5 R 3			14
	上擬鎖骨		R 3	L 1 R 2	L 1 R 1			8
マダイ亜科合計		3	13	48	87	3	1	155
タイ科	前鋤骨				M 1			1
	副蝶形骨			M 2	M 4			6
	翼耳骨			L 3 R 5		L 1 R 2		11
	主上顎骨	R 1						1
	前鰓蓋骨				R 1			1
	間鰓蓋骨		R 1	R 4				5
	下鰓蓋骨		L 1	L 1 R 2	L 1 R 1	R 1		7
	尾舌骨		M 1					1
	上舌骨				L 4 R 4			8
	擬鎖骨			R 1	L 1 R 1			3
	上擬鎖骨			R 1				1
	後側頭骨			R 1				1
	耳石		不明 1					1
	烏口骨				L 1 R 1			2
	肩甲骨				L 1			1
	基鰭骨			R 2	R 1			3
	神経間棘				M 1			1
	血管間棘		M 1	M 1	M 1			3
	第一椎骨	M 1						1
	第二椎骨				M 1			1
	尾部棒状骨		M 1	M 4				5
タイ科合計		2	6	27	25	4		64
マダイ型	腹椎	M 1		M 2	M 3			6
	尾椎			M 4	M 4			8
マダイ型合計		1		6	7			14
チダイ	前頭骨			L 1				1
	上後頭骨			M 1				1
チダイ合計				2				2
タラ科	歯骨			L 1 R 1				2
	角骨			L 1			１号遺構　R1	2
	口蓋骨				L 1 R 1			2
	主鰓蓋骨				R 1			1
	前鰓蓋骨			R 1				1
	角舌骨			L 1				1
	上擬鎖骨			L 2				2
	後側頭骨			L 1				1
	耳石			不明 1				1
	尾椎		M 2	M 2				4
	腹椎			M 2	M 1	M 1		4
タラ科合計			2	13	4	1	1	21
ニシン	第二椎骨				M 1			1
ニシン合計					1			1
ニシン科	腹椎				M 4	M 1		5
ニシン科合計					4	1		5

表6－7　武家屋敷地区第７地点出土魚類出土量表（4）（発掘時取り上げ資料）
Tab.6－7　List of Pisces (fish) recovered in excavation from BK7 (4)

小分類	部位	24号土坑	2号遺構				その他の遺構	合計
		埋土3層	埋土1層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層		
ハゼ科	前鋤骨			M 1	M 3			4
	前頭骨				L 1 R 1			2
	副蝶形骨			M 2	M 1			3
	上後頭骨				M 1			1
	基後頭骨			M 1	M 5			6
	前上顎骨		L 1	L 2 R 1	L 6 R 5			15
	歯骨	R 1		L 3 R 1	L 2 R 1			8
	主上顎骨			R 2	L 2 R 4			8
	角骨			R 1	R 1			2
	方骨			L 1 R 1	L 3 R 1			6
	舌顎骨			R 2	L 3 R 2			7
	主鰓蓋骨	R 1		L 1	L 4 R 3			9
	前鰓蓋骨			L 1				1
	尾舌骨			M 1	M 2			3
	基鰭骨			L 2	L 4 R 1			7
	角舌骨			L 2	R 1			3
	擬鎖骨			L 1 R 1	L 3 R 2			7
	後側頭骨	R 1		L 1 R 3	R 4			9
	第一椎骨				M 5			5
	第二椎骨				M 2			2
	腹椎		M 4	M 21	M 40			65
	尾椎	M 1		M 14	M 56			71
	尾部棒状骨				M 3			3
ハゼ科合計		4	5	66	172			247
ヒラメ	擬鎖骨			L 1				1
ヒラメ合計				1				1
フサカサゴ科	主鰓蓋骨		L 1	L 1 R 1	L 1 R 1			5
	上耳骨		R 1					1
	腹椎			M 1				1
フサカサゴ科合計			2	3	2			7
カナガシラ	前鋤骨			M 2				2
	前頭骨		L 1 R 1	L 1 M 2	L 1		28号土坑埋２層　L1	7
	翼耳骨			L 1 R 1	L 1 R 2			5
	前上顎骨				L 1			1
	主上顎骨				L 1			1
	歯骨				L 1 R 1			2
	角骨			R 1				1
	方骨				L 1			1
	涙骨		R 1	R 3	L 1			5
	舌顎骨			R 1				1
	主鰓蓋骨			L 1 R 2	L 1			4
	尾舌骨			M 1				1
	擬鎖骨	R 1	L 1	R 1	L 2	L 1		6
	後側頭骨			R 2	R 1			3
	第一椎骨			M 2				2
	第二椎骨			M 1				1
カナガシラ合計		1	4	22	14	1	1	43
カナガシラ型	腹椎			M 6	M 4			10
	尾椎		M 3	M 10	M 6		１号遺構　M1	20
カナガシラ型合計			3	16	10		1	30
不明	前上顎骨			L 1				1
	副蝶形骨			M 1				1
	基後頭骨			M 1	M 1			2
	咽頭骨?			M 1				1
	歯骨					L 1		1
	角骨		L 1	L 1				2
	方骨	L 1			L 2			3
	口蓋骨				L 1			1
	主鰓蓋骨	L 1						1
	前鰓蓋骨			R 1		不明 1		2
	下鰓蓋骨			R 1				1
	擬鎖骨		L 1	L 3				4
	上擬鎖骨				L 1			1
	後側頭骨				L 1			1
	耳石			ニベ科? 1				1
	肩甲骨			不明 1 R 1	不明 1			3
	基鰭骨	L 1						1
	第一椎骨		M 1		M 1			2
	椎骨	M 3	M 2	M 2	M 2			9
	尾椎	M 1	M 1	M 10	M 7			19
	腹椎		M 4	M 6	M 4	M 3		17
	尾部棒状骨	M 2		M 1				3
	複合椎骨	M 1						1
不明合計		10	10	32	21	5		78
全種類総計		93	94	830	505	35	6	1,563

表6－8　武家屋敷地区第７地点出土魚類出土量表（土壌サンプル）
Tab.6－8　List of Pisces (fish) caught on the screen from BK7

小分類	部位	左右	2号遺構													合計
			A	B	B②	C	D	D②	D⑥	F②	G	H	L	N⑤	Q④	
アイナメ属	前頭骨	L			1											1
	方骨	R									1					1
	尾椎	M									2					2
	腹椎	M			1	1										2
アイナメ属合計					2	1					3					6
アユ	尾部棒状骨	M	1													1
アユ合計			1													1
カレイ科	前鰓蓋骨	L									1					1
	第一血管間棘	M					2									2
	腹椎	M			1	1				1		1				4
	尾椎	M	1			5	2	3		1	1	4				17
カレイ科合計			1		1	6	4	3		2	2	5				24
コイ科	腹椎	M			1											1
コイ科合計					1											1
サヨリ	歯骨	L	1													1
サヨリ合計			1													1
マダイ亜科	前上顎骨	L								1						1
	歯骨	L		1											1	2
	主上顎骨	L													1	1
		R													1	1
	角骨	L													1	1
		R		1												1
	舌顎骨	R				1										1
	尾舌骨	M													1	1
マダイ亜科合計				2		1				1					5	9
タイ科	主鰓蓋骨	R		1												1
	間鰓蓋骨	R				1										1
	角舌骨	L			1											1
	肩甲骨	R				1										1
	血管間棘	M												1		1
	尾椎	M			1	2									2	5
タイ科合計				1	2	4								1	2	10
タラ科	主鰓蓋骨	L									1					1
	間鰓蓋骨	L									1					1
	基後頭骨	M									1					1
	腹椎	M				1	3									4
	尾椎	M				3					2					5
タラ科合計						4	3				5					12
カナガシラ	前頭骨	M									1					1
	歯骨	L											1			1
	間鰓蓋骨	L				1										1
		R				1										1
カナガシラ合計						2					1		1			4
カナガシラ型	腹椎	M				5										5
	尾椎	M						1								1
カナガシラ型合計						5		1								6
エイ目	椎骨	M				3										3
エイ目合計						3										3
不明	角骨	R									1					1
	方骨	L	1													1
		R						1								1
	擬鎖骨	L			1											1
	第一椎骨	M				1										1
	腹椎	M			3											3
	尾椎	M						1								1
	椎骨	M							1							1
不明合計			1		4	1		2	1		1					10
土壌サンプル検出魚類総計			4	3	10	27	7	6	1	3	12	5	1	1	7	87

表6－9　武家屋敷地区第７地点出土鳥類出土量表（1）
Tab.6－9　List of Aves from BK7 (1)

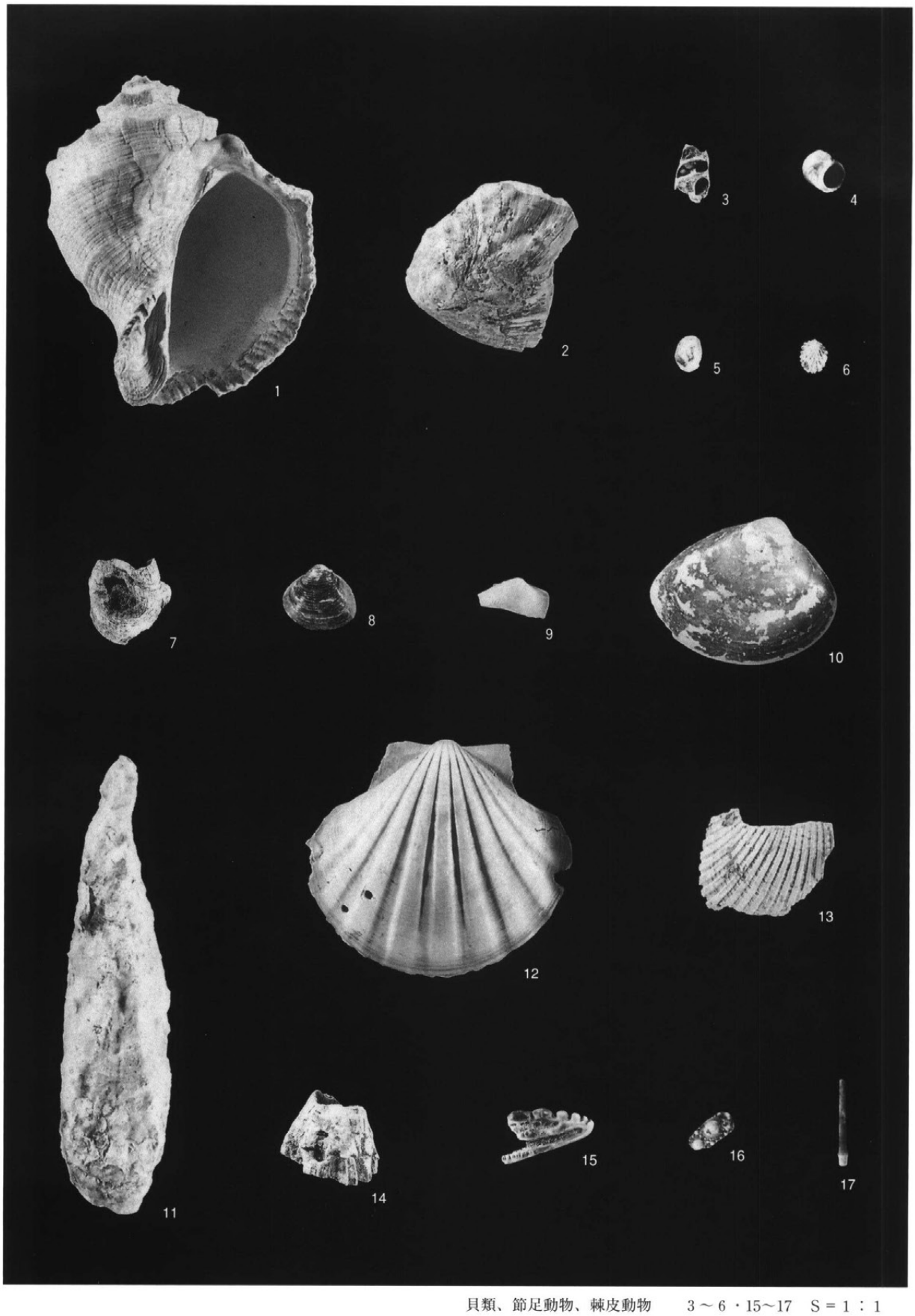
小分類	部位	左右	24号土坑	2号遺構					合計
			埋土3層	埋土1層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層	土壌サンプル	
カモA	上腕骨	L		完形 1	完形 3 遠位 3	骨幹 1			8
		R			近位 1	完形 1 近位 1 骨幹 1			3 1
	橈骨	L			完形 2				2
		R				完形 1			1
	尺骨	L			完形 3 遠位 1				4
		R			近位 1 遠位 1	完形 1			3
	尺側手根骨	L			完形 1				1
	中手骨	R				完形 1			1
	大腿骨	L			近位 1				1
	脛骨	L			近位 1				1
		R				遠位 2			2
	中足骨	L			完形 2	完形 1			3
		R		完形 1	完形 1	完形 1			3
カモB	上腕骨	L			近位 1 遠位 1	近位 1			3
		R			完形 1 近位 1 遠位 2	近位 1			3 2
	橈骨	R			完形 2				2
	尺骨	L		完形 1	完形 4 近位 1				6
		R			完形 3 骨幹 1	完形 1			5
	中手骨	L			完形 1				1
		R		完形 1					1
	脛骨	L			近位 1 遠位 1 骨幹 2				4
	中足骨	R			完形 2	完形 1		完形 1	4
カモC	尺骨	L			遠位 1				1
	第三指骨	L			完形 1				1
	脛骨	L				遠位 1			1
	中足骨	R			完形 1				1
カモD	尺骨	L				遠位 1			1
	中手骨	L			完形 1				1
	脛骨	R				遠位 1			1
カモE	上腕骨	L				遠位 1			1
	橈骨	L				遠位 3			3
	尺骨	L				遠位 1 完形 2			3
		R				完形 1		完形 1	2
	中手骨	L				完形 2			2
		R				完形 1			1
	第三指骨	L				完形 1			1
		R				完形 2			2
	脛骨	L			遠位 1				1
		R				遠位 3			3
	中足骨	L			近位 1				1
		R				完形 2 近位 2 遠位 1			5
ガン類	烏口骨	L						下位 1	1
	上腕骨	L		骨幹 2	完形 2 近位 5 遠位 10 骨幹 3	近位 6 遠位 5		近位 1	34
		R		遠位 2	完形 1 近位 5 遠位 12 骨幹 4	近位 3 遠位 3		近位 1	31
	橈骨	L			完形 10 近位 4 3	完形 2 近位 8 1	近位 1		29
		R			完形 7 近位 9 遠位 1 骨幹 1	完形 3 近位 1	遠位 1		23
	尺骨	L			完形 10 近位 4 遠位 1 骨幹 1	完形 4 近位 5 遠位 1 骨幹 1		近位 1	28
		R			完形 10 近位 8 骨幹 3	完形 2 近位 3 骨幹 1			27
	中手骨	L			完形 1 遠位 1			遠位 1	3
		R		完形 1	完形 1	遠位 1			3
	第三指骨	R				完形 1			1
	大腿骨	L			近位 1 遠位 2	完形 1 遠位 2 骨幹 1		骨幹 1	8
		R		完形 1	遠位 2	完形 1 遠位 5 骨幹 1			10

表6－10　武家屋敷地区第７地点出土鳥類出土量表（2）
Tab.6－10　List of Aves from BK7 (2)

小分類	部位	左右	24号土坑	2号遺構					合計
			埋土3層	埋土1層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層	土壌サンプル	
ガン類	脛骨	L			完形 3　近位 4 遠位 9	完形 3　近位 3 遠位 7　骨幹 1		遠位 1 骨幹 1	32
		R			完形 3　遠位 5 骨幹 3	完形 1　近位 1 遠位 4		骨幹 1	18
	中足骨	L			完形 9　近位 1 遠位 1	完形 11　近位 1 遠位 3		完形 1 骨幹 1	28
		R			完形 6　近位 1 遠位 3	完形 5　近位 2		完形 2 骨幹 1	20
	端尾骨	M				完形 1			1
ガンカモ科	下顎骨	M			完形 1	完形 2			3
	頭蓋骨	M				完形 2			2
	環椎	M				完形 3			3
	頸椎	M				完形 1			1
	胸骨	M		左側 1		右側 1			2
	尺側手根骨	L				完形 2			2
		R				完形 1			1
キジ科	橈骨	L			完形 4				4
		R		完形 1	完形 1				2
	尺骨	L			完形 7	完形 2			9
		R			完形 1　近位 1				2
	尺側手根骨	L			完形 1				1
		R			完形 2	完形 1			3
	中手骨	L			完形 2				2
		R			完形 1	完形 1			2
	第三指骨	L			完形 2	完形 2			4
		R			完形 1				1
	大腿骨	L			近位 1				1
	脛骨	L			遠位 3	遠位 1			4
		R			遠位 1				1
	中足骨	L			完形 5				5
		R			完形 6　骨幹 4		遠位 1		11
	蹴爪	L			- 1				1
シギ科	上腕骨	R			近位 1　遠位 1				2
	橈骨	R			完形 2				2
	尺骨	L			近位 1				1
	第三指骨	L			完形 1				1
カラス科	上腕骨	R			近位 1	遠位 1			2
	尺骨	L			遠位 2				2
	中手骨	L			完形 1				1
		R			完形 1				1
不明	下顎骨	L				後位 2			2
		R				近位 1			1
	頸椎	M	完形 1	完形 2		完形 12		完形 1	16
	胸椎	M			完形 3				3
	肩甲骨	R			完形 1				1
	胸骨	M			中央部 1	右側 1　中央部 1			3
	寛骨				破片 2	中央部 1　破片 1			4
	上腕骨	L	遠位 1	近位 1	近位 1　骨幹 1				4
		R			遠位 1				1
	橈骨	R			完形 3	遠位 1			4
	尺骨	L		1					1
		R	遠位 1		完形 2　遠位 1				4
	尺側手根骨	L			完形 1				1
		R			完形 1				1
	中手骨	L		完形 1	完形 1				2
		R	完形 1						1
	第三指骨	L			完形 3				3
	大腿骨	L	遠位 1	骨幹 1					2
	脛骨	L			近位 1				1
		R		近位 1	遠位 2				3
	中足骨	L	完形 1		完形 1　骨幹 1	完形 1			4
		R	完形 1	近位 1	完形 1				3
	腓骨	L			完形 1				1
		R			完形 2	3			5
鳥類全種類合計			7	20	308	189	3	17	544

表6－11　武家屋敷地区第７地点出土哺乳類出土量表
Tab.6－11　List of Mammalia from BK7

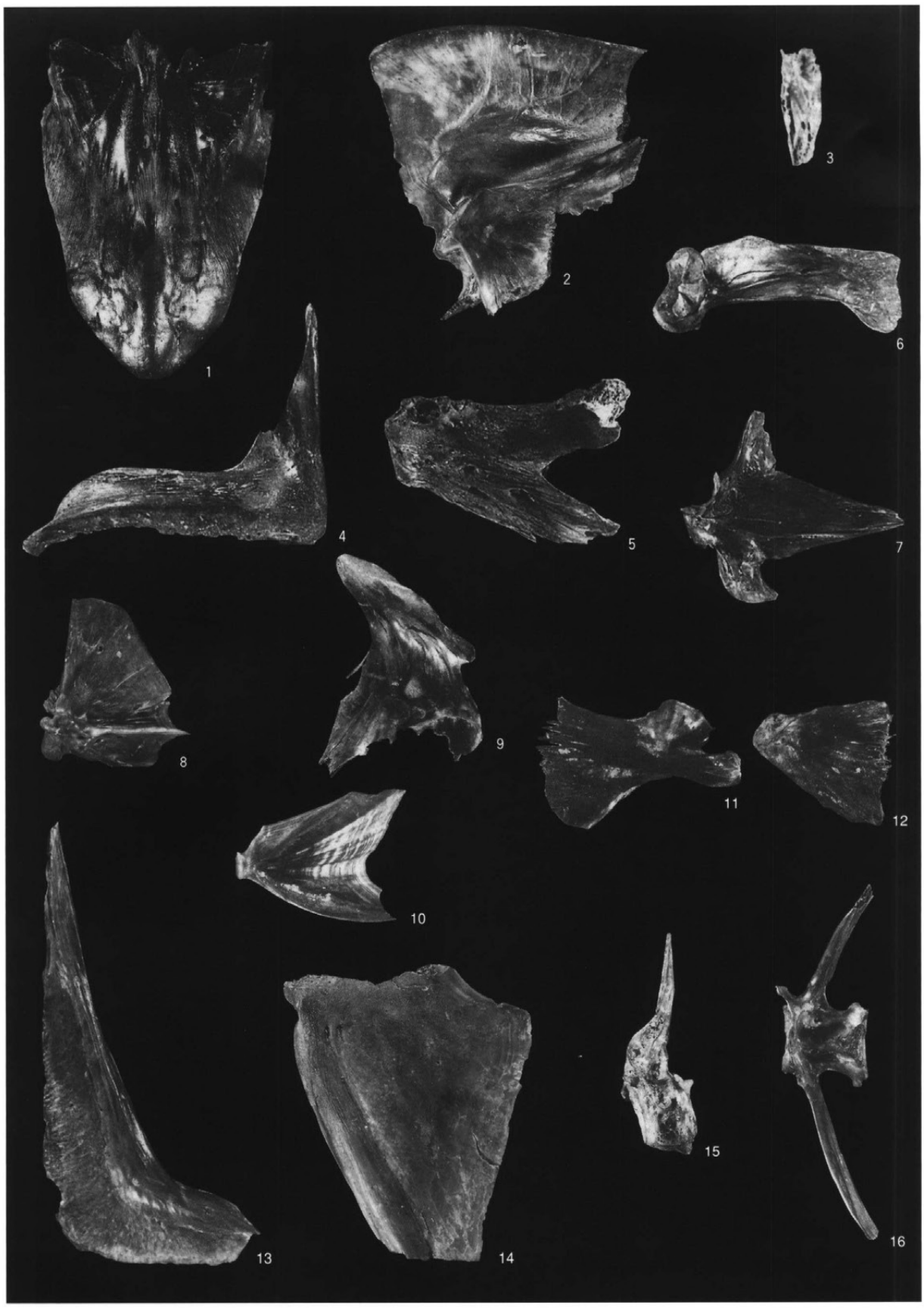
小分類	部位	左右	残存	29号溝	1号遺構	2号遺構				その他	合計
				埋土	埋土3層	埋土2層	埋土2b層	埋土3層	土壌サンプルJ②		
イノシシorブタ	上顎骨	L	破損					1			1
	上腕骨	L	完形					1			1
		R	遠位							20号土坑床面　1	1
イノシシorブタ合計								2		1	3
ニホンジカ	角	不明	角座							13号土坑埋土　1	1
	撓骨	L	近位					1		20号土坑埋１層　1	2
	中足骨	L	近位					1			1
ニホンジカ合計								2		2	4
イヌ	腰椎	M	完形		3						3
	寛骨	L	完形		1						1
		R	近位		1						1
	尺骨	L	完形			1					1
	中手骨	?	完形							攪乱　3	3
	大腿骨	L	近位		1						1
	脛骨	R	骨幹		1						1
イヌ合計					7	1				3	11
ネコ	頭蓋骨	M	前部	1							1
			後部				1				1
	腰椎	M	完形				3				3
	寛骨	L	完形				1				1
		R	完形				1				1
	肩甲骨	L	完形				1				1
	撓骨	L	完形	1							1
	大腿骨	L	完形				1				1
	脛骨	L	完形				1				1
		R	遠位					1			1
	距骨	L	完形	1							1
	中足骨	不明	完形	4							4
ネコ 合計				7			9	1			17
ネズミ	頭蓋骨	M	完形							28号土坑埋２層　1	1
	上顎骨	L	完形				1				1
	前頭骨	L	完形				1				1
		M	完形			1					1
	下顎骨	L	完形				1				1
		R	完形				1				1
	頬骨	L	完形				1				1
		R	破損一部のみ				1				1
	鼓骨	L	完形				1				1
	胸椎	M	完形				5				5
	腰椎	M	完形				3				3
	尾椎	M	完形			2	4		2		8
	寛骨	L	近位				1				1
		R	近位				1				1
	肩甲骨	R	完形				2				2
	上腕骨	L	完形				1				1
		R	完形				1				1
	尺骨	L	完形				2				2
		R	完形					1			1
	大腿骨	L	遠位				1				1
		R	遠位				1				1
			完形				1				1
			近位				1				1
	脛骨	L	完形				1				1
			近位				1				1
	距骨	L	完形				1				1
	踵骨	R	完形				1				1
	中足骨	R	完形				1				1
ネズミ合計						3	36	1	2	1	43
不明	胸椎?	M	完形							24号土坑埋３層　1	1
	腰椎	M	完形			1					1
	肋骨	?	完形		1						1
不明合計					1	1				1	3
哺乳類総計				7	8	5	45	6	2	8	81



貝類、節足動物、棘皮動物　　3～6・15～17　S＝1：1
1・2・7～14　S＝1：2

1アカニシ　2ミミガイ科　3ウミニナ科　4タマキビ科　5コウダカアオガイ　6ユキノカサガイ科　7オオヘビガイ　8ヤマトシジミ　9アサリ　10ハマグリ　11マガキ　12イタヤガイ　13フネガイ科　14フジツボ科　15十脚目　16～17ウニ綱（16殻板　17大棘）

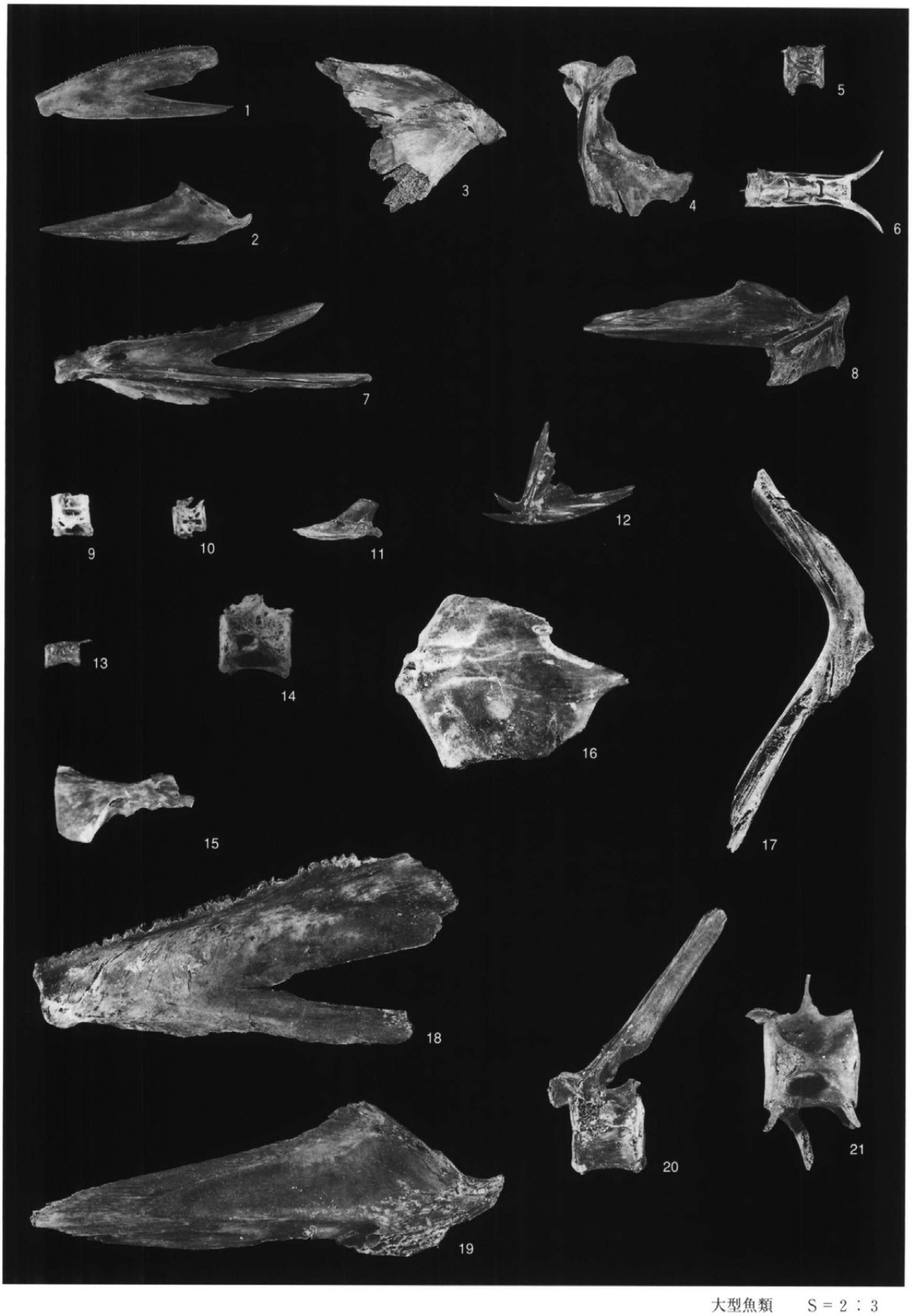
図6－3　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（1）
Fig.6－3　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（1）



タイ類　　S＝1：1

1～2マダイ（1前頭骨　2上後頭骨）　3チダイ（前頭骨（L））　4～14マダイ亜科（4前上顎骨（R）　5歯骨（L）　6主上顎骨（R）　7角骨（R）　8方骨（L）　9口蓋骨（L）　10尾舌骨　11上舌骨（L）　12角舌骨（L）　13前鰓蓋骨（R）　14主鰓蓋骨（L））　15～16タイ類（15腹椎　16尾椎）

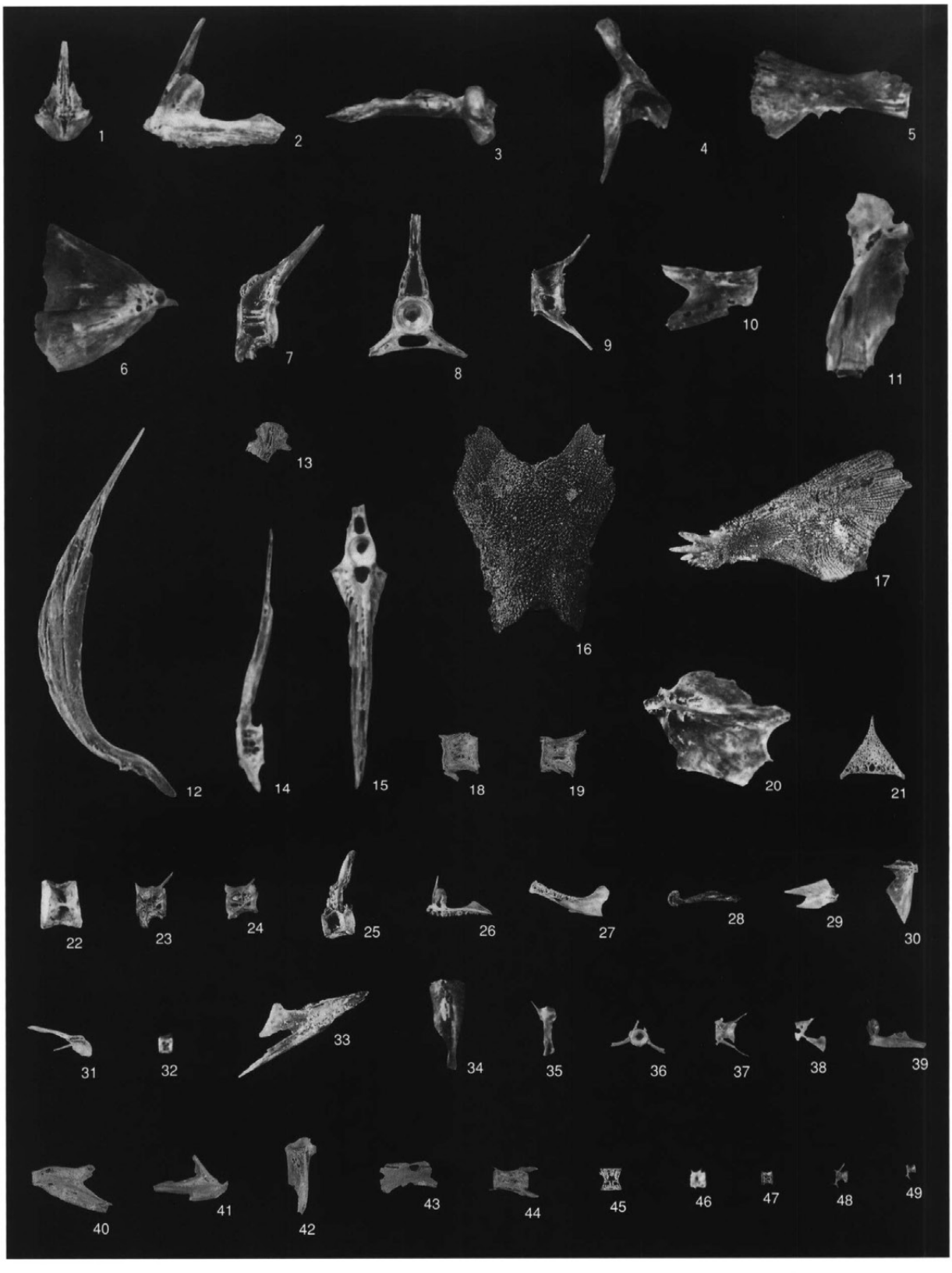
図6－4　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（2）
Fig.6－4　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（2）



大型魚類　　S＝2：3

1～6カツオ（1歯骨（L）　2角骨（L）　3主鰓蓋骨（L）　4舌顎骨（R）　5腹椎　6尾椎）　7～10タラ科（7歯骨（L）　8角骨（L）　9腹椎　10尾椎）　11～13コチ（11方骨（L）　12前鰓蓋骨（R）　13尾椎）　14ブリ属（尾椎）　15～16スズキ（15角舌骨（R）　16主鰓蓋骨（R））　17ヒラメ（擬鎖骨（L））　18～21マグロ属（18歯骨（L）　19角骨（L）　20腹椎　21尾椎）

図6－5　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（3）
Fig.6－5　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（3）



中・小型魚類　S＝1：1

1～9アイナメ（1前鋤骨　2前上顎骨（L）　3主上顎骨（L）　4口蓋骨（L）　5角舌骨（R）　6主鰓蓋骨（R）　7腹椎　8・9尾椎）　10～15カレイ科（10歯骨（L）　11舌顎骨（R）　12第一血管間棘　13腹椎　14～15尾椎）　16～19カナガシラ・カナガシラ型（16前頭骨　17涙骨（L）　18腹椎　19尾椎）　20フサカサゴ科（主鰓蓋骨（R））　21ウミタナゴ（咽頭骨）　22エイ目（椎骨）　23～24ウナギ（23腹椎　24尾椎）　25コイ科（腹椎）26～32ハゼ科（26前上顎骨（L）　27歯骨（R）　28主上顎骨（R）　29角骨（R）　30主鰓蓋骨（L）　31後側頭骨（L）　32腹椎）　33～38サヨリ（33歯骨（R）　34前頭骨（R）　35基後頭骨　36腹椎　37尾椎　38尾部棒状骨）　39～44マアジ属（39前上顎骨（L）　40歯骨（L）　41角骨（L）　42舌顎骨（L）　43角舌骨（L）　44尾椎）　45ニシン科（腹椎）　46マアナゴ（腹椎）　47アユ（腹椎）　48～49カタクチイワシ（48尾椎　49腹椎）

図6－6　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（4）
Fig.6－6　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（4）

1～4　ガンカモ科
5～14　ガン類　　S＝2：3

1～4　ガンカモ科（1頭蓋骨　2下顎骨　3頸椎　4胸骨）　5～14　ガン類（5上腕骨（R）　6橈骨（L）　7橈骨（R）　8尺骨（L）　9尺骨（L）　10中手骨（L）　11大腿骨（L）　12脛骨（R）　13中足骨（R）　14中足骨（L））

図6－7　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（5）
Fig.6－7　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（5）

鳥類　S＝1：1

1カモB類（上腕骨（R））　2カモA類（橈骨（R））　3カモA類（尺骨（R））　4カモB類（尺骨（L））　5カモE類（尺骨（L））
6カモA類（中手骨（R））　7カモB類（中手骨（R））　8カモE類（中手骨（L））　9カモA類（中手骨（L））　10カモB類（中足骨（R））　11カモ類（胸骨）　12～17キジ属（12尺骨（L）　13中手骨（R）　14第三指骨（R）　15手根骨（R）　16中足骨（L）　17中足骨（L、雄））　18カラス科（上腕骨（R））　19～20シギ科（19上腕骨（R）　20橈骨（R））

図6－8　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（6）
Fig.6－8　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（6）

哺乳類　　S＝2：3

1～3イノシシorブタ（1上顎骨（L）　2上腕骨（L、幼獣）　3上腕骨（R））　4～6ニホンジカ（4鹿角　5橈骨（L）　6中足骨（L））　7～13ネコ（7頭蓋骨　8腰椎　9寛骨　10肩甲骨（L）　11橈骨（L）　12大腿骨（L）　13脛骨（L））　14イヌ（尺骨（L、幼獣））　15～24ネズミ科（15頭蓋骨　16下顎骨（L）　17肩甲骨（R）　18寛骨（L）　19腰椎　20上腕骨（R）　21尺骨（L）　22脛骨（L）　23距骨（L）　24中足骨（R））

図6－9　武家屋敷地区第7地点出土動物遺存体写真（7）
Fig.6－9　Pictures of animal bones, fish bones and shells at BK7（7）

(7) 武家屋敷地区第７地点出土の犬骨

菅原　弘樹（奥松島縄文村歴史資料館）

A．はじめに

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査において、「期の１号遺構（大規模なゴミ穴）から１体分のイヌの骨がまとまって出土した。遺構内からは、享保年間の年号が記された木簡が大量に出土しており、おおむね1720年前後のイヌと考えられている。

以下、出土したイヌの出土状況および形態的特徴について述べる。各部位の計測にあたっては、斉藤（1963）および茂原（1986）に従った。

B．出土状況

後世の攪乱によって前肢の先端部分と骨盤以下の後肢部分を欠くが、一括して検出された骨は解剖学的位置を留めている（図7－1、図7－3上）。墓坑は確認されておらず、大規模なゴミ穴に、他のゴミと一緒に廃棄されたような状態で出土した。

保存状況は良好で、頭を北方に向け、左側面を下にして横たえた左側臥の状態で検出された。首を起こし、胴はまっすぐ伸ばし、前肢は肩と肘関節で軽く屈曲させている。周辺からは同一個体とみられる左右の寛骨および大腿骨、右脛骨、右第２・３・５中手骨などの骨が散乱した状態で出土している（図7－3下）。出土した骨には、解体に伴う切痕は認められず、また刃傷や骨折痕跡も認められないことから、病気などで死亡した犬を、死後そのままゴミ穴に埋めたものと考えられる。

こうした出土状況は、品川区仙台坂遺跡や新宿区市ヶ谷薬王子町遺跡などの近世の遺跡でも認められ、堀跡やゴミ穴とみられる遺構の土層中から「北向き、左側臥、伸ばした首と頭、四肢の曲げ方まで共通した姿勢」で検出されている（金子2004）。本例も、江戸時代犬の死後の扱われ方としては一般的な事例を示しているものと思われる。

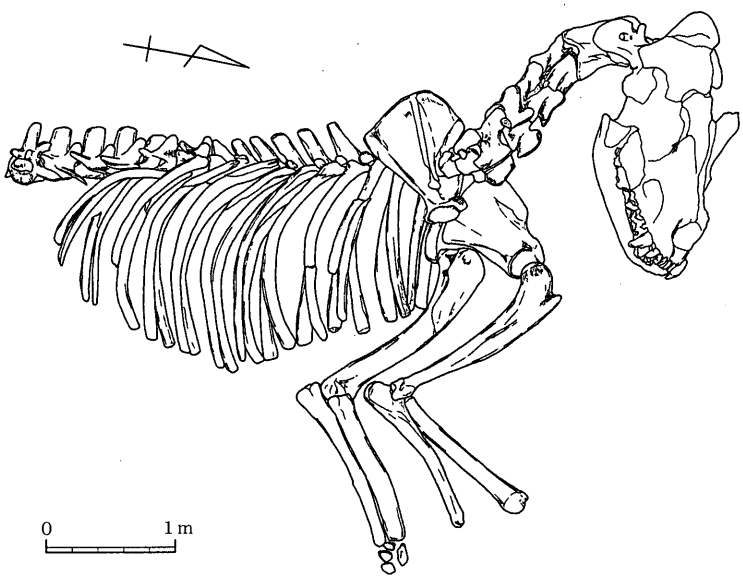


図7－1　武家屋敷地区第７地点１号遺構出土のイヌ遺骸の出土状況平面図
Fig.7－1　Picture of a excavated dog bone from No.1 structural remains at BK7

C．出土犬骨の特徴

【頭蓋骨および下顎骨】（図7－2）

頭蓋骨は他の部位に比べて残存状況が悪い。埋没時の土圧あるいは攪乱の影響によるものとみられるが、頭蓋骨右側面の欠損および歪みが著しい。頭蓋最大長は210mm程を測る。長谷部の５段階の型区分の中では、最も大きい「大級犬」に相当する（長谷部1952）。仙台坂遺跡１号犬よりもやや小さいが、江戸時代犬の中でもかなり大きな個体である。体高（肩甲骨の最高点の高さ）は、山内（1958）の推定式で53.5cm、西中川他（2008）では57.6cmと推定される。骨質は頑丈であるが、頭蓋骨の大きさに比べて吻部および頬骨弓の幅が狭く、顔全体が細長い、精悍な印象を受ける。頭蓋骨のプロポーションを示す頭蓋指数（頬骨弓幅／最大頭蓋帳×100）は、縄文時代以降、時代が新しくなるにつれて大きくなる（幅広になる）傾向にあるが、本資料は縄文時代犬よりも小さく、現代のシェパードに近い値を示す。性別については、矢状稜および外後頭隆起がよく発達しており、小野寺・茂原他（1987）によれば、オスの可能性が高いと考えられる。

上顎歯は全て揃っている。右犬歯および左右の切歯と第１・２後臼歯にやや咬耗が認められるが、他の歯はほとんどが進んでおらず、若い個体と考えられる。

下顎骨は左右の骨が検出された。下顎骨全長は保存状況が良好な左側で151.6mmを測る。下顎体は厚く頑丈で、高さもあり、下顎底後方の張り出しも強い。咬筋窩深は10.8mmで、かなり咬筋が発達した犬種だったとみられる。歯は上顎歯と同様に全て揃っている。切歯、犬歯、第１後臼歯にやや咬耗が認められるが、他の歯はほとんど進んでいない。左犬歯は欠けてしまったのか、短く磨耗している。また、左下顎骨で第１前臼歯と第２前臼歯の間で「過剰歯」が確認された（図7－1-2a）。同様の例は、港区芝神明町町屋遺跡１号犬（山根2004）でも確認されている。現代においては、先天性過剰やインブリード（近親交配）など遺伝の影響による可能性も指摘されているが、江戸時代犬における歯列不正の原因は明らかではない。

【四肢骨】

骨端部は全て化骨を完了している。土ごと取り上げが行われたため、詳細な観察・計測はできなかったが、右上腕骨全長は178mm、右橈骨全長は174mm、右尺骨は202.7mmを測る。現生シバイヌや縄文時代犬と比較すると、各部位とも全長で４～５cm長い。四肢骨の長さに対する太さの割合を示す頑丈指数（中央矢状径／中央横径×100）も大きい。出土した四肢骨から算出される平均体高は、山内（1958）の推定式で50.7cm、西中川他（2008）では55.5cmと推定される。

D．まとめ

以上、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区から出土した18世紀前葉（1720年前後）のイヌについて報告した。

出土したイヌは、体高が50～55cm程（最大頭蓋長210mm）と推定される大型犬である。これまで江戸の遺跡から出土した犬の中でもかなり大きなサイズであり、洋犬の可能性が高い。頭蓋骨のプロポーションも、縄文時代犬の血を引く当時の在来犬（小～中型犬）とは異なり、顔つきは細面で、かなり咬む力の強い犬種であったと推定される。

江戸時代の大型犬は、大名屋敷跡や武家屋敷跡などの武家地から出土することが多く、大名をはじめ有力武士の権威の象徴として飼育されていたと考えられている。塚本（1993）によれば、慶長年間に日本にもたらされた新しい猛犬の種（唐犬）が、そうした権威ある犬になったと考えられ、大名家などの鹿狩や猪狩に用いられた。唐犬の実体としては、当時の絵画にしばしば描かれるグレイハウンド種の犬の可能性を指摘している。二の丸武家屋敷から出土した本資料をはじめ、仙台藩伊達家下屋敷跡（仙台坂遺跡）など江戸の遺跡から出土しているシェパード・クラスの犬が、この唐犬に相当する可能性も考えられる。

《引用・参考文献》

小野寺覚・茂原信生・江藤盛治　1987　「骨格による性の判別―シバイヌについて」『解剖学雑誌』第62号第１号

金子浩昌　2004　「仙台坂出土の埋葬犬と江戸のイヌたち」『品川歴史館紀要』第19号　品川区立品川歴史館

斉藤弘吉　1963　『犬科動物骨格計測法』

茂原信生　1986　「東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ」『東京大学総合研究資料館標本資料報告』第13号　東京大学総合研究資料館

茂原信生・芹澤雅夫　1990　「38号遺構出土の犬骨」『西新橋二丁目　港区No.19遺跡』港区西新橋二丁目遺跡調査会

茂原信生　1990　「仙台坂遺跡出土の犬骨」『仙台坂遺跡』品川区埋蔵文化財調査報告書第７集　品川区遺跡調査会

茂原信生　1990　「芝金杉通町町屋跡遺跡出土の犬骨」『研究紀要』第１号　港区教育委員会

茂原信生　1991　「日本犬に見られる時代的形態的変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集

塚本　学　1993　『生類をめぐる政治－元禄のフォークロア』平凡社

西中川俊・福島晶・谷山敦・池田省吾・土岐学司・小山田和央・松元光春　2008　「イヌの骨計測値から骨長ならびに体高の推定法」『動物考古学』第25号

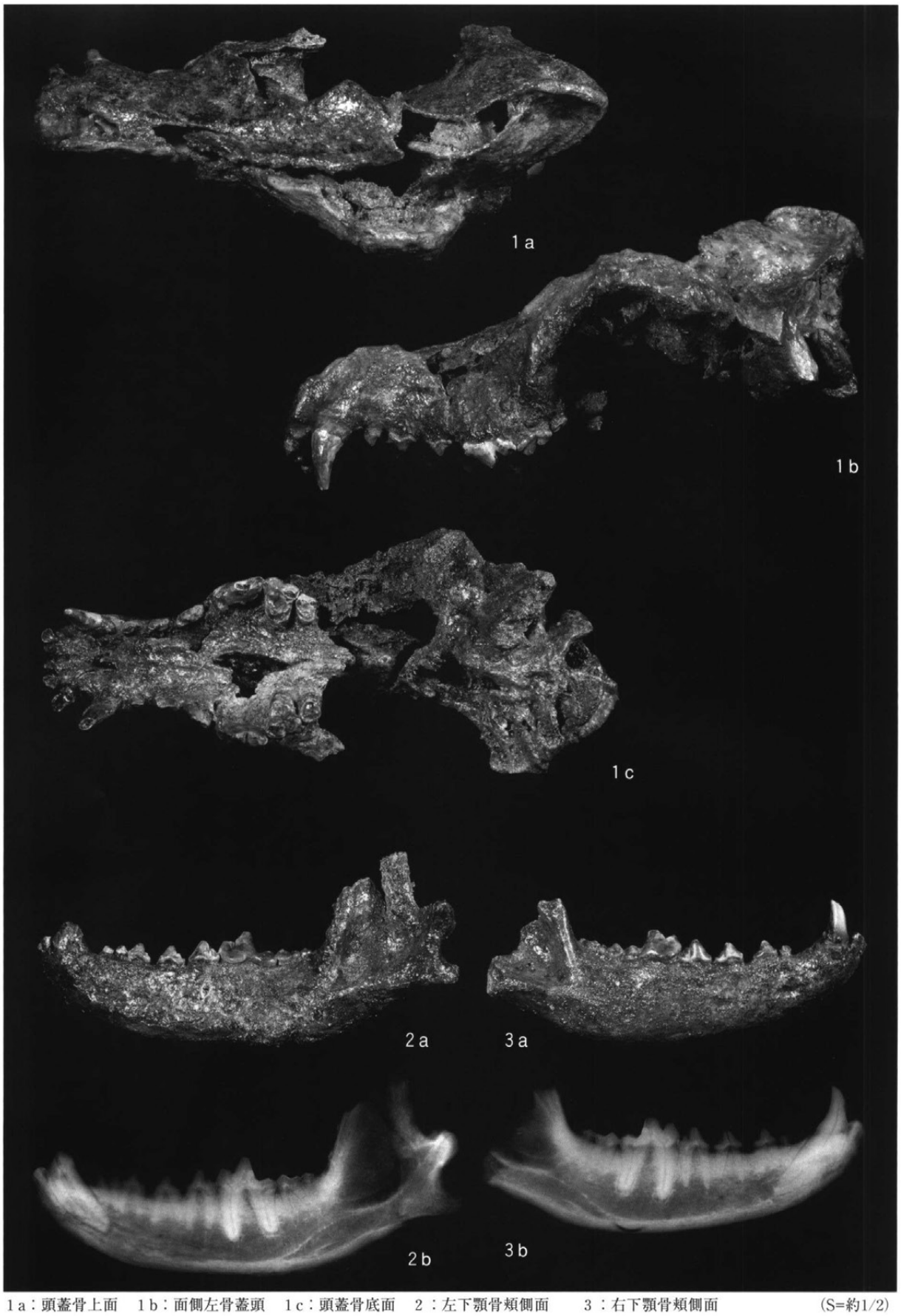
西本豊弘　2008　「イヌと日本人」『人と動物の日本史１　動物の考古学』

長谷部言人　1945（解説：茂原信生 2009）　「石器時代日本犬」『動物考古学』第26号

長谷部言人　1952　「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会

山内忠平　1958　「犬の骨長から体高の推定法」『鹿大農学術報告』７

山根洋子　2004　「芝神明町町屋跡遺跡出土のイヌ」『研究紀要』第８号　港区立港郷土資料館



1a：頭蓋骨上面　1b：面側左骨蓋頭　1c：頭蓋骨底面　2：左下顎骨頬側面　3：右下顎骨頬側面　(S=約1/2)

図7－2　武家屋敷地区第7地点1号遺構出土のイヌ頭骨
Fig.7－2　The skull of a dog from No.1 structural remains at BK7

イヌ出土状況
(頭骨取り上げ後)
(S=約1/5)

1：右寛骨　2：左寛骨　3：右大腿骨　4：左大腿骨　5：右第2中手骨　6：右第3中手骨　7：右第5中手骨　(S=約1/2)

図7−3　武家屋敷地区第7地点1号遺構出土のイヌ四肢骨
Fig.7−3　The appendicular skeleton of a dog from No.1 structural remains at BK7

表7－1　武家屋敷地区第７地点１号遺構出土のイヌ計測値
Tab.7－1　The measurement data of a dog bone from No.1 structural remains at BK7

頭骨計測値と比較資料

計測部位	仙台城二の丸 1号遺構犬♂		仙台城三の丸 ♂	仙台坂 第1号犬♂	西新橋 ♂	芝神明町 1号犬	芝神明町 2号犬	金杉 ♂
1：最大頭蓋長(pr-i)	(212)		176.4	(220)	175.1	203.0	171.1	182.0
2：其底全長(pr-　)	(195.5)		169.4	200.0	162.9	187.4	155.6	170.9
3：頬骨弓幅(zy-zy)	(110)		105.5	(117)	101.1	－	(106)	104.0
4：脳頭蓋長(na-i)	－		91.5	(125)	96.9	108.7	93.2	100.2
5：頭蓋幅(1)(eu-eu)	－		54.2	63.2	52.7	57.4	52.6	60.5
6：頭蓋高(1)(br-ho)	－		50	60	50	59	53	56
7：パジオン・ブレグマ高(ba-br)	－		67.2	81.3	64.7	81.0	71.1	66.8
8：最小前頭幅(ft-ft)	－		31.2	37.9	34.6	38.2	35.1	38.2
9：前頭骨頬骨突起端幅(ect-ect)	(45)		46.9	61.3	49.2	56.5	51.1	46.4
10：後頭三角幅(ot-ot)	－		65.7	76.7	61.6	72.5	62.5	70.1
11：最小眼窩間幅(ent-ent)	－		29.9	42.2	32.4	38.6	34.7	30.5
12：顔長(pr-na)	－		88.5	95.8	83.8	98.2	82.3	89.3
13：吻長(pr-oa)	(89)		76.6	91.6	74.0	83.0	72.1	76.1
14：吻幅(犬歯部)	(38)		36.8	(47)	33.5	46.3	37.3	40.7
15：吻高(na-　)	－		39	(47)	38	50	45	45
16：鼻骨凹陥深	－		6.4	6.8	5.2	－	－	－
17：硬口蓋長(pr-sta)	－		87.3	(99)	82.8	94.9	81.3	88.5
18：硬口蓋最大幅	(58)		63.5	75.2	60.0	73.9	62.5	69.5
19：下顎骨全長(1)(id-goc)	151.6	－	133.5	152.0	128.8	149.6	124.7	136.2
20：下顎骨全長(2)(id-c.mid)	150.8	－	132.5	154.2	127.6	151.1	125.3	136.9
21：下顎枝高	－	－	53.6	65.0	52.0	60.9	52.7	55.5
22：下顎枝幅(最小値)	(42.7)	－	33.3	40.0	33.3	－	－	34.1
23：下顎体高(M2の後部)	31.9	30.1	－	－	－	－	－	－
24：下顎体高(M1の中央)	32.4	31.2	24.9	28.9	23.6	29.8	25.4	27.2
25：下顎体高(P4とM1の間)	30.7	30.6	－	－	－	－	－	－
26：下顎体厚(M1中央下方)	14.8	13.2	11.3	13.9	10.7	15.1	13.0	－
27：咬筋窩深(下顎枝幅位)	－	10.8	8.5	8.5	7.2	－	－	8.6
頭蓋指数(3/1)	51.9		59.8	53.2	57.7	－	62.0	57.1
吻長指数(13/1)	42.0		43.4	41.6	42.3	40.9	42.1	41.8
下顎体厚高指数(26/24)	45.7		45.4	48.1	45.3	50.7	51.2	－

四肢骨計測値と比較資料

計測部位	仙台城二の丸 1号遺構犬♂	仙台城三の丸 ♂	仙台坂 第1号犬♂	西新橋 ♂	芝神明町 1号犬
肩甲骨全長	148.6	127.3	－	－	－
関節窩長	28.1	－	－	－	－
頚部最小幅	28.9	－	－	－	－
上腕骨全長	(178)	162.5	172.0	142.6	168.2
橈骨　全長	(174)	－	174.8	140.3	168.3
上端最大幅	28.1	－	－	15.6	19.0
頚部最小幅	21.0	－	16.4	12.6	－
中央横径	15.3	－	15.5	12.0	－
中央矢状径	10.7	－	9.4	6.8	－
下端最大幅	－	－	27.4	20.5	26.4
尺骨　全長	202.7	185.6	－	167.7	－
大腿骨全長	－	－	－	－	184.0
上端最大幅	42.0	－	－	－	39.5
中央横径	15.3	13.4	15.6	14.1	－
中央矢状径	15.3	13.1	17.5	13.4	－
下端最大幅	－	29.3	34.1	32.1	33.6

※1　(　)：推定値
単位：mm

※2　頭骨および四肢骨の比較資料の計測値は茂原・芹澤(1990)、山根(2004)による。

(8) 武家屋敷地区第７地点で出土した特殊な遺物の取り上げと保存処理

埋蔵文化財調査室　千葉直美

Ａ．はじめに

仙台城跡二の丸北方武家屋敷跡第７次調査で、比較的大型の特殊な遺物が出土した。植物繊維で作られた俵、埋設された当初の形態を保っている桶、そして犬の全身骨格である。これらを出土状況を保ったまま取り上げ、保存処理したので報告する。

Ｂ．俵の取り上げと保存処理（図8－1・図8－2・図8－6）

４号土坑から出土した２つの俵は、いずれも上部は欠損し内部には土が詰まっていた。内部の土を除去したところ、植物繊維の存在を確認することができた。しかし、俵になお付着している土の乾燥に伴い崩壊の恐れがあった。

そこでまず俵の内側を、湿った土層の剥ぎ取り等に用いられる変性ウレタン合成樹脂（トマックNS－10）とガーゼを用いて裏打ちした。次に俵の周囲をダンボールで囲み、そこに発泡硬質ウレタンを流し込み、俵全体をウレタンで包埋した。俵周囲の拡張や掘り下げが困難であったため、銅線を用いてウレタンと地面とを切り離した。ウレタン上部を水平にカットし、２つの俵のうち１つを反転したところ、俵の一部が脱落した。そこでもう１つの俵は、下部からの脱落を防ぐためコンパネを差し込み、コンパネを固定するため再度ウレタンで包埋した。ウレタンの上部を水平にカットして反転し、人力で吊り上げ、取り上げを行った。脱落した俵の一部についても再度養生しウレタンで包埋して取り上げた。

２つの俵のうち、コンパネを差し込んで取り上げた俵をＡ、取り上げ時に脱落した俵をＢとした。俵はPEG（ポリエチレングリコール#4000）を用いて処理を行った。

俵Ａは、まず余分なウレタンと土を除去して俵表面を露出した。露出作業中、俵表面にカビが発生したため、ホウ酸ホウ砂0.2～0.4％水溶液を霧吹きで散布した。その後、俵表面の溝に入り込んだ土を洗浄瓶や筆を用いて洗浄した。次に、PEG20％水溶液を俵表面に筆で塗布し、徐々にPEG水溶液の濃度を上げながら、俵表面がPEGで白く固化するまで繰り返し塗布を行った。俵表面の固化したPEGをドライヤーや温めたエタノールを用いて除去し、俵表面の質感が出るよう仕上げを行った。その後ウレタン下部を俵形に整形した。

俵Ｂは、本体と脱落部分それぞれ、余分なウレタンと土を除去して俵表面を露出し、俵表面の溝に入り込んだ土を洗浄瓶や筆を用いて洗浄した。次に、それぞれ、PEG20％水溶液を俵表面に筆で塗布し、徐々にPEG水溶液の濃度を上げながら、俵表面がPEGで白く固化するまで繰り返し塗布を行った。俵表面の固化したPEGをドライヤーや温めたエタノールを用いて除去した。その後、脱落部分の俵表面を濡らした和紙とアルミホイルで養生し、さらに濡らしたペーパータオル（キムタオル）（注１）で養生し、俵表面を覆うようにウレタンを流し込み包埋した。反転後、余分なウレタンを除去し俵の裏面を露出した。俵表面と同様に裏面にもPEG水溶液を塗布し、固化後余分なPEGを除去した。本体と脱落部分を合体し、高濃度のPEG水溶液で接着した。脱落部分のウレタンと養生を除去し、俵表面を露出した。本体と脱落部分との隙間にパテ状に調整したPEGを充填した。俵表面のパサつき感を解消するため、アクリル系合成樹脂（バインダーNo.17）の原液をエタノールで１／２希釈したものを俵表面に塗布した。俵表面の余分なPEGを電気ゴテ等を用いて除去し、隙間に充填したPEGの表面をアクリル絵の具で違和感のない程度に補彩した。その後ウレタン下部を俵形に整形した。

Ｃ．桶の取り上げと保存処理（図8－3・図8－4・図8－7）

桶は、調査区の南側で埋設された状態で出土した。桶の直径は約45cm、残存高は約23cmで、材は針葉樹であった。まず、桶内部を濡らしたペーパータオル（キムタオル）で養生し、そこに発泡硬質ウレタンを流し込んで充

填した。その後、桶の外側の土を5cm程度残して周囲を掘り下げ、ダンボールで囲み、ウレタンを流し込んで桶全体を包埋した。銅線を用いて底部と地面とを切り離し、ウレタン上部を水平にカットし、反転して取り上げた。

取り上げた桶は、桶内部のウレタンを残したまま、他の余分なウレタンと土を除去して桶の外側を露出し、桶表面を洗浄瓶や筆を用いて洗浄した。桶の残存状態は極めて悪く、処理中の剥落や崩落を防ぐため、タガ（竹材）を布テープとピンで仮固定し、桶の外側を約5cm幅の布で巻いて養生した。

桶は、糖アルコール含浸法（注2）を用いて処理することとなったが、桶の大きさから、通常処理に使用している含浸槽や乾燥機は使用できないことが判明し、含浸処理には特大コンテナ（内寸80×56×48cm）を用いることとなった。通常行っているラクチトール（糖アルコールの一種）含浸法（注3）は、約70℃の温度をかけ最終的に濃度80%程度のラクチトール水溶液を含浸させる。しかし、特大コンテナ内で含浸する場合、温度をかけるのに投げ込みヒーターを利用するしかなく、防災上の理由から夜間は稼動できない。そのため、常に70℃程度の温度を保つことができず、高濃度のラクチトール水溶液の含浸は不可能となり、処理が不完全に終わる恐れが出てきた（注4）。そこで、ラクチトールにやはり糖アルコールの一種であるトレハロースを添加することとした。トレハロースを添加することにより、ラクチトールの結晶阻害が起こり、それほど温度をかけなくてもある程度の濃度の含浸が可能となる（今津2000）。今回、ラクチトールとトレハロースの混合比率を7：3にすることとした。この比率だと、常温では濃度65～70%程度まで、50℃では濃度80%程度まで含浸が可能であることが事前の実験（注5）により判明したからである。

ラクチトールとトレハロースの7：3混合溶液を濃度40%から含浸を開始し、徐々に溶液濃度を上げ、最終的に濃度74%まで含浸させた。含浸期間は約4.5ヶ月であった。

含浸中、桶の底板が脱落したため、底板と本体とは別個に乾燥処理を行った。底板は、含浸終了後、湯で表面洗浄し、完全に水分を拭き取った後、溶液の結晶化を促進させるためにラクチトールの粉を全体にまぶした。50℃に設定した恒温乾燥機（INCUBATOR IC－450）（注6）で約3週間乾燥させた後、ぬるま湯で表面の粉を洗浄し水分を完全に拭き取って、再び恒温乾燥機内で約1週間乾燥させた。本体は、含浸終了後、桶外側の養生布を除去し、桶表面の溶液を軽く拭き取った後、ラクチトールの粉を全体にまぶした。本体は恒温乾燥機には入らないため、70℃に設定した含浸槽のステンレス製の蓋の上にのせ、さらにダンボールのカバーをかぶせて含浸槽の余熱（約30～35℃）で乾燥させた。約7週間後、熱湯で桶表面の粉を流し、水分を完全に拭き取って再び含浸槽の余熱で約4週間乾燥させた。

乾燥終了後、底板と本体の表面に付着固化した糖アルコールの結晶を除去するため、熱湯に浸して固く絞った布を該当箇所に当てて蒸らすことで糖アルコールの結晶を溶解するという表面クリーニングを行った。

タガは糖アルコールの結晶で側板に固定されており、一部脱落した破片のみエポキシ系接着剤（アラルダイトラピッド）で接合した。側板と底板の固定および隙間の充填にはエポキシ系接着剤（アラルダイトラピッド）に増量剤（マイクロバルーン）を添加したものを用いた。桶内部のウレタンを除去し、桶内側の隙間の充填不足部分をエポキシ系接着剤に増量剤を添加したもので補い、充填箇所を違和感のない程度にアクリル絵の具で補彩した。

D．犬の全身骨格の取り上げと保存処理（図8－3・図8－5・図8－8）

犬の全身骨格は、ゴミ穴と考えられる1号遺構で、木材や竹材、漆椀、下駄、陶磁器などが堆積している中に横たわった状態で出土した。骨の表面を軽く洗浄した後、骨を仮強化するためアクリル系合成樹脂（パラロイドB72・5％アセトン溶液）を塗布した。後で土を除去する際の目安とするため、取り上げ遺構面際に目盛りを付けた竹串を数本差し込んだ。骨は濡らした和紙を張り付けて養生し、さらに頭骨と肩甲骨はアルミホイルで覆って保護した。取り上げ遺構面全体（約98×75cm）を濡らしたペーパータオル（キムタオル）で覆い、取り上げ

遺構周囲をダンボールで囲い、発泡硬質ウレタンを流し込んで包埋した。取り上げ遺構周囲を掘り下げ、底部の土を掘り込み、最後は銅線を用いて地面から切り離した。ウレタン上部を水平にカットし、反転して取り上げた。

取り上げた遺構裏面の土を、事前に遺構面際に差し込んだ竹串の目盛りを目安に、土の厚さが１cm程度になるまで除去し（注７）、その部分にエポキシ系合成樹脂（FRP）を流し込んで底部を補強した。再度ウレタンを流し込み底部を覆った。底部に流し込んだウレタンを水平にカットし、正位に戻した後、骨格上部を覆っていたウレタンを除去し遺構表面を露出した。

遺構表面の木材や竹材は可能な限り取り上げた。骨は、頭骨以外は状態が比較的良好だったため、取り上げ時に塗布したアクリル系合成樹脂（パラロイドB72・５％アセトン溶液）をアセトンを用いて一旦除去し、再度洗浄を行った。その後、アクリル系合成樹脂（パラロイドB72・アセトン溶液）を濃度５％から15％程度まで徐々に濃度を上げながら繰り返し塗布して再度強化した。骨の強化中、遺構表面の乾燥を防ぐため、土には水を塗布し、木材や竹材にはPEG（ポリエチレングリコール#4000）水溶液を濃度20％から40％程度まで塗布した。

頭骨は計測のため取り上げることとなった。頭骨を頭蓋骨と左右の下顎骨に分離し、裏面や内面部分に付着した土を除去した。しかしながら、脆弱な部分が多く、完全には除去できなかった。その後、アクリル系合成樹脂（パラロイドB72・アセトン溶液）を濃度５％から15％程度まで徐々に濃度を上げながら繰り返し塗布して強化した。

次に、遺構表面の土を硬化することとなったが、土の硬化剤を選定するために実験を行った。取り上げ後に除去した遺構裏面の土を厚さ1cm程度容器に入れ、充分に湿った状態を再現し、それぞれにPEG#4000、OH100（石材強化剤の一種）、OM50（土壌強化剤の一種）、サンコールSK－50（イソシアネート系合成樹脂・土層剥ぎ取り後の転写面の固定等に使用）、バインダーNo.17（アクリル系合成樹脂・湿った遺物の仮強化等に使用）を塗布し、硬化後、土の中央を割りその効果を確認した。PEG#4000は、20％水溶液の塗布から開始し、徐々に濃度を上げながら、土の表面がPEGで白く固化するまで塗布を続けた。土の表面の白く固化したPEGをドライヤーで溶かして除去し、土の表面を露出した。土の表面が黒い仕上がりとなったが、土の中央部分まで硬化していることが確認できた。OH100は、原液を土に塗布し、乾燥・塗布を数回繰り返した。土の表面が若干白い仕上がりとなったが、土の中央部分まで硬化していることが確認できた。OM50は、原液を土に塗布したが、薬剤の粘度が高く、内部まで浸み込まずに表面で固まり、土の中央部分まで硬化することはできなかった。サンコールSK－50は、原液をシンナーで１／２希釈したものを土に塗布し、乾燥・塗布を数回繰り返した。土の表面が若干白い仕上がりとなり、かつ薬剤が土の表面で固まり、土の中央部分まで硬化することはできなかった。バインダーNo.17は、原液を水で１／２希釈したものを土に塗布し、乾燥・塗布を数回繰り返した。土の表面が光沢を帯びた仕上がりとなり、かつ薬剤が土の表面で固まり、土の中央部分まで硬化することはできなかった。この実験結果（注８）を踏まえ、今回硬化する土に木材や竹材が含まれていることから、それらを同時に硬化するためにも、PEG#4000を選定した。

遺構表面の土および木材・竹材にPEG20％水溶液を塗布し、徐々に濃度を上げて、遺構表面全体が白く固化するまで繰り返し塗布した。白く固化した遺構表面のPEGをドライヤー等を用いて除去し、土の表面を露出して仕上げとした。

Ｅ．まとめ

俵については、懸念された高湿度時におけるPEGの溶出（注９）もなく、比較的良好な状態で処理できた。

桶については、極めて悪い残存状態にもかかわらず、出土時の状態を保ったまま処理できた。今回の桶が針葉樹材であったことが処理成功の一因ではあると思われる（注10）が、ラクチトールとトレハロースの混合溶液を用いることにより、含浸槽や乾燥機に入らない大きさのものでも処理が可能であることが確認できた。

犬の全身骨格については、遺構表面に含まれている木材や竹材の存在が問題であったが、PEGを用いることで土・木材・竹材を同時に硬化することができた。

いずれも比較的簡便な方法であるが、ある程度満足のいく仕上がりとなった。

発掘現場では時として特殊な遺物が出土する場合がある。そうした遺物に対して最高の処理ができればよいが、それが不可能な状況のほうが多い。しかし、特別な設備がなくても方法を工夫することで、ある程度の取り上げと保存処理が可能であるといえよう。

なお、この報告は、第20回日本文化財科学会での発表内容（藤沢ほか2003）を含んでいる。

＜注＞

1）ウレタンが遺物に付着するのを防ぐため。

2）出土木材内部の水分と糖アルコールを置換し、糖アルコールを結晶化させることによって木材の形状を保つ方法。

3）出土木材にラクチトール水溶液を濃度20%から80%程度まで含浸させる。濃度60%以上になると、常温ではラクチトールは水に溶解せず、また不完全な結晶化が始まるため、70℃の温度をかけて含浸する。含浸終了後木材表面の溶液を湯で洗浄し、水分を完全に拭き取った後、ラクチトールを結晶化させるためにラクチトールの粉を木材表面にまぶす。50℃で乾燥し、表面の粉をぬるま湯で洗い流す。水分を完全に拭き取った後、再度50℃で乾燥する。

4）含浸濃度が低い状態で結晶化工程に進むと、木材内部の残留水分により脆い結晶が形成され、収縮・変形を招く恐れがある。

5）ラクチトールとトレハロースの混合比率10：0、9：1、8：2、7：3の場合、常温、50℃、70℃ではそれぞれ濃度何%まで含浸が可能なのかという実験を行った。結果は、10：0の場合、常温では55～60%程度まで。50℃では70%程度まで。70℃では80%程度まで。9：1の場合、常温では60%程度まで。50℃では75%程度まで。70℃では80%程度まで。8：2の場合、常温では65%程度まで。50℃では75～80%程度まで。70℃では85%程度まで。7：3の場合、常温では65～70%程度まで。50℃では80%程度まで。70℃では85%程度まで。

6）糖アルコールの結晶化工程で、乾燥機で乾燥する場合、送風式の乾燥機を使用すると、風の当たる部分が過乾燥となり、木材内部の結晶が粉体化する恐れがあるため、送風式ではない乾燥機を使用する（千葉2001）。

7）資料の軽量化を図るため、土は必要最低限の量だけ残して除去する。

8）今回の実験結果は、今回実験に使用した土に対してのみ有効である。

9）PEG#4000は、常温では固形であるが、温度をかけると溶解する。そのため高温多湿の環境下での保管は避けるよういわれている。

10）これまでの経験から、糖アルコール含浸法は針葉樹材の処理には向いているが、広葉樹材の処理については成功する場合とうまくいかない場合があるといえる。

《引用・参考文献》

今津節生　2000　「糖の混合による糖アルコール含浸法の改良」『日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集』pp.42～43

千葉直美　2001　「糖アルコール含浸法における予備実験」『東北大学埋蔵文化財調査年報16』pp19～26　東北大学埋蔵文化財調査研究センター

藤沢　敦・千葉直美・京野恵子・高木暢亮　2003　「特殊な遺物の取り上げと保存処理」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』pp.176～177

沢田正昭　1997　『文化財保存科学ノート』近未来社

京都造形芸術大学　編　2002　『文化財のための保存科学入門』角川書店

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　沢田正昭　編集・監修　2003　『遺物の保存と調査』クバプロ

図8－1　武家屋敷地区第７地点遺構配置図（Ⅱ期）
Fig.8－1　Distribution of fearures belonging to phase Ⅱ at BK7

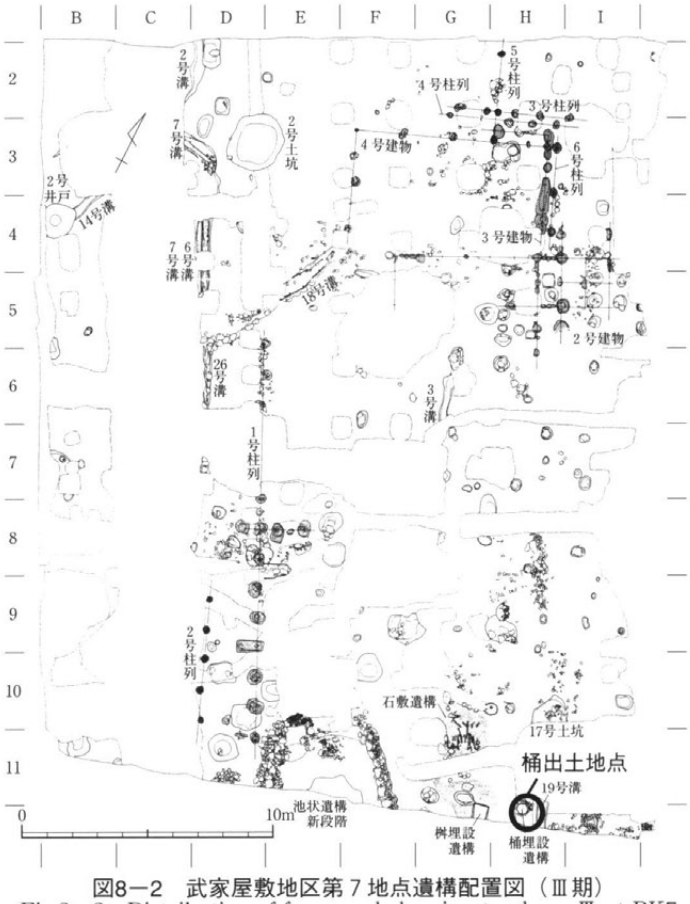
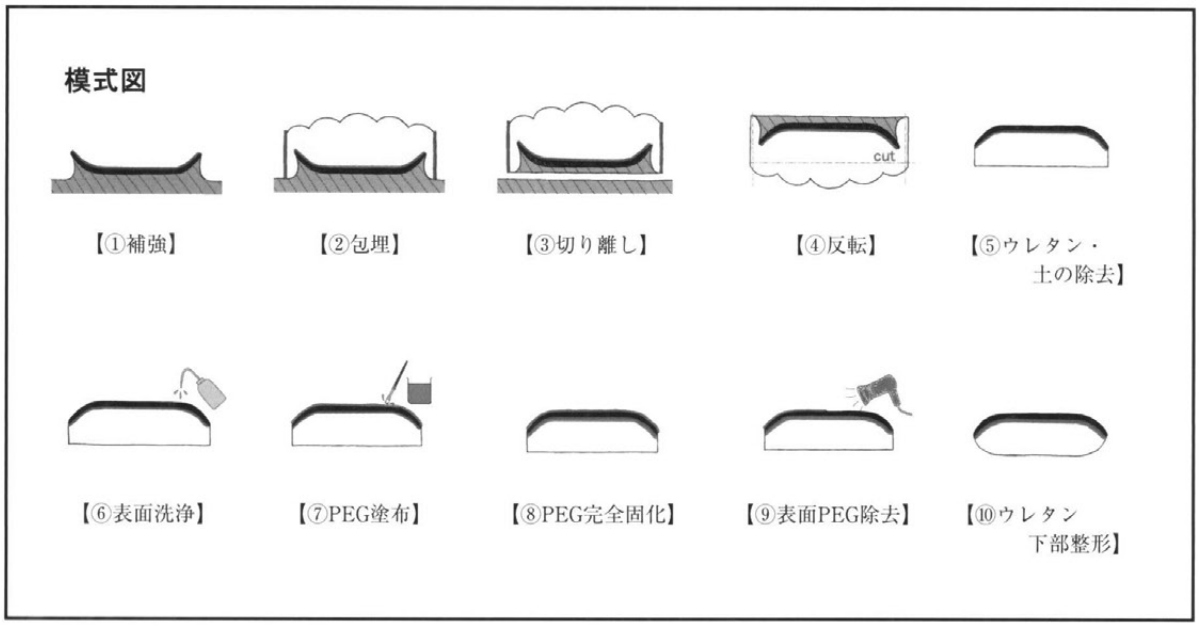


図8－2　武家屋敷地区第７地点遺構配置図（Ⅲ期）
Fig.8－2　Distribution of fearures belonging to phase Ⅲ at BK7

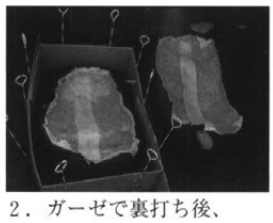
図8－3　俵の出土状況
Fig.8－3　Picture of a excavated straw

図8－4　桶の出土状況
Fig.8－4　Picture of a excavated wooden buck-

図8－5　犬の全身骨格の出土状況
Fig.8－5　Picture of a excavated dog bone



1．俵の内側にトマックNS－10を塗布


2．ガーゼで裏打ち後、ダンボールで周囲を囲む

3．ウレタン包埋

4．銅線で地面と切り離す

5．コンパネを差し込む

6．ウレタン再包埋

7．反転して吊り上げる

8．吊り上げ作業

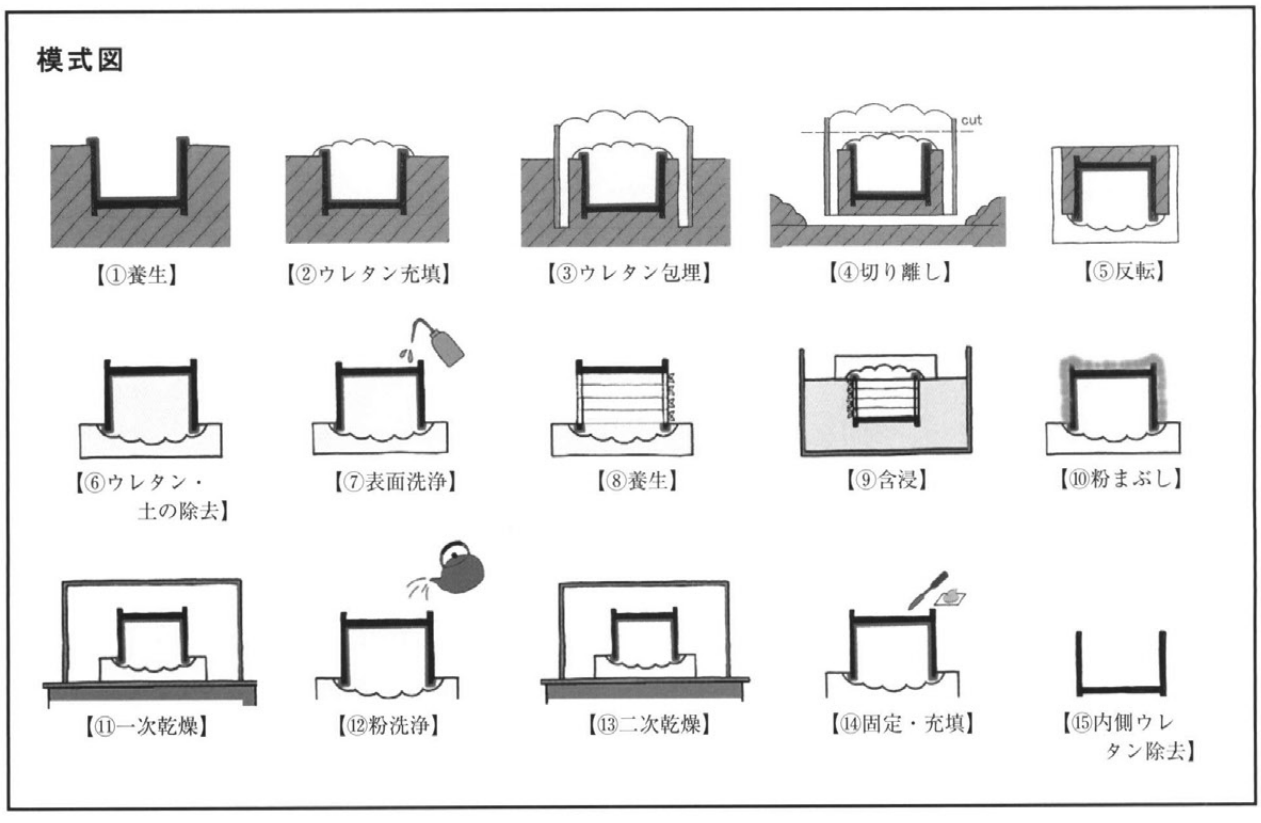
9．PEG水溶液を塗布

10．表面PEGの除去

11．俵A保存処理終了後

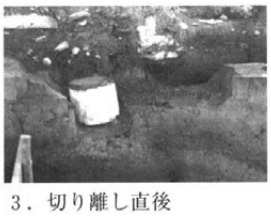
12．俵B保存処理終了後

図8－6　俵の取り上げと保存処理
Fig.8－6　Excavation and conservation process of a straw bag



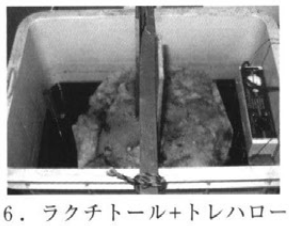
1．内側をウレタンで充填し、周囲を掘り下げる

2．ウレタン包埋


3．切り離し直後

4．タガを布テープとピンで仮固定

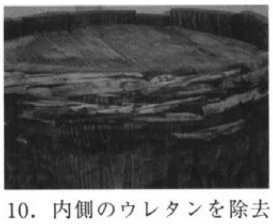
5．桶の外側を布で養生


6．ラクチトール+トレハロース7：3混合溶液含浸中

7．含浸後ラクチトールの粉をまぶして、含浸槽の上へ

8．ダンボールのカバーを被せて乾燥中

9．熱湯を用いて表面の粉を洗浄


10．内側のウレタンを除去し、隙間をエポキシ系合成樹脂等で充填

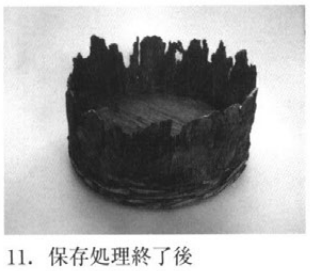
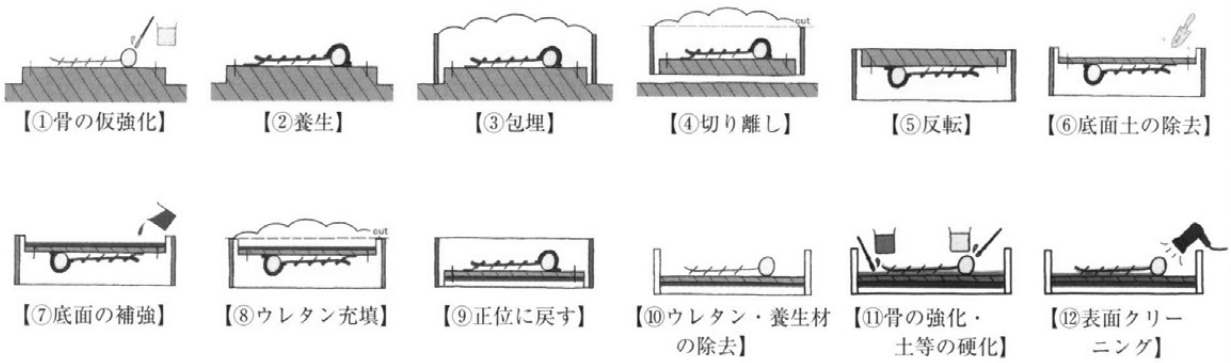
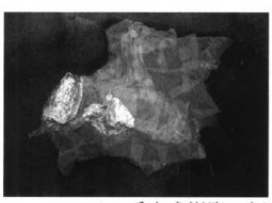

11．保存処理終了後

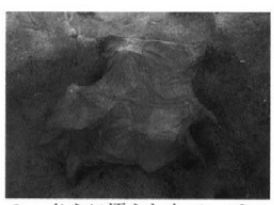
図8－7　桶の取り上げと保存処理
Fig.8－7　excavation and conservation process of a wooden backet

模式図



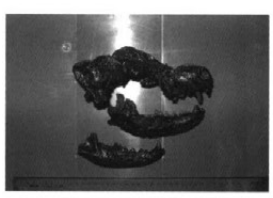


1．アクリル系合成樹脂で仮強化後、濡らした和紙とアルミホイルで養生



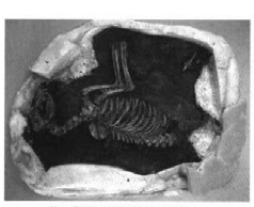
2．さらに濡らしたペーパータオルで養生

3．ウレタン包埋



4．ウレタン除去後、計測のため頭骨取り上げ

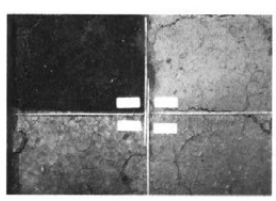
5．土表面のPEG除去



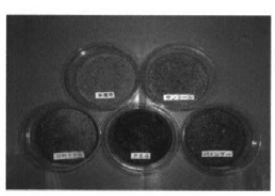
6．保存処理終了後

土硬化実験

容器に犬の全身骨格の底部の土を厚さ 1cm 程度入れ、それぞれに PEG・OH100・OM50・サンコール・バインダーを塗布した。



土硬化実験①
左　上：PEG
右　上：未塗布
左　下：OH100
右　下：OM50



土硬化実験②
左　上：未塗布
右　上：サンコール
左　下：OH100
中央下：PEG
右　下：OM50

	中央部分まで硬化	仕上がり具合
PEG	○	黒
OH100	○	白
OM50	×	光沢
サンコール	×	白
バインダー	×	光沢

図8－8　犬の全身骨格の取り上げと保存処理
Fig.8－8　Excavation and conservation process of a dog bone

(9) 武家屋敷地区第７地点の調査成果ーまとめに代えてー

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査報告は、諸般の都合で５分冊に分けて刊行することとなった。報告を終えるにあたり、５分冊に分けて報告した調査成果を通覧し、まとめに代えておきたい。

武家屋敷地区第７地点の調査は、調査面積810m²、調査期間は８ヶ月におよぶものであった。東北大学による武家屋敷地区における調査は比較的小規模なものが多く、大規模な調査としては、1994～1995年度に実施した第４地点の調査以来、２ケ所目の調査となった。

江戸時代以降の検出遺構は、Ⅰ～Ⅳ期に分けられた。これら以外に、縄文時代の陥し穴の可能性がある土坑が１基検出されている〔第１分冊〕。

Ⅰ期は、江戸時代初頭から17世紀末頃までと考えられる。直交して展開する溝が検出されており、区画溝の可能性がある。これ以外の遺構密度は低く、土坑などがある。

Ⅱ期は、おおむね18世紀初頭から、19世紀前葉頃までと考えられる。調査区南東部に、18世紀前葉の大規模なゴミ穴が作られており、膨大な量の遺物が出土した。調査区北東部では、土坑が集中し、新しくなると溝が多数造られている。他の区域の遺構密度は、あまり高くなく、土坑・溝・井戸などがある。

Ⅲ期は、19世紀前葉頃から、明治時代初頭頃と考えられる。調査区北東部を中心に、礎石建物跡や柱列などが検出されている。他の区域には、柱列・土坑・溝・池状遺構などが見られる。

Ⅳ期は、明治時代初期から明治20年前後までと考えられる。畑の可能性のある、畝状遺構などが検出されており、武家屋敷が取り払われた後の様相を示している。

このような今回の調査成果を踏まえ、さらには仙台城本丸地区や若林城跡など関連する遺跡の調査成果を参照しつつ、二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区の遺構について検討を加えた。建物跡の柱間寸法、柱列の柱間寸法、建物の性格の違いによる礎石の規模と構造、礎石建物と掘立柱建物の関係などについて考察した〔第５分冊分析・考察（1)〕。

武家屋敷地区第７地点から出土した遺物は、縄文時代の石器２点が出土している〔第４分冊〕のを除くと、江戸時代以降のもので占められる。江戸時代以降の出土遺物には、多種多様なものがあり、その量も膨大で、年代も江戸時代初頭から幕末ないし明治時代初頭まで幅広い時期におよぶ。作業上の便宜もあり、種類ごとに整理・報告を進め、作業が終了したものから順次報告書を刊行した。第２分冊では、陶磁器類と土師質・瓦質土器、土製品、瓦を報告した。木簡と墨書ある木製品は、文字資料の活用という観点から、第３分冊でまとめて報告した。これら以外の遺物としては、墨書あるものを除いた木製品、漆塗製品、金属製品、石製品、ガラス製品があり、第４分冊で報告した。

これらの遺物の過半は、Ⅱ期の大規模なゴミ穴である２号遺構から出土した。同様に、１号遺構、24号土坑も、２号遺構とほぼ同時に機能していたゴミ穴と考えられる。これらの遺構を中心に、594点におよぶ大量の木簡が出土しており、他に墨書のある木製品も48点出土した。近世の木簡としては、東北地方でもっとも数の多い資料群である。木簡などの記載内容の分析から、大多数は荷札木簡と考えられ、二の丸に運び込まれた荷物に付けられていたものと考えられる。このことから、２号遺構などの大規模なゴミ穴は、二の丸地区から持ち込まれたゴミを捨てたものと推定された。年貢米に付けられた荷札が最も多く、他には餅・塩など様々な荷物に付けられたものである。木簡には、年号の書かれたものも多く、18世紀前葉の享保年間に限定されることから、これらのゴミ穴は享保年間に利用されたものと考えられる〔第３分冊〕。

２号遺構などからまとまって出土した18世紀前葉の遺物は、今次調査による出土遺物の過半を占めるとともに、時間的にも限定できる良好な一括資料と判断されることから、集中して検討を加えることとした。陶磁器、土師質土器・瓦質土器、漆器、箸状木製品については、資料の特徴を整理するとともに、これまでの研究成果と照ら

し合わせ、時期的な特徴などについて検討を加えた。駒形木製品については、民具などの類例を含めて、その用途などについて検討した〔第５分冊分析・考察（2)〕。

大量に出土した木簡については、428点について樹種同定がなされた。針葉樹がほとんどを占め、広葉樹は極めて少数であること、針葉樹の中でもスギが多数を占めアスナロが次ぐことなどが明らかとなった。東北地方における近世木簡の樹種について、これだけ多数の資料を分析した事例は他に無く、今後の研究にあたっての基準となる成果である〔第５分冊分析・考察（3)〕。

また、樹種同定の結果を踏まえ、木簡の型式や記載地名などと樹種の関係を検討し、多数を占めるスギやアスナロなどは、植林されたものが利用された可能性などを指摘した〔第５分冊分析・考察（5)〕。

植物遺存体も、２号遺構などから多数出土しており、種の同定と検討がなされ、オニグルミ、モモ、ウメなどが食糧として利用された可能性などが指摘されている〔第５分冊分析・考察（5)〕。

動物遺存体も２号遺構などから大量に出土した。貝類、魚類、鳥類、哺乳類などがあり、様々な種が同定されている。これらの中には、食物残滓の可能性の高いものが多数含まれている〔第５分冊分析・考察（6)〕。

１号遺構からは、解剖学的位置を保った犬の骨が検出された。大きさなどの特徴が検討され、在来犬でない可能性などが指摘されている〔第５分冊分析・考察（7)〕。

武家屋敷地区第７地点で出土したイヌの骨格や、繊維を編んだ俵、埋設された桶については、出土状態を保ったままウレタンで包埋して取り上げ、保存処理を行った。これら特殊な遺物は扱いが困難な場合が多いが、取り上げ方法と処理方法を工夫することで、特別な施設を用意することなく、比較的簡便な方法で対処することができた〔第５分冊分析・考察（8)〕。

今回の調査では、木簡をはじめとして膨大な量の遺物が出土し、その整理作業には多大な労力と期間が必要で、2001年度の調査実施から報告書の完結まで、９ヶ年の歳月を要することとなった。第５分冊では、自然科学的な分析を含め、重要な課題と考えた点について分析・考察を加えた。特に、享保年間と推定される18世紀前葉の一括資料は、その内容が極めて豊富であり、集中して検討を加えることとなった。これらは、仙台藩のみならず、東北地方における近世考古学の研究を進めていく上で、基準資料となるものと考えられる。

東北大学川内北キャンパスとその周辺では、仙台市の地下鉄東西線事業に関係する工事に伴い、2005年度以降、多数の発掘調査が実施されている。武家屋敷地区第７地点に隣接する区域も、地下鉄東西線工事に伴い、発掘調査が実施されている。それらの調査成果は、これから順次明らかになっていくものと期待される。これらの急速に増加している考古学的データを総合的に検討して、仙台城下の武家屋敷の実態を明らかにしていくことが、今後の課題であろう。

REPORT

OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

vol.19-5, March 2010

The Archaeological Research Office

On The Campus, Tohoku University

Katahira-cho, Aoba Ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

This volume carries the report of the salvage excavation of BK7 (Loc.7 of the samurai residences located on the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle), which was conducted by the Archaeological Research Center on the campus of Tohoku University in 2001.

In the excavation of BK7, a large number of artifacts have been excavated. So these are reported in five separate volumes. This report is the 5th separate volume, and describes about the analysis and examination of archaeological features and various artifacts with analytical results of the natural sciences at BK7 site.

At the excavation of the samurai residences in Tohoku University, small scale excavations are frequently done. But the excavation of BK7 was on a large scale, the area covered 810m^2, the excavation period extended to 8 months. This large scale excavation at the samurai residences was the second time since the excavation of BK4, excavated in 1994~1995.

We considered about the archaeological features of Secondary Citadel of Sendai Castle and the samurai residences, compared with the excavation at the Honmaru of Sendai Castle and Wakabayashi Castle. (Honmaru was the main enclosure of Sendai Castle, and Wakabayashi Castle was Masamune's private residence, who was the first load of Sendai clan.) The viewpoint was the span between the pillars measured from center to center at each structure, the difference in the size and structure of pillar base stones for different types of buildings, and the relations between structures constructed on base stones, and embedded-pillar structures.

Most part of the artifacts was dated to Edo period. These were various and enormous. And these belong to wide ranging dates, from the initial Edo period (the initial period of the 17th century) to the initial Meiji period (the middle period of the 19th century). A great part of these artifacts was excavated from No.2 structural remains, which was a huge garbage pit. No.1 structural remains and No.24 earthen pit were also huge garbage pits used similarly in the same period. The artifacts found from No.2 structural remains were dated to the early period of the 18th century. These artifacts were the major part from this excavation, and constitute a fine hoard of artifacts of a limited time period.

So we considered special characteristics of the artifacts dated to the early period of the 18th century, for example, porcelain, glazed ceramics, unglazed ceramics, lacquer wares and wooden chopsticks. We compared these special characteristics with our past research results. And we also considered the use method of the wooden implements shaped to a horse in comparison with similar cases in the folklife materials.

A great number of wooden tablets written in black ink were also found from above mentioned features. The number amounts to 594, and these were the largest collection for the wooden tablets dated to Edo period in Tohoku

region. From the analysis of the contents recorded on wooden tablets, it is thought that most of these wooden tablets were carried to Ninomaru with the rice or the salt as the land tax. The era names written on these wooden tablets were limited to Kyoho. Kyoho is from 1716(the first year of Kyoho) to 1735(the 20th year of Kyoho), in the middle of Edo period. So it was concluded that these huge garbage pits were dated to Kyoho era.

In these wooden tablets, 428 were analyzed for the tree Species Identification. The result was that the large part of the tree species was of some coniferous trees, and broad-leaved trees were fewer. Among coniferous trees, the most numerous was the Japanese cedar, while the hiba arborvite was the next. This is the first analysis of tree species used for wooden tablets in a large volume, dated to Edo period in Tohoku region, so this result will become a standard in the future research.

Based on the result of the Species Identification, we compared the tree species with the type of wooden tablets and place names written on these wooden tablets. As the result, it is thought that the Japanese cedar and the hiba arborvite, the most abundant tree species, were planted as nursery trees, and these afforested trees were used for the wooden tablets.

A lot of seeds, nuts and animal remains were also found from No.2 structural remains. These were analyzed for the Species Identification. About the plants, it is thought that walnuts, peaches and Japanese apricots were used for foods. About the animal remains, various species, for example shellfish, fishes, birds and the mammals, were identified. It is thought that most of them were the residue of their foods.

From No.1 structural remains, a whole body skeleton of a dog keeping its anatomical position was found. From the size of the skeleton, it is thought that the dog was not a native breed.

The skeleton of a dog, the straw bag weaving fiber and a wooden bucket laid under the ground were excavated in situ, and packed with the urethane foam, so we could excavate and conserve them, keeping the original position. It is often difficult to treat these unique fragile articles. But we devised the method of excavation and conservation, and we could treat these unique articles with comparatively simple methods, without special equipments.

In this excavation, an enormous number of artifacts were excavated, so we needed a great deal of labor and time to sort out these articles and to make scale drawings and so on. It took for 9 years from the excavation until the completion of the reports. In this report, we analyzed and examined the important themes including the natural sciences. Especially, a fine hoard of artifacts dated to the early period of the 18th century was extremely rich in its contents. These will be a standard research materials not only for the research of the Sendai clan period, but also for the archaeology of the early modern period in Tohoku region.

In and around Tohoku University at the Kawauchi-kita campus, many excavations have been carried out since the 2005 fiscal year, for the construction of the subway in Sendai City. The theme in the future will be the comprehensive examination of the rapidly increasing data and investigation of the actual situations in the samurai residences of Sendai clan.

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	19－5
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	阿子島香・藤沢　敦・柴田恵子・高木暢亮
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目１－１　TEL022-217-4995
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
せんだいじょうあと 仙台城跡 にのまるほっぽう 二の丸北方 ぶけやしきあと 武家屋敷跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 あおばくかわうち 青葉区川内41	04100	01033	38° 15′ 32″	140° 50′ 57″	2001.5.7～11.23	810	マルチメディア 総合研究棟 新営

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	城館	近世	建物跡・ 廃棄土坑・溝・ 塀跡・ 池状遺構・ ピット	陶磁器・瓦・木製品・ 木簡・金属製品・ 土製品・石製品	

要約	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査の分析・考察編である。検出遺構を基にした近世建物の基礎構造に関する考察、18世紀前葉の遺物の検討、木簡の樹種についての分析、樹種と木簡の型式や記載内容との検討、植物遺存体や動物遺存体の分析、出土した犬の骨についての考察、特殊な遺物の取り上げと保存処理に関する考察などを掲載している。

東北大学埋蔵文化財調査年報19　第５分冊

平成22年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166

東北大学埋蔵文化財調査年報19第５分冊　付属CD-ROM　収録内容

1．本CD-ROMには、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点から出土した陶磁器のカラー写真データが収録されています。
2．本CD-ROMには年報19第２分冊図版１～40に対応した、以下のファイルが収録されています。

```
¥ ── 図版別カラー写真 ──┬── 図版１
                        ├── 図版２
                        ├── 図版３
                        │   ⋮
                        └── 図版40
```

3．写真データはJPEG形式で収録されています。
4．写真データのファイル名称は、年報19第２分冊で掲載した実測図・観察表・写真図版の登録番号の名称と対応します。一つの登録番号で、表面・裏面や、見込み・側面・底部など、写真が複数ある場合は、登録番号にa、b、cなどの記号を付して区別しています。（例：CJ001a.jpg、CJ001b.jpg）
5．写真データは、図版別のフォルダに分かれており、フォルダの名称は、年報19第２分冊で掲載した写真図版の図版番号に対応しています。
6．写真は、整理作業の途中で撮影したものです。そのため、一部の写真には、登録番号とは異なった、整理段階で用いた仮番号のラベルが写っているものがあります。正式な登録番号は、ファイル名と対応したCJ、あるいはCTで始まる番号であり、注意が必要です。
7．本CD-ROMは、学術資料としての観点から、複写・転載に関しては、基本的に許可申請を必要としませんが、有償による販売を目的とした刊行物などで使用される場合は、当調査室までお問い合わせ下さい。
8．本CD-ROMの使用により生じたいかなる損害に対しても、東北大学埋蔵文化財調査室では責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

vol. 19-5

Analysis and examination of BK7 site
(BK7, i.e.Loc.7 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru)

2010

The Archaeological Research Office on the Campus
TOHOKU University
Sendai, JAPAN